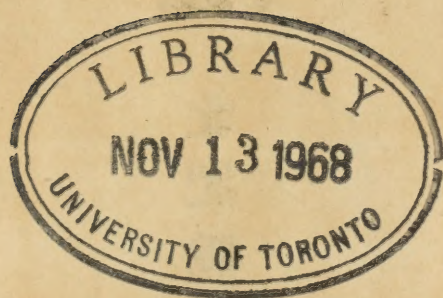
文學士 矢野太郎編

國史叢書

北肥戰誌 二

國史研究會藏版

例言

一、本編は、北肥戰誌卷之十七より卷之三十迄を採收す。
一、反讀を讀下しに改め、語尾を補ふ等、其他總て既刊の諸書に同じ。

目次

北肥戰誌

卷之十七

卷之十八

卷之十九

卷之二十

卷之廿一

卷之廿二

卷之廿三

卷之廿四

卷之廿五

卷之廿六

卷之廿七

卷之廿八

卷之廿九

卷之三十

目次終

北肥戰誌　卷之十七

長良の妻
故鄕鹿江
に落つ

神代長良妻室の事

扨も長良の妻室は、土生島の城を忍出で、河窪藤付の先達の坊へ落著かれ、少時は爰に居られしが、斯くてはいつまで暮すべきと、是より勘内をば差戻し、乳人一人を供として、故鄕鹿江を志し、賤の女の物請〔詣カ〕する風情にて、人目忍ぶの編笠に、さも荒々しき草鞋はき、夜半に紛れて出でらる。頃は卯月の末つ方、山郭公の一聲、雲井に音をさえしかば、婦人斯くぞ思ひつゞけられける。

　心せよなればかりかは時鳥物思ふ身に夜半の一聲

と打誦して、分けつゝ行けば小笹原、袖に玉散る篠木野や、爰はいづくぞ八溝の、水の流の末懸けて、妻の行方を安穩に守らせ給へと、あたりなる白髮の御社へ、心計

りに奉幣あり。あそこや爰とたどり給ひし間、河窪より鹿江までは、僅の行程なりしかども、三日三夜にして、泣く〳〵尋ね著しけり。母上を初め皆々驚き、樣々に勞り、後には龍造寺の聞を恐れて、大堂の社家を憑み隱し置かれけり。

神代長良筑前戶板へ浪人の事

龍造寺隆信は、神代長良を追落し、大に悅び、重ねて大軍を以て、長良の唯今ありける畑瀨の城を攻めむと議せられけり。此時、田代因幡守へ隆信よりの狀にいはく、

御札令披見候。如仰神代事、相違深重之仁候間、取掛打崩候。爲此等之儀預御使書、御目出度存候。猶期後喜候。恐々謹言。

五月六日　　隆信判

田代因幡守殿

斯くて隆信、彌〻畑瀨を攻めらるべく、小川武藏守・納富但馬守・廣橋一祐軒・副島民部大輔に軍兵を差副へて、山々の口々より向はる。此事、山內へ聞えて、長良、則ち

神代長良戸板へ浪人す

家人等を集め軍の評定ありしかども、はか〴〵しき行（てだて）もあらざりけり。斯かりし間、長良、さらば先づ當城を去りて時節を待ち、重ねて素懷を達すべしと、男女の從者二百餘人、筑前の方へ打越え、飯場の城主曲淵河内守房助を賴まれけり。房助申しけるは、斯樣に落人の身となられ、某を御賴ある上、難澁申すは武士の本意にあらず候へども、御存知の如く此所は無下に分内狹く、其上、某微力を以て、唯今上下二百人の人々を扶持し申さむ事、中々叶ひ難く候間、何方へも御開きまし〳〵、さるべき大名をも憑まれ候へと、辭し申ければ、長良も尤もに思はれ、夫より同國怡土郡飯盛の城主小田部紹叱入道を賴まれけるに、是も曲淵が申すに同じき返答しければ、長良爲方なく、又同國那珂郡岩門鷲岳城主大鶴入道宗周をぞ賴まれける。宗周仔細なく賴まれて、急ぎ長良の上下二百餘人を迎へ取り、己が領知筑前國戸板といふ所に勞（いたは）り置き、能く介抱しけり。彼の大鶴山城入道は、元來豐後の士にて、音に聞く姨嶽大蛇の子孫なり。近年筑前國は、豐府よりの支配なる故、來りて鷲岳に在城しけり。當國に於ては大名にて福裕の者なり。また此頃大友家の老臣戸次

伯耆守鑑連も、長良の難儀を聞付け、士は互の事と主の宗麟へ披露し、時々情を加へけり。其後、大鶴入道、長良の夫婦別れ〳〵にありけるを痛はしく思ひしかば、長良の文に己が手の者五十餘人を添へ、肥前の大堂へ迎にぞ遣しける。妻室は此程の憂き思に身も顇れ、隨つて風に窄れ、日に黒み、萩の葉のそよと計りの信も、其方様の便かと戀しう思はれしに、長良の文を見て、迎の使と聞かれしかば、限なく悦び、急ぎ戸板へぞ赴かれける。大鶴入道の心底こそ賴もしけれ。

長良歸城附納富治部大輔討たるゝ事

斯くて神代刑部大輔長良は、大鶴山城入道の情にて、妻子・家の子を初め從者二百餘人、四月下旬より八月の半ば迄、岩門の内戸板に時節を待ちて蟄居あり。然るに神代の家人共、藤原の寄合原に參會し、如何にもして、長良を近々歸城さすべしと談合し、一味の輩數百人一同に起りて、龍造寺の代官の三瀨の城にありしを俄に取懸け討殺す。掛此事、山々の味方共聞付けて、急ぎ村々より馳せ集り、勢を一つに

圍め、早速岩門に使を立て、長良の方へ早く御歸城あるべしとぞ申送りける。されども長良、餘りに無勢なりしかば、合瀬因幡守を高祖の城に遣し、原田越前入道了榮へ加勢の軍兵を乞はれ、又小田部・大鶴よりも加勢ありて、長良其勢三百餘騎になり、さらば歸入るべしとて、永祿八年八月二十日、岩門の戸板を打立ち、本領肥前の山内に歸參ありけり。長良、戸板に浪人の間百餘日とぞ聞えし。斯くて長良、本領へ歸入らる。頃日龍造寺の代官共が、山々へ來りてありけるを一々に追出し、三瀬の城に修理を加へて居城とし、隆信に對して必ず土生島の鬱憤を晴らすべしとぞ謀られける。

一、翌永祿九年丙寅、春より雨一滴も降らず、卯月より五月に至り、青苗さながら枯槁し、耕しても空地となる。爰に神代長良は、三瀬の城にありしが、去年四月、土生島の城にて納富但馬守に謀かられし事、返々も無念に思はれ、今年五月の初め、古川新四郎を召寄せ事の仔細を含めらる。新四郎急ぎ河窪へ赴き、彼の納富が領知上佐賀の内千布村・和泉村へ流れたる河窪よりの水道を悉く切埋め、水を

神代長良歸城

別筋へ流し懸けたり。納富、是を聞いて大に腹を立て、早速其水筋を切流せと、同月九日、弟治部大輔信純に人數を副へて差遣す。斯くて治部大輔、先づ下德永に副ひて水筋を巡見しけり。早此事、河窪へ聞えしかば、神代の家人に白水讃岐守・山口周防守・古河新四郎・篠木薩摩守・竹下主水允以下相集り、白髭明神の社にて行を評定して、三百餘人の者共三手に分れ、三所に草伏し、扨足輕の兵を十四五人、土民に出立たせ農具を持たせて、河窪・八溝より德永へ流るゝ水筋を堰ぎ留むる體にぞ見せたりける。是は納富が人數を誘引出し、右三所の伏兵を以て取籠め捕るべしとの行なり。治部大輔、是を謀とは知らずして、あの奴原一々切つて捨てよと馳寄す。十四五人の者共、元より相圖の事なりしかば、北を指して逃退く。治部大輔是を見て、遁さじと追駈け、南原の築地の內まで追込めたり。其時、彼の三所の草伏、一同に嚾と起り三方より押取籠む。治部大輔是を見て、すは忻られたるよと、持ちたる槍を馬の首に引側め、縱橫十文字に突いて廻り、向ふ敵を追靡け、一段高き小土手の上に馳せ登る。斯かる處に、川窪勢の中より武

納富治部大輔討たる

者一人、古川新四郎と名乘つてつと馳せ合せ、長躬の槍にて突合ひしが、治部大輔誤りて、左の脇の下より右の肩先まで突貫かれけり。治部大輔も無雙の剛の者にて、疼ず新四郎が右の腕を縫ひざまに突透す。新四郎、突かれながら鎗を返しければ、治部大輔馬より逆に落つ。時に新四郎。走り懸りて首を取らむとしけれども、右の腕すくみて叶はざりしかば、弟藏人に治部が首をぞ取らせける。此治部大輔、實は西村伊豫守家秀が弟、納富石見入道道周の養子なり。既に治部大輔討たれしかば、其與力小宮佐渡守も竹下主水允に渡り合ひ討死す。其外杉町右馬允も討たれにけり。斯かりし程に、納富が手の者、或は敵中へ駈入りて討死し、或は逃散りて一人も殘らずなりにけり。斯くて軍の次第、三瀬に注進しければ、長良手を打つて、去夏土生島の鬱胸を今ぞ少し晴らしけるよと悅ばれけり。是より中佐嘉の内上巨勢の内、大牟神代領知となりけり。

一、右八溝の迫合に、治部大輔討たれし事、龍造寺に聞え、兄但馬守急ぎ和泉村まで馳せ來りしかども、早軍散じて後なりし故、空しく佐嘉へ引返しけり。

或はいふ、此時納富但馬守、和泉村に於て川窪勢と相戰ひ、討負けて引退くとも。

一、同年十月廿四日、上松浦天河の城に、龍造寺より差籠置かれし加茂左衛門大夫一家、神代衆に攻められて皆討死す。

高橋鑑種大友に叛く
其理由

高橋鑑種大友に對し叛逆の事

去る弘治の頃、筑前國筑紫・秋月兩人、大友逆意の後に至り、其警衞の爲め同國岩屋の城へ、豐府よりの下知を以て、高橋三河守鑑種居住しけり。然るに鑑種、頃日重代の主君大友に背き、岩屋・寶滿の兩城に聢と籠城に及びけり。其謂を尋ぬるに、先づ一つには彼の高橋、實は豐後の一萬田彈正が弟にて、前三河守親種が家督なり。されば豐後の太守宗麟入道、近年其作法甚だ不行儀にして、一向女色に溺れ、高橋が兄一萬田が妻女の美なるに迷ひて、わりなく所望ありしかども彈正之を許さず。仍りて宗麟、樣々工夫を回し、彈正を易々と毒飼にて殺し、則ち彼の女房を侵し取

り、十二人の妾の第一と傳きて、深閨に藏し置かれけり。此事、高橋傳へ聞き、大に疎み憤りぬ。又二には、過ぎし永祿四年に、大友より豐前國を手に入るべしと軍兵を差向け、先づ香春岳の城を攻めしかども、高山に依りて容易に事成らず。然る處に筑前國山鹿の麻生鎮貞が調達にて、原田遠江守・同備前守頓て下城し、夫より豐後衆、宮古郡へ陣替、扨三尾原へ陣を寄せ所々へ分遣し、文司城へ取懸けけるに、城主仁保右衛門大夫、堅固に城を持ちける故、度々攻め戰ふと雖も勝利を得ず。然る處に、文司城へ關口より船を以て加勢の衆之あり。又中國よりも加勢として、毛利家の人數、關口に著陣しければ、豐後衆合戰叶ひ難く、竟に霜月五日亥の刻、夜中悉く敗軍して立つ足もなかりけり。是より大友家の弓矢、散々手弱く見え、世上の沙汰も宜しからず。斯樣の事、彼是に付いて鑑種、心中には大に豐府を疎み、しかも先づ一兩年は色にも出さず差恢へけり、然る處に、其後豐後衆、松山の城長陣の後、鑑種彌〻大友家を背き、早逆意の色を差顯はし、中國毛利元就に屬して、既に岩屋・寶滿の兩城に取籠りけり。斯くて此事府內へ聞え、宗麟入道大に立腹あり。さ

立花鑑載大友に叛く

らば其鑑種を早速誅伐すべき由、筑前に於て秋月長門守種實・筑紫右馬頭惟門に下知せられぬ。又府内よりも檢使として、生善寺・田尻三河守を差向けらる。此兩使則ち筑前に打赴き、秋月・筑紫に參會し軍の評定を極めて、寶滿表へ相働きしかども、寶滿城嶮難の高山にて、攻め戰ふ事中々事成ならず。之に依りて府内より重ねて齋藤鑑賢・夏足宗譽入道罷向ふと雖も、是れ亦同前にて日を累ね、其外の檢使二三箇年の間、打替り〳〵來陣して、種々の行を廻しけれども、終に高橋退治事成らずして、空しく月日を送り數箇年に及びけり。斯かりし間、高橋一味の輩次第に出來り、肥前には龍造寺、筑前には原田・立花、筑後には草野・星野・黑木・問注所、各〻居城に楯籠りけり。

立花鑑載大友に對し叛逆附自殺の事

筑前國糟屋郡立花勢樓山城主立花民部大輔鑑載も、永祿八年の春の頃より高橋と同意し、毛利元就に屬して大友に對し逆心を挾みけり。此立花は、元來大友の一家

にして、則ち西大友と稱し、先祖右近將監貞載以來、數代筑前の立花に在城す。然るに鑑載、身に取りてさしたる恨はあらざりしかども、頃日豐府の政務を鑑みるに、日に増し月に累ね暴惡なり。其上太守宗麟、南蠻の邪宗を崇敬し、女色に耽り、或は一萬田が妻女を侵取り、或は伯父菊池右兵衛重治道閑入道。が妻をも奪取り、彼是人法に背きし故、大友家の滅亡近きにありと、未前に其凶を知りて、此度叛逆を企てけり。斯くて此事、府内へ聞え、同年の夏、鑑載誅伐として、戸次伯耆守・臼杵中守・志賀安房守・朽網三河守以下大軍を以て、筑前へ發向し立花山に取懸け、五月十七日、辰の一點に矢合あり。七月に及ぶまで攻め戰ふ。城主鑑載、身命の限は防ぎしかども、終に怺へず自害して失せけり。斯かりし間、城は則ち落去し、寄手勝鬨を揚げ、當城の番には奴留湯主水允を入れ置きけり。

或る記にいふ、此時大友宗麟出馬ありしとなり。舊記に記さず。

又いふ此時、高橋三河守より立花加勢として、家人衞藤尾張守を差遣すの處に、持口に於て衞藤討死すとなり。非なり。此衞藤が事、永祿十一年に見ゆ。

原田了榮父子沒落

原田了榮同親種沒落附親種討たるゝ事

此時、高祖城主原田越前入道了榮・同子息上總介親種も大友を背くに依り、豐後勢取懸けて是を攻めけるに、原田父子防戰叶はずして、了榮は行方を知らず、上總介は高良山へ落行き、衆徒を賴みて居たり。然るに親種、ある朝手水を遣ひし處を、最愛の童形、心變(こゝろがはり)して故なくも斬殺しけり。

秋月休松軍附立花城騷動の事

高橋三河守鑑種、近年大友へ逆心し、岩屋・寶滿の兩城に楯籠るに依りて、豐後より檢使打替り〳〵參陣して攻め戰ふと雖も、無雙の要害にて、更に事ともせず。然る間永祿十年丁卯、又々豐後より戶次伯耆守鑑連・臼杵越中守鑑速・吉弘左近大夫鑑理に肥後衆加はりて大勢出張し、筑後よりも蒲池・田尻・三池・溝口各〻參陣せしめ、寶滿の麓堂尾觀世音寺表に著陣す。然る處に秋月種實よりも、名代を以て出勢し、色

休松合戦

大友勢の歴々討死す

色計略を廻し、高橋を攻めしか共、實滿・岩尾猶堅固にして差したる行(てだて)に及ばず。斯かりし間、寄手人數を二つに分け、臼杵鑑速は多田越といふ所に陣を移して野陣しけり。爰に於て秋月種實事、敵高橋に一味する由、陣中に風聞する故、則ち彼の名代を、鑑速陣中に於て討果し、さらば先づ高橋をば差置き、秋月を攻むべしと、同八月十五日、夜中に秋月表へ取懸け、同十六日の午の刻、休松に著陣す。時に種實、居館を差迦(はづ)し古所山の本城へ取登りけり。然る間、各、評定を極め、臼杵鑑速と吉弘鑑理は、肥後衆を手に屬け八町といふ所に陣替せしめ、戸次鑑連は南部衆・筑後上下の衆を相從へ、其儘本の休松に跎と在陣す。されども秋月勢、時分を見合せけるにや。更に軍を出さず。斯かりし程に、戸次鑑連、徒軍と共に彌永表へ陣を移し向城を取付くべしと議定して、同九月三日、休松の陣を引取りけるに、秋月勢打出で急に取懸け、休松の山中にて火を出し防戰す。時に豐後方散々打負け、足々〔引足カ〕になりて敗軍し、諸手の歴々討死する者數を知らず。中にも鑑連の舍弟戸次中務大輔・同名兵部少輔・同刑部少輔、扨又筑後衆には、溝口鎮生・三池鑑連舍弟親冬・蒲池近江入道・

同九郎兵衞、右何れも討死す。其引足の中にも、筑後國田尻中務大輔鑑種は、場所を退かず、戸次鑑連の側にありて自身手を碎き打戰ひ、其手に敵の首十五を討取る。田尻勢にも討死・手負多く有之あり。其人數には先づ鑑種が弟田尻式部少輔・同名刑部少輔・同大和守・同常陸介・同左京允・同三郎左衞門・同三郎四郎・同右衞門尉・衆行佐渡守・鳥町對馬守以下侍廿人、其外又者三十五人、疵を蒙る者廿九人なり。此外にも諸家の輩悉く討死して、豐後勢難儀に見えたりしに、大將戸次伯耆守鑑連は、少しも屈せず頗る勇を振ひ、敵の近所三桑木一本原に於て、其夜切据り、諸勢は皆足をも溜めず筑後川邊まで引退く。此時豐後衆には、朽網入道宗歷・清田入道紹喜・一萬田入道宗慶、竟に足場を退かず、又筑後衆には三池河内守鎭實・田尻中務大輔鑑種、是も其場を去らずして、戸次と一所に休へたり。然る間、戸次鑑連大に是を感じ、先づ三池鎭實は、父鑑連今度忠節を盡して討死致せし褒賞に、具足一領引出物にしぬ。田尻鑑種は、粉骨を抽んで自身太刀打し首を得たる軍勞とて、秘藏の太刀一腰を與へ、兩人ともに少し休息あるべしと、明くる四日に先づ在所へ歸られけり。斯

大友勢退却

くて翌くれば九月四日、豐後衆山隈原に俄に一城を取付け、戸次鑑連を初め南部衆皆取籠りぬ。然るに八町に在陣したる臼杵越中守鑑速幷に肥後衆、早古所山を攻むるに克たず、又引取ることも叶はずして。先づ樣體を見合せしに、折節大雨降りしかば、其風雨の紛れに漸く八町の陣を退いて、是も山隈へ繰入り。則ち山隈に在番しけり。斯くて次第に冬深くなりける儘に、豐府の三將、山隈の城を去りて皆上筑後へ打入り、戸次は富本村に、臼杵は八町島に、吉弘は吹上村に在陣し、永祿十年の暮は、各〻爰にて年を越しけり。扨も大友の軍士、今年休松の軍に大なるおくれを取りけるとぞ聞えし。

一、翌くれば永祿十一年戊辰、豐後の三老、上筑後へ引取りし後、山隈の城へは筑後の三池鎭實と田尻鑑種を在番せしめし處に、秋月衆、當城へ取懸るの由其聞あり。されども實不實未だ決定なかりしに、近邊の三原左馬大輔が一族に、同名右馬助といふ者、秋月に一味して俄に逆意を企で在所を燒拂ふ。茲に因りて三原親種、居館に怺へず、忽ち在所を立退きしかば、三池も田尻も山隈に怺へ難く城

を明けて、石崎村へ引退きけり。斯くて三原の騷動過ぎて、戶次鑑連此事を聞き、三池と田尻が山隈を明退きし事、甚だ不覺の至なりと、彼の兩人を猶敵口近く馬渡村へ押出し在番申付けけり。兩人是非なく思ひしかども爲すべき樣なく、數日馬渡村に差固めて居たり。斯かる處に、筑前國立花の城番奴留湯主水允へ、高橋三河守が引廻（まはし）にて、藝州より毛利衆少々取懸る由〔注進脫カ〕到來す。斯かりし間、折節豐後・筑後の軍士等、上筑後に在陣せしを幸に、奴留湯を見次がむ爲め、早速立花表へ馳付けしに、早彼の表には臼杵新助鎭富先驅を以て、藝州〔勢脫カ〕を打散らし、其上高橋三河守が加勢衞藤尾張守・米藏兵部少輔以下數多討取りて、戶次・臼杵・吉弘の三老へ其死證を見す。死證は首なり。斯くて立花表異儀なく平均しければ、當城の番人奴留湯以下の代として、田北民部少輔・田北刑部少輔・鶴原兵部少輔、此三人を立花城へ入置く。扨豐府の三老を初め諸勢は、旹岩門の如く引入れけり。時に筑後の諸將も、追々岩門の陣へ來り加はる。此時、戶次伯耆守鑑連より田尻鑑種への狀に云く、

御懇書委細令二拜見一候。　如レ仰去年於二休松一、向後不易仕候樣無二別儀一可二申承一候段、況以二一通一申談候。　駿河殿可レ有二變化一候哉。斯不レ及レ申候。就中於二一木一御心底之趣顯然仕條御頼敷存候。　雖レ非二指物一候上一腰令二進入一候。于レ今無二御失念一結句爲二御禮一黃金五兩被レ掛二御意一候御丁寧之儀畏存候。併御慇懃之御扱御隔心之樣存計候。　定而近日は可レ爲二御著陣一之條每事以二面上一可二申承一候條、不レ能二委筆一候。　恐々謹言。

六月七日　　戸伯　鑑　連判

鑑　種　まゐる御返可レ被レ下候

斯くて秋月種實も、其後は打出でず。然る間、豐後の諸軍、是よりは肥前へ亂入して、龍造寺隆信の佐嘉の城を攻めむと議す。

小田鎭光多久に移る附少貳政興の事

此頃、肥前國蓮池の城主小田彈正少弼鎭光は、隆信と和平あり、壻になりて居たり

隆信小田鎭光を蓮池より多久に移す

しが、少貳家衰微せし事を、くれぐ痛ましく思ひしかば、時々隆信に據りて、少貳政興の當時浪人の體にて居られしを、何とぞ宥免有りたき由歎き申しけり。然れども彼の政興は、龍造寺に對し累年の讎といひ、其上豐府に通じて大友と一味なりしかば、隆信更に許容あらず、結句鎭光に異心ありと忽ち狐疑を挾まれけり。斯かりし程に鎭光、是を謝すべき爲め、隆信の三男鶴仁王丸を養子に申請け、聊か異心なき由をぞ申開きける。然る間、隆信も疑を晴され、鶴仁王丸を鎭光の養子にせられけり。されども猶用心にや。鎭光元祖代々の地蓮池を所替にして、多久の城へ鎭光を遣し、蓮池の城には、舍弟和泉守長信を多久より移して入替へられけり。然るに鎭光は、先祖小田常陸守直光が時、應永年中に關東より肥前へ下向し、蓮池城に居る事已に八代、領する〔地脫カ〕凡そ六千餘町なり。斯かる處に、今度隆信の支配にて、思寄らず多久の山中に移され、大に心服せず是非なき事に思ひけるが、果して年を經ず、翌年の冬より龍造寺に對し害心を挾み、大友方とぞ成りにける。

一、少貳政興は、此時東肥前綾部城に住居せらる。然るに大友宗麟より森越前入道

少貳政興筑後に移る

宗智を以て、筑後國へ山を越さるべき由申遣されしかば、政興同意あつて、今年永祿十一年六月五日、朝日近江入道宗賫・宗筑後守を召具し、筑後へぞ赴かれける。此子孫ありけるや知らず。少貳數代の嫡流爰に於て絶えけるこそ淺猿しけれ。

大友宗麟龍造寺以下征伐の爲め出陣

大友宗麟龍造寺以下征伐の爲め出馬の事

永祿十二年己巳正月十一日、大友入道三非齋宗麟、筑後・肥前の敵高橋・秋月・星野以下、別しては龍造寺隆信征伐の爲め、府內の居城を出馬せらる。首途の祝は去る十二月初旬なり。先陣は例の三老戸次伯耆守鑑連・臼杵越中守鑑速・吉弘左近大夫鑑理にて、已に二月十六日、宗麟筑後國へ著陣あり。高良山の吉見岳へ假に要害を取構へ本陣と定め、爰にて著到を記すに、分國の士卒凡そ六萬餘兵なり。時に宗麟、田原六郎親永を招き、生葉の星野筑後守親忠が近年大友を背き、島津に從ひしを攻むべしとて差向く。玆に因りて田原六郎、三月中旬より高良山を引分かれ、上筑後に發向し、生葉の妙見城に取懸けたり。されども彼の星野が妙見の城といふは、高

原田親永星野親忠の妙見城を攻む

隆信書を田尻鑑種に送る

き事雲を分け、嶮しき事屏風の如く、中々攻め近づく便もなし。其上、筑後守の當國に於て既に三郡を知行し、財寶多く多勢の者なりしかば、田原六郎矢長(やたけ)に思ひしかども、差(さし)たる行に及ばず、兎角の計略に滯りて徒に數日を送りぬ。

一、已に豐後衆、高良山へ著陣し、先づ龍造寺を攻むべしと聞えしかば、佐嘉の城中へ打寄りて評定ありけるは、今度豐後の大軍を當城へ引請け、始終の合戰叶ひ難かるべし。先づ僞りて一旦和を乞ふに若くべからずとて、隆信より吉弘左近大夫鑑理まで、樣々に申されしかども、鑑理更に肯はず。然る間、隆信、筑後の田尻中務大輔鑑種を賴み、重ねて一札を送られける其狀に云く、

任二風便一聽二一書一候。然者於二此方一豐州衆可レ被二取掛一之由候條、種々到二鑑理一詫言雖二申入候一、無二甲斐一候而失二外聞一候。至二于今一者名字之盡之覺悟迄候。然處內內所存候者被レ對二我等一、御屋形さのみ上意あしくは候はん由承付候條、扨者鑑連叅而御賴母敷人にて御座候由承及候條、鑑連以二御取合一上意を伺申度候。近頃物笑之申事にて候得共、鑑連以二御懇一被レ無レ力置一候。何樣當末迄鑑連脇檜之儀

戸次鑑連大友宗麟を諫む

者無ㇾ淺仕候而、可ㇾ立二御用一物をと存事にて候。此等之趣可ㇾ然樣御申候而可ㇾ給候。恐々謹言。

三ノ十一　　龍山信判

鑑種まいる申給へ

返々鑑連承及候條、得二御指南一度候。鑑理のやふ〔樣〕にたのみがひなき人はいやく。

右、隆信より三月十一日の書札、田尻が陣へ到來しければ、鑑種是を差置き難くして、早速戸次鑑連に見す。然れども鑑連、更に眞實の事とも思はざりしにや、兎角の會釋に及ばず、彌、近日龍造寺を攻むべしとぞ聞えける。

一、斯くて大友宗麟、二月中頃より高良山に在陣し、既に卯月にも及べども、敵征伐の事を急がれず、唯、酒宴亂舞に心を模(すつ)して日を送らる。爰に豐府の三老の內、戸次伯耆守鑑連は、才智ともに世に秀でたる者なりしかば、大に眉を顰め、宗麟を諫めて申しけるは、夫れ舞能猿樂と申すは、治世遊民の時に當りて、平日溫席の和

樂にて候なり。然るに公、此度逆徒御退治の爲め、民の費・國家の損亡をも顧み給はず、七箇國の士卒を召され、遙々と他國に御馬を出され、已に百日に及び此所に御在陣あり。更々武備を御忘ありて、何ぞやうかうかと遊興に日を累ね給ふ。然るに彼の龍造寺隆信と申すは、元邊鄙の孤に候へども、其天性勝れて發明に武邊權變の勇士にて候。然れば其者御退治の爲め御發向あり。斯樣に空しく御在陣ましまさば諸軍疎み困窮し、却つて龍造寺より當陣を謀られ候べし。其上程なく梅雨の時節に向ふ。是れ亦軍旅の煩にて候間、曲げて御遊興を思召止められ、急度軍議を御決定ありて、逆徒の中にも先づ龍造寺を取詰められ、御征伐あるべしと理を盡して諫言しけり。宗麟、實にもと思はれしかば、軈て軍の評定決し、筑前國の敵誅伐には、早先立ちて下筑後の蒲田尻以下馳せ向ひしかば、其檢使には眞光寺壽元法印幷に浦上左京入道宗鐵を差遣し、生葉の星野へは西原六郎元の如く、肥前の龍造寺には戸次伯耆守鑑連・臼杵越中守鑑速・吉弘左近大夫鑑理に士卒三萬を屬けて差向けらる。然るに此先勢は、旣に千栗へ著陣し、諸勢は高

山へ陣を寄せ、夫より神崎勢福寺の城へ取懸けて、江上武種を味方に引付けむとす。扨又宗麟入道は、豊後一國の士卒を以て警衛と定め、高良山を彌〻本陣とせらる。

一、肥前の龍造寺には、豊後衆彌〻攻め來る由聞えしかば、隆信を始め親類家人、城中に相集まり色々評議を加へしかども、何れ此事、豊後の大勢を防がむ事叶ひ難かるべし。先づ何れもの妻子等を心安からむ方へ立忍ばせ、其上にて十死一生の決定をも極むべしと談合ありけるに、小城郡蘆刈の鴨打陸奥守胤忠と、德島治部大輔長房一同に申しけるは、我々知行所蘆刈は片田舍と申し、殊に船便能く候程に、隆信公の御妻子其外鍋島信生公の御足弱をも、皆々預り申すべしと申す。さらば其儀然るべしとて、龍造寺・鍋島の女童又は足手も立たぬ老人は、悉く蘆刈へ退かれけり。

或はいふ、此時隆信の子息長法師丸後政家と稱す。兄弟は、上松浦の鶴田越前守預り申して、已が獅子城へ招き入れけるとも。

江上武種大友方となる事

江上武種豐後大友に一味す

旣に豐後衆、神崎郡へ討ち入り城原勢福寺の城へ取懸けて、城主江上左馬大輔武種に使を立て、急ぎ龍造寺へ案內すべき由を申送る。元來此江上は、少貳家輔弼の臣にて、大友へは內々同心の者なりしかども、今迄は龍造寺へ一味しける仔細ありけり。

其理由

其事を聞くに、彼の武種、先年隆信と合戰の後、互に心を和げ、隆信の三男を養子に契約す。斯かりし故に、去る頃より宗麟、高良山へ在陣にも事を通せず。まして近日豐後衆、肥前へ亂〔入脫カ〕しけるにも出合はず。扨武種、先頃龍造寺へ申遣しけるは、今度大友の軍兵、大勢を以て佐嘉へ取懸け申すの由、然るに某が居城は、東の口一番に候の條、定めて先づ最初に攻め來り候はむか。然らむ時は、城原一手を以て彼の大勢を相支へむ事、中々難儀に候べし。其期に及び候はゞ、南の日の隈山に狼煙を揚げ申すべし。其節に於ては延引なく早速援兵を給はるべしとぞ申送りける。然るに今度豐後の軍兵、案の如く城原へ先づ取懸けしに依りて、武種、龍造寺

へ約束の如く早速南の山へ相圖の火を揚げ、援の兵を待ちしかども、隆信、如何思はれけむ。其援兵一騎も來らず。爰に於て武種大に腹を立て、事の急なるに臨んで約を變ずる法やある。よし〳〵今に於ては大友方に一味すべしと、忽ち龍造寺を棄て豐後の三老へ參禮し、長臣執行越前守種兼が嫡男新助武直（後に種直。）と牧吉長門守種次が二男六藏大輔（後の名清兵衞。）を、宗麟の本陣高良山に於て質人とし、終に大友方となりけり。時に舍弟石見守定種、兄武種に向つて申しけるは、凡そ人、武門に生を受け時に至りて命を惜み、事に臨んで身を捨てざれば、忽ち先祖の名を貶し子孫の面を恥ぢしむ。されば貴公、先年一紙の起請文を以て龍造寺と和平し、今又豐後に從ひ給ふ事、侍の本意に候はず。急ぎ元の如く大友と手切ありて、隆信と死を一所に致さるべしと、面を赤らめ諫言しけり　されども武種承引せず。仍りて定種、腹を居ゑ兼ね、いでさらば、此定種に於ては不義の輩に與して、憂世に恥は曝すまじ。所詮腹切つて屍を清くすべしと、腰の刀をずばと拔き、左の脇に突き立つ。兄武種を初め執行越前守、其座にあり大に驚いて、急ぎ定種に取付き刀を奪ひ奪りけ

り。定種力及ばず自害を半ばに仕たりしが、定業や來らざりけむ。其疵癒えて程なく本復しけり。此事龍造寺に聞え、鍋島左衞門大夫、彼の定種が心底を感賞あり。年歷て後、其子孫を家人に列し、食祿の地を給はりぬ。今の川瀨是なり。

右本文に載する所は、江上の家の記なり。又ある舊記にいふ、江上武種、去年以來田尻親種が故實に依りて、內心は大友へ相從ふ。隆信、是を知りて今度武種を援はれざるか。然るに弟定種、兄を疎みて自害しけるとなり。此定種が嫡子は、江上左近大夫澄種と號す。天正十二年、江上家種に屬して島原へ乘陣せしめ討死す。子孫なし。其弟、名字を變へて川瀨と號す。

豐後勢佐嘉に陣を寄す事附堤安武隆信へ諫詞の事

斯くて豐後の三將、神崎勢福寺の城を攻めけるに、城主江上武種頓て降參す。其外、神代刑部大輔長良・八戶下野守宗陽・馬場肥前守鑑周・横岳中務大輔鎭貞・筑紫次郎鎭恒・高木肥前守胤秀・犬塚民部大輔尙重・同名彈正忠鎭家・小田彈正少弼鎭光・本

告左馬允賴景・姉川彈正忠惟安以下、悉く大友方となりて段々參陣しけり。同三月二十二日、豐後衆、爰にて三萬餘騎を三手に分けたり、先づ一手は戶次伯耆守鑑連、龍造寺の城より北へ廻り、行程二里を隔てゝ春日塚原に陣を取る。一手は吉弘左近大夫鑑理、是も戶次と同じく北の方水上山に陣を取る。今一手は臼杵越中守鑑速、城の東の大手龍造寺より僅か一里を隔てゝ姉村へ押詰めたり。扨又、右三將の方より神代長良へ先達いひ送りしかば、長良も急ぎ三瀨の城を出で、河窪へ出張して竹下といふ所に在陣し、陣代兵庫頭を大將にて、古川佐渡入道を軍奉行とし、松瀨・關屋・一番ケ瀨・栗並・杉山・藤ノ瀨以下一千餘騎を差出し、豐後勢の案內者とす。扨大友方の軍兵共、爰彼所に打群がりて所々に放火し、村里民屋に充滿す。前代未聞の壯觀なり。

一、爰に此時、筑後國三瀦郡下田城主を、堤筑前守貞元といふ。妻は龍造寺和泉守家門の女にて、隆信とは相壻なり。此者兼ねて大友に相從ふ。然るに豐後の三將、貞元を以て隆信の許へ遣しけるは、今度宗麟公、高良山御在陣の事、一つには

堤貞元隆信に大友へ降參を勸む

龍造寺一家を御征伐の爲なり。早速軍門に下り、高良山の御本陣へ罷出で、御禮を述べられ然るべしとぞ申送りける。されども隆信、默然として返答なし。貞元重ねて申しけるは、某兼ねて、大友の旗下たりと雖も、貴方と緣ありて兄弟に異ならず。然る間心底を殘らず申す。聞き給へ。先づ今度の弓矢、大友方の大軍と龍造寺の一勢を物に比べなば、誠に九牛が一毛と申すべし。然るに軍を相挑まれ、如何なれば勝利の候ふべき。唯、三將より申送られし如く、早々降參ありて、高良山に出頭せられ、宗麟公へ御禮を申されよ。尤も其儀に於ては、一には國家の治平、二には龍造寺家の相續、三には諸軍の安泰なりと、頻に敎訓しけり。されども隆信、猶應諾の色なくして、貞元に向つて申されけるは、御邊の口能尤の至なり。然れども最前我等より吉弘・戸次の兩老へ、色々申したる仔細も候ひつれども、其節は其甲斐なく、既に近日佐嘉へ取懸け、當城を圍みし上にて、如是の憖、更々隆信が氣に應ぜざる處なり。早此上に於ては、名字の盡くるまでに、豐後の大勢を速に此城へ引受け、討死するより外餘儀候はずと返答申されしかば、貞元

重ねて詞なく、座席をぞ立ちにける。夫より又、同國貝津の城主安武山城守鎮敎が方よりも、龜山一竿入道を使にて、堤に同じく申送りしかども、隆信彌々承引なし。是は宗麟の內意を含み、兩人が申しける處なり。斯くて大友の軍兵共、彌々龍造寺を攻むべきにぞ相決しける。隆信、最前吉弘・戶次兩人が方まで、和平を願はれしかども其甲斐なく、今に於ては、又あなたより堤・安武等に含めて、和平の楸を入れしかども、隆信承引なし。其謂いはれいかん奈となれば、筑前の秋月・高橋が方より、中國へ大友勢亂入の事を注進せしに依りて、毛利衆段々渡海し、當三月下旬より筑前に所々軍始まり、其上近日又々、毛利勢雲霞の如く龍造寺以下の加勢として、關口幷に立花衆へ押渡る由相聞えしに依りて、豐後衆今に於ては和與を求めず。されども隆信は、又中國の加勢を預けられし故、今度堤・安武が申す旨に承引あらぬとなり。

北肥戰誌 卷之十七 終

大友勢龍造寺を攻む

北肥戰誌　卷之十八

豐後勢龍造寺を攻むる事

斯くて北山に陣したる豐後の軍士、永祿十二年四月六日、龍造寺を攻むべしと評定を決し、戸次伯耆守鑑連・吉弘左近大夫鑑理を兩大將にて、水上春日の陣を發し、神代勢を案內者とし、其道々を放火せしめ、長瀨御領蠣久へ相働く。神代の手の者は、旣に龍造寺の城近く、神野・三溝・大財村まで討ち入り、所々に火を懸け燒拂ふ。時に城兵に副島式部少輔・百武志摩守・田中上總介・秀島源兵衞幷に秀島が與力に合滿民部以下出向ひ、大財村にて神代勢と相戰ひ、數多討取りて追拂ふ。斯かる處に、豐後の兩將も續いて來り、構口に於て散々打戰ふ。城兵も此所を破られては叶はじと、討ち出で〳〵合戰す。されども豐後衆、鐵炮を以て稠しく打ちすくめしかば、

城兵終に叶はずして城中へ引籠る。されば此時豐後衆、付入に續いて攻入りなば、由々しき大事なるべきに、龍造寺の幸運にや。豐後の一將吉弘左近大夫、俄に煩出し進退心に任せずして、先づ攻口を引退き、軍兵を配り其口々を差固めけり。此時、寄手の輩に手負歷々多し。斯くて豐後の兩將、今日は素より陣替の爲なりしかば、戸次伯耆守は龍造寺の城より一里を隔て、北の方高木村八幡の社内に陣を取り、吉弘左近大夫は漸く病を扶けて長瀬村に陣を固む。

一、此時、筑後國簗河の城主蒲池武藏入道宗雪も、大友の催促に應じ、去る四月四日より下筑後の軍士を引いて、榎木津を打渡し肥前に討ち入り蒲田江に陣を取る。時に吉弘左近大夫より宗雪入道への狀に云く、

御札令拜見候。然者今日陣易候處、長良衆敵取合及鑓候由候條、鑑連・鑑理も罷出候。敵取出候者數度追込、於構口以手火矢悉仕付候。悴手にも手負歷々候。明日者惡日候條、以衆評口々可相定候。扨又犬塚彈種々口能とも候哉、更存分無實所事多候。殊に神崎郡之儀、筑紫鎮恆江被遣候條、犬彈存分

之儀に者不㆑可㆑有㆑之候。必以㆓面上㆒可㆓申達㆒候。恐々謹言。

卯月六日　吉左鑑　理判

宗　雪

參御返し

追而明日は以㆓衆評㆒從㆑是可㆓申入㆒候。御内略不㆑可㆑有㆓御油斷㆒候。已上。

此時、犬塚彈正忠より宗雪を賴み、領知を望みしにや。右鑑理の紙面斯くの如し。

犬塚民部大輔同長門守と討果す

犬塚民部大輔同名長門守と討果の事

豐後衆參陣の半ば、去る三月下旬、神崎郡蒲田江の城主犬塚民部大輔尙重と、同じく崎村の城主犬塚長門守鎭直と害心を挾みて切死しけり。此兩人、先祖は下筑後の住人にて、蒲池・大木の一族、當時東肥前の内にして頗る大身の者なり。さればその刺違へし意趣を聞くに、尙重は龍造寺の壻なれども、今度大友に一味し、鎭直は差たる緣はなけれども、龍造寺に一味す。斯かりし故に、兩人從弟ながら敵味方と

分れて、已に討ち果さむとぞ思立ちけり。されども離れぬ一族なりしかば、先づ兎角して色にも出さず押送りぬ。斯かりし處に、蒲田江の民部大輔侚重より、彌、鎮直を討取るべしと思立ち、兼ねて家人等に申含め、三月廿七日使を崎村へ遣して、長門守に申送りけるは、今度豊後衆參陣に付いて相談申すべき事候間、道手まで出合ひ給へ。面談を致すべしとぞいひ遣しける。道手といふ所は、蒲田江崎村の間なり。長門守、仔細に及ばず、則ち參るべき由返答す。爰に長門守の家人に、上瀧石見守といふ者あり。其姉女は民部大輔所へ召仕へけり。此女、前の夜、彼の工(たくみ)を聞付けて、本主なれば此事を長門守へ急ぎ告知らせむと思ひ、其夜半に城の堀を游ぎ越し、崎村へ赴き彼の企をぞ告げける。長門守是を聞き、元より思儲けしなり。何條事のあるべきや。彌、道手に出合ふべしと、同名左兵衛尉家虎・同伊豆守・同左京允・同彦太郎・向井幸圓入道・上瀧石見守・栗原左馬允・野口藏人・江島左近允、其外荒木恒武以下究竟の者共四十餘人引勝つて、約束の如く道手へぞ出向ひける。斯くて民部大輔も、中野宗明を初め宗徒の家人を選び召具して、道手に出合ひ長門守に面談し、扨此度、大友出馬の

事などいひ出しける其半ば、兼ねて相圖やありけむ。民部大輔が側にありし中野宗明、長門守に居寄りて、唯〻一太刀にと礑と斬る。長門守斬れながら、中野には目を懸けず、民部大輔を引寄せ中を刺通す。尙重中を透されても、獅子王といひける重代の太刀、ずばと拔きしかども、痛手なれば叶はずして忽ち事切れけり。中野は栗原・野口に討たれたり。斯くて雙方の家人等入亂れ散々切合ひて、鎭直が家人上瀧石見守も討死す。されども崎村の者共、あたりの敵を切拂ひ、主の手を曳いて崎村の方へ引返す。蒲田江の者共、栗山出雲守・鵜池・原・手塚以下遁すまじきと追駈くる。時に長門守は、深手にてありしかば、步行心に任せずして、崎村の居館まで叶ふまじとや思ひけむ。家人共が防ぎし隙に、今村用作の龍雲寺に入りて腹搔切り臥しにけり。斯くて鎭直の家人等、傍輩殘らず相催し、早速蒲田江に押寄せ、尙重の城を討破り、城に火を懸け相戰ふ。城中防ぐ事を得ず、尙重の妻子は蓮池へ落行き、龍造寺長信をぞ賴みける。彼の妻女は長信には姉、隆信には妹なり。（此後、横岳下野守賴續に嫁す。）

然るに犬塚民部大輔尙重に、男子二人あり。嫡子は前腹にて三郎といひ、二男

は後の龍造寺腹にて太郎と號す。家重と太郎は、眼前隆信の甥なりしかば、野心の者の子なれども、母と共に佐嘉へ迎へられ、成長して後、龍造寺の名字を受けて與三左衞門信尙といひしが、又本名犬塚になり、茂續とぞ改めける。扨前腹の三郎は、助け置くべきにあらずと、鍋島左衞門大夫信生、手づから切害ありけり。

或はいふ、右兩犬塚切死せし事は、尙重が蒲田江の城へ、鎭直を饗應に招き寄せての事なりとも、又いふ、尙重は犬塚左京允切害しけりとも。

斯くて隆信、今度、犬塚長門守鎭直が忠死を憐み、同四月二日、彼の一子百十九へ父が知行の內、肥前國黑津野三百町を宛行はれ　又同八月廿五日に、內曾我部ヶ里を加恩ありけり。其狀に云く、

倉戶鄉の內

一、內曾我部ヶ里　　一所

一、黑津野

御知行肝要に候。

永祿十二年八月廿五日　山城守判
犬塚百十九殿

植木軍の事

龍造寺の城中には、鍋島父子を初め龍造寺の一族、其外小河・納富・福地・江副・安住百武・西村・副島・馬渡・土肥・成松・內田・小林・鴨打・德島・野田・高岸・石井一族以下譜代相傳の家人等相集まり、必死になりて楯籠る。其勢僅か三千餘騎なり。爰に杵島郡佐留志の城主前田伊豫守家定は、龍造寺には新參なり。然るに今度豐後の大軍、佐嘉へ取懸け、龍造寺の滅亡既に近きにありと聞付けしかば、此期に及び兼ねての約を變じ見放すべきにあらず、一所に取籠りて兎も角もなるべしと、一家の男女都合百五十八、佐留志の居城を棄て、龍造寺の城へぞ入りにける。然るに隆信、衆を集めて申されけるは、倩〻事を案ずるに、唯今當城に籠る所の軍兵僅に三千を以て、大軍の敵を防がむ事、千に一つも勝利あるべからず。さりながら先づは中國毛利

の援兵を憑む計りなり。若し其援兵も延引せば、十死一生に決して、城中を突出で一人も殘らず討死すべし。又左もなくば、一向城に火を懸け腹を切るべし。此二つの外はあるべからずとぞ申されける。一座の面々申しけるは、仰の如く城中無勢にして、賴なく相見え候。然れども中國の援兵を待たずして十死一生に決し、切出でむも如何なり。されば先づ此度は、大友に御降參あるべきか。又先年の如く筑後の方へ御開き候はむかと、衆議區々なりけり。其時鍋島左衞門大夫申されけるは、唯今大友へ降參の事、先頃提・安武が方より和平を慫ひし時は御承引なくて、今更此方より阿容々々と降參とは、中々申し難き事なるべし。又筑後へ立退れむは然るべからず。夫を如何と申すに、先年には事變り、今度は彼の國人悉く敵に一味す。然るに其敵地へ落行かむ事は、偏に飢ゑたる虎に近づくが如くなるべし。先づ某、つく〴〵と思案を廻し候に、當城へ唯今籠る處の輩は、或は骨肉を分けたる親族、或は譜代恩顧の家人なり。然れば其中よりよも反忠の者は候まじ。其中必城中に野心の者すら出來らずば、當城無勢なりとも、急には落城申すまじ。

定、中國よりの援兵來るべし。然れども先づ此儀を待たるべきか。よし〳〵中國よりの加勢來らずば、其時の評定なるべし。各、如何にと申されしかば、隆信を初め一座の面々、皆尤もと同意ありけり。斯くて豐後の軍兵、臼杵新助鎭富を大將にて、多布施口へ取懸るの由注進あり。さらば是れ追拂へと、鍋島左衞門大夫信生・龍造寺下總守信種・小川武藏守信友・鍋島將監信定・同名彈正左衞門賢秀・成松刑部大輔信勝・安住石見守信能・倉町近江守信光・納富越中守信安・秀島孫五郎賢同・百武志摩守賢兼・圓城寺美濃守・於保賢守・石井・合滿・野田・高岸以下三百餘騎、多布施口へ馳せ向ふ。中にも鍋島左衞門大夫一陣に進んで、弓鐵炮を打違へ散々に相戰ふ。時に豐後衆打負けて、北をさして引退く。城兵是を追駈くるに、植木村にて豐後衆取つて返し烈しく相戰ふ。此時、城兵に北島河內守・副島式部少輔・高岸主水・同木工兵衞・同新左衞門進み戰ひ各、分捕す。軍半ばと見えし時、城兵の中より百武志摩守、陣頭に馬を乘出し大音聲にて名乘りけるは、唯今爰に進み出でたる兵は、龍造寺の家士頭百武志摩守にて候。尋常に槍を參らうとぞ呼ばはりける。時に豐後勢の中よ

り武者一騎馳せ出し、誰とは知らず志摩守に突いて懸る。二騎の間に少許りの水道あり。勝負更に付かざりしに、志摩守が槍先、少し上ると見えたりしが、豊後衆如何したりけむ。馬より逆にぞ落ちたりける。此者何様然るべき者にてやありけむ。後に控へし豊後の士卒、一度に噇と駈け寄りて、落ちたる者を舁乗せ、味方の内へ引いて入る。後に誰ぞと尋ね聞くに、今日の軍の大將臼杵新介なりけり。斯くて豊後の軍兵長瀬村へ引退く。城兵勝に乘り續いて是を慕はむとせしかども、戸次伯耆守が軍兵、三溝口へ攻來り、鍋島以下の後を取切り、既に龍造寺の城戸口へ攻め詰むる由聞えし間、先づ其敵を拂はむと皆々取つて返し、三溝口に群りたる戸次勢を追散らして、鍋島左衞門大夫を初め三百餘騎の者共、城中へぞ引入りける。

大友龍造寺和平附筑前立花軍の事

斯くて豊後の三老戸次伯耆守・吉弘左近大夫は、長瀬蠣久に陣を張り、臼杵越中守

大友龍造寺和平

阿禰村に在陣し、其近邊の村々を放火して、猨煙天を焦し城中を侵し苦しむ。加之神社・佛閣を燒失ひ、或は佛像・神體の玉眼を拔取り、或は寺院の經卷を奪取り、亂妨する事いふばかりなし。是れ豐後勢は、士卒ともに耶蘇宗門の故となり。斯かる處に、四月十七日肥後國城越前守親冬、雙方に入りて和平を談合せしに、隆信、仔細に及ばず納得ありしかば、戸次も吉弘も和與に決定して軍を止め、長瀨蠣久の陣を引いて本の如く春日原河上表へ差甘げけり。斯かりし程に、追付隆信より納富越中守信安を、戸次伯耆守が陣所へ使として有馬一足を相送らる。則ち大友家へ隨はるゝ所の印なり。其上、質人に納富但馬守弟秀島河内守が家督秀島四郎左衞門家周（此時は未だ孫五郎賢周と號す。）を、府内へ差送らるべきにぞ極まりける。其禮答の往返に、豐後の三老暫く肥前に在陣す。然るに、筑後國大鶴山城入道宗周が許より飛脚を以て、立花表へ中國の軍兵夥しく著陣し、其人數、稻麻竹葦に異ならず、已に事穩便ならざる由急を告ぐ、此注進を聞いて城越前守親冬は、吉弘左近大夫が手に屬し、河上に陣してありけるがよしなしやと思ひけむ。帷幕を捨てゝ本國肥後に歸りぬ。然

るに又、立花の城番として豐府より入置きたる田北・鶴原が方よりも、藝州の敵兵雲霞の如く渡海し、既に當城を圍むの由、高良山の宗麟の本陣へ早打敷並(しきなみ)なりしかば、宗麟驚き、肥前に在陣したる三老共の方へ、早速龍造寺と和平をなし、其許(もと)の陣を拂ひて急ぎ立花表へ罷向ひ、中國勢を追拂ふべき由、申送られけり。茲に因つて豐後の三老、急ぎ龍造寺の質人秀島四郎左衞門を具して肥前を引拂ひ、彼の秀島をば高良山の本陣へ引渡し、五月初三老は五萬六千餘騎を引率して、敵高橋が城下寶滿・岩屋の麓を驅け通り、臼井崎に著陣し、夫より杉山に一兩日野陣し、爰にて人數を兩手に分け、藝州陣と谷一つを相隔てゝ陣を取向ひ、數度の迫合之ありしかども、更に勝劣なかりけり。斯くて五月六日、戸次伯耆守引立にて、筑後衆と同じく長尾といふ敵陣へ取懸けたり。されども敵の陣構へ稠しくして事ならず。然れども切岸に於て合戰し、伯耆守自身槍を執りて、敵悉く仕付け陣屋へ追籠め、其儘異議なく引取りぬ。此時、筑後衆の内田尻中務大輔鑑種軍功を抽でて相戰ひ、家人等八人疵を被る。仍りて宗麟より鑑種へ感狀を與へらる。

筑前立花合戰

一、同月十八日、豐後衆・筑後衆、同陣を以て重ねて藝州陣に取懸け、切岸に於て合戰す。此時も田尻勢の內、金栗織部助・手火矢疵。楠原勘解由左衞門・同じ疵。三嶺兵部左衞門・同じ疵。森出雲守・同じ疵。中島刑部左衞門・同じ疵。中間の彌太郎同じ疵。合せて六人疵を蒙り、東三郎太郎・原口善助討死しけり。

一、さても今度筑前國立花表には、中國藝州衆吉川駿河守元春・小早川左衞門佐隆景兩大將にて、宍戶安藝守隆家・吉見三河守正賴を副將とし、其外桂新五左衞門・熊谷小次郎・浦兵部少輔・赤川能登守を初め、福原・川野・小笠原・高瀨・三澤・米原以下、山陽・山陰・南海十餘州の軍兵都合五萬餘騎を以て渡海し、總大將毛利右馬頭輝元は、長府まで出張ありて諸軍を下知せられ、先づ大友持の立花山の城を取圍み、其外山野に陣取りて豐後勢と陣を對し、數日相戰ふと雖も、未だ勝負はなかりけり。斯くて五月も過ぎ閏五月初め頃、宗像大宮司氏貞より藝州陣へ通用し、其往返之ある由相聞えしに依りて、豐府三老の下知を以て其通用を斷つべき爲め、肥後衆其外人數を牽し、藝州陣の前を打通りて宗像表へ相働き、人畜等牽

捕り、本陣の如く繰取りける處に、同三日、立花城を藝州勢攻め破りて、豊府よりの城番田北民部少輔・同名刑部少輔・鶴原兵部少輔此三人を虜にし、船より姪の濱に差送りけり。　藝州衆の仕樣、情ありとぞ聞えし。　然るに高橋三河守・秋月長門守兩勢を竝べて水木に城を構へ、大友勢の豊後・肥後・筑後等の通路を差塞ぎけり。茲に因つて立花に陣したる豊後衆、夫より往來輙からざるに迷惑し、長陣といひ彼是に付き窮しければ、斯くては叶ふべからずと、同閏五月下旬、戸次・臼杵・吉弘の三老相談を以て、高良山の本陣宗麟より下知せられ、南郡衆に筑後衆を差加へ、博多表氣古といふ野山に中陣を構へ、通路を差掘めて、其後彌、雙方立花に對陣し、既に十月に及びけり。　されば去る五月より今十月に及び、都合十八度の合戰なりしかども、互に勝劣あらず。然る處に宗麟入道調議にて、舍弟大内太郎左衞門輝弘に軍兵を相付け中國へ差渡し、藝州衆の跡を斷たむとす。斯かりし程に、其由、中國より立花に於て藝州陣へ急ぎ注進ありしかば、吉川・小早川を初め、先づ行に及ばずして、立花城には浦兵部少輔・桂新五右左衞門・〔能登守平の教經子孫、代々精兵なり。〕赤河〔能脱

登守、此三人を殘置き、總勢は十月十五日の夜中に、立花表を悉く忍引に繰取りけり。豐後衆勝に乘り、許斐表まで付慕ひしかども、さしたる敵も討取らず。然るに宗像大宮司氏貞、中國方として居城蔦岳に聢と楯籠りけり。されども是も臼杵越中守鑑速が調達にて頓て降參す。斯くて豐後衆、夫より西郷といふ所に陣を直し、立花の城へ中國より殘り居たる浦・桂・赤河此三人を虜にし、筑後衆一人づつを副へ、關口まで打送りけり。是は去る閏五月に、立花城にて田北・鶴原を藝州衆虜りしかども、結句懇志を加へて、姪の濱まで差送りたる返禮とぞ聞えし。扨中國に軍ありて、大内輝弘討死せしとなり。然るに今度、中國より大勢渡海の根元は、一つは龍造寺以下の味方を援はむ爲と聞えしかども、專らには高橋が勸にて、九州を手に入るべしとの事なりけり。然るに豐後の諸軍、夫より三笠郡へ陣を返し寶滿へ取懸け、高橋を攻めて日を累ね、今年は宰府に越年す。大友入道宗麟は、年内高良山を立つて府内へ馬を納られけり。

藝州勢九州渡海の原因

高橋鑑種以下大友へ降参の事

高橋鑑種大友に降參す

翌くれば永祿十三年（元龜と改元す。）庚午、豐府の三老戶次・臼杵・吉弘を初め、肥・筑・豐の諸勢共、早靑陽の霞とともに太宰府の陣を打立つて、高橋三河守鑑種が岩屋の城を攻めて相戰ふ。中にも筑後國草野中務大輔鑑貞・蒲池志摩守鑑廣・田尻中務大輔鑑種、進んで岩屋層（裏カ）手へ打登り城中に矢入す。然るに城主高橋鑑種、數日の防戰に退屈してやありけむ。さしたる行に及ばず、先非を悔いて懇望しければ、吉弘左近大夫の㥦（あつかひ）を以て總に降參の上、下城に及びけり。此鑑種、大友に背き近年籠城せし事、當年まで既に七八箇年なり。斯くて宗麟入道、高橋が降參を聞き、首をも切るべきなれども、其罪を宥免すべしと、則ち高橋が家督には、吉弘左近大夫が弟主膳兵衛鑑盛を居ゑられ、寶滿の城へ差籠めて勤番せしめ、又三河守鑑種には、豐前國にて規矩一郡を宛行はれ、頓て鑑種は豐前へ打越し、岩借城に隱居しけり。斯かりし程に、古所山の秋月長門守種實・高祖の原田越前入道了榮・五ケ山の筑紫右馬入道良甐

秋月原田等大友に降參す

も、皆大友へ降參す。されども其内に、筑後國妙見の城主草野親忠は、猶籠城して打戰ひ、更に大友へ隨はず。

大友宗麟龍造寺退治の爲め重ねて出陣

龍造寺隆信重ねて籠城の事

肥前國佐嘉の城主龍造寺山城守隆信は、去年の夏、大友と和平あり。既に質人を出されしかども、唯一旦の計略なるに依りて、彼の質人秀島四郎左衛門家周、今年元龜元年。の春、府內より忍んで佐嘉に歸る。之に依りて大友宗麟、重ねて龍造寺退治の爲め自ら大軍を率ゐ、府內を發足あり。三月十日先づ日田へ著陣し、夫より筑後へ打入り、去年の如く高良山を本陣として、例の三老戶次伯耆守鑑連・臼杵越中守鑑速・吉弘左近大夫鑑理に、豐後・豐前・筑後・筑前の士卒を差副へて肥前の佐嘉へ向けらる。斯くて此勢、三月廿七日、各肥前へ打入り、戶次鑑連は龍造寺の大手東の口阿禰境原へ差寄せ、臼杵鑑速・吉弘鑑理は、北の口春日原・河上表へ押廻し、下筑後の輩は南の舟手を承りて、榎木津に在陣し。兵船を用意す。檢使は雄城播磨守・上野兵

部少輔なり。高來の有馬左衛門佐義純も、大友へ力を合せ、高來・藤津・杵島其外領分の士卒を相催し、西の口砥川・丹坂・牛尾まで出勢す。山内の神代刑部大輔長良も、先立ちて河窪へ出張し、去年の如く同名兵庫頭を頭人にて、古河佐渡入道眞清を軍奉行とし、三瀬内藏助・杠左馬大輔・國分和泉守・小副川藏人・藤原善四郎・中村壹岐守・田中安藝〔守脱カ〕・秀島惣兵衛・陣内九郎左衛門等を差出し、河上に陣を取る。此外國中の輩には、高木肥前守・江上左馬太郎・犬塚彈正忠・横岳中務大輔・馬場肥前守・筑紫越後守・綾部備前守・藤崎筑前守・本告左馬允・姉川中務少輔を初めとし、東肥前の侍は皆大友方となりて、千布・金立・春日表へ出張しけり。爰に道池の舊主小田彈正少弼鎭光は、近年隆信の婿になりて、多久の梶峯城にありけるが、去年豐後衆來陣の時より、志を大友方に通じ、今度は彌々多久の居城を打つて出で、水上山に陣を取る。されば此度大友の從軍都べて八萬餘騎と聞え、山野民屋に群り日々夜々に國中を横行し、去年燒殘したる神社・佛閣・森林に至るまで悉く燒拂ひ、此時に及び古跡の伽藍・神寶・佛經殘らず灰燼とぞなりにける。斯くて龍造寺の城中には、隆信同

龍造寺防禦の部署

名の一族・鍋島の一類、其外譜代の家人僅に五千餘騎なり。隆信、是等と評定あつて、皆々死を一途に極め、持口の手分を定めらる。先づ東の大手をば鍋島豊前守信房・同左衞門大夫信生・小川武藏守信友を初め、末々の龍造寺差固む。南の船手をば蓮池の城にありける龍造寺兵庫頭長信に下知し、同名下總守信種を差副へらる。西の口砥川・丹坂・牛尾は、龍造寺左馬頭信周・同名左衞門佐鑑兼を以て守らせらる。北の河上口をば龍造寺右衞門大夫家就・納富但馬守信景・廣橋一祐軒信了固めて各、之を守る。

一、此時、大友より下筑後榎木津の渡、其外諸浦船留奉行として、夏足三河入道・齋藤民部少輔、四月廿日に來陣す。

巨勢軍の事

斯くて寄手も卒忽に取詰めず、疑と城中を圍んで四月下旬に及びぬ。然るに同月廿三日、城中詮議ありて、倡や不意に打つて出で一戰を勵し、敵の分際を量るべし

戸次鑑連龍造寺勢と戰ひて敗る

と、先陣は鍋島左衞門大夫・小川武藏守、二陣は納富但馬守、殿は隆信の旗本にて、東の口戸次伯耆守鑑連が陣に切懸けらる。鑑連は物馴れたる大將にて、備を亂さず其勢二千計りと見え、中田町へ繰出し、城方の先手鍋島と相懸りに雙方鬨の聲を作り、矢を射違へ入亂れて合戰す。其半ば鑑連兵を引分け、自身は千住村の堂の前に廻り、隆信の旗本へ切つて懸り散々に駈け立つ。時に隆信の旗本、打負けて既に難儀に及ぶ。此時鍋島信生の陣へ、注進櫛の齒を曳きしかば、信生則ち我が陣の軍を納富に渡し、其身は手勢を引揚げ、倉町大隅守信吉に談合し、鬨の聲を揚げて、戸次が陣へ切懸り火を散らして相戰ふ。此時城兵に、百武志摩守・高岸主水・宮崎伊勢守・北島河內守・池田式部少輔・西村新右衞門・長福寺雲叔以下、進み戰つて分捕し、中島三郎四郎は、信生の眼前にて敵三人切つて臥せ、其身も疵を蒙り、水町彌太右衞門生年十五歲、大に打戰ふ。爰に於て隆信の旗本、忽ち備を立直し、數刻戸次と相戰ふ。鑑連も千變萬化し鬪ひしかども、竟に打負け敗走し、僅に五百計りにて明屋敷のありしに取籠る。隆信、勝に乘り猶戰はむとありしかども、俄に大雨降出し、

其上日暮になりしかば、急に御歸城候へと、鍋島頻りに申されしに依り、則ち歸城ありけり。此時城兵に、久富兵庫助、阿禰・境原まで相働き、軍功を抽んで討死す。戸次伯耆守は明くる廿四日、横大路の茶臼山へ陣を移す。

所々軍の事

一、五月中旬、大友の軍士、東の口高峯まで押詰めたり。城兵是を追拂はむと討つて出で散々相戰ふ。寄手には下筑後の田尻伯耆守親種、一陣にありて深手を負ひ、合戰利を失うて引退く。時に城兵石井孫三郎討死しけり。田尻は本國に歸り、六月廿三日居城鷹尾に於て死す。

一、同月下旬、南の船手を攻むべき由、依りて兵船第一の條、下筑後の輩に於ては急ぎ歸陣せしめ、榎木津に到つて、駐と在陣すべき由、宗麟入道、高良山の本陣より肥前の口の在陣中へ下知せられし狀に云く、

水貝表之行、兵船第一之儀候條、早々有歸宅船數以馳走到榎木津、駐與在陣

専一候。聊不可有緩之儀候。猶戸次伯耆守可申候。恐々謹言。

五月五日　　　　宗　麟判

田尻中務大輔殿

南無道具留利合戰

一、六月十三日、北の口長瀬村の南無道具留利に於て、城兵と神代長良の手の者討ち戰ひ、城方打負けて數多討死す。時に宗麟より長良への狀に云く、

（前文闕ク）以行敵數輩被討捕被得勝利之由感悅無極候。今度御心掛之次第取鎮仕樣可顯其志候。雖無申迄候可被勵懇忠專可為祝著候。委細尙臼杵越中守可申候。恐々謹言。

六月廿日　　　　宗　麟判

神代刑部大輔殿

船津合戰

一、七月六日、下筑後の大友・田尻を初め、豐府よりの兩檢使雄城播磨守・上野兵部少輔同心を以て、兵船數十艘、龍造寺の南の船手端津村へ發向し、與賀・川副の城兵北村淸兵衞・鰡江村の無量寺以下と相戰ひ、利あらずして引退く。此時、筑後勢に

討死多し。其名略す。

一、同月十八日、肥後國城越前守親冬・隈部式部大輔親永も、宗麟の下知を得、肥前へ來陣して川上口に陣を張る。扨龍造寺の城攻、來る八月廿日と決定なり。此時、宗麟より隈部への狀に云く、

先書如二申一候、佐嘉表一働、來廿日に議定候。就中親永事、親冬同前河上江可レ有二馳走一之段申出候。親冬事、今日如二彼表一越山之條、繼二夜於一レ日出張肝要候。雖レ無二申迄一候、人數等別而可レ被二申遣一事可レ爲二祝著一候。爲二存知一候。恐々謹言。

七月十八日　宗　麟判

隈部式部大輔殿

浮盃口合戰

一、同月廿七日・廿八日、下筑後の大友方、浮盃口に於て重ねて合戰し、疵を蒙る者多し。其名之を略す。

此時、鍋島左衞門大夫の下知に依りて、池田一黨打出で、大に軍忠を抽んづ。

一、八月六日、下筑後の輩、重ねて浮盃口へ押渡り合戰す。此時、田尻が手の者松本

隆信の兵大友勢を破りて城中に入る

彈正忠・德永又次郎疵を蒙る。

一、同月七日、龍造寺の城中に各、評定あり。斯樣に數日を送り、大敵に圍まれて闇闇と暮さむ事、日に增味方の弱なれば、倡や隆信公を初め、何れも東の口へ切つて出で、戶次伯耆守と懸合せ、十死一生の軍を勵ますべしと、先勢は鍋島左衞門大夫、二陣は小川武藏守、殿は隆信の旗本にて、高峯口へ打つて出で、戶次と合戰あり。初度の軍は城兵打負けしかども、二度目の槍に戶次利を失ひ、巨勢野へ引退く。時に龍造寺の軍士の中より堤治部允・高岸主水允分捕す。隆信申されけるは、いで〳〵此勢に續いて巨勢野へ取懸け、戶次を駈け散らし、夫より高良山宗麟が本陣へ押寄せ、一戰の中に討ち崩すべしと申されしかども、鍋島を初め衆軍同意せずして、皆城中へ引入らむとしける處に、山內の神代衆に八戶宗暘の手の者相加はり、大勢の敵繰り來り半途を遮り切懸る。城兵已に終日の軍に戰ひ勞れて、合戰難儀に見えしかども、隆信の旗本より納富越中守・百武志摩守・安住安藝守以下、鍋島信生と一つになり、敵を高峯江の南方へ追退け、仔細なく城中

に入りけり。

北肥戰誌卷之十八終

北肥戰誌　巻之十九

今山夜軍大友八郎親秀討たるゝ事

大友宗麟弟親秀をして肥前に出陣せしむ

斯くて佐嘉の合戰に、大友衆打負くる由、高良山の宗麟の陣へ聞えしかば、さあらば軍兵を差加へよと、舍弟大友八郎親秀を大將にて、玖珠越前守・森藏人大夫・惠良左京允・同兵庫助・同右京大夫・同中務少輔・平井宮内大輔・同隼人介・豐饒彈正少弼・山下右近大夫・小田左馬助・田籠大藏允・森式部大輔・同子息中務大輔・吉弘大藏允を肥前へ差向けらる。（此内、豐饒・林・吉弘三人は、兼ねて隆信より豐府への申次なり。）此勢、千年川を打渡り肥前國に入りて、三根郡中津隈の干飯原に相集まり、西の河原に手勢を揃へ、夫より田手の東妙寺に入りて勞を休め、横大路を西へ打通り、金立山へ取登りて暫く休息す。爰に於て神代長良よりの案內者、白水讃岐守・篠木薩摩守出合ひて、此等を先立て同八月十六

日、都渡岐の渡を打越えて、諸勢大願寺野に陣を取る。同十七日、大將大友八郎は、主從三百餘騎にて、今山の北の嶺に陣を移す。都べて北の手の大友勢三萬餘騎と聞え、春日・河上・眞手・今山・大願寺の山野に陣を取り、先手の勢は於保村の黒土原に押出し、其旗旌天を掠めて行粧夥しき事いふ計りなし。城攻は彌〻來る廿日に相決しけり。

一、同十七日、下筑後の大友方田尻以下、檢使雄城薩摩守・上野兵部少輔と同じく兵船を以て、又々北端津へ取懸け、太田美濃入道源舜以下と相戰ひ、利を失ひて引退く。此時、筑後衆に討死・手負多し。其名之を略す。

大友勢黒土原に敗軍

一、同月十九日、納富但馬守信景、家人與力を引率して、於保の黒土原に取懸けて大友衆と相戰ふ。此陣の寄手は、豐後の先勢豐饒彈正少弼・吉弘大藏・林式部大輔・城越前守・隈部式部大輔にて、但馬守と駈合せ火を散らし防戰す。暫し戰ふと見えたりしが、但馬守打負けて引退く處に、新庄の伊東兵部少輔家秀、納富に代りて相戰ふ。但馬守力を得、備を返して伊東と一つになり、又豐後衆と亂れ合ふ。

時に大友勢利を失ひ、討死・手負類を知らず、士卒東西に散亂す。伊東・納富二度目の軍に切勝つて黒土原を引退く。

或はいふ、此時廣橋一祐軒も、納富と相備にて合戰すとも。

又いふ、此合戰は十八日の事なりとも。

鍋島信生今山の夜襲を決意す

一、同十九日の早旦、鍋島左衛門大夫信生、敵陣の體を見るべき爲め、手廻（てまはり）計りを召具して、城北中野村へ乘出し、北山の方を見られしに、先づ東は神崎・茶臼隈・火隈山より、西は川上・眞手・小城の今山まで、其行程五六里が間、山野谷嶺森林に至るまで、皆家々の旗見えて敵陣ならずといふ事なし。信生、馬廻の者共へ申されけるは、敵勢日々に增り、さても夥しき大軍かな。當家の浮沈此時なり。然れども又軍の勝負は、必ずしも勢の多少に依らず、時の運と不運との二つにあり。汝等も更に氣を屈する事あるべからずと、又此時信生、心中に思はれけるは、明日の廿日、敵諸口より押詰め、城を乘取るべきに已に決定する由風聞す。されば城中愁に戰ひなば、千に一つも利を得まじ。所詮我等が一手を以て、今夜大友八郎が今山

の陣を夜討にして、死を一擧に定むべし。其上にて自然勝利を得なば、目出度き事なり。又打負けて屍を敵陣に曝しなば、本よりの事なるべしと、心底に早一決あつて、城中へ歸られしが、半途にて屹と思出し、路より使を小城へ差遣し、鴨打・德島・持永以下の鄕士共へ、今夜鍋島左衞門大夫、今山の大友八郞が陣に夜討申すなり。各〻今夜彼の表へ出合はされ、加勢あつて給はるべしといひ遣し、扨龍造寺へ歸られけり。斯くて城中には、隆信の前に宿老其外相集まり、樣々評定ありけるは、已に四方の敵、明日當城へ取懸け、一同に時を定めて打崩すべき由相聞え、敵は其勢十萬餘騎と風聞す。味方、僅の小勢にて是を防がむ事、九牛が一毛なれば中々叶ふべからず。然れば龍造寺鑑兼は、豐後へ親しき者なる間、彼の一子を質人に出して、先づ一旦降參し、其後、行を廻すべきか。又當城を枕にして、一向討死に極むべきかと、詮議區々なりける處に、鍋島つと來り、隆信に向つて申されるは、某今朝、敵陣の體を見量り候に、北山谷峯に至るまで皆人ならずといふ事なく、計りもなき大軍なり。然るに明日は、四方の寄手一同に當城へ取

懸る由其聞候。城中、此小勢にては千萬に一つも利を得る事、御座あるまじ。あはれ某に御免候へ。今夜今山の大友八郎が陣を夜討にして、十死一生の勝負を決し候べし。其勝劣の變に隨つて御合戰あれと、頻りに望み申されけり。されども隆信を初め同意の輩なかりし處に、隆信の母公慶誾尼とて、其頃六十に餘られしが、軍評定の席に推參し、牙を嚙みて申されけるは、唯今左衞門大夫の申す處、圖に丁つて餘儀もなし。我等、扨城中の體を見るに、皆敵の猛勢に氣を呑まれ、猫に遇うたる鼠の如くなり。唯今信生の申すに任せ、今夜有無敵陣へ切懸り、死生二つの勝負を決するに如くべからずとぞ申されける。時に隆信も同意あつて、夜討然るべきにぞ極まりける。鍋島大に悅んで、八月十九日の夜、佐嘉の城を打出づ。俄の事なりしかば、主從十七人には過ぎざりけり。道祖元を打過ぎける時、百武志摩守貞兼十人計りにて追著きぬ。新庄村に到り勝樂寺に入り、暫し味方を待合す。信生、堤治部左衞門に下知をなし、彼の寺の竹を伐らせ新く旗竿を拵へらる。時に當所の伊東兵部少輔家秀、信生の陣へ馱餉を相贈る。鍋

鍋島信生名に加勢の交名

島、士卒と共に是を用ひ、既に新庄を打立たれしに、納富越中守信安・成松刑部大輔信勝・秀島淡路守信純・諸岡尾張守信良・成富甲斐守信種・安住安藝守家能・西村伊豫守家秀・倉町大隅守信吉・同近江守信光・圓城寺美濃守以下、追々馳せ付きて、信生其勢早三百計りになりぬ。扨新庄の西の川を打渡り、今山の方へ向はれし時、後より伊東兵部少輔・前山新左衞門・同名長門守、其外江頭村の者共二百餘人、鐵炮百餘挺にて駈け付けたり。時に信生、其勢凡そ七百計りになりて、藤折村に著陣ありし時、西の山に添ひて人數百計り旗一流指させ、曳や聲して押來る者あり。信生是を怪み、永松相五郎とて歲十九になりける若者を差遣し、見られし處に、蘆刈の鴨打陸奥守忠胤なり。忠胤、相五郎に向つて申しけるは、今日鍋島左衞門大夫殿より御役を給はり、今夜今山の大友の陣へ召懸らるゝの間、御加勢申せとの仰せに付いて、無勢なれども先づ駈付け申すと言遣す。信生打頷き、扨面面聲なせそ。竊に懸れと下知を加へ、靜に大友八郎が本陣へ取懸けらる。爰に鍋島の近臣に、七島一之允といふ者あり。兼ねて小城郡の案內者にて、先達小城

一揆共に觸廻し、自身は來つて案內す。斯かる處に、牛尾別當琳信、一山の衆徒を引具し來り、鍋島勢に加はる。山伏の出立・甲冑の行粧いかめし。信生大に機を得、權現の方を伏し拜み、自ら眞先に進み槍を杖に突き、今山の半腹に攀ぢ登らる。士卒ともに皆歩立なり。爰に深谷あり。上下行掛りて如何すべきと、何れも案じて居たるを、信生斯樣の時は難所なりとて、遲々せぬものぞと下知を加へ、槍を突立て一番に飛込まれしかば、七八百の軍兵共飛込み〳〵悉く向の高みに駈け上り、已に八郎が本陣へ打臨む。此時、鍋島の馬廻石井又次郎、敵の案內を見るべき爲め、味方に抽んで先に進み、大友衆に行合ひ討死す。扨信生、八郎が陣へ忍寄り、事の體を窺ひ見らるゝに、大將かと覺しくて、歲の程三十計りと打見え、大肥滿の男の色白きが牀机に腰を掛け、敵の寄すべきとはつゆ思寄らず、士卒に酒を勸め、明けなば疾く打立たむ體に見えて、馬物具引側めたり。

或はいふ、此時信生、宵より今山の八郎が陣へ斥候を遣しけるに、走り歸りて告げけるは、豐後衆、明日は城乘とて、大將も士卒も首途の祝、上下酒宴し、夜

討などの事は、努々思寄らず候。彌々御勢を急がるべしと申す。依りて信生彌々力を得られしとなり。

此斥候の士、成松刑部大輔とも、又秀島源兵衞が與力合滿某といふ者なりとも。

鍋島、よく〳〵八郎が陣を窺ひ見らるゝに、帷幕の紋茗荷の丸にて、燭の光に輝き其形鮮なり。信生、是を見、後に續きし百武志摩守・諸岡尾張守へ囁かれけるは、各々あの幕の紋を見よ。美はしき紋なり。唯今、此陣を一戰の中に切崩し、是を吉例に用ひて、則ち我が紋にすべきぞ。勇めや方々と鬨を噇と揚げさせ、中山掃部助を以て、是は神代長良なり。裏切するぞと呼ばはらせ、同じく八郎が本陣へ猪鳴きて切懸けらる。敵陣動搖する事限なし。然れども八郎の馬廻は相騷がず、其兵三百計り一所に圍め、暫し怺へて切合ひたり。大將八郎も、長刀を水車に廻し、自身手を碎き討ち戰ふ。此時、龍造寺の軍士に、犬塚伊豆守・古館掃部允以下討死しけり。斯くて戰半なりし時、鴨打陸奥守續く手の者、追々三百餘騎に

大友親秀討たる

なりて鯨波を發し、西の山より大友の陣へ切懸る。又相圖の時を待合せて、今市村の北に昔宿あり。今に知る人なし。深川に陣して居たりし小城一揆、德島・粟飯原・空閑・大塚・桃崎・彌頭司以下凡そ一千餘人、中にも持永治部少輔盛秀が謀に、大勢の體に見すべき爲め、火繩を多く切つて火を付け、竹に挾みて今市の東西に立竝べ、扨今山へ押寄せ、是も鬨を發し、大友の陣へ打つて懸る。斯かりしかば豐後勢、終に戰負け討たるる者數を知らず。大將八郎は主從十八人計りにて、艮の方へ遁れし處を、龍造寺の家人成松刑部大輔主從七八人、早先に廻つてとある境の後の茨の蔭に伏し竄れ、八郎を待懸けて、家人成松大膳・柄長左馬允と三八にて取籠め、互ひに名を稱し渡り合ふ、八郎も長刀を以て大に働きしかども、竟に討たれ首を成松刑部大輔に取られにけり。生年三十三となり。八郎の家人松原兵庫助・速見・西島以下、皆成松が手の者に討取られけり。

或はいふ、成松刑部大輔、今夜龍造寺の城を打出でけるに、此度信勝、大友の大將を討取らずば生きて二度歸り候まじと廣言吐き、城門の柱を二刀誓つて出

大友勢敗北

でけるが、果して大將を討ちけりと。

或説には、此時小城郡に堤善左衞門といふ者あり。成松が實の弟なり。此者最前、今山の八郎が陣所を能く窺ひ見、其案内を成松に告知らせける故、右の如しとなり。

已に十九日の夜も、天明と明けけるに、八郎旗本の士卒は、皆散々に成り、大願寺野に陣取りたる豐後の諸勢も、八郎殿討たれたりといふ聲に色めき立ちて見えける處に、納富但馬守、宵(よひ)より河を越え、鍋島左衞門大夫の相圖の鬨の聲待受け、其勢五百餘騎、於保の黑土原に陣したる大友の先勢に切懸り相戰ふ。最初は納富打負けて二度まで追立てられしが三度目に切崩し、逃ぐる敵を追駈けて大願寺野へ攻め來る。斯かる處に鍋島も、今山の敵を悉く追散らして凱歌を揚げ、大願寺の西の尾崎より競ひ來られ、鴨打陸奥守・徳久治部大輔・持永治部大輔・矢作左近將監・陣内藏人・大塚左京允以下の小城一揆、山伏には牛尾別當琳信・西持院宥秀・圓實坊叡秀を先とし、皆大願寺野へ押來り、諸手一同に鬨を作つて、爰に陣

したる豐後勢に噇と切懸りしかば、何かは怺ふべき。豐後衆足立もなくなりて、東西南北に敗走し、田の畔川岸に蹎倒し、はか〴〵しく弓をも射ず、太刀をも合せず逃迷ふ。斯かる處に、廣橋一祐軒信了・副島式部大輔光家・倉町新太郎信俊・堀江新五左衞門信久・鹿江宮內大輔信明・石井和泉守忠清が一族追々來りて、納富但馬守と一つになる。其外、牛島下野守・於保賢守・大塚內藏允・秀島主計允・木下四郎兵衞・七島一之允以下、我れ先きにと馳せ加はりて、豐後勢の敗（走脫を）するを選討に追伏せ切倒して、首を得ること數を知らず。中にも前田伊豫守家定は、納富が一列にありけるが、手の者五十人を引分け、逃ぐる敵を追詰め自身の槍下に、首五つ取りて但馬守に見する。同じく納富が與力辻左馬允は、豐後の侍田原大隅守を討つて首を取る。同國林中務大輔を荒木勘介之を討つ。此荒木は、元來備後國の浪人希代の劍術人にて、近年肥前に來り、宗徒の輩を弟子に取りて居たりし者なり。又三城尾張守・同源助を、北島河內守討取りたり。同豐後の侍森大膳允は、味方の退く中より取つて返し戰ひけるを、副島式部少輔太刀を合せ、

大友の士卒討死二千餘人

竟に大膳を討ち首を取る。牛津の山伏善戒坊證人なり。鴨打陸奥守・同子息左馬大輔・同右衛門・同太郎九郎は父子四人、手の者數百人にて、逃ぐる敵を慕うて河上へ押詰め、大友宗徒の侍林式部大輔を、鴨打家人菰原大膳組伏せて首を取る。此外豊饒彈正も討たれぬ。吉弘大藏は、最前於保原の軍に齋藤木工左衛門討取りけり。此三人は龍造寺の兼ねて申次なり。肥後國城越前守親冬と隈部式部大輔親永は、兩人一所に切据り、隆信へ懇望を以て降參しけるを、成松が家人成松大膳・柄長左馬允虜にす。又筑後國矢野の住人菅五條鎭定も同じく生捕となる。（此五條は、先祖京極の公家なり。）此等は皆大友方にて、一城の主なりしかども、時の運に引かれておめ／＼と或は生捕られ、或は首を取られけるこそ無念なれ。されば十九日の夜より明くる廿日の早朝まで、今山大願寺野に於て、大友の士卒討死二千餘人なり。其外國侍には、神代長良の家人・軍奉行の古川佐渡入道眞清を初め、執行内藏助・名尾平左衛門・川浪三郎右衛門以下討死す。同家人三瀨内藏助は、一段高き所にありけるを、小城の持永治部允つと駈け寄り、低き所より見上げざま槍を合

せ、終に突伏せ首を取る。同小城鯖岡の犬塚左京允盛家も、大願寺野に於て爽なる母衣掛武者に駈け合せ、二尺七寸の太刀を以て馬上にて切合ひ、敵の太股を切付け、彼の武者切られて馬より落つ。左京續いて飛下り、押へて首を搔落す。其名字を知らざりけり。又神代の家人杠左馬大輔重滿は、手の者殘なく討たせ、自身も疵を蒙りて唯ゝ一人馬を早め、川上の奥井手の原まで落ちたりしが、慕ふ敵に返し合せ、其場にて討たれにけり。八戸下野守宗暘も、神代長良といひ合せ、此度大友に一味し、大願寺野に陣を取り、神代衆と同じく戰ひしが、味方早敗軍に及び、亂足(みだれあし)になりて、軍是までと見えしかば、主從四五人にて山内の方へ引きけるを、川原忠右衞門追駈け、上帶の迦(はづれ)を切付く。宗暘は無雙の勇將にて、切られながら取つて返し川原と切結ぶ。川原も左の手を切られ、叶はずして引退く。宗暘は痛手を負ひしかども、杠山まで退いて、同月廿四日、其手に痛み竟に死にけり。大供和尙の引導にて、杠の清流寺に葬りぬ。此宗暘、初名は於保宮內大輔と號す。佐嘉郡數百町を領して八戸の城に住し、隆信の妹壻なり。されども人

の下風に立つ事一生嫌ひし男にて、終に龍造寺に從はず、天文の末の頃より山内へ引入り、神代を賴みて居たりし者なり。又此時、上松浦の草野中務大輔鎭永も、大友に加勢として留主何某を差遣し、大願寺にありけるが、諸勢と共に彼の留主も敗軍し、上松浦へ歸りし處を、山内の溺者共、落人あるぞ。物具剝いで所帶にせよと觸廻し、數十人出合せ鷹取越にて討留めけり。小田彈正少弼鎭光は、水上に陣して居たりしが、味方敗軍と聞きしかば、陣所より逐電し、居城多久へも歸入らず、忍びて舊領蓮池へ赴き、船より筑後に落行きけり。斯かりし程に、西の口丹坂へ陣取りたる有馬勢も引退く。

一、今度龍造寺の軍士に、討死鹿江左京亮・石井又次郎・納富孫九郎・犬塚伊豆守・古館織部允・牟田兵部左衞門・中島三郎四郎。生年十九。

一、鍋島左衞門大夫信生は、今夜一戰の功に、大軍の敵を切崩し、其勢、堂々と勝鬨を三度執行し、討取る處の敵の首を、今山原大願寺野に悉く埋めて、則ち首塚と名づけらる。

一、納富但馬守信景も、同じく戰功を抽んで、是も討取る首を於保原に埋めて首塚と號す。

一、隆信は龍造寺の城中にありて、信生以下の今夜の軍、餘りに心許なしとて、小川武藏守信俊（時に未だ大炊助信貫といふ。）を先陣にて、西高木の邊まで馬を出されしかども、早今山の敵陣敗れ、大友八郎も討たれし由、追々相聞えしに依りて、則ち歸城ありけり。

此時、色々興ある事共多しとなり。隆信今夜城を出でられ、愛敬島村の北へ道押ありし時、馬廻の者甲著けるに、此者極めて臆病にやありけむ。大に手振ひ竿に甲の綴あたりて、がた〱と鳴りしを、隆信、殊の外に訶り疎早の奴かな。甲を能く仕れとありしに、此者取敢へず、何とて左様に腹を立たるゝぞ。今度の軍は決定御利運たるべし。其故は、今度の御甲かつたり〱と申すと答ふ。隆信一笑あつて、汝は出馬の首途に吉事を申す者なり。軍必ず利運を得ば、此近邊にて知行を取らすべしと約束ありけり。果して合戰勝利ありしかば、

約束の如く愛敬島村の邊にて少地を與へられけり。其田を今にかつたり免といふなり。

此時又、斥候を追々遣されけるに、ある斥候走り來りて大息をつき、さても豐後の者は、皆切志丹と聞えしが、眞言に魔法を遣ふにや。大根に火を付け燈すか。さて〳〵能く煽る物かなと申す。此者、蠟燭を知らざるにや。

多久城軍の事

鍋島納富佐嘉に歸陣

斯くて八月廿日、鍋島信生を初め納富但馬守以下、今度軍功ありし輩、皆緩をゆすりて佐嘉へ歸陣す。寔に由々しくぞ見えたりける。城中の老若男女、數日の間大敵に圍まれ、膽を冷してありしに、偏に信生の武力を以て、先づ北山の大軍を追拂ひ、悦ぶ事大方ならず。されども隆信は悦ばれず。其故は今度敵に與せし小田鎭光の妻室は、繼子なれども息女なり。又彼の養子鶴仁王と申すは、隆信實の三男末だ幼稚の見なり。此人々、鎭光の居城多久にありける間、其存亡の程如何にと、心許な

鍋島信生て多久赴く

信生多久城を攻む

く思はれし故なり。然るに信生、早其色を推量あつて、某唯今多久へ馳せ向ひ、彼の兩人を則ち受取り參るべしとて、宵の儘未だ甲冑をも脫がずして、城にて兵糧仕ひ、日既に西の山の端に見えしより佐嘉を打出でらる。是を見て舍弟小川武藏守信貫・龍造寺上總介家晴・時に未だ孫九郎信重といふ。鴨打陸奥守胤忠・同嫡子左馬大輔胤泰・牛尾別當琳信以下都合六百餘人、皆宿所へも歸らずして、道々兵糧仕ひ、信生に相續く。中にも琳信、先陣を請ひて眞先にぞ進みける。時に納富但馬守信景は、搦手に廻り南の方横邊田口より押寄す。此手の先陣は佐留志の前田伊豫守家定なり。斯くて信生、先づ別府へ陣を寄せられ、彼所の地侍相浦右衞門允を味方に語らはれけるに、相浦仔細に及ばず、此以前信生の情、今更忘るべきにあらずと、頓て伯父甥物具固め。家人等を催して參陣しけり。信生悅び、則ち是を案內者とし、廿一日の未明多久の城へ取懸けられ、程なく著陣せらる。爰に於て信生、鍋島淡路守に公文相模守を副へて使者とし、城番致したる鎭光の老臣江口右馬助・內田治部少輔が方へ申されけるは、鶴仁王丸母子を受取るべき爲め、唯今鍋島左衞門大夫當城へ罷向うたり。

早速相渡され候へとなり。されども兩人の者承引せず異議を申す。依りて、さらば大城戸を打破つて攻入るべしと下知ありしかば、案內者の相浦右衞門允を初め、同名河內守・同佐渡守・同右近允を先として、龍造寺伊豫守・同上總介・小川武藏守・牛尾別當の同宿共、城戸口へ犇々と付きて打破らむとす。城中には江口・內田を初め、橫山・吉島・山田・井手・大隈以下の輩、城門を持つて破られず。中にも江口右馬助は、櫓に登り、寄手を屹と見、相浦右衞門允が眞先に進みしを打見て申しけるは、近年當家、此所を領知せしより、彼の相浦が一族共皆祿を食まずといふ事なし。然るに唯今、あの右衞門允、佐嘉勢の案內として、眞先に進むこそ面惡けれ。いでく彼等が質人の妻女を城戸口へ引出し、眼前に殺して見すべしと申しけれども、鎭光の妻室あはれみを加へられ、頻に留め申されけり。斯くて城兵共、城戸を破られじと防ぎ戰ふ。時に鍋島信生采配を揚げて下知ありしかば、寄手の士卒悉く城戸口に押詰め相戰ふ。此時佐嘉勢に增田善次郎討死し、松田治郎左衞門深手を負ひて命を落し、副島孫兵衞も矢に中りて死し、七島一之允手柄を現し疵を蒙る。其外瀧造

寺の軍兵込重りて、終に大城戸を打破り、暫時に本城を攻め落さむとす。爰に又鴨打陸奥守は、父子主從五十餘人にて城の後に廻り、龜甲といふ難所より、木の根や葛に取付きて息をもつかず攻め登る。城兵是を上げ立てじと防ぎし程に、嫡子左馬大輔〔マヽ〕石手を負ひて半死半生なり。されども鴨打、終に此口より攻め入りて、已に本城に入らむとす。斯くて鍋島信生は、水の手の堀口に付いて、一番に城兵を突崩し、城へ追登られけるに、城方より信生の旗を石にて谷へ打落す。於保賢守、是を見て續いて谷へ飛下り、彼の旗を取りて差上げたり。扨信生、七曲の上より三番目に木陰のありしを楯に取りて、諸勢を下知し居られし處に、城兵多く打つて出で、信生に切懸る。爰に龍造寺和泉守長信の侍に、成富與六左衞門といふ者あり。最前より進み戰ひ、大城戸を打破つて、信生と一所の堀に付いて居たりしが、つと驅け合せ、信生に懸りし敵二人、足下に突いて伏す。信生是を見て、天晴早業かな。汝は何者ぞと尋ね問ふ。彼の者答へて、某は龍造寺長信の家人成富與六左衞門と申す。信生重ねて、軍神の血祭に能く仕りたりと甚賞美ありけり。斯くて與六左衞

門は、猶塀に付き塀越に突合ひしが、城兵より槍を切折られ力及ばず、信生に向つて持合の內を給はれと乞ふ。仍りて鍋島、彼等が働きを感賞あり。則ち手槍を得させけり。成富大に悦んで、鵙指を以て塀を破り城中へ乘入る。又倉町大隅守・於保賢守も城中へ乘入る。時に信生、士卒を下知して悉く城に乘入り大に打戰はる。城兵も爰を最期の合戰なりと勵み、割りて防ぎしかども、主の鎮光出陣の跡にて、無下に無勢なりかば、防戰叶ひ難くして、宗と頼みたる內田治部少輔は、木下四郎兵衛昌直に討取られけり。對馬守名字知らず。といふ者は、北島河內守に討取られぬ。其外の城兵、或は落失せ或は討死して早殘なくなりけり。斯くて鍋島信生は、鶴仁王丸母子の人を捕るべしと、城中を走り廻りて、死人の中を押分け〳〵尋ねられし處に、傍より江口右馬助不斗出でて、信生を只ゞ一太刀にと飛懸る。彼の右馬助は無雙の剛の者、其上不意の事なりしかば危く見えたりしを、辻左馬允、得たりと聲を懸け、右馬助をぞ切伏せける。然る處に、鶴仁王丸を江島左近が女房搔抱き逃行きけるを、鴨打が家人菰原大膳追駈け、彼の女房を一刀に切つて、鶴仁王の血に觸れ

しを捕へたり。　此女は水町丹後守が妹、隆信より附屬せられし乳人なり。　鶴仁王丸今年八歳とぞ聞えし。　扨鎮光の妻室も、恙なくおはせしを、信生是を守り、彼の母子を具して龍造寺へ歸陣ありけり。　其時、隆信安堵にて、今度信生の軍功甚だ莫大なりとぞ感ぜられける。　斯くを搦手へ廻りたる納富但馬守も、龍造寺へ歸陣す。此時、但馬守が先鋒前田伊豫守は、先頃己が佐留志の居城を、有馬方より攻め取られしを今度取返しけり。

或はいふ、此時江口右馬助は、成富與六左衛門討捕りしとも、又いふ、右馬助は、最前城戸口にて討死すとも。　兩説非なり。

隆信感狀を成松に與ふ

一、今度今山夜軍に、軍功多き中にも、成松刑部大輔信勝は、敵の大將大友八郎親秀を討取るに依りて、隆信、感狀を與へらる。　其狀にいはく、

去廿日於二今山一豐州陣切崩砌、抽二粉骨一入體大友八郎方被二討捕一之段、高名無二比類一付、弓矢靜謐之刻可レ加二扶助一候。別而辛勞之趣、向後不レ可二忘却一之狀如レ件。

元龜元年八月廿六日　　　隆　信判

戍松刑部大輔殿

一、今度於保原の軍に、齋藤木工左衞門、豐後の吉弘大藏を討取り、其首を緥に包み、則ち大藏が帶したる金の熨斗付の一尺五寸の脇差に副へて、隆信の實檢に入る。其賞として木工左衞門を佐渡守になされ、米田原に於て領知を與へられけり。此外、今度軍功賞多し。說々詳ならざるに依りて之を略す。

一、今度豐後衆、今山敗軍幷に大友八郎討死の事を、田尻中務大輔鑑種筑後榎木津の陣所より、同廿二日に高良山の大友宗麟の本陣に注進す。時に宗麟よりの返書にいはく、

小城表立柄示給候被﹅副﹅心候案中候。合戰之慣不﹅珍候條、更不﹅及﹅仰天﹅候。其表無﹅油斷﹅可﹅被﹅申談﹅候條、毛頭無﹅氣遣﹅候。宗麟事も千栗迄急度可﹅差寄﹅之條、必以﹅面可﹅申候。委細倚浦上左京入道可﹅申候。恐々謹言。

八月廿二日　　宗　麟判

田尻中務大輔殿

右狀の文談に、更に不ㇾ及ㇾ仰天ㇾ書載之あり。然れども何樣仰天しけるにや。宗麟の右筆兩人あり。葛西長門守・吉良新五郎といふ。宗麟平生に、此兩筆の外更に他筆を用ひられず。然るに此狀の正書を見るに、兩人が手蹟にあらず。疎筆にして其體早晩に相違す。されば今山の敗軍を聞いて、高良山の本陣も周章けるにや。

高峯口軍の事

去る廿日の未明、大友八郎親秀、今山にて討たれ、其從軍は悉く敗走し、北一方の豐後衆は退きしかども、東の口阿稱境原に陣取りたる豐後の諸勢は、更に退かず。然る處に高峰口へ差寄せたる臼杵式部大輔が一勢、凡そ五千餘騎かと見けるに、次第に減じ二千に足らざる由、城中へ聞えしかば、倡や彼等を打散らすべしと評定あり。八月廿三日、隆信も自身馬を出され、納富但馬守を先手にて、高峰口に於て臼杵と合戰あり。此時龍造寺の軍士三ヶ島又右衞門・西村新左衞門進んで分捕し、三

大友方臼杵式部大輔討死

ヶ島は勝の下に矢疵を蒙り、池田式部少輔軍功あり。斯くて軍牢なりけるに、鍋島信生と龍造寺上總介家晴、牛島より敵の後に廻り、鐵炮を烈しく打掛けしかば、臼杵が軍兵四途路になりて、東の方へ引退き、山邊・高山以下宗徒の者共、數多討死す。龍造寺の侍に、秀島源兵衞は眞先に進み、敵三騎切つて落し、其馬に打乘り猶驅け入りて打戰ふ。斯かりし程に、臼杵式部大輔は、一本松の南の方にて、納富が與力辻左馬允に討取られ、其手の殘兵悉く東をさして散亂し、境原の味方と一つになりけり。

ある記にいふ、臼杵式部大輔、此時自殺すと。非なり。又いふ、今の一本松は、臼杵が舊跡なりと。未だ詳ならず。

一、爰に神埼下郡蒲田の城へ、犬塚彈正少弼鎭家、大友方にて楯籠り、未だ怺へて控へたり。之に依りて今月廿四日、宗麟入道、高良山の陣所より下筑後の輩へ下知ありし狀にいはく、

於其表別而軍忠感悅候。然者蒲田要害無心許存候條、無盡期辛勞雖察存

候、急度以乘船被差籠、彌可被勵馳走事肝要候。如此之砌、口能之儀候而者不可然候條、輕々與可被遂其節事專一候。委細眞光寺壽元法印可有演說候。恐々謹言。

八月廿四日　　　　宗麟判

田尻中務大輔殿

巨勢若宮軍の事

既に高峯口の寄手は退散すと雖も、阿稱境原の豐後衆は猶退かず。斯くて九月に入りて城中僉議あり、一軍あるべしと、今度も隆信馬を出され、巨勢若宮へ差寄せたる豐後陣へ取懸る。時に豐後の者共、一支も支へずして、阿稱の味方と一つになる。隆信士卒を下知し、是を追うて敵陣近く押詰め、今日は早日暮れぬ。明朝早旦に取懸るべしと申されしを、倉町大隅守信吉制して申しけるは、御諚にて候へども、阿稱境原に在陣の敵の分限を量り候に、未だ味方には十倍の大勢なり。然るに

卒忽の合戰惡しかるべし。唯、晝の勝利を十分にして、今夜御歸城候はむか。但し若し敵、是を知りて慕ひ候はゞ大事にて候べし。所詮此方より今夜、鬨の聲を揚げて引上ぐべし。敵陣、先度の今山夜討に懲り、決定動搖申すべし、然らば其變に應じて、御引取然るべきか。これ軍の一法に候はずやと、申しけるに依りて、隆信も尤もと同意あり。其夜の夜半計りに、先づ鯨波を揚げけり。案の如く敵陣大に騷ぎ、大半崩れ立ちしかば、其騷動の紛に、隆信軍士を引揚げられ、佐嘉へ歸城ありけり。

大友龍造寺和平の事

斯樣に寄手、每度の軍に利を失ひしかども、元より目に餘る大軍なれば、阿稱境原の寄手猶雲霞の如し。斯かる處に、豐後の軍將戶次伯耆守鑑連・臼杵越中守鑑速が陣より、筑後の田尻中務大輔鑑種まで色々申す旨ありけり。之に依りて鑑種より佐嘉へ到り、其趣、隆信を初め鍋島信生の方へ申試みける處に、過半請付ありしか

大友龍造寺和平

ば、同九月下旬、戸次鑑連・臼杵鑑速・吉岡越前入道宗觀、阿禰・境原より船にて、田尻が領地下筑後高崎村へ渡海し、則ち鑑種陣所にて毎日談合之ありし上、其使者として、鑑種自身佐嘉へ赴き、右三老の意分（こゝろわけ）を樣々相談しけるに、隆信承引あり。宗麟入道も納得せられ、雙方既に和平一著しけり。斯かりし程に、佐嘉よりは祝儀として岩部相模守平常久を差出され、則ち高崎陣所に到りて、戸次・臼杵・吉弘此三老に面謁し、又大友よりは、古庄左京允を龍造寺へ差遣し、互の祝禮ありけり。夫より十月朔日、吉岡入道宗觀は、高良山宗麟の本陣へ赴き、戸次・臼杵兩人は、又肥前阿禰の陣所へ打越えけり。時に佐嘉より龍造寺備前守鎭家・小河大炊助信貫・（武藏守のことなり。）秀島四郎左衞門家周參陣して、彼の兩將に見參す。斯くて其儘豐後衆、肥前の陣所を立つて、皆々高良山に打集まり、筑後衆も殘らず宗麟の本陣へ出仕し、同月三日、宗麟は高良山を打立たれ、府內へ馬を返され、諸勢も皆々歸陣しけり。其中に田尻中務大輔鑑種は、軍忠を抽んで、殊に龍造寺へ大事の使節を勸め、首尾能く調へたりと、宗麟大に其感をなし、鑑種所望に依りて幕の紋を免し、太刀一腰を與へられけ

り。大友の本紋桐塔、又若衛の丸なり。右和平調ひ、佐嘉よりの祝儀の使者岩部相模守は、田尻是を引廻す。又大友よりの使者古庄左京允は、成富甲斐守之を取次ぐ。右和平の時、神代長良よりも、家人中島三郎兵衛が召仕の不世といふ遁世者を、高良山と府内へ差遣し、宗麟父子へ和平然るべき由、談合ありしとなり。

ある記にいふ、此時織田信長公、義昭公の命を含み、九州へ上使を下し、大友・龍造寺を和平さすと。非なり。

一、去る八月廿日、今山の軍に龍造寺へ囚へ置きたる三八、肥後の城・隈部・筑後の五條の馬鞍等相調へ、懇志を加へて各本國へ歸さる。

一、今度龍造寺の城中に籠りし輩の老母・妻子・稚子共、過ぎし三月より其緣々に隨つて、爰彼所に忍んでありしが、國中平均の由を傳聞き、急ぎ龍造寺へ馳せ集る。その外、老法師農人工商の類まで、所々より來り集まり、妻子一つに寄合ひて悅びたる有樣、偏に俎上の魚の江海に歸り、籠中の鳥の林藪に放されし風情なり。扨昨日まで大友一味の輩、今日はいつしか腰をかゞめ、膝を折りて門前に市を

なす。

北肥戰誌卷之十九終

北肥戰誌　卷之二十

龍造寺隆信所々征伐の事

隆信所々征伐

元龜元年十月、大友勢退散の後、龍造寺隆信、此度敵に與せし輩を誅伐すべしと下知せられ、先づ蒲田江の犬塚彈正忠鎭家を攻められけるに、鎭家、城を去つて筑後國へ落ち退きけり。夫より隆信、東高木肥前守胤秀を攻めむとありける處に、早落失せて養父郡に赴き、筑紫越後守鎭恒を憑むに依りて、隆信頓て筑紫へ通られける間、鎭恒則ち高木兄弟を計策りて、朝日山の麓に之を討ち、其死證を佐嘉へ差贈りけり。斯くて隆信、夫より有馬方の者共、杵島郡にありけるを征討すべしと、舍弟龍造寺左馬頭信周を差遣され。先鋒は納富但馬守にて、鴨打・德島・前田・井元以下、信周に相從ひ小田大町に陣を取る。時に有馬衆、悉く當郡を去り、皆藤津に到つ

て、大方は横造の城に取籠りけり。扨隆信、舍弟和泉守長信に、同名石見守家秀・石井大隅守周信兄弟・福地藏人助信盈・南里隼人介・木下刑部允・村山常陸介・蒲原相模守・江副備中守・吉岡玄蕃允、其外侍百廿騎を附けて、小田鎭光の明城多久城に差籠め、西の口松浦・後藤を押へられ、同左馬頭信周を杵島郡小田に差置きて、有馬・平井を押へ、又從弟同名上總介家晴を、蓮池の城に移して、東の口筑後の境を守らせらる。

小田鎭光切害の事

翌くれば元龜二年辛未、小田彈正少弼鎭光は、去年の軍に大友方となり、水上に陣して居たりしが、八月廿日の敗軍に引かれ、陣所より直に筑後へ落行き由緣を求めて彳居たり。隆信思はれけるは、彼の鎭光、我等と緣を結び親くなると雖も、元來心解けず。故に去年も飜りて敵に與す。所詮方便寄せて誅伐すべしとぞ思はれける。扨隆信、四月初頃、鎭光の妻室の去秋多久の城より來りて、一所に居られしに、

歎きし顏に申されけるは、扨も御身が夫の鎭光、去年多久を退きし後は爰彼所に浪流し、頃日は筑後の邊にありと聞く。されば鎭光、我等に對し一旦怨を結ぶと雖も、一度壻に取り、親となり子となる上は、さのみは爭か凶かるべき。唯今にても鎭光心を飜し、爰に來りて罪を謝しなば、早速本領蓮池を返し與へて、御身と一所に置くべし。是を嬉しく思ひなば、急ぎ鎭光が居所へ文を送りて、其旨をいひ遣すべしとぞ申されける。婦人は父の方便とは夢にも知らず、限なく悅んで、乳母の女房に語られけるは、さても父上の志の嬉しさよ。自らは龍造寺の總領胤榮の一人子にて、今の父上には繼子なり。男に生れなば家を繼ぐべき者なれども、女の身なれば所知の望は更になく、唯、明暮の悔しさは、去年の秋より鎭光の他國に居られし事ぞかし。然るに父上、今には宥免あつて、夫婦一所に置くべしとの仰こそ嬉しけれ。急ぎ文を認め、筑後へ遣すべしとて、委しき事を書き累め、鎭光へぞ送られける。鎭光披いて見るに、疑もなき妻女の手跡なりしかば、大に悅び舍弟中務大輔朝光幷に久池井三郎左衞門・山崎主水允以下主從僅に十二三人、四月九日、筑後の假屋

を出で肥前の佐嘉へぞ赴きける。されば彼の鎭光が命の墓なさは、寔に微水の魚の消行く泡を頼み、屠所の羊の歩(あゆみ)の近づくを慶ぶに異ならず。翌くれば十日、鎭光は先づ納富但馬守が館へ入り、舍弟朝光は鍋島豐前守が宅へぞ入りにける。斯くて隆信是を聞かれ、謀り得たりと悦び、則ち但馬守を招かれ、今夜鎭光を汝が館にて討果すべしと下知せらる。納富領掌申し、急ぎ歸宅して、一族共を閑所に集め談合しけるは、彼の鎭光は尋常の者ならず、坐(そゞろ)に心得て討洩しては叶ふまじ。詮ずる處、某引組み刺違へて殺すべし。若し仕損じてあるならば、各〻心得給へと申す。時に但馬守の伯父石見守信門申しけるは、御邊の申さるゝ處至極なり。さりながら御事は家の總領なり。幸に此信門、御邊年若き故、其後見として爰にあり。我等鎭光と刺違ふべし。敵も流石に歷々なり。家人などの手に懸けては、士の本意にあらずと、但馬守を制して竊に其用意をぞ仕たりける。斯かる處に水田左京允・同彌太右衛門入り來る。是は隆信の命を含み、助太刀の爲なり。斯くて納富石見守、時刻を量りて座敷へ出で、鎭光に暫し會釋して拔きざまに斬りけるを、鎭光得たりと、石

見守を口口ず切伏せ、續く者共四人、矢庭に切倒す。後に控へたる水町左京、すは仕損じけると思ひしかば、さしつたりと聲を掛け、槍を以て突懸る。鎭光餘りに勵み、刀を打折りて、後に立てたる長刀押取り渡り合ふ。此鎭光は父政光の師範を受け劒術の妙を得しかば、さしもの水町既に危く見えける處に、子息彌太右衞門、生年十六歳駈け寄りて、竟に鎭光を切伏せけり。扨鎭光の家人久池井三郎左衞門・山崎主水允以下、座敷に犇々と切籠りしを、久池井は彌太右衞門に討たれ、山崎は彌太右衞門に目を懸け、主の敵遁すまじと切懸り、暫し切合ひて、彌太右衞門に手負はせし處を、左京允駈寄りて山崎をぞ討留めける。斯くて鎭光の弟中務大輔朝光は、鍋島豐前守信房の館へ入り、夜更けて寢所に臥してありけるを、信生・信房兄弟差寄りて、是を切害ありけり。

一、さても鎭光最期の詞に、妻女の事をぞ恨みける。此事妻室傳聞き、胸臈り膽消えて、涙も更に落ちやらず、恨めしの父上や。安々と方便りて自らに文書かせ、夫鎭光を呼寄せて殺させ給ふ事やある。無き人の恨の數、何れの世にかは晴すべ

き。よしやたゞ僞の我が身にあらぬ心底を、死してあの世に語らんと、守刀を拔いて早自害せむとせられし處を、母上を初め女房達、是は如何にと周章て刀にすがり、樣々敎訓ありしかども、深き歎きに臥し沈み、更に枕も立てられず。斯かりし程に、隆信大に迷惑あり。嫡子政家の其頃は、未だ太郎四郎と申しゝを日夜附置かれ、自害などのなき樣に能く守らせけり、されば夜の猿は傾く月に叫び、秋の蟲は枯行く野邊を悲むとかや。況はんや偕老同穴の別に於てをや。此姫は故龍造寺豐前守胤榮の一子にて、隆信には繼子なりし故、彌〻恨み思はれけり。

城原軍隆信江上武種と再び和平の事

神崎の庄城原勢福寺の城主江上左馬大輔武種も、兼ねて龍造寺への約を變じて、今度大友へ與せし故、隆信是を征伐すべしと、鍋島左衛門大夫信生を先鋒として、龍造寺下總守信種・同名左衛門大輔家就以下二千餘騎を、城原へ差向けらる。武種、元より思ひ設けし事なれば、長臣執行越前守種兼に下知し、枝吉長門守種次・直塚治部

少輔純英・服部但馬守種家・米倉因幡守種益・右橋治部大輔・光安刑部允・古賀・小柳・島・久良木・手塚・西青柳以下究竟の者共を引勝つて、南の大手横大路口の大門を差固む。中にも執行越前守は與力の手者六七百人を引率し、大門より南へ押出し、川土手を蔭に取りて相備へたり。斯くて龍造寺の先鋒鍋島左衞門大夫の一列押寄せ、鬨の聲を揚げて切懸る。時に執行、采配を揚げて下知をなすに、其手の者、川土手の蔭より嚏と突いて出で佐嘉勢と相戰ふ。少時入り亂れて見えたりしが、寄手一戰に利を失ひ、南の方へ引退く。後陣に控へたる龍造寺右衞門大夫・同名下總守、敗軍の味方を援けて、蛇貫士井相支へ散々に打戰ふ。されども城原の軍兵、江上速種を先とし、追々來つて執行が士卒と一つになり、火を出し戰ひしかば、寄手終に打負けて龍造寺へ引退く。城原勢、勝に乘り阿禰村まで追懸け、矢を少々射懸けて勝鬨を揚げ、城原へ歸陣しけり。

佐嘉勢敗軍

一、隆信は、此度城原の軍に鍋島以下の者共、打負けしに依つて、大に腹を立てられ、甚儀ならば自身向つて討ち崩すべしと、大勢を率して城原へ取懸けらる。先

隆信城原に出陣

城原勢敗軍

手は今度も信生なり。斯くて江上が城中には皆集まりて評定す。其中に枝吉いひけるは、先度の合戰に鍋島打負けて、今度は負腹をかき、隆信自身向ふ由、頗る大事の軍なるべしと申す。又執行がいひけるは、いやとよ。さにあらず。先度の軍に佐嘉衆、城原武者の手並は能く見つらむものを、今度の先手も定めて鍋島なるべし。一戰の中に切り崩して、隆信の旗本に討つて懸り、十死一生の軍を勵むべし。勇めや方々と、當然に味方の機を進めて、士卒二千餘人を引率し、今度も越前守、城より南の横大路へ押出し、佐嘉勢の近づくを待懸けたり。斯くて龍造寺の先鋒鍋島信生、城原の大手南の口へ押寄せ、弓鐵炮を射懸け、越前守と相戰ふ。勝負未だ見えざりしに、信生兼ねてや計りけむ、軍兵を引分け西の方へ差廻し、藪蔭より執行が陣へ、横合に鐵炮數十挺稠しく累べ懸る。時に越前守が軍兵共、大に動搖し合戰叶ひ難かりしかば、悉く敗走して城中へぞ引入りける。信生、勝に乘り艇を叩いて追駈け、町小路に火を懸く。此時佐嘉勢に、齋藤佐渡守、敵の首二つ取る。斯くて越前守、城中に入りて主の武種を諫めて申しけるは、先

龍造寺江上和平

度の合戰に佐嘉勢を追崩し、早心底は晴れて候間、今度は龍造寺と和議を求め然るべく候はむや。其儀ならば、某唯今、鍋島の陣所へ參りて談合申すべきにて候と。樣々に諫めしかば、武種も同意あり、兎も角もと申されけり。然る間、越前守急ぎ信生の陣所へ赴き、和平ありたき由談合しければ、信生、穩便を以て隆信へ調達し、仔細に及ばず和與に決定あつて、合戰を止められけり。扨先年の約束違變すべきにあらずと、隆信の二男を武種の養子とし、江上又四郎家種と改め、城原勢福寺の城へぞ送られける。時に佐嘉よりのめのと諸岡安藝守幷に高木伯耆守家康・鍋島丹波守種房以下を相附けらる。斯くて又四郎家種、中頭左馬頭と號し、其後權兵衞と改め、江上家の所領二千五百町に、重代の名劍小胸切を讓受け、勢福寺の城に居住ありけり。扨養父武種は、田手の日吉城へ隱居しけり。彼の家臣の內執行越前守・枝吉長門守・服部伊賀守は、後に龍造寺より食祿を受けて、彌、家種にぞ仕へける。

光安刑部允化異に遇ふ

光安刑部允化異に遇ふ事

其頃江上の家人に、光安刑部允といふ者、城原に居住しけり。天性不敵の剛の者にて、未だ忠三郎とて年若くありし時、勢福寺の城番しけるに、ある夜、敵三百計りの人數にて不意に攻め入らむとす。時に忠三郎、僅十人計りを以て是を防ぎ、難なく追拂ひ、比類なき高名したる者なり。然るに此刑部、平生に山狩を好み、猪・猿の類を捕る事得方なり。ある時、月冷に風清げなる夜、逸物の犬を連れて、勢福寺大明神の上、菩提寺山の頂土器割といふ高山に、猪を捕りに登りけり。抑ゝ此山と申すは、九州に取りて豊前には彦岳、豊後には右田岳、日向には法華岳、肥後には阿蘇岳、肥前には此土器割とて、隱なき天狗の住所なり。然るに件の犬、事々しく吠え騒ぐ。刑部見て、不思議や何ならむと窺ひ寄りて見けるに、鹿・猪の類にあらず、月の光に能く〱見ければ、黒めなる石の柑子を割りたる程に、路脇にぞありける。刑部允、不思議やな。如何なる石ならむ。今宵は仕合もなし。是を取りて歸り、明

けなば、能く見るべしと思ひ、やをら懐に入れて、峯筋の細道を下りし程に、半腹にて懐少し大になりて重く覺ゆ。探りて見るに、件の石、天目程に太りて重くなりぬ。刑部怪み思ひながら、猶坂中を下りしに、四五町過ぎて、此石、早鞠程になりて、重きこと限なし。されども刑部。少しも騒がず、己れ知者かな。よし何にてもあれ。爭か汝に負けぬぞと、猶怺へて下りし程に、大磐石の如くになりて動き得ず。光安も今はすべき樣なく、脇なる谷へ抛落しければ、其音雷の如く鳴響きて、夥しきともいふ計りなし。暫くありて、向の尾崎に人ならば、數千人の聲にて、山も崩れよとぞ笑ひける。刑部は刀の柄を碎くる計りに握りて、四方を白眼み居たりしも、眼に遮るものなし。刑部允、力及ばず我が家に歸りて、此事、主の武種に語りしかば、武種聞きて、夫を怺へて持歸り、家土產にせば、唯ゝ太りて希代の珍物なるべきに、あたら魔なりとぞ笑はれける。

隆信神代長良と重ねて和平の事

同元龜二年の夏、隆信、江上を從へられし後、少貳・大友の餘類を退治あるべしと、東肥前へ打出でられし時、執行越前守種兼、江上勢を引具し、城原より出でて先陣す。此時三根郡の輩、土肥出雲守家實・坊所尾張守以下、荒々出向ひて龍造寺に屬從す。斯かる處に、神代長良、山內より上佐嘉・千布へ出張して、隆信の留守を計るの由、佐嘉より注進ありし間、隆信先づ歸城せられけり。然るに其頃納富但馬守信景は、有馬・平井を押へて杵島郡に居たりしが、神代出張の由を聞き、杵島口をば龍造寺左馬頭へ打渡し、佐嘉へ歸り先陣を乞うて、上佐嘉に發向し、千布に於て神代と相戰ふ。然る處に、雙方和議の談合あり。今年終に隆信と長良と和平ありけり。是より佐嘉と山內、通用心安くなりて上下往來す。

隆信神代と重れて和平

隆信東肥前へ出馬兩筑紫降參の事

元龜三年壬申三月下旬、隆信重ねて、東肥前の與黨等退治として、嫡子民部大輔鎮賢と同じく先づ神崎まで出張あり。此時馳せ集まる輩には、神代長良の陣代同名

隆信東肥前に出陣

彈正忠・江上武種の陣代執行越前守、其外本告左馬允賴景・藤崎筑前守盛義・姉川中務大輔信安・犬塚三郎右衛門家廣・重松中務大輔賴幸・綾部備前守鎭幸等、是れ皆新參の餘害なり。此外汜々は數知らず。されば隆信の武威漸く輝きて、其勢雲霞の如くにて、神崎を打通り養父郡に著陣あり。爰に於て隆信、先づ筑紫越後守貞治が朝日山の城を攻むべしと評定せられ、所の案內者たるに依りて、執行越前守を大將にて朝日山へ取懸けらる。城中の士卒、持口を差固め大に防ぎ戰ふ。時に越前守、一手の者に囁きけるは、各々能く聞くべし。去年我等が城原の城を、鍋島信成の武力に碎かれ、既に攻干して龍造寺に和を乞ひ、唯今彼の從軍にあつて、其下知を受くる事口惜しき次第なり。然ればせめて此朝日山の城を城原一手にて攻め落し、去年の恥辱を雪がむと思ふぞや。此事構へて佐嘉勢に知らするなと、先づ續松を數百用意しけり。然るに越前守、兼ねて此邊の案內を能く知りしかば、四月朔日の夜、彼の續松を人足數百人に燃させ、朝日山の麓三方へ分け遣し、平生に獵師・樵夫の行き通ふ細道より登らせけり。斯かる程に、城より是を見下し、さては寄手夜討

執行越前守城原一手を以て朝日城を陥る

にして三方より攻登るぞ。急ぎ口々に人數を配りて差固めよと、城兵悉く三方へぞ分れける。斯くて越前守、城中の體を推量し、時分を能く量りて、城原勢三百餘騎、一方の攻口より取懸けたり。計略の如く此構は、中々無勢なりしかば、越前守仕澄したりと悦び、大音聲を揚げて、倡や方々、此城戸打破れ。彼の塀引破つて城中に攻め入れと、頻に下知を加ふ。時に城原衆江上左近允・枝吉周防守・生野佐渡入道・執行四郎兵衞・同名式部大輔・直塚左馬允・光安刑部允・同彦四郎・島治部大輔・手塚主計允・西刑部允・青柳九郎左衞門・小柳淸右衞門・古賀右衞門允以下、犇々と打寄せ塀を悉く打破り、我れ先にと入込み、爰彼所に火を懸け、鬨の聲を揚げたりしかば、三方へ分れし城兵共、こは如何に忻らかれぬるはと動轉し、城へ入りて戰ふ者一人もなく、皆落去つて勝尾へぞ逃げ籠りける。斯かりし程に、僅に殘る城中の黨、煙に咽びて防ぎ得ず、或は切殺され或は落失せて、城は則ち落去せり。斯くて執行越前守は、一時の謀に、城原一手を以て輙く當城を攻め落し、一片の煙と燒立て凱歌を揚ぐる事、四月二日の辰の上刻なり。隆信、本陣より遙に其行粧を遠見あり、鍋

島飛驒守初右衛門大夫。を招かれ、あれ見られよ飛驒守。城原の執行が他勢を交へずして、當城を攻干し勇む風情の面白さよ。されば世にいふ如く、敵に强き者は味方にも强しとは、此者の事なるべしと、大に賞美ありけり。斯くて隆信、筑紫廣門が勝尾城を攻めむと議せらる。

此時、朝日山の城に、城主貞治は居ざると見ゆ。子息榮門と一所に綾部の本城にありけるか。貞治或は鎭恒とも。

神崎櫛田宮の由來

神崎櫛田宮の由來附執行本告の事

彼の執行越前守伴朝臣種兼が先祖は、元來下□〔本闕ク〕にて神崎櫛田宮の執行職なり。抑、櫛田と申すは、忝くも聖主の勅願に、異國の賊船退散の爲め、往古より三社の大明神を、肥前國神崎郡に崇め奉らせらる。所謂櫛田・白角折・高志社、是れ則ち稻田姫を祭る處、最も九州の大社なり。其神領、北は山内・藤原を限り、南は海際崎村まで、東は米田原、西は尾崎村まで分量數千町、是を名づけて神崎の御庄といふ。然るに年中

執行本告兩家の由來

の神事、古は十三度なりしを、中頃鎮西大に亂れ、山賊・海賊充ち〱て、祭禮の勅使下向せらるゝ事叶ひ難し。是に依りて之を略せられ、年中三ケ度になす。されば今の執行越前守が先祖は、天忍日命の苗裔伴國道十二世の孫伴兼貞と號し、人皇八十四代順德院の御治世、建暦年中當社の執行別當職に補せられ、始めて下向し、同建暦三癸酉年十二月十九日乙卯の日午の刻、修造上棟の時、則ち彼の職を勤む。其子息伴太郎兼篤朝臣、かはらず父の職を受けて、肥前に在國し彌、當社の司職たり。然るに人皇九十代後宇多院の御宇、弘安の頃、蒙古の數千艘筑前國博多へ襲來し、天下の騷なりしより、公家・武家の御執成にて、櫛田より東田手村に、蒙古御祈禱所として、七堂伽藍を御建立あり。彼號東妙寺南西大寺唯圓上人（俗姓佐々氏なり。）を以て、彼の寺に居住せられしより、東妙寺を又櫛田宮の修理別當と定めらる。又其後、東山殿義政將軍の御時、康正三丁丑年七月廿九日、修造上棟の時、本告彈正忠貞景を以て宮柱とせらる。然るに彼の御社、其後は公家・武家の御崇敬も白地になりて、神領も滅少し、三度の神事すら、絶えけるこそうたてけれ。斯くて近代執行は江上に招

筑紫廣門隆信に降參

かれ、竹原に在城し、本告は牟田に居城を取構へたり。されば今の越前守が祖父伴治部大輔兼貞が時、始めて名字を稱し、則ち執行と號す。其子執行攝津守直明、其子越前守にてぞありける。

一、斯くて龍造寺隆信、四月二日、朝日山の城を攻め落し、勝尾の城下へ陣を進めて、當城主筑紫進士兵衛廣門の許へ、使者を立て申送られけるは、隆信此度、三根・養父の輩退治の爲め發向し、早朝日山の城は攻め落しつ。扨唯今、其許へ取懸けむとす。然れども御邊、無事を思ひて和を乞ひ給はゞ、軍を止め申すべしといひ送らる。時に廣門、親類家人を集め談合の上、和平然るべきに一決して、其印（しるし）に同名兵部少輔榮門がありける綾部城を初め、其左右の持分三ヶ城を明けて、龍造寺にぞ渡しける。斯かりし程に、隆信、廣門と軍に及ばず、養父の陣を拂つて三根郡に打入られ、横岳中務大輔鎭貞が西島の城を攻められしかども、利あらずして先手の龍造寺上總介家晴・同名越前守家就・初右衛門大夫。同名伊賀守以下引退く。仍りて隆信、先づ當城を閣（さしお）きて歸陣あるべしと、犬塚三郎右衛門家廣を、崎村より中津隈

に移し、姉川中務大輔信安を、姉川より米田村に移し、横岳が知行の內を米田村にて百町押取り、信安に給はり、土肥出雲守家實を加へ、右三人を以て、三根・養父兩郡を守らせらる。執行越前守が今度の軍功を感賞あつて、二百町を加恩せられ。隆信は則ち佐嘉へ歸城ありけり。此時筑後國貝津城主安武山城守鎭數も、坊所尾張守が申す旨に任せて、隆信へ和を乞ひ、神文をこそ送りけれ。後に此安武、改名して式部大輔家敎と號す。山城守は隆信同名を辭しける。

隆信上松浦へ出馬草野落城の事

元龜四年癸酉、天正と改元す。當今は人皇百七代正親町院方仁。武將は足利十六世權大納言源義昭將軍なり。されば當時に當りて、五畿七道悉く亂れ、公家には朝權廢れて其政を爲さず。武家には大樹の威輕くして其令を用ひず、諸國の大名、皆己れ〳〵が分國に蟠り、朝には領知を論じ、一夕には境を諍ふ事、偏に犬獸の喧しくするに異ならず。然るに今年の冬、上松浦草野の鏡の城主草野中務大輔鎭永、手の

者を小城へ差越して、千葉介胤誠が舊臣共を相語らひ、龍造寺に對し一揆を企てけり。此事、持永治部丞・陣內藏人幷に佐嘉より兼ねて小城へ附置かれたる宮崎伊豫守が方より、早速龍造寺へ注進す。之に依りて隆信、則ち小城へ出馬あり。彼の一揆を追拂はれ、猶其警衛の爲め。松尾山に陣營を構へられけり。斯くて隆信、彼の草野を其儘差置きては叶ふべからず。急ぎ征伐を加ふべし。神代は其手寄(たより)なれば、是を語らひて加勢を乞ふべしと評定せらる。同十二月下旬、山內に於て神代長良の方へ、秀島四郎左衞門家周(時に九郎右衞門と號す。)を使者として、隆信追付(おつつけ)、草野退治として上松浦へ來陣申すなり。御邊も出馬せられ、加勢あつて給はるべしといひ遣されけり。折節、大雪降り溪嶺一般に積もりて、秀島、山路の旅行自由ならず、杠の淸流寺に宿を借り、漸く明くる正月元日、三瀨の城に著き長良に對面して、右の趣を申達す。長良異議に及ばず、さらば先づ軍兵を差出し、自身は後より打立つべしと、則ち同名對馬守周利・三瀨大藏・畑瀨右馬助・合瀨掃部助・杠右衞門大夫・栗並治部大輔・篠木右衞門佐等に人數を副へて差遣す。隆信又此時、上松浦鬼子嶽の城主波多三

隆信上松浦に出陣

河守鎭へも、先達田原一運を使にて、賴み思ふの由申遣されしに、鎭も仔細に及ばず、長臣八並武藏守を草野の案內者とし、半途へ差出し置きけり。斯くて草野は、波多が龍造寺の導すと聞いて、さらば鎭を攻めよとて、鬼子嶽へ取懸り相戰ふ。頃は十二月下旬なりしに、鎭、早速佐嘉へ急使を馳せて援兵をぞ乞ひける。斯くて隆信、鎭が使に彌〻參陣を急がれ、明くれば天正二年壬戌正月二日、未だ鷄鳴ならざるに佐嘉を出馬あり。小城岩藏より石臺越に掛り、市の川を過ぎて上松浦の內池原へ出で瀧川に著陣せらる。爰に於て八並武藏守出向うて案內す。扨隆信、草野の五段田に著かれし時、神代長良も摩耶子より瀧川を歷て、同じく五段田に著陣あり。隆信大悅せられ、則ち其日平原まで押詰めらる。先陣は鍋島信生、二陣は小川武藏守信貫・內田紀伊守信堅、三陣は神代の山內勢・江上の城原勢なり。旗本には納富能登守家理・（時に未だ七郎兵衞信理と。）副島長門守家光・百武志摩守守賢・成松遠江守信勝、其外安住・石井・圓城寺以下、都合一萬餘人なり。斯くて城中より草野が家人草野元幸・靑木良珍・吉井右近允を初め究竟の者共、平井峠へ討つて出で、龍造寺の先陣鍋島信生

隆信の一陣草野と戰つて敗る

の陣へ突いて懸る。時に鍋島勢の中より江副兵部左衞門、一番に槍を合せ敵味方入り亂れて大に打戰ふ。少時ありて、鍋島終に利を失ひ、久納平兵衞・副島内記允以下廿餘人討死して悉く敗走し、味方の二陣に崩れ掛る。二陣に續きたる内田紀伊守、是を見て與力の副島式部に向つて申しけるは、既に先陣敗れたり。大將の御陣むげに近し。斯くては惡かりなむ。倡や一槍して敵を追返さむと、一度に噇と斬懸り競ひ來り敵を突崩す。中にも副島式部大輔眞先に進み、岡口が持ちたる構に押詰め、防ぐ者を突退け、構を取つて暫し息をつき居たるに、原口平次兵衞憲秀續いて構を刎越え、城戸を開くに、副島式部・成松内藏允則ち攻め入りて相戰ふ。此時式部は、日の中二三度の槍合に、三度ながら分捕しけり。斯くて日も暮れしかば敵も引入り、雙軍を止めて居たり。時に隆信、一首の狂歌を詠まれたり。

正月の一日二日の事なれば草野を燒きて鏡餅かな

明くれば正月三日、鍋島信生、彌、先陣に進まれ、先手千葉家より來る輩、仁戸田・鍋尼・野邊田・金原・小出・巨勢・堀江・平田・田中・陣内・井手・濱野此十二人、鍋島の家人に相

草野鎮永遂に敗走

隆信長良に對面す

加はり、城戸口へ押詰め、即時に打破らむと相戰ふ。是を見て龍造寺和泉守・舍弟左馬頭・勝屋勝一軒・田代因幡守以下、鍋島に續いて押詰めたり。時に城中より矢石を飛ばせ、鐵炮を放し懸くること雨の如くなり。然れども寄手大に勵み戰ひ、城戸を打破つて早二の丸へ火を懸く。此時草野が家人進藤將監を、西の大手にて佐嘉勢の中より北島河内守討取りたり。其外秀島主計・高岸主水・木下四郎兵衛・相浦河内守進みて相戰ひ、秀島圖書助分捕す。斯くて城主草野中務大輔鎮永、防ぐに力盡きしかば、竟に城を去つて二重嶽へ落行き、夫より筑前怡土郡へ原田入道了榮の居城高祖にぞ入りにける。此鎮永、實は了榮の三男にて、草野永久の養子なり。扨隆信は草野を追落し、則ち陣中にて神代長良に對面あり。參會は是が初なり。雙方牀机に掛り一禮あり。用心と見えて長良は、山伏阿含坊と杠太郎右衛門といふ大刀の剛の者に大長刀を持たせ、左右に召具く。又隆信の身邊にも、百武志摩守・成松遠江守を初め、究竟の輩を二行に置かれ給り。時に長良申されけるは、先達御約束に候條、鎮永領の内草野七山(馬の・丹生川・粟退・瀧川・荒川・藤川・急木川)。此儀は、便(たより)に候條我等知行申すべし

原田了榮隆信に降參

となり。隆信返答には、仰の通り仔細に及ばず候。但し其內、丹生川の儀はさる仔細あつて、鴨打陸奥守へ約束申しゝ間、其代地は何樣佐嘉郡にて進ずべしと會釋ありけり。斯くて長良は三瀨に歸城し、隆信は夫より筑前の內へ打入られ、怡土郡に到りて高祖の大島井まで放火せらる。此所は草野が實父原田了榮入道が領知に依つてなり。時に佐嘉勢の內、鍋島信生の手の者に、小城の櫻木三郎左衞門相働く。爰に於て原田入道、孫子の冠者を召連れ隆信の陣へ來り、則ち和を乞ひて對面す。隆信大悅あり。彼の冠者に加冠せられ、原田三郎信種と號せられけり。此冠者、實は草野鎭永の子にて、了榮には孫子なりしを、了榮の家督五郎右衞門親種、先年死去に付いて其家を繼がせむとぞ聞えし。此後彼の信種、佐嘉より鴨打左馬太夫の女を、隆信養子にして壻に取られけり。又了榮、草野鎭永が事をも樣々歎き申すに依りて、隆信和平せられ、鎭永本領に歸入り、後には佐嘉の倉町左衞門大夫信俊が二男太郎三郎を養子しけり。此松浦の草野といふも、元は筑後の草野なり。扨隆信、原田と和順ありしかば、飯場の曲淵河內守も降參し、小田部入道も音通す。隆

信、夫より又上松浦へ馬を向けられしに、波多三河守親、初の名下野守鎮。早速長臣八並武藏守・福井山城守を差出し、龍造寺の先鋒鍋島信生を天河に迎へ、自身も案内の爲め打出でて私領法師良に陣を取る。斯くて隆信、鳥巢に著陣ありけるに、大河野の鶴田因幡守勝・嚴木の同名越前守進・河原豐前守以下松浦の黨の者共、已に旗頭の波多三河守和を乞ふ上はと、皆龍造寺へ降參しけり。然るに隆信、松浦・草野を一圓に從へられ、さらば先づ歸陣すべしとて、從軍の內より龍造寺石見守家秀・高木兵部少輔胤清・石井長門守忠家・神代彈正忠・武藤左近將監等を、鏡・天河・大河野の城々に殘し置き、其身は先づ多久の城まで馬を入れられけり。

北肥戰誌　卷之二十　終

北肥戰誌　卷之廿一

隆信西肥前出馬の事

隆信西肥前に出陣

龍造寺隆信、天正二年正月、上松浦を征し、同二月、多久の城に入りて少時逗留あり。女山一揆の棟梁鶴崎源太左衞門が殘黨殘らず退治せられ、同夏の頃、杵島郡へ出張して、塚崎の後藤と須古の平井が先年和平すと雖も、猶異心あるに依りて、是を征伐すべしと、旣に天正二年七月廿七日、佐嘉・小城の士卒大勢を以て白仁田山に陣を居ゑられけり。平井經治是を聞いて、さらば不意を擊つて、隆信の陣を打崩すべしと、八月二日、弟左近大夫直秀・河津左馬助經忠以下多勢を引率し、隆信の陣近く取懸けたり。然るに龍造寺の陣場は、岩石高く峙ち急に下る事叶はずして、其働自由ならざる所なり。平井兄弟是を見量り、軍は案の中ぞ。佐嘉勢一人も洩さず

隆信の軍平井經治と合戰

討取るべしと勇み悦んで、所々に備を設け、既に其體切懸らむと見えしかども、日夕陽に傾く故、軍を進めず暫し見繕ひて控へたり。時に龍造寺の先勢鍋島飛驒守信生、敵の機を察し、軍使を旗本に遣して隆信へ申されけるは、敵間近く押寄せ申すと雖も、日暮に及ぶ故、明日の軍を待つと見えて候。所詮此方より早速軍兵を進めて、一戰を始め申すべし。此儀御同意に候はゞ、急ぎ御用意あつて、相圖の貝を立てらるべしといひ送られしに、軍使未だ歸らざるに、貝の音聞えしかば、信生則ち采配を揚げて士卒を下知し、十丈計りの岩石を一同に颯と押下し、平井が陣へ切懸からる。時に平井も軍兵を勵し、火を出して戰ひしかども、後陣の佐嘉勢相續き、北島河内守・高岸主水・副島式部以下大に打戰ひ、平井忽ち打負けて、河津左馬助討死し、總勢悉く須古をさして引退く。

平井勢敗北

されども茲に其殘兵一列、久津句の山上にありて退かず。鍋島信生其體を見て、此敵を拂はざれば始終の勝利あるべからずと、同月八日久津句島へ押寄せ、鬨の聲を揚げて切懸けられしに、平井勢又打負けて立つ足もなく敗走しけり。斯くて龍造寺の軍士、敵の北ぐるを慕うて小塚口まで追

詰む。爰にて平井勢取つて返し、烈しく相戰ふ。時に龍造寺上總介進みて敵に懸り、其中より副島式部・成富左近軍功を顯し、高木主水・成富甲斐守・木下四郎兵衞・北島河內守等挑み戰つて分捕す。爰に於て平井が兵、竟に又打負けて皆城中へ引籠りけり。斯くて隆信は、軍勝利を得られ、少時陣を甘げ久津句に到りて屯せらる。此時馳せ集る輩數を知らず、兵氣天を掠めたり。其勢に恐れ猪熊にありける後藤方の者共、皆塚崎へ引入りぬ。斯かりし間、隆信其翌日、陣を小通に移し、須古の平井が居城高岳を攻めんと評定あり。

平井直秀兄に背く事

斯くて隆信、彌〻平井を攻むべしと申されけるを、宿老中諫めて申しけるは、永々の御陣に付いて士卒皆疲れ、士民悉く勞して候間、先づ御馬を龍造寺へ返され候へかし。平井御征伐の儀は、頗る今度に限り申すまじとありける處に、鍋島信生進みて申されけるは、いや〳〵此弊に乘じて西一通の敵を悉く退治せらるべし。國家靜

謐の爲なれば、豈士卒の疲れ農人の妨を厭はれ口〔んやカ〕と申されしかば、隆信、鍋島が申す處圖に當れりと大に悅ばれ、彌、横邊田に陣を居ゑられけり。斯くて平井を攻むべき由にて、色々評議ありしかども、彼の居城高岳といふは、分內狹しと雖も無雙の要害にて、其上城主經治、聞ゆる勇將なりしかば、容易くは叶ひ難かるべし。然るに鍋島信生、樣々工夫を廻し、經治の弟左近大夫直秀を、竊に陣所へ招き囁き申されけるは、御邊は眼前經治の兄弟なりしかども、先年一度和平の砌、龍造寺の壻となられ、既に一子出生ある上は、正しき龍造寺の親屬なり。所詮兄經治を殺されよ。然るに於ては須古領殘らず進せて、高岳に安堵させ申すべし。唯今の如く隆信を背かれ、弓箭を執給ひなば、御邊が命を亡し家をも滅し給ふべし。穴賢。此飛驒守が申すに隨ひ給へとぞ賺されける。直秀、鍋島に方便(たば)かれ一議にも及ばず承引して、急ぎ己が居館男島(高岳の向。)に歸り、忍び〳〵に平井の家人を招き、件の隱謀をいひ聞かせ、皆々加恩すべき由の判形を與へしかば、大半直秀に同意しけり。斯くて直秀、神文を信生へ送り、彌、別心あらざる旨、龍造寺へ通じ、扨一味の者を催して、

兄經治を討たむとす。然かりし間、經治無念に思ひしかども力及ばず、河津近江守・新宗吟入道以下男女百八十餘人を具し、居城高岳を去つて藤津の吉田へ退きけり。然るに隆信は信生の計略に依りて、一戰にも及ばず經治を退け、大悦ありて則ち須古・高岳の城を直秀に與へられ、納富但馬守を橫邊田へ殘し置き、其身は頓て龍造寺へ歸陣ありけり。

直秀經治の爲に討たる并須古落城の事

平井武藏守經治は、弟直秀が逆意に依りて須古の城を退き、頃日は吉田にありけるが、如何にもして舊地に歸入るべしと時分を見量り、伯父新刑部入道宗吟と談合し、同年十月、須古・白石の地下人共を相催し、其勢數百人にて吉田を打立ち鹽田越に掛り須古へ出で、直秀がありし高岳の城を取圍む。直秀天の理に背きし故にや。防戰するに利あらず、打敗れて橫邊田の方へ退かむとしけるに、經治是を察し、小通の橋を燒きしかば、直秀其煙を見、經治、佐嘉と引合せ我を討たむと相圖の火を

平井直秀兄經治の爲に討たる

隆信須古城を攻む

立つるよと大に懼れ、寶藏寺に入りて栖籠る。經治が軍兵、是を圍みて相戰ふに、直秀叶ひ難く竟に自害して失せにけり。斯かりしかば、軈て本城高岳に入替る。扨此事、白石の上野讃岐守（此時褔富。）が方より、早速佐嘉へ注進しければ、隆信、さらば經治を退治あるべしと、十一月廿日過に、其勢一萬餘騎を以て、佐嘉の城を打立たれ、横邊田に著陣あり、褔母山に本陣を居ゑらる。爰に隆信の舍弟左馬頭信周は、其頃下松浦征伐の爲め、西肥前に在陣しけるが、隆信、此度須古を攻らるゝの由聞えしに依りて、早速松浦勢を差語らひ、横邊田へ馳せ來りて佐嘉勢に相加はる。斯くて龍造寺の總勢、一同に横邊田の陣を打立つて須古に押寄す。此時、褔母大町は、龍造寺上總介家晴の領知に依りて、其手寄たるの由にて、家晴先手を蒙り、小通より發して相進む。其餘旗本以下は、皆大渡を越しけり。時に白石の鄕士上野讃岐守一族四十七人、大串十兵衞等、馬田・神野江に出向ひ、案內して先手に加はる。さて諸口の手分を定めて、先づ鍋島飛驒守信生幷に廣橋一祐軒信等・小川武藏守信貫合せて二千三百餘騎に、旗本より成松遠江守・百武志摩守・下村生運・横尾內藏允・田中源

佐嘉勢の部署

右衛門加はりて、城の北一間堀口へ向ふ。此一勢の先手は一祐軒なり。又龍造寺左馬頭信周に、下松浦の軍士加はりて二千餘騎、前田伊豫守家定・井元上野介を案內者とし、城の東白河口より男島の方へ押寄す。其次に納富但馬守信景に、田代因幡守・同子息治部少輔・同左馬助以下相加はり一千八百餘騎、城の南へ押廻し、湯崎・川津口に向ふ。其外納富能登守信理に、副島式部少輔・木下四郎兵衛・杉町藤右衛門・木下左近允・石井大隅守以下加はりて小塚口へ差寄り、龍造寺和泉守長信は搦手の方へ向はれけり。

須古城の要害

然るに彼の平井が居城高岳と申すは、僅の小城と雖も、北の大手は岩石峨々と峙ち、一騎打の細道なり。西は百町牟田とて、深泥限を知らず、東は男島に稠しく砦を構へたり。南は堀を二重に深くほり、塀を高く塗りて、所々に櫓を掻並べ、其構へ事々し。斯くて城中には、佐嘉勢の大軍にて寄すると聞いて、先づ北の一間堀口には、川津近江守を頭人にて、湯川・長池以下の者共を差出し、多勢にて固めたり。又東男島の持口は、平井兵庫助・同名刑部少輔・多久上野守宗利・草場民部大輔・簑具遠江守・今村木工之允是を固め、南の口は新入道宗吟下知を加へ、

西一方は深泥を頼みたり。斯くて城主經治、士卒を下知し龍造寺勢の寄するを待つ。

一、旣に十一月廿六日、龍造寺の軍士相圖を定め城を攻む。中にも一間堀の攻口、軍烈うして佐嘉勢の先手廣橋一祐軒追立てられて引退く。時に鍋島入替りて相戰ふ。此時江副兵部左衞門、一番に鐵炮を打懸け、軍功を現はす。廣橋機を勵まし押返して攻め入らむとするに、其從士大に挑み戰ふ。中にも田中源右衞門進みて、城兵と槍を合せ痛手を負ひて危く見えしを、下村生運駈け寄りて、白柄の槍を以て彼の敵を突伏す。然る處にまた靑鎧著たる武者一人駈け來り、生運が甲の鉢を切割りたり。生運、大事の手なれば眼暗みて漂ひけるを、小川武藏守懸け合せ、其敵を討ち取り下村を助けにけり。斯くて敵味方討死手負數を知らず、日已に暮れむとす。時に鍋島、軍使を廣橋に遣し、御邊眞先に懸けらるゝと雖も、槍先鈍きに依りて、飛驒守が陣差支へ進む事を得ず候間、速に懸けらるべしといひ送られしかば、一祐軒大に腹を立て、案内知らぬ攻口といひ、其上日黃昏に及

ぶ處に、無理の合戰を急ぐ軍の法やある。よし〳〵此一祐に、討死せよとの使なるべし。心得たり。唯今骸を此攻口に曝さむと、頻に士卒を下知し、自身眞先に進んで無二無三に攻め入りしを、川津近江守見て、必ず敵の一將とや思ひけむ。押並べて引組み、一祐が首を掻く。時に廣橋が家人二騎馳寄り、主の敵遁すまじと近江守を討取りたり。此時佐嘉勢に、堀江諸太郎も一祐と一所に討死す。斯くて寄手の一將一祐軒命を殞し、城兵にも宗と賴みたる川津近江守討たれにければ、日も既に暮れ、又軍は先づ是までなりと、互に陣をくつろげり。斯かりし程に、隆信は妻山に陣を居ゑられ、諸勢は田中・寶藏寺其外所々に陣を取る。

或はいふ、一祐軒、此時鐵炮に中りて死すとも。非なり。又いふ、鍋島此時一祐に使を立て合戰を急ぎしは仔細ある事なりと。

一、十二月廿日、龍造寺の諸勢、時を定めて一同に口々より兵を進め高城を攻む。中にも鍋島信生は、白石の鄕長秀伊勢守といふ者を賺して、味方に引付け是を案內者とし、一間堀口に押寄せらる。城兵城戸を差固め、今度も合戰烈しくして、

川浪河内守を初め、鍋島の軍士多く討死す。されども於保賢守・松田權助・櫻木三郎左衞門・高岸主水・右近刑部允・中島次兵衞以下の者共、粉骨を抽んで大に勵み戰ひ、城兵岩永喜左衞門等若干討たれ、攻口終に破れしかば、信生則ち秀が導にて、此口より攻め入られ、深泥の方、城兵の油斷せしより城中へ攻め寄らる。斯かりし程に、龍造寺信周幷に案內者前田伊豫守・井元上野介、男島口より攻め入りて、多久上野守・草場民部大輔・蓑貝遠江守・今村木工之允を討取る。扨男島の砦を打崩し、平井刑部少輔をも討取りけり。又川津口に向ひたる納富但馬守も、湯崎山口まで攻め入り相戰ふ。時に田代左馬助主從、湯崎に於て討死しけり。斯くて龍造寺長信も、同じく城近く攻め入り、其手の侍村山甚右衞門は、平井甚十郎を討つて首を取り、相浦左衞門尉生年十七歲、草場治郎大輔と渡り合ひ、手を負ひて危き處に、成富與六左衞門駆け寄りて、治部大輔を討取りぬ。相浦も敵二人を切つて伏す。其外石井源左衞門、是も生年十七歲、續いて分捕る。但し一間塀に於てとも。未だ詳ならず。相浦佐渡守・同名左衞門尉進み戰ふ。又小塚口に於ても、寄手軍に切勝つ

て、石井大隅守・木下四郎兵衞・北島河内守分捕り、秀島源兵衞戰功あり。其外佐嘉勢に、水町左京亮・同彌太右新門・右丸藤太左衞門・同弟千右衞門・小宮左馬允進みて敵を討つ。城兵も大に防ぎ戰つて、寄手にも犬塚宮内少輔・福地内藏允・田中九郎兵衞・大塚半左衞門・峯左衞門尉以下、所々の攻口にて討たれにけり。斯くて龍造寺の總勢早口々を攻め破つて、高岳の本城へ押詰む。時に城中より新宗吟入道切つて出で、中島刑部少輔信運と太刀を合せ、やゝ暫し切り合ひしが、竟に刑部少輔に討たれにけり。中島も、十三ヶ所宗吟に切られて、半死半生と見えたり。されば此入道は、武勇普通に勝れ、又連歌を好みて艶(なまめ)き者なり。頃日須古踊といふ遊あつて、樣々に花車(くわしや)なる文句を謡ひしも、此入道の作ぞかし。斯くて龍造寺の諸勢、我れも〳〵と本城へ攻め登りし程に、城主經治防ぐ事を得ずして竟に腹を切らむとしけるを、同名兵庫頭、頻に是を制し、如何にもして此城を遁れ、有馬・後藤を頼まれよと諫めしに依りて、經治、自殺を止め、西の方の百町牟田を樋に乘りて打越え、山中へぞ忍び込みける。扨城中には、兵庫頭を初め既に大將

落ち去りし上は、いざ打破つて遁るべしと、南の口より皆打つて出で、岡川を渡り湯崎へ出でけり。納富但馬守是を見て、城中より落人あるぞ。一人も洩すな。討取るべしと下知をなす。納富が從兵共、追駈けく是を討つ事數を知らず。平井兵庫頭も、爰にて討たれけるとぞ聞えし。斯くて鍋島信生は、本城に攻め登られしに、七曲とて特に嶮しき所あり。爰にて信生柴すゝれして難儀に見られけるを、杉町刑部、先に立ち小脇差を土に押立て、是に取付き下り給へといふ處に、城兵一人刀を振つて走り懸る。刑部心得たりと太刀を合せ、彼の敵を切伏せけり。斯くて信生は、同名大膳以下と本丸の塀を飛越え、城中へ乘り入りて、殘黨を捜し悉く誅伐あり。納富但馬守は、經治必定落行きたりと推量しければ、手の者共を西の山へ差遣し、安福寺・觀音寺を初め、其邊の民家殘らず燒拂ひ、經治を捜しけれども知れざりけり。抑ゝ此平井經治といふは、元來少貳の一族なり。武勇の聞ありしに依りて、有馬義貞入道仙岩、是を壻に取りて、杵島郡の內數千町を與へ、其境を守らせけり。されば龍造寺と數度の弓箭を取りしかども、竟に負

けたる事なし。然るに今度は、鍋島信生の計略にて、秀伊勢守が導きし故落城せしとぞ聞えし。此經治、後に後藤貴明を賴み、天正四年の冬、上戸城へ入り、又塚崎の城へも來りしとなり。斯くて隆信は、强敵の平井を退治あり、凱歌を揚げられ寶藏寺に於て首實檢あり。則ち龍造寺安房守信周、初名は左馬頭。鍋島飛驒守信生を以て當郡を支配せられ、且つ殘黨を治め、平井直秀が妻子を尋出し、是を具せられ、十二月廿一日、佐嘉へ歸陣ありけり。此時、新宗吟を討つて痛手を蒙りし中島刑部少輔、橫邊田まで歸陣しけるが、大町に於て遂に落命しけり。未だ存生の內、隆信、彼の戰功を賞せられ白石鄕の內、日目ヶ里といふ所を加恩ありけり。又平井直秀が一子をも扶持を加へられ、家人に召仕はれ平井甚左衞門と號し、百武志摩守賢兼の壻となりけり。

或はいふ、城主經治、此時城中に於て切腹すとも。非なり。又いふ、城中を忍び出で、南の川津口より落行きしを、納富但馬守、前を取切り討取るとも。非なり。又いふ、七浦に到り岳崎まで落ちたりしを、佐嘉勢附慕ひ、散々に射け

隆信首實檢

る矢に中りて死すとも。非なり。

既に經治、是より二年を過ぎて、天正四年の冬、上戸城へ入りし證文之あり。或はいふ、經治の子の稚きを、鍋島信生憐を加へられ、佐嘉へ具して歸らる。後に野村と改むと。非なり。野村氏は、前田伊豫守仔細ありて切腹す。其子供高麗在陣の內、鍋島直茂の命に依りて、前田を改め野村と稱せしなり。又いふ、須古落城は、十二月廿六日より合戰始まり、翌廿七日の事なりとも。非なり。

後藤貴明父子軍の事

後藤貴明父子不和

天正二年の夏、西肥前塚崎の城主後藤伯耆守貴明と、養子の左衞門大夫惟明不和の事ありて、既に軍に及び、惟明竟に浪人の身となりぬ。其濫觴を尋ね聞くに、貴明に男子ありしかども、未だ幼稚なりし故、近年平戶松浦肥前入道々可の三男を養ひて、惟明と號づけ是を總領とす。然るに彼の惟明、頃日父の貴明を色々恨むる仔細

其原因

あり。先づ一つには、貴明の家の子中村太郎次郎公明が家人と、惟明の手の者、去る頃喧嘩を仕出し、中村が家人頗る慮外を働きしかども、貴明、是を等閑の沙汰に附せらる。又二には過ぎし日、有馬の軍兵、塚崎へ亂れ入らむと、鹽田を越えて長島花島まで攻め來るの時、貴明は病惱にて出でられず、惟明早速馳せ向ひ、久間の城に入りて辻左近大夫に會し、自身手を碎き有馬勢を悉く追返し、其趣、後藤山城守貞明を以て貴明に注進ありけるに、貴明の返答には、武士の軍に勝つ事は珍しからずと、更に褒賞の詞なし。亦三には、後藤の家に傳はる太刀と鬢燒といふ尉の面ありしを、先祖代々總領に讓る重寶なりしかども、貴明是を惟明に讓らずして、實子彌次郎晴明が今年十二歲甫子丸といひしに渡されけり。右彼此に付いて、惟明大に恨み思ひ、如何にもして貴明を亡し、鬱胸を晴さむと思立られけるこそはかなけれ。斯くて頃は六月廿二日、惟明思慮を廻し、塚崎の二の丸へ、澁江豐後守公師・松尾豐前守茂明・八並右衛門大夫・小楠兵部大輔・中野兵庫助・宮野三河守・上野彌三郎・下の忠助・上瀧權兵衛を饗應すべき由にて招かれけり。此等は皆惟明を兼ねて最

員の輩なり。扨酒飯過ぎて夜に入り、惟明席を近うし、兼ねて思ふ心底を殘らず語り出し、貴明を討たむ事、頼み思ふ由をぞ申されける。一座の輩、是を聞いて其中に松尾豐前守・八竝右衞門大夫・上野彌三郎・宮崎三河守は、樣々惟明を諫言し宥め申すと雖も、中野兵庫助と小楠兵部大輔・下の忠助、一向惟明と同意にて、有無貴明を亡すべきに決定す。斯かりし間、松尾・八竝・上野・宮崎も力及ばず、皆一味して謀叛を企て其用意區々なり。時に惟明申されけるは、貴明を討つべき計略は勿論の事、爰に後藤山城守・久間薩摩守・辻左近大夫・中村太郎次郎は、貴明に至つて無二の忠臣の者なり。彼等又大勢の者にて、既に己が居城にあり。是を討取る事、先づ第一なりと申されけるに、小楠聞きもあへず、何條仔細や候べき。兎角今宵は早夜も深更になりぬ。又明晩こそ參會申すべしと、各、暇を乞ひて宿所に打歸りけり。爰に後藤山城守が弟に、富岡新九郎といふ者あり。折節所用ありし故、二の丸へ來りしが、彼の密談を物越にふと聞き、急ぎ歸りて兄に告ぐ。山城守大に驚き、早速久間薩摩守に告遣す。薩摩守、頓て弟の辻左近大夫を以て、貴明の方へ注進しけり。斯

かりし程に、貴明其夜、則ち妻子に武富志摩守を副へて、實子彌次郎晴明のありける宮野館住吉城と號す。へ送り遣し、其身も翌くる六月廿三日の平旦、塚崎の本丸を立退き宮野の館へ赴かる。既に西山の水呑坂を越えられけるに、後藤山城守主從十四五人にて馳付け、又西谷坂にて久間薩摩守・辻左近大夫・永田河內守彼此三十餘人追々馳せ來りて、貴明上下八十餘人になり、宮野に著し、彌次郎晴明と一所に取籠らる。斯くて塚崎の二の丸には、惟明を初め叛逆の輩寄集まり、聞口〔囁きカ〕申しけるは、此曉貴明、宮野新館に移徙とて、俄に引越さる。いと不審なる事なりと評定す。其中に中野兵庫助申しけるは、さればこそ過ぐる夜富岡新九郎、二の丸へ來り奥へも得通らずして、頓て歸りし由、某が下人の申すに承りぬ。彼の新九郎自然立聞して、貴明にや告げけむ。急ぎ彼等が館へ誰ぞ馳せ向ひ、事の體を見るべしと、中野監物・田中大藏允・八並新助彼此四五十人急に出立ち、富岡が天神崎の城に到りて窺ひ見けるに、山城守は今朝より早宮野へ赴き、新九郎は老母女童共を久間の城へ立忍ばせ、自身は疾く貴明に追付かむと、唯今打出づる砌なり、然る處に、城中より三人の者

共來りて、中にも中野監物門外より呼ばはりけるは、唯今惟明公より御邊へ尋ねらるゝ仔細あり。早々二の丸へ參らるべしとの事なりと申す。新九郎打聞きて、心得たり中野殿と、いふより早く主從四五人にて切つて出づ。中野の手の者七八人、槍を揃へ新九郎に渡り合ひ、火を散らして突合ひけり。爰に惟明の家人に、中山十助とて精兵の手垂(てだれ)あり。よつ引いて射る矢、新九郎に中りて馬より落ち、矢庭(やには)に空しくなりけり。歲廿二なり。扨三人の者共、新九郎を討取り二の丸へ歸り、惟明に斯くと語る。斯かりし程に、惟明を初め與黨の輩、我々が企早露顯したり。此上は片時も急ぎ宮野へ打寄せ、勝負を一戰の中に決すべしと其用意したり。斯くて此事、世上に隱なくして、伊萬里兵部少輔治・中村太郎次郎公明を初めとし、有田の山中半兵衞、同所の三百人衆是等は、皆貴明方にて宮野へ馳せ集まる。其外上松浦の鶴田兵部少輔勝・同弟川原豐前守向も、軍兵を率して宮野へ差遣し、貴明に加勢しけり。貴明、頓て其勢を合せ、宮野住吉の要害に引籠らる。斯かりし間、塚崎惟明方よりも卒忽に取懸り得ずして、先づ塚崎城に楯籠る。其人數には松尾豐前守・田

中大藏允・中野兵庫助・同名式部少輔・同監物・加々良讃岐守・富岡喜左衞門・小楠兵部大輔・同名新左衞門・同監物・宮野三河守・黑髮隼人允・八並右衞門大夫・同名新助・馬庭隼人佐・武雄右馬太夫・上瀧權兵衞・上の彌三郞・下の忠助・田島忠五郞・川崎忠五郞・鹽見前城主澁江豐後守・橘公師を先として、宗徒の者共五百人、二の丸・詰城・新城輛の尾口所々に楯籠り、各〻其持口を相守りぬ。斯くて雙方より軍を出さず、日を送りて暫くありし處に、七月三日、惟明方より小楠兵部大輔・同監物軍勢を引率し、宮野へ取懸り、先づ鳥海三間坂を放火しけり。時に貴明より白水原へ出向ひ、小楠と打戰ふに、小楠兄弟利を失ひ長谷の邊へ引退き、土橋美濃守・野田又七郞が爲め、監物あへなく討死しければ、兵部大輔は塚崎へぞ引入りける。其後惟明、使を龍造寺隆信へ遣し、加勢ありて給はるべき由申送られぬ。貴明よりも原能登守・武富志摩守兩使にて、惟明同前に加勢をぞ乞はれける。其頃隆信は、平井と對陣あり。杵島郡に居られし處に、惟明の使と貴明の使同時に來り、障子を隔てゝ仔細を述べけり。時に隆信の近臣勝屋勝一軒、是を取次ぎ披露しけるに、隆信も分け難く良(やゝ)思案ありし

かども、衆議一決の上、貴明に加勢あるべき由、返答せられけり。扨塚崎へ人數を差越すべしと、小河武藏守・納富能登守・執行越前守に二千餘騎を副へて、宮野へ差遣し、貴明へ力を合せらる。其後惟明、宮野に於て一戰ありしかども、打負けて終に先非を悔ひ、貴明へ降參しけり。此時、宮野の軍中衆議あつて、不孝の者の見懲(みこらし)にとて是を虜にし、誅戮すべきに極まりけるを、貴明打案じ一度父子の約をなせし者なり。努々(ゆめゆめ)殺すべからずとて、平戸領早岐へぞ送り遣されける。今度惟明に一味せし者の內、小楠兵部大輔・八並右衞門大夫は、同じく早岐へ赴き惟明へ奉公す。加々良讃岐守・中野式部少輔・富岡喜左衞門は、龍造寺へ赴き鍋島信生を賴みて佐嘉に住し、其外黑髮隼人允・武雄右馬太夫・田島忠五郎・川崎忠五郎等は、皆心々にぞ浪人しける。斯くて貴明、隆信に對し今度加勢の謝禮あり。向後に於て別心あるべからざるの由、堅く約束ありけり。

惟明遂に父貴明に降參

或はいふ、惟明、今度軍に打負けて、然も大事(〔軍カ〕)に圍まれ、籠中の鳥の如くなりし由、小川・納富・執行三人の方より隆信へ注進す。時に隆信より、急ぎ父子の間中

和然るべき由下知せらる。之に依りて佐嘉勢の先手執行越前守より、塚崎の城中に於て中野監物・馬場隼人佐方まで、其趣いひ送りぬ。中野心得て惟明にいひ聞かす。仍りて惟明、兎も角もと背ひ、則ち貴明へ降を乞ひけるとなり。或はいふ、惟明、早岐へ浪人の後、伊萬里へ來り後藤左京進と號し、數年居住す。此時隆信、哀憐を加へられ龍造寺左衞門大夫と名を改め、食祿の地を與へしとも、此子孫今平戸にあり。後藤と號す。

隆信後藤貴明と和平互に養子の事

隆信貴明と再び和平

後藤伯耆守貴明は、今年の夏、父子合戰に及びし時、龍造寺の加勢に依りて、已に利運を得しかば、此後隆信に對し異心あるまじき由、堅く申しかはされし處に、又如何なる仔細やありけむ。翌くる天正三年の春、貴明佐嘉に到りて重ねて害心を挾みけり。時に貴明、骨肉を分けたる一族後藤山城守貞明、聊か仔細あつて忽ち心を佐嘉へ通じ、龍造寺勢を差招く。斯かりし間、三月中旬、隆信出馬せられ、多久より

北方に出でられ、塚崎に取懸けて先手は鷺田暇彌三橋に押詰め相戰ふ。されども城中堅固にして事ともせず。隆信其體を量られ、田原伊勢守尙明を使とし、貴明と再び和平ありけり。扨兩家神文を取替し、隆信の三男善次郎家信（鶴仁王の事なり。）を貴明養子として、息女槌市女に娶らせられ、又貴明の實子彌次郎晴明は、隆信の養子とせられ、貴明は頓て杵島郡蘆原に隱居し、天正十一年八月二日、行年五十二歲にして卒去ありけり。斯くて善次郎家信は、中頃後藤伯耆守と號し、後十左衞門に改め、彌、塚崎を領して唐船岳の城に居住せらる。彌次郎晴明は龍造寺生左衞門家均と改め、佐嘉の內太俣庄を知行して、中頃久保田に在館しけり。

後藤家由來の事

抑、彼の後藤といふは、元祖如何なる者ぞと尋ね聞くに、大織冠の御末左近將監兼武藏守藤原利仁將軍の子孫なり。利仁六代の孫を後藤內則經といふ。源賴信に仕へて、或時は越前の盜賊を征伐し、ある時は市原野の猿童を誅す。其子を後藤內章

明と號す。北面にありて昇殿を免されし故、雲上後藤內と稱し、又河內國坂戶を知行するに依りて、坂戶判官ともいひけり。是も源賴義朝臣に仕へて、八幡殿の乳母子なり。義家一年、奧州の安部貞任を攻められ、七ヶ年の在陣に大に功を立て、義家朝臣僅七騎に成られし時も、別して軍勞あり。則ち七騎武者と稱す。其七騎といふは、鎌倉權五郞景政・三浦平太郞爲次・忍三郞季茂・加藤加賀介景通・首藤權守助通・後藤內章明に、大將義家を加へ七人なり。然るに章明が子後藤太資茂相續いで義家朝臣に仕へて、淸原武衡追討の時、出羽國に於て戰功あり。其後又義家の子息六條判官爲義、天仁二年に伯父美濃守義綱を、江州甲賀に伐たるゝの時も相從ふ。斯くて此資茂が時、始めて肥前國杵島郡塚崎庄の領知へ下向しけり。夫より以來其子後藤資明、塚崎の城に居住して、人皇七十六代近衞院の御宇仁平年中に、八郞爲朝鎭西在國の中、黑髮山の大蛇を射られし時、專ら其評定の人數なり。彼の資明二十六代の孫を、後藤伯耆守純明と號す。此純明に男子なくして、大村丹後守純前の次男又八郞純を養ひ、一人女に娶せて、中頃は後藤左衞門尉と號し、後には伯

著守と改めけり。今の貴明是なり。初の妻室早世ありしに依りて、其以後伊佐早の伊福氏の女を迎へらる。然るに此貴明、武勇飽くまで勝れ、近年は後藤領の外に他郡を多く切取り、門前に馬を繋ぐ血判の侍、既に四百餘人とぞ聞えし。

伊萬里圓通寺觀音由來の事

斯くて後藤左衞門大夫惟明浪人の後、松浦の早岐に暫し居住し、夫より伊萬里へ來り、左京進と改名す。然るに一人の娘あり。於吉の前とぞ申しける。此女、幼少より觀世音を信じ、平生に普門品を誦する事怠らず、漸く深閨に仁(ひと)となり、貌は春の風一片の花を吹殘すかと疑はれ、顏は秋の雲片江の月を吐出するに似たり。其上敷島の道に心を寄せ、滿々たる雨の夜は明行く空をかこち、紛々たる雪の日は暮るる夕を悲み、既に三五の歲も過ぎ、二八の春の末にやありけむ。窓近く植ゑし櫻の散るを見、於吉前、

　大方の花よりも猶ほものうきは身の春過ぐる夕なりけり

されば父母の寵愛は、袖の裏の珊瑚の珠、掌に置ける芙蓉の花に異ならず。其頃、此里に龍造寺右衛門督家繁といふ人あり。如何なる玉垂の隙にか見染めけむ。中達を求めて文を送る。千束の文も錦木の、朽つる計りになりしかば、於吉前も流石岩木にあらず、引く手に靡く豊竹の一夜の枕を川島の水の流の變らじと見えけるに、家繁暫く陳ずる事あり。離々にてある時又忍びて來り、於吉御前の閨近くかいまみえけるに、女は是を知らず、折柄秋の夕の哀しさに、西の廊の簾卷かせて浦の方を詠めやるに、室の八島にあらねども、海士の藻鹽やく煙の、思はず空に打靡くも又面白く、沖に漕行く船共の跡白浪に見えけるも、人間五十年の夢の如しと、憂世の假なるを思ひ續け、乳母して庭の千種を折らせけるに、白菊のうつろひて見えければ、於吉前、

ことわりや人の心の秋の色にうつろひ果つる庭のしら菊

又黑髮山の峯に、鹿の聲幽に聞えしかば、乳母、

鳴かずとも秋の哀は知れぬるに悲しさ添ふる鹿の聲かな

吉御前の歌の樣、乳母が誣し心の中、家繁我ながら罪深く思ひ知りて、緣にさしのぞけば、女は見る人ありやと、やをら打下して引入りぬ。其後は家繁彌〻思に堪へ兼ね、人目の關守も、今はよしや。中々免せかしと打省みて、伊勢の海〔人脫カ〕の度重りしかば、惟明夫婦談合あり、吉御前十九と申す天正十四年丙戌の春、容儀刷ひ右衞門督の許へぞ送られける。されば栴檀の煙には釋尊免れ給はず、無常の風には萬乘の聖主も遁れ給はぬ世の習なれば、其明くる天正十五年二月八日、於吉前難產にてはかなくなりけり。惟明夫婦の歎き、家繁の思ひ大方ならず、なく〳〵近き邊りの圓通寺に葬り、法名梅岩壽香大姉と號し、佛事經營懇なり。斯くて五七日に當りし前の夜、吉御前父母の夢に見えけるは、我は素より斯かる垢塵の家に生まるゝ身にあらず。然れどもさる因緣あつて、母の胎內を借り假に人界に生を受けたり。されば去る衣更著八日、愛執の絆を切つて、本の如く上界に歸り去りぬ。今は一向父母ともに歎を止め給ふべし。唯願はくは自らの形を觀音の像に彫らせ、圓通寺の本尊に安置し給へ。さあらば此後、難產の女人を救ふべしと、正しく夢に見えた

り。　惟明夫婦、夙に起き不思議なる夢なりと互に語り合ひける處に、夫の家繁來り、我も過ぎし夜見たりと、同じ夢をぞ語りける。人々彌〻信を取りて、折節其頃筑前國博多の浦より感定軒といひける佛師の、伊萬里に來りありしを賴み、吉御前の影を觀音の像に彫らせ、金物細工玄智齋にて、同十月に佛體成就し、吉御前の舍利を二粒御ぐしに刻籠めて、則ち圓通寺に安置ありけり。されば難產を救ふ利益深くして、女人の佛詣絕ゆる事なし。今の本尊是なり。又三十五日に當る日、彼の寺にて佛事樣々なしけるに、其半、吉御前かと覺しき氣高き尼、忽然と來りて住持鎭翁元宅に向ひ、彌陀の六字を冠に置き、六首の歌を詠じて搔消す如く失せけり。元宅不思議に思ながら、卽座に其六首を書留め、深く祕して今に圓通寺にあり。誠に一百年の過ぐるは夢の如く、吉御前の印の松、寺中にありて苔むしたり。

右、於吉前の事、其外觀音安置の由來、其節の佛師感定軒自筆を以て、鳥の子紙を短く切り、年月日委しく書き、佛體の內に作籠め置きたり。是を其後知る人なし。　然るに去る元祿の頃、彼の佛像損じけるに依りて、再興すべしと佛師を賴み

し時、右書付を佛體の內より見出しぬ。今に彼の寺にあるなり。

一、天正三年己亥、上松浦波多三河守親、龍造寺に彌〻和を乞ひて隆信の壻となる。

妻室は初の小田鎭光の室なり。

此室、後に親遠流せられし故、佐嘉へ歸り、尼になりて靜室妙安と號す。

北肥戰誌 卷之廿一 終

北肥戰誌　卷之廿二

龍造寺隆信須古城普請の事

天正三年乙亥、隆信歲四十七なり。然るに近年嫡子民部大輔鎭賢に家を讓らむと思立たれ、隱居所の爲め、須古の平井が舊城高岳の要害を普請すべき由下知せらる。茲に因りて今年七月より勝屋勝一軒・小林播磨守・成富甲斐守、須古に赴き彼の城地所々を見積り、或は堀を深うし、或は塀を修補して、同十二月に普請成就しけり。

隆信須古城普請

隆信、當城の普請を思立たれし事、强ひて隱居の爲のみにもあらず、且つは松浦・彼杵・藤津・高來の輩、未だ龍造寺に隨はざるを征伐すべき爲とぞ聞えし。

橫岳鎭貞龍造寺へ降參の事

横岳鎭貞龍造寺に降參

同年隆信、三根郡の横岳中務大輔鎭貞を攻めらるべしと、舍弟安房守信周・同名上總介家晴に軍兵を副へて、東肥前へ差向けらる。彼の鎭貞、少貳政興を取立つべしと、豐後の大友と談合し、此十餘箇年以來、己が西島の居城に栖籠り、竟に龍造寺に從はず。然る間、隆信、去る永祿七年の春・元龜三年の夏、其外にも度々大軍にて取懸け攻められしかども、城は無雙の要害なり。其上、大友宗麟より加勢として、鐵炮・玉藥・兵粮等に至るまで不足なく籠置きしかば、城中堅固にして、横岳家人宗兵部・古館將監・原左近・靑木刑部左衞門・板部六郎・福島藤右衞門・島上野介・市武兵部以下の者共、其口々を相守り防ぎ戰ひける間、隆信、一度も勝利を得られずして、每度馬を返されぬ。然れども今度は、豐後の加勢も乏しくなり、政興御曹子も出國ありて、鎭貞賴む方なくなり果て、其上同名の下野守賴續、先達隆信へ屬し、此度西島の城中に入り、一向家相續の爲め、龍造寺へ降參然るべき由、樣々敎訓申すに依りて、鎭貞も尤もと同じ、信周・家晴まで和を乞ひて、則ち西島の居城を彼の兩人へ去渡し、城中男女悉く財部村へ引入れけり。鎭貞其後、龍造寺に屬して、兵庫頭家實と

ぞ改めける。

安武家敎重ねて龍造寺へ降參の事

横岳が西島の城落去しければ、龍造寺の諸勢、筑後貝津の城主安武式部大輔家敎を攻むべしと、夫より三根郡を立つて河を越え貝津に取懸る。此家敎、先年佐嘉に向つて和を乞ひしかども、又飜りし故なり。先手は横岳下野守・坊所尾張守・赤司志摩守・秀島淡路守・横尾內藏允にて、都合二千餘騎閧を作つて攻め入らむとす。不意の事なれば、城中大に騷動し防戰叶ひ難かりしかば、家敎、先非を悔い懇望を以て再び降を乞ひ、妻子を具して城を開き、豐後の方へぞ赴きける。此事佐嘉に於て隆信に注進ありし處に、則ち貝津の城へは、橫岳下野守に赤司・江口を副へて差籠めらる。扨此時、當郡の面々所替ありて、三根の中野の城主馬場肥前守鑑周を、杵島の小田へ移され、是を有馬の手當とせられぬ。綾部備前守鎭守をも、横邊田へ移されけり。次に此度戰功の者、横岳下野守家人廣木玄蕃允・長但馬守・桂新五郎・森土佐

安武家敎再び龍造寺へ降參

守、其外高良山の座主鎮興の家人池尻和泉入道久元等へ、各、恩賞を給はりけり。
又彼の安武は、其後筑後へ立歸り、再び龍造寺へ相從ひ、質人を出しけり。

隆信須古に移らるゝ幷横造落城の事

隆信須古城に移る

同年十一月、須古城普請既に成就ありしかば、隆信頓て移られけり。然るに其頃有馬方の輩、藤津・彼杵兩郡の內に數人在城す。先づ藤津には松丘（濱の事なり。）へ有馬左衛門佐義純、自ら渡海して在城す。鷲巢の城には同名修理大夫義直あり。其外横造・鳥附（鹿島の事なり。）兩城へは、深町尾張守・岩永和泉守・原左近大夫以下在城しけり。斯くて翌くれば天正四年丙子正月に、隆信、宿老中を集め彼の藤津の敵城を一々攻むべしと評定せられしに、鍋島信生の申されけるは、案內知らぬ敵地へうか〳〵と馬を向けられむ事如何候はむや。先づ先達ちて人數を差向けられ、敵と相對して其分限を見、其後大將は、御發向候うて然るべく候はむやとありしに依りて、隆信も同意せられ、されば誰をか差向くべき。爰に近年筑後へ浪人せし蒲田江の犬塚彈正と申

刈の徳島左馬助は、武勇の者共なり。此兩人を賺し寄せ、味方に引付け藤津へ差向けて、敵の强弱を試み、其後總勢は取懸るべきに衆議決し、犬塚がありける筑後國大休へは、勝屋勝一軒を使ひし、又徳島へも同じく使者を立てられ、彼の兩人を須古へ招かれけり。斯くて犬塚は、隆信の招を受け稍〻打案じ、先年小舅の小田鎭光が隆信の謀計に陷り、うか〳〵と佐嘉へ赴き、詮なき死を致せしを思ひ出して、少時返答せず。然れども勝屋入道、色々諫言を加へしに依りて、さらば參るべしとて、嫡子掃部助・二男平内・三男九郎次郎・同名美作守・同兵部少輔・家人栗山備後守・中田町石見守以下、究竟の者四十餘人・雜兵二百餘人召具して、肥前へ打越え直に須古城に著く。徳島左馬助も同じく來りぬ。然るに隆信、先づ犬塚に對面あり。年來の怨心を飜され、今度藤津への加勢を賴み思ふ由にて、備前鍛冶の太刀一振彈正に與へられ、同脇差を嫡子掃部助へ給はりけり。犬塚畏まり領掌して退出す。爰に彼等が家人栗山備後守は、大剛の者にて三尺五寸の太刀、三日月の如く彎り反りたるを鐧尻に横たへ、座敷の次まで押入りて、若し彈正に仔細もあらば、隆信を唯、

一太刀にと思ひし氣色なりしかども、別儀なくして退出しけり。扨德島も、同じく領掌申して座を立ちぬ。斯くて犬塚彈正忠鎭家・德島左馬助信盛、各〻手勢を引率し、藤津へ討ち入り、森といふ所に要害を設けて陣を取り、有馬方と相對す。斯くて隆信は、彼の兩人が時々の注進に任せ、さらば打出づべしとて、正月廿日、都合一萬餘騎にて須古を立たれ、鍋島信生は先陣に打つて、先づ高町に屯せり。夫より

隆信藤津に出陣横造城を攻む

隆信、次第に旗を進められ、二月初旬既に龍王峠に着陣ありしに、犬塚・德島出向ひ、隆信を迎へて爰よりは兩人案內し、眞先に鞭を揚げ、藤津へ相進む。斯くて隆信、同月六日陣を二つに分けられ、其身は旗本三千五百を以て濱付を押され、總軍六千五百は横造の城へ取懸る。先手は犬塚・德島、二陣は鍋島豐前守信房・同信生、其次段々小川武藏守信賢・納富能登守信理・龍造寺下總守康房・鴨打陸奥守胤忠・德島甲斐守長房・同左衞門大夫信安・千布因幡守家利、其外神代衆・千葉衆・多久衆・後藤衆・江上衆・佐留志の前田伊豫守・山口の井元上野介（或はいふ上總介。）・納所の田代因幡守・横浦の河原豐前守・鹽田辻左近大夫以下、各〻三陣・四陣に作りて、皆横造へ攻め近づく。然る

同合戰

に當城には、有馬家人深町尾張守・原左近大夫・同十郎・同五郎・岩永和泉守加はりて、城兵二千餘騎大手の江に支へたり。既に龍造寺の先陣犬塚・德島、輕卒を進め弓鐵炮を打たせ、敵數十人矢庭に打倒し、城兵を追込めて柵を作る。時に原・深町自身猪鳴(をめ)きて切懸り、柵を打破つて犬塚・德島と戰ふ。其軍烈くして、犬塚・德島、利を失ひ手の者多く討たせ、眞先に進みし犬塚彈正、既に討たるゝよと見えしかば、二陣の鍋島、是を援けて相續く。原・深町、大に勝に乘り勇み進みて馳せ立つ。鍋島も亦打負けたり。是を見て佐嘉勢の中より、北島兵庫助・同名河內守・水町彌太右衞門・犬塚勝右衞門・吉岡源次兵衞・小宮左馬允・江里口九郎右衞門・中橋平兵衞・執行與三右衞門以下、崩る味方を引立て、稠しく打戰ひ、各、敵を討つ。中にも杉町刑部は、一番に築地を驅け登り敵を拂ひ、味方を麾くに、井元茂七來りて城兵と引組み、顚びて堀に入りしを、成富十右衞門續いて堀に飛入り、其敵を討つて茂七を助く。成富今年十六歲にて初陣なり。爰に又秀島主計允は、敵と槍を合せ討たれし處を、弟圖書助驅け付け、兄の敵遁さじと追驅け切伏せたり。鍋島信生の眼前なりしかば、甚

嬉野直通等の變心

だ褒詞あり。則ち其場に於て、圖書を隼人に改められ、其上鞍置く馬を給はりけり。此外、高岸主水も首二つ取り、成富甲斐守信種首五つ取りて疵を蒙る。斯くて城兵、猶强うして烈しく防戰し、寄手の軍兵難儀なりしかば、石井肥後守定時・成富民部少輔・福地內藏允・犬塚左馬允・江口兵庫助・千布新九郎を先として、龍造寺の軍士敵中に馳け入り、引組んでは刺違へ、打違へては切死す。石井三郎左衛門は敵六人を討つて討死しけり。斯かりし程に、龍造寺の先陣・二陣竟に敗するかと見えける處に、小川武藏守・百武志摩守・成松遠江守・鴨打陸奥守・井上上野介・加々良大學助・德島甲斐守・同名左衛門大夫、我れ先にと相續く。鍋島兄弟、力を得、敵を左右に追散らし、少時息をつがれし處に、藤津日守の城主宇禮志野越後守直通（今は嬉野。）といふ者、有馬方にて居たりしが、如何なる所存や出來りけむ。忽ち飜り脇備より引挑つて、龍造寺の陣へ馳せ加はる。是を見て宇禮志野が相備の原豐後守・永田備前守・吉田左衛門大夫も、味方の陣を引き別れて、越後守と一つになり、却つて城兵と相戰ふ。爰に於て原・深町、大に動搖し、混崩（ひたくづれ）に崩れて、城中へ入らむとするを、永田・吉

田・嬉野後を遮り、龍造寺の總勢、亦左右に廻りて洩さじと討ち戰ふ。斯かりし程に、城兵猶立つ足もなくなりて、大將深町尾張守立所に討死し、原十郎は鍋島の手より江副土佐守に討たれ、同五郎は江副兵部左衞門に切られ、岩永和泉守も討死しけり。旣に大將分の者共皆討たれしかば、其手の軍兵途〔度〕を失ひ、宗徒の輩四十餘人、爰彼所にて討取られ、殘兵東西に敗走し、城戶口忽ち破れにけり。時に寄手の總軍、悉く込入る。中にも小川武藏守が一列、本丸の塀を打破り一番に乘入りしかば、是に續いて、鍋島信生・同名豐前守・納富能登守・德島左馬助以下、皆乘り入る。斯くて其手の侍副島式部少輔・古賀新左衞門・井原隼人・木下四郎兵衞・立川新五左衞門、城內所々に走廻り、あそこ爰に火を懸け燒立てしに依りて、城中の者共、煙に咽びて防ぎ得ず。此時寄手の軍兵共、分捕高名樣々なり。中にも鍋島信生の手より松田權助は、城兵原が役人を討取り、其身も疵を蒙る。辻小左衞門も敵を討つて首を取る。爰に城の土手際に敵ありて、縫・ねくぶくなどを張り、其透間より長柄の槍を以て、鍋島信生所々働かれしを、狙ひ居たり。信生の手の者に野田與次郎是

を見付け、忍寄りて彼の槍の鵜の首に取付き、敵を外へ引出さむとす。敵も頻に引合ひて、與次良をねくぶくの際に引付けたり。信生急ぎ走り寄り、竟に其槍を奪取りぬ。此時、敵ねくぶくの下より槍・長刀にて拂ひしかば、信生、足の踵に疵を蒙らる。時に鍋島大膳立寄りて流るゝ血を止め、櫻木三郎左衞門是を愴はる。扨當城に籠りし者共、殘なく討たれて城は則ち落去しけり。此合戰に討たれし處の有馬勢、凡そ三百餘人なり。斯かりし程に、鷲の巣・島附の兩城も、攻めざる前に明退きしかば、隆信頓て島附へ陣を移さる。爰に於て藤津郡の歷々嬉野越後守直通・同名陸奥守通益・同子息與右衞門尉・同名大和守・原豐後守直家・吉田左衞門大夫・永田左京允通清・久間薩摩守・上瀧志摩守盛貞を初とし、我れ先にと參陣して龍造寺に相從ふ。然る間、隆信の軍兵雲霞の如く成り、則ち濱の松岡の城を攻めむと議せらる。有馬義純・同義直、是を聞いて合戰をや除にけむ。俄に松丘の陣を引いて高來へぞ打渡りける。斯くて隆信、少時鹿島に在陣あり。此所に於て今度始めて龍造寺に屬せし藤津郡の鞴嬉野・永田・原・上瀧・吉田以下に、各〻先本領を安堵させらる。

（鹿島の事。）

扨犬塚彈正忠鎭家を播磨守益家と改名あり、當郡に於て新恩の地二百町を給はり、則ち森岳に城を取構へ盛家を居ゑられ、德島左馬助を筑後守になし、犬塚と同じく新恩の地を給はり、松丘の城を修補して、德島に橫岳兵庫頭家貫を副へられ、其上上瀧志摩守・辻甚七・永田左京等の手寄衆を各番にして入置かれ、鷲巣には嬉野與右衛門尉を差籠められ、鹿島の城には鍋島豐前守信房を居ゑられ、各々當境を能く相守り、有馬を押へ申すべき由下知ありて、隆信は頓て須古の城へ歸陣ありけり。

一、同年佐嘉龍造寺の城、四方の總構を築き、牛島敵繰の土手の松を植う。其役成富甲斐守なり。

隆信下松浦出馬附大村高來軍の事

天正五年丁丑或舊記にいふ、今年光永元年と唱ふ。東西に光り永く映く故と云々。六月、龍造寺隆信、下松浦へ馬を出さる。平戶松浦肥前守鎭信を初め、當郡の輩征伐の爲なり。既に龍造寺の大軍伊萬里へ著陣しけり。時に所の地主伊萬里兵部少輔治、一番に和を乞ひて下城す。平戶の

隆信下松浦出陣

松浦以下降伏す

松浦鎮信も同じく和を乞ひ、大曲對馬守を差出し神文を送る。其詞にいふ、自今以後傾〔頓カ〕早以可レ龍ニ立御前途一（上下之を略す。）となり。仍りて隆信、平戸へ發向是なし。斯くて山代の城主山代虎王丸も降參し、有田唐船の城主松浦丹後守（松浦四十八黨の總領なり）も、家人池田武藏守を以て和議を求め、同所大木の庄山伊勢守高も軍門に降りて、下松浦の輩悉く平伏しければ、隆信容易く當郡を手に入れ、舎弟安房守信周を有田に居ゑ置き、其身は夫より彼杵郡へ討入り、大村丹後守純忠（時に理專といふなり。耶蘇にての名。）を攻むべしと評定ありて、後藤貴明・平戸鎮信へも人數を出さるべき由いひ送られ、其外伊萬里以下を催して、既に下松浦を打立つ。

ある説にいふ、此時隆信、伊萬里表に於て平戸の松浦・唐津の波多・筑前の小田部・大津留と合戰しけるに、唐津の波多尾張守、俄に心を變じ龍造寺に一味する故、平戸以下力を失ひ、則ち隆信へ降參すとあり。跡形もなき事なり。元より波多尾張守といふ者なし。

一、既に隆信、大村征伐の爲め、彼杵郡へ發向あり。一陣は鍋島信生幷に勝屋勝一軒、

隆信大村を攻む

同合戰

二陣は納富左馬大輔・小川武藏守、三陣は執行越前守・（城原の江上衆。）神代彈正忠、（山内の神代衆。）四陣は鍋島豐前守・（藤津郡の軍士。）龍造寺和泉守、（多久の軍士。）その外小城の千葉衆以下なり。後陣は隆信の旗本にて、彼杵へ討入られけり。斯くて平戶・後藤も其催促に應じて、貴明の一勢は塚崎を立つて吉田を過ぎ、郡村を野兵に指して押出し、鎭信の軍兵は兵船を揃へ、平戶を出船して、大崎三越に大村へ著岸す。（此時、鎭信自ら參陣か。）然るに大村純忠、今度龍造寺の大軍攻め來る由聞きしかば、皆是河內（或は貝瀨。）の要害に、郡何某を大將にて、逞兵數千人差籠めて此口を固め　扨本城を固く守りて佐嘉勢の寄するを待懸けたり。斯くて龍造寺の先陣鍋島信生・勝屋勝一軒、皆是河內へ著陣して、六月廿日、先づ軍の一法なりと足輕を懸け、城邊の青田を刈り取らす。城兵、是を追拂はむと打出でたり。寄手、案の內に敵を誘引出し、大勢一同に曈と懸り、是を追立て付入にせむと、城戶口に押寄せたり。されども城兵入れじと支へて相戰ふ。時に鍋島の手より江副兵部左衞門一番に懸りて打戰ふに、鐵炮に中りて倒る。原口平次兵衞は、金の一本菖蒲の指物を差し、刎木戶を越えむとしけ

るを、城兵鐵炮を以て打倒す。是を見て勝屋勝一軒が一勢、頻に抽んで攻め入らむとす。されども城兵、城戸口を固く守りて烈しく防戰し、勝一軒が兵打負けて引退く。隆信、大に機を揉まし、田原伊勢守を使にて、飛驒守急ぎ勝屋を援はるべしと下知せらる。鍋島は此時、聊か思慮ありて勝屋勝一軒が敗るゝを見物してありしかども、田原來りて隆信の使を述ぶるに依りて、さらば信生懸るべしと采配を揚げられ、總勢一つに圓めて早速攻め懸けらる。城兵是を見て、爰を破られては叶はじと、悉く一所に集まり防ぎ戰ふ事甚し。其時信生、敵の體を量りて人數を引分け、中にも究竟の者共は、坤の方の搦手へ差廻さる。信生の計りし如く、此口は城兵油斷して、防ぐ者無勢なりしかば、佐嘉勢の中より副島式部少輔、やす〳〵と城戸を打破り、一番に攻め入りて城兵を討つて首を取る。是を見て成松遠江守・於保賢守も相續く。斯かりし程に、總勢此口へ廻りて、倉町眞清・木下四郎兵衛・大塚内藏允・高岸主水允・北島河内守・同名兵庫助・相浦河內守以下、續いて討戰ひ各〻分捕す。中にも倉町眞淸は、敵數多に渡り合ひ、突かれて深手を

負ひけるを、木下四郎兵衞駈け付け、一其敵を切伏せて眞淸を助く。されども眞淸、重き手負にて終に相果てたり。又相浦河内守は、餘りに進み戰ひ、先年多久の城にて相働きし故、隆信より給はりたる信國が作りし太刀を打折りぬ。斯くて相集まり烈しく防戰し、弓・鐵炮を打懸くること雨の如くにて、龍造寺の士卒討たるゝ者數を知らず。斯かる處に、鍋島信生の家人杉町刑部、手負・死人を顧みず、矢面に立つて塀を打破り、信生と同じく城中へ乘込み、大に勵み戰つて共に分捕す。又武藤丹後守眞淸も、間道より城中へ忍入り、味方の諸勢を引入るゝに、水町彌太右衞門・秀島甚左衞門・牟田周防守・辻小左衞門・中島將監・中島次兵衞・井原隼人・香田孫兵衞、其外城原衆に諸岡安藝守・執行與三左衞門以下悉く攻め入りて、皆々分捕り高名す。味方に討死の侍小川但馬守・川浪源助・增田藤左衞門、其外雜兵數を知らず、中橋平兵衞疵を蒙りけり。斯かる半ばに、小川但馬守が子源右衞門、城の堀を游ぎ越し、塀を乘越え城中に入りて火を懸く。又成富十右衞門信安も、同じく走り廻り、城の巽の方より火を懸けたり。斯かりし程に、城中の者共

大村勢敗軍

隆信大村と和平

防ぐべき様あらず、悉く落失せて城兵則ち落去しけり。然るに彼の大村純忠と申すは、元來有馬仙岩の子なりし故、兼ねて高來の援兵を賴み、心強く思ひし處に、此度有馬、藤津の通路を龍造寺に取切られ、大村への加勢叶はず。然る間、純忠力を落し、長島の澁江豐後守公師が方へ書を送り、俵坂まで是を招き、色々談合の上、公師を彼杵の濱より小船に乘せ、松浦鎭信の陣所に差遣す。堺に取るべしと賺して、先づ隆信を平戸へ歸し、扨龍造寺と和議を調へ、同六月廿六日、神文を龍造寺の旅陣へ送り、同名右衞門大夫家秀を質人に出しけり。然るに依りて、隆信應諾せられ、彌、和與ありて純忠が居城を攻められず、其上純忠の息女を、隆信の二男江上權之允家種の室に契約ありけり。

ある舊記にいふ、此〔マヽ〕本文の如く純忠、先づ平戸鎭信を歸して後、龍造寺に和を乞ひしとあり。詳ならず。今度貝瀨軍に、杉町刑部・武藤丹波守が軍忠を感ぜられ、杉町へは筑後國の內、〔木室阿彌陀寺分一所之を給はり、武藤へは鍋島信生より信國作の脇差を給はるとなり。但杉町へは是より後、筑後を龍造寺よ

り知行ありての事なるか。

隆信伊佐早を攻む

一、斯くて隆信、大村純忠と和平あり。六月下旬、大村を打立たれ、伊佐早高城の城主西郷石見守純堯を攻めらるべしとて、伊佐早へ討入らる。先鋒は龍造寺下總守康房・小川武藏守信貫、二陣は鍋島信生・納富左馬大輔家景、三陣は倉町左衞門大夫信俊・龍造寺肥後守信時・高木左馬大輔盛房、四陣は內田紀伊守信堅・横岳兵庫頭家實・馬場肥前守鑑周、其次は旗本なり。この外大村左近大夫(純忠の神代。)松浦藏人(父榮の神代。)を先とし、波多・鶴田・草野の出勢、深堀中務大輔純賢も來陣し、先づ手當(てあたり)に宇木の城を攻む。城兵防戰し難く、寄手當日の小先手成富甲斐守信種以下の佐嘉衆、大に進みて不日に攻め落し、城主西郷玄蕃允降參しけり。然るに伊佐早は高來へ甚だ近かりしかば、純堯兼ねて有馬と親くして、急ぎ船を飛ばせ加勢を乞ひて戰はむとす。然る處に、純堯が實弟深堀純賢、兩陣に入りて和平を談合しけるに、則ち一著して合戰に及ばず。爰に於て隆信と純堯始めて對面せられ、純堯の子次郎三郎純俉を、隆信の壻に契約あり。諱の一字を受けて信俉と改名し、

伊佐早の城主西郷降參

隆信西郷と和平

父純堯は頓て隱居し、小野城へ引入りけり。斯くて同十月十四日、西郷一門廿六人連署の神文を、隆信へ差進す。其人數には西郷兵部大輔純安・同左近大夫行教・同目新次郎堯繁・同次郎貞德・同右京允幸信・同右衞門大夫幸長・同但馬入道宗浦・同右近大夫幸勝・同左衞門尉幸光・同彈正忠幸守・同越後守堯忠・同越中守幸勝・同常陸介幸明・船越城主・南肥後守純淸・北淡路守幸俊・同伊豫守尙秀・蘆塚伯耆守幸貞・近藤豐前守善明・井崎右衞門尉綱道・遠岳治部少輔堯增・金崎伊豫守種定・宇良右衞門尉尙保・原左京允純秀・矢上又三郞幸治・御崎彈正忠忠堯・市來加賀守忠末合せて廿六人なり。此時、龍造寺よりも神文を取替はせられ、其上秀島四郞左衞門家周を質として、伊佐早へ遣置き、天正六年までありけり。

一、隆信、伊佐早を治められ、同十一月、有馬領七浦へ討入られしに、當所の鄕司小野兵右衞門を先として、五十六人味方へ馳せ參り導き申す。この時、藤津の嬉野・德島・上瀧・吉田・永田等、先手にありて敵を追拂ひ、七浦悉く龍造寺に相從ふ。夫より隆信、有馬以下高來の還を征伐あるべしとて、同十二月、島へ渡海せらる。

浦龍造寺に從ふ

有馬龍造寺合戰

此勢二萬餘騎なり。先づ神代へ著船ありしに、此所の領主神代兵部大輔貴茂、隆信を請じて樣々奔走す。又島原式部大輔純豐も、隆信の陣所に馳せ參る。然るに當郡の總地頭有馬左衞門佐鎭貴、前名義純。佐嘉勢の大軍にて押寄すると聞きしかば、急ぎ安富・安德以下の味方を相催し、多比良・三戸の湊へ出向ひ、龍造寺の軍士と散々討戰ふ。時に龍造寺の先勢打負けて、悉く崩れ立ちしを、大塚勝右衞門、與力の手の者三十餘人踏留まりて戰ひしかば、味方是に力を得、返合せて又戰ひ、有馬勢を退けゝり。斯くて隆信、夫より千々岩の城主千々岩直員を攻めらる。此直員は元來有馬仙岩の末子、鎭貴には弟なりしかば、有馬より加勢を差遣し稠しく防ぎ戰ふ。斯かりし間、龍造寺の軍兵利を失ひ、隆信の旗本まで色めき立ちて崩れむとす。然るに此時、佐嘉の光照寺住持に、空圓とて元は旅僧なりけるが、兼ねて隆信の懇志を受けし故、此度當陣へ見舞の爲に來つてあり。此出家、唯今味方の崩るゝを見て、褊綴の長袖を結んで肩に投げ掛け、長刀押取り敵に向ひ、是は龍造寺與賀の寺僧に、空圓とて、實は松永彈正弟なるぞ。出家とて侮る

など、敵中へ切つて入り、四角八方へ追散らし切死にこそ死にゝけり。彼の空圓、近年肥前に來り、與賀の蜜藏寺へ假初に宿してありしに、殊勝の出家なりしかば、折々城内へ招かれ、隆信夫婦、其法談を聞かれしより甚だ歸依せられ、頻に城下へ留置かれ、内室の亡母光照尼菩提の爲め、則ち蜜藏寺を修造ありて、光照寺と改められ、彼の空圓を住職に居ゑられけり。然るに此出家、生國と俗姓を覺にいはざりしが、今度討死しける時、始めて斯くは名乘りけり。隆信、是を聞かれ彌、歎き思はれけり。斯くて隆信、今年は早月迫に及びし間、先づ歸陣あるべしと、諸勢と共に佐嘉に兵船を歸されけり。

隆信重ねて高來發向の事

隆信重ねて高來に出陣

天正六年戊寅正月龍造寺隆信、重ねて有馬征伐の爲め、大軍を催し高來の島へ押渡らる。時に當島の翟安富伯耆守純治・同子息下野守純泰・安德上野總介純俊を初め、力武對馬守・松園伊勢守等、龍造寺に屬して降參す。されば右人數の中、安富伯耆守

と申すは、元來當國の者にもあらず。先祖民部入道心空が時、正應五年十一月六日、鎌倉殿より下文を給はりて始めて當所へ下向し、有馬と緣を求め、既に九代に及び舊好の者なりしかども、聊かの恨ありて、今度島原純豐といひ合せ、有馬へ逆意をなし龍造寺へぞ隨ひける。然るに隆信、去冬降參したる當島の輩の內、神代貴茂は別心あらず。島原式部大輔純豐が質人を取るべしと、成松遠江守・成富甲斐守を遣さる。兩人則ち島原へ行向ひて其旨を述べしかども、純豐難澁して其返答に能はず。然る間、成松・成富力に及ばずして打歸りけり。時に鍋島信生、さらば某行向ひ、彼の質人を取るべしと、主從百餘人に水町丹後守信定を召具して、島原が城へ赴かる。其時純豐は大幕打たせ、一族家人等二三百人左右に召置き信生に對面す。信生は唯、一人幕の內へ入りて前後に目を懸けず、質人を出さるべき由申されけるに、純豐猶も領掌せず、面を荒らけて不與氣なり。斯かりし程に、其體既に危かりしを、水町は無雙の古兵にて早推量し、大幕を摑んで座敷へ押入り、眼を見出し拳を握り、其氣勃然として無手と坐す。其時、鍋島の家人も幕內へ入り、氣〔マヽ〕然を現し悉く

有馬鎭貴和を龍造寺に乞ふ

一面に列座しけり。時に純豐、忽ち面を和げ詞を出し、嫡男を質として鍋島に引渡しぬ。信生是を具し本陣へ歸られしかば、大に喜悅ありけり。

一、斯くて高來島中の城持共、數輩龍造寺へ相從ひ、今には有馬左衞門佐鎭貴、領知狹く無勢になりしかば、大に力を落して先非を改め、懇望の上隆信へ和を乞ひ、安富左兵衞純生を納富が陣所へ差出し一書を送る。其狀にいはく、

對隆信鎭賢改先非、向後得御指南度念望候條、內意之段申出候き。就夫然然爲可得御意、安富左兵衞尉差出候。就中故但州到此方、別而被添御心候段無忘却候。其續無相違、彌、御入魂承仰候。一至存分者用口上候條、不能審候。恐々謹言。

三月廿三日　　鎭　貴判

納富左馬大輔殿

御陣所

と申送りけり。彼の鎭貴、此前方も和を乞ひ、違變重々なりしかば、此度も亦眞(まこと)

言しからず思はれしかば、斯く申す上はとて隆信宥免あり。則ち和平一著し、鎭貴へ初めて對面せられ、嫡子民部大輔鎭貫を、彼の妹壻に契約あり。其悅の使者は成富甲斐守信種なり。扨高來島一圓に靜謐しければ、隆信頓て佐嘉へ歸陣せられけり。此時、有馬鎭貴よりの質人には、一族島原大學・土黑備中守なり。島原式部大輔純豊の質には、嫡子木工左衛門、さて又安富下野守泰の質人には、これも嫡男の助四郎なり。此質人共、後には皆々簗河にあり。

北肥戰誌卷之廿二終

北肥戰誌 卷之廿三

隆信筑前に出陣

龍造寺隆信筑前國出馬の事

天正六年戊寅三月下旬、隆信、高來より歸陣あり。國中は早東西ともに雌伏しければ、是よりは他國を隨ふべしと思立たれ、先づ筑前國を征せむと陣觸あつて、大軍を催され東肥前へ打出でらる。抑、筑前と申すは、元は少貳の分國にて、其後、中國大内家の支配となり、近年は又豐後の大友より知行して、西筑前の內五ヶ所の城に、豐府より歷々を差籠置き、中國の毛利を抑へ、肥前の龍造寺を差搦めたり。其城々には、先づ立花城に戶次伯耆入道々雪、岩屋城に高橋主膳入道紹運、荒平城に小田部入道紹叱、鷲岳城に大津留山城入道宗周、柑子岳城に臼杵新助鎮富なり。斯くて隆信、神崎へ著陣あり。先手は手寄なれば、城原の輩仕るべき由下知せられ、

大將は江上權之允家種、軍奉行は執行越前守・諸岡安藝守・鍋島丹波守にて、背振山を越え筑前の內早良郡へ討つて入る。爰に於て脇山の住人重松對馬守・大敎坊・圓信坊を初め六十三人、龍造寺へ降參して、江上衆の陣所へ來りぬ。斯かりし間、城原勢是に氣を得て、則ち彼の山の者共を案內者とし、所々を燒拂ひ相進む。斯くて隆信、敵地繫の爲に內野と云ふ所に要害の地を見量られ、執行越前守種兼・鍋島丹波守種房、其外江上家の輩に、各番にして在陣すべき由下知せられ、其身は先づ佐嘉へ歸陣ありけり。

重松對馬守以下降參

大友と島津日州耳河合戰の事

爰に其頃、薩州の島津修理大夫義久と、日向の伊東大膳大夫義祐威を爭ひ、去年天正五年の冬、野尻・高原兩城の合戰に、島津、竟に伊東に切勝つて、舍弟中務大輔家久、其外宗徒の輩を、土持彈正少弼親成が高城竹隈城とも へ差籠めて、日州を相守らす。斯かりし間、伊東義祐、在所へ溜り得ず豐府へ赴き、大友宗麟を賴みて居たり。此

時義祐、宗麟へ申しけるは、あはれ加勢を給はれかし。島津と合戰を遂げ本意を達して、我が日州の本領を取返して候はゞ、其内半分は加勢の御禮に貴公へ進ずべしと申す。仍りて宗麟、是を應諾あり。今年天正六年の夏、島津と戰はむと議す。此事隱なし。島津義久、老臣と共に評定ありけるは、若し大友より龍造寺を語らひ、兩家の勢を併せて當家と戰ひなば、由々しき大事なるべし。所詮、此方より龍造寺を語らふべしと、彼の家臣三人の方より、連署を以て佐嘉へ申送りし狀にいはく、

先年一翰啓入之刻、御慇禮畏悅至極候。爲二其辻一今度賀雲齋被二差上一之處、通用依レ難レ成、從二中途一歸宅候樣、日州之事義久雖二分置候一、累歲逆心故、舊冬被レ屬二案利一候。然者自二豐後一到二當郡一防戰之企候哉、萬一實に候はゞ、彌二向後甚深可一レ申談一段所存候。仍而乍二微色一絹布四端令レ進レ之候。聊補二空書一計候。期二來信一候、恐々謹言。

六月十九日　　經　定判

光　宗判

意　鈞判

大友宗麟日州に出陣

納富殿

斯くて大友宗麟は、伊東が申す處に彌、同心あり。日州へ軍兵を差向け、薩摩の輩幷に土持彈正を誅伐し、伊東を舊地へ安堵させ、其領內をも分取るべしと思はれしかば、同六月下旬、嫡子左兵衞督義統を大將にて、志賀・佐伯・田北・田原・朽網・吉岡以下の歷々、其勢三萬を日向へ差向けらる。此時日州には、縣の城に島津兵庫頭忠平あり。財部城山崎とも。に島津中務大輔家久あり。土持彈正少弼親成は、元より居城の高城を守りてありけり。然るに豐後の大軍攻め來る由日州へ聞え、急ぎ土持親成、己が手勢計りにて高城を打出で、豐後勢を待懸く。斯くて大友の軍士三萬餘騎、豐府を立つて梓越屋崎海陸より日向へ入りしかば、土持聽て橋峯といふ所に出合ひ、大友勢と相戰ふ。されども豐後の先陣志賀安房入道道輝、火を散らし討戰ふに、土持が賴切つたる綱田孫左衞門以下八十三人立所に討たれ、土持竟に戰負け、己が高城に引籠る。大友勢三萬を以て、續いて押寄せ是を攻めけるに、城中、此大勢を防兼ね、詰の城松尾に皆取籠りけり。大友の軍士、勝に乘り松尾へ押詰め火を懸く。爰

に於て土持親成、終に遁れ難くして生捕となりけり。斯かりし間、大友義統、則ち彼の親戚を誅し、薩州の者共を大半退け、七月に入りて府内へ歸陣ありけり。此時、肥前の横岳が方へ、大友宗麟の狀に云く。

土持表悉屬二案中一、義統令二歸陣一候處、爲二祝儀一太刀一腰・織筋一端送給候。祝著候。猶田原近江入道可レ申候。恐々謹言。

七月六日　　　三非齋印判

横岳中務大輔殿

此時、此横岳、龍造寺に屬し兵庫頭と改む。然れども又豐後へも通じけるにや。中務大輔とは大友一味の時の名なり。西國太平記・鎭西記等には、此時宗麟日州へ出馬とあり。非なり。

舊記にいふ、義統今度の出馬、五月上旬とも、又ある書に、伊東義祐、今度日州の舊地へ安堵すとも。

一、今度大友義統日州參陣の時、筑後衆も日向の中小邦まで打出でしかども、彼の

表早一著せしに依りて、皆小邦より引返しけり。斯くて日州大牟、大友の支配と相成りしかば、同年九月より宗麟入道、内室を具して日州へ出張あり、牟志賀といふ所に在宅せらる。斯かりし程に、此事薩州へ聞えて、島津義久大に立腹あり。先度土持を大友に切らせし事、先づは當家の瑕瑾なり。其上日州過半、敵地となりて、已に宗麟、牟志賀に移り其儘在宅するの由、是非なき次第なり。急ぎ人數を差越し、悉く退治すべしと下知ありしかば、島津右馬頭以久・同圖書助忠長・伊集院右衛門大夫忠棟、急ぎ日州へ發向し、先づ佐土原の城に入りて、島津中務大輔が財部の城に居たりしと會して軍評定す。時に土持が舊城の高城へは、山田新助在番しけり。又薩摩より追々に伊集院肥前守久將も來りて、穗北城に入り、是も味方と會す。

島津義久宗麟の日州に居住するを怒り出陣す

或はいふ、此時島津以久・伊集院以下日州へ來りしは、去る八月にて、宗麟、牟志賀へ移られし前よりとも。

一、斯くて大友宗麟は、頃日牟志賀にあり。さらば一戰を勵まし、彼の島衆を討散

らすべしと、近國の旗本共を催されけり。然るに依りて筑後の諸將は、十月二日打立つて、同廿四日に日州へ著陣す。此時、簗河の蒲池武藏入道宗雪・同嫡子民部大輔鎭竝、手勢三千にて打出でしが、子息鎭竝は落馬して氣色惡しとて、半途より引返す。時に宗雪、涙を流して申しけるには、如何に鎭竝、年來大友の重恩を請け、斯かる專度（先途）を見屆けず、其上六十に餘る親の戰場へ赴くを見捨てゝ、己れ一人家に歸るといふ法やある。必ず汝、天の罰を蒙るべしとぞ恨みける。寔に宗雪が申しゝ如く、鎭竝三年の內に家名を失ひけり。是は鎭竝先達て島津より內意を得て、龍造寺と同じく大友に到り、逆意ありける故とぞ聞えし。

一、大友の總勢四萬餘騎と聞え、先づ山田新助が籠りたる高城を攻むべしと、同十月十日、名貫川を馳渡し、明くる十一日高城に取懸け攻め戰ふ。城主山田新助、固く城を持つて防戰するに、無雙の要害なれば事ともせず。然れども此城、高山の頂に依りて水乏くして、始終籠城叶ひ難くぞ見えける。斯かりし程に、財部城にありける島津中務が方より薩州へ注進し、大守義久へ加勢を乞ひけり。之に

島津義久日州に出陣

因つて義久、さらば自身發向すべしと、舍弟祁谷院左衞門尉歲久を初め、本田・猿亘・平田・謙田・伊勢・疑掎・新納・肝付・坂尾・竹內・本鄕の一族以下都合三萬八千大聖寺日記には二萬餘兵と有を率ゐて、十月廿五日、西國記には十月一日とあり。鹿兒島を打立たれ、日州に到りて佐土原戶部に著陣あり。扨大友の諸勢、彌〻高城と財部の兩城を取圍み、十一月十一日には、西は耳川を境して陣を取る。島津の總勢は、耳川の西の山麓に陣を張る。斯くて十一月一日の午の刻、島津方より軍兵を進め、大友方の筑後陣に切懸る。時に筑後の輩無勢に依りて戰ひ負け、其陣場をも切取られ、悉く崩れて豐後の田原近江入道紹忍が陣と一つになる。然るに大友方の諸勢、常陣の行粧を見て、今度の合戰勝利を得しと思ひけるにや。皆々必死になりて、故鄕へ形見を送り、妻子へ遺詞の文を殘しけり。其中に齋藤兵部少輔鎭實は、旣に陣屋を打立ちし時、明日の命を待たぬ身の今朝は甚だ寒しとて、下人に申付け祕藏して持たせける乘替の鞍を割らせ、酒を溫め飮みけり。是を限と思定めて打立ちけり。斯くて明くれば十一月十二日の朝巳の刻、大友方より軍を進め、耳川を駈渡し島

耳川合戰

大友勢敗軍

津陣へ切懸り、鬨の聲を揚げ弓矢鐵炮を打懸けて亂れ合ふ。兩陣の兵、十萬に及びしかば、其聲天地に響いて夥し。初度の軍は、島津方の先勢本郷の一族と、大友の先手佐伯紀伊入道宗夫・左備。田北相模守鎭周右備。と暫く戰ひけるが、島津勢打負けて、本郷内藏助・本田因幡守以下、田北相模守が手に討取られぬ。島津兵庫頭忠平、後陣より其體を見て、手の者を引具し馳け來り、自身三間柄の大槍を以て、大友勢を追立て叩き倒し突伏す。其業更に凡夫にあらず。是を見て島津右馬頭・同圖書助も馳せ加はり、同名中務大輔・山田新助は、財部・高城の兩城より討つて出で、大將島津義久も、本陣より來つて一つになり、東西南北に輪立ち相戰ひし程に、大友勢竟に打負けて、先陣の田北相模守、味方の敗るゝを助けむ爲め、一番に討死し、其一列殘なく、同名三郞兵衞・同下人忠三郞・善助腹搔切つて空しくなる。斯かりし程に、田北が相備佐伯入道宗夫も、敵中へ馳入り討死しけり。爰に於て大友の總勢、混崩(ひたくづれ)に崩れて敗軍す。島津中務・山田新助勝に乘り士卒を下知して、追伏せ〳〵首を取る。淺猿かりし有樣なり。爰に橫三丈に餘り、深さ二丈に足

らざる深淵あり。僅の流れなれども、其水の速き事恰も龍門三汲の如くにて、昔より此淵を越すものなし。殊更頃日の雪消に水增し、白波岸を混して冷じ。然るに豐後の敗軍共、後の敵を遁れむ爲め、我れ先にと來り、此淵に行掛りて爲方なさの餘りに、案內は知らず飛込み〳〵しける程に、一人も助かるはなく、數千人の者共、皆水屑とぞなりにける。扨此度大友勢の討死には、先づ彼の老臣に吉岡越前入道宗觀・同嫡子掃部助鎭興・佐伯紀伊入道宗夫・田北相模守鎭周・同名三郎兵衛、其外臼杵鎭次・萩野鎭信・小佐井鎭正を初とし、齋藤兵部少輔鎭實もいひし言葉に違はず討死す。中にも角隅越前入道宗岩は、薩摩の侍本鄕忠左衛門と討死す。首實檢の時、大將義久、此入道は年來の知音なりしとて、淚をぞ流されける。(軍法の師なりけり)爰に簗河の蒲池武藏入道は、手勢三千を引分け戰ひけるが、味方悉く討たるゝを見て、今は早是までなりと、從弟の同名和泉守鎭秀と同じく敵中へ驅け入り、切死にこそ死にける。此等を宗徒の者として、大友方の討死三千餘人、途々にて討たるゝ者千餘人、手負數を知らず。島津方にも討死本鄕內

大友勢の戰死者

藏助・本田因幡守・海田主膳助・眞方大炊助以下雜兵二千餘人なり。斯くて明くれば十一月十三日、島津義久、其家臣河田駿河守に下知せられ、凱歌を執行はる。時に大友入道、鬱憤に堪へず、重ねて島津と合戰すべしと聞えし處に、其頃は公方義照公、中國に御下向あり。小早川左衛門佐隆景を御賴ありて、備後國に坐し(ましまし)けるが、此大亂を聞召し、急ぎ伊勢駿河守貞順を上使にて、大友・島津兩陣へ御敎書をなされ、雙方私の宿意を堪忍して、合戰を止め申すべき由仰下されしかば、上意の趣背き難く、兩陣弓矢を納め、無事の化をなして、兩陣より色々の土產物を調へ、貞順を賴みて進上す。扨義久は、同月廿日鹿兒島へ歸陣あり。宗麟も無念ながら府內へ歸陣ありけり。是よりして大友の武威、大に衰微せしとぞ聞えし。斯くて伊東義祐は、豐府の老若惡みし故、豐後への逗留叶はずして、四國へ渡り伊豫國に到つて、河野の一族を賴み年月を送りぬ。

將軍義昭の御敎書によりて島津大友和平

一、此度大友入道、島津と戰ひしを、其前廉角隅越前入道宗岩、五つの凶を擧げて之を制す。（角隅は軍配者なり）一つには粮を他國へ荷うて師(いくさ)すること、二つには味方は長途の

嶮岨を越えて身を勞し、敵は自國にありて自由なる事、三つには宗麟今年四十九にして厄年の事、四つには宗麟今年寅の歲にて、十月は過害の事、五つには十一日滅門にて寒節の事、是を宗麟用ひずして、終に合戰し敗北ありとなり。

一、此耳河合戰の事、諸記同一ならず。此書は舊記を以て之を書す。或はいふ、此合戰、天正二年の事なりとも。

隆信筑後國出馬の事

隆信筑後に出陣

龍造寺隆信は、當夏島津よりの內意を得られ、扨思はれけるは、鷸蚌相挾則烏來ニ其弊一といふ事あり。幸ひ大友が日州にありて島津と相挑む。其留守を量つて近國へ出張し、彼の旗下の輩共を一々に切從へむと、簗河の蒲池民部大輔鎭竝と心を合せ、同十一月十九日、先づ筑後國へ討出でらる。先陣は鍋島信生、二陣は納富左馬大夫家景、三陣は龍造寺上總介家晴、四陣は松浦衆、五陣は後藤伯耆守家信、六陣は龍造寺和泉守長信、七陣は江上權之允家種、八陣は馬場肥前守鑑周、九陣は神代長

良の陣代同名彈正忠と、千布因幡守家利、殿は隆信の旗本にて、都合二萬餘騎、筑後國三潴郡酒見村に到つて陣を居ゑらる。爰に於て當國の住人等、荒々參陣して龍造寺に相從ふ。中にも簗河の蒲池は元より一味なり。其外久留米の豐饒中務大輔鎭連・草野の草野中務大輔鑑員・下田の堤備前守貞之・西牟田の西牟田左近大夫鎭豐を初めとし、酒見・城島の者共段々に來り從ふ。此等は皆兼ねて大友旗下の輩、筑後國の城持なり。隆信、今度當國出馬の初め、各〻參陣申すに依りて大に悦ばれけり。其中に戸原河原城主戸原薩摩入道紹眞・山下の城主蒲池志摩守鑑廣・此時、未だ勘解由次官と號す。古賀の城主三池河内守鎭實等は、大友方にて隆信に雌伏せず、己々が居城へ引籠りけり。然る間隆信先づ戸原入道を攻むべしと、龍造寺勘解由左衞門信家・同右馬大輔信門・內田美作入道卜菴・姉川中務大輔信安・副島長門守光家・鹿江宮內大輔信明以下軍士を率ゐて、戸原河內へ差向けらる。斯かる處に伊駒野城主河崎出羽守鎭堯、大勢を以て戸原を援ふに依り、龍造寺の者共叶はずして引退く。斯くて十一月も下旬になりしかば、隆信先づ筑後を差置き、筑前に打入り敵地を巡見すべしと、

十二月朔日、酒見の陣を拂はれ直に筑前國へ發向あり。時に秋月長門守種實・筑紫右馬頭廣門急ぎ參陣申しけり。其外早良郡の者共馳せ著きしかば、隆信是等を案内者とし、大友方の戸次・高橋がありつる立花・岩屋・寶滿の城を攻めらるべきやと議せられしかども、何れも堅城にて、卒忽には叶ふまじき由、導の者共申すに依りて、さらば先づ馬を返すべしと、隆信頓て龍造寺へ歸陣ありけり。

隆信歸陣

此時、筑紫廣門より弟新助晴門が、今年十一歳になりして、鍋島信生の養子にして、佐嘉へ遣置くべき由申すに依りて、其通りに約束せられ、新助を則ち佐嘉へ同道あり。

一、今年秋月長門守種實、大友宗麟入道の暴惡十餘ヶ條を擧げて、筑前一國はいふに及ばず、隣國を觸廻すに、諸將是に同意し、宗麟を背く輩各〻連判をなす。十ヶ條之を略す。

一、大友宗麟、耳河合戰の後、負腹(まけばら)を立て、心彌〻僂(かゞ)み國務猶正しからず。老臣田北大和入道紹徹を誅伐せらる。是は彼の紹徹が嫡子相模守鎮周、去る耳河の軍に一番に討死し、味方に弱みを付くると宗麟大に誹謗して、更に其功を立てられず。

茲に因つて紹徹恨を含みし故なり。又府內の侍古庄左京允兄弟・朽網市佑・雄城右衛門大夫惟周故なく勘氣を蒙り出國す。仍りて大友の家人等主を恨むる者多くして、宗麟其威を失ふとなり。

一、今年龍造寺隆信、田原伊勢守尙明を備後國へ差遣し、小早川隆景まで、公方義照公へ御禮を遂げらる。

一、今年隆信、蒲池鎭竝と談ぜられ、人質として秀嶋四郞左衛門家周、簗河へ赴く。此秀島、去る頃より西鄕への質として伊佐早に赴き、今年又簗河に到る。

隆信重ねて筑後國出馬三池落城の事

隆信重ねて筑後に出陣

天正七年己卯三月、龍造寺隆信大軍を引率し、重ねて筑後へ出張あり。是は去冬酒見に在陣の內、來り從ふ輩もあり。又從はざる族もあり。中にも三池鎭實・蒲池鑑廣籠城するに依りて、是を打崩さるべき爲なり。然るに此時、筑後國山門郡鷹尾の城主田尻中務大輔鑑種が伯父に、同名山城守鑑乘といふ者あり。入道して宗達と號す。此

其目的

宗達、兼ねて龍造寺の內に岩楯といふ者と知音なり。仍りて隆信、彼の岩楯を使とし、宗達を賺かされしに、仔細なく承引し、既に大友と手切して、去冬十二月廿二日、隆信・鎭賢と神文を取替し。一向龍造寺に一味す。因つて玆に今年二月十日、鍋島信生よりも神文を送られ、同月廿六日、鎭賢よりも又々神文あり。是併同名の鑑種を味方に引付けらるべきなり。斯かりし間、鑑種も宗達に勸められ、又は甥の蒲池鎭竝申す旨もありしに依りて、頓て龍造寺に心を通じ、今度隆信、當〔國脫カ〕出馬の時、早速蒲池鎭竝と同じく龍造寺の陣に來り、隆信に聘禮しけり。隆信大に悅ばせられ、則ち鑑種・鎭竝を案內者とし、瀨高庄を打通り竹井村に著陣あり。爰に於て先づ三池河內守鎭實を攻めらるべしと、三月廿日、佐嘉勢、三池の古賀の城に向ひ、既に尾嶺に陣を寄せらるゝ處に、鎭實、則ち龍造寺へ降參すべき由懇望す。然るに田尻鑑種は、鎭實が爲には妻女の兄弟なりしに依りて、是を調達し、肥後の筒岳の城主小代伊勢入道宗禪は、又鑑種が舅なれば是へも談合して、三池鎭實、龍造寺へ降參の事彌〻一著しけり。然る上にて、鎭實より龍造寺へ質人を差出すべきに、田尻鑑

種堅く申談じける處に、鎭實其節に至り是を違變しけり。斯かりし間、鑑種、隆信へ至つて不首尾を申したる由、大に迷惑して急ぎ小代に赴き宗禪に面談し、則ち此入道を同道して、鑑種、三池に到り、右約束の質人を有無出さるべき由、鎭實へ稠しく申すと雖も彌〻難澁しけり。剩へ宗禪入道、三池と內談し、田尻は親子の緣といひながら龍造寺へ一味し、今には敵の事なれば、討果すべきかと內談す。之に依りて三池が隆信への降參、一著事成らずして、田尻は隆信の陣所に來り、又色々內習しけれども、鑑種もすべき樣こそ無かりけれ。斯かる處に小代入道の妻女、肥後より鑑種の陣所に來り、今度夫の宗禪、三池と同心し、龍造寺と弓箭を取りなば、忽ち數代の家を滅すべし。所詮子孫連續の爲と思ひて、宗禪へも聞かせず自ら質人となりて、隆信の陣へ出づべき爲のことを賴みて、唯今來る由申しければ、鑑種其意を得、急ぎ彼の女中を同道して、隆信の陣所へ參り、小代宗禪別心なきに依りて、則ち彼の妻女質となりて陣所へ出で申す由、隆信へ首尾能く調へ、扨彼の宗禪の妻女は、男女の事なれば、鑑種が鷹尾の城へぞ預りける。斯くて三池鎭實が降參の事、

隆信の軍三池鎭實を攻む

田尻色々內畧に及びしかども、彌〻質人を出さゞるに依りて事調はず。さらば三池へ發向すべしと、佐嘉勢各〻三池へ討入り、所々へ相働き、靑麥悉く薙拂ふ。時に城主鎭實は本城へ取登りけり。斯かりし間、龍造寺の軍士、先づ引取るべき由評定しける處に、小代宗禪入道、妻女の質人に出でけるを怒つて、彌〻龍造寺雌伏せず、人數少々芥田神といふ所へ差出し、佐嘉勢に矢を射懸けむとす。玆に因つて佐嘉勢の中より鍋島信生一手にて馳せ向ひ、皆追崩し、樫野まで燒き拂はる。斯くて鑑種打崩すべき由申すに依りて、佐嘉衆少々相加へられ、鑑種手の者中尾與三兵衞種次以下魁を以て、また鷄鳴に切入り、今山悉く仕崩し、三池衆を討取り、田尻勢にも中尾が弟彌三郞討死し、其外疵を蒙る者多かりけり。扨夫より三池の本城を攻めらるべしと、隆信、竹井に在陣ありて、人數を三池へ差向けらる。先陣は田尻中務大輔鑑種・〔二陣〕(脫カ)蒲池民部大輔鎭竝、三陣は鍋島信生、四陣は神代長良の陣代同苗彈正忠・千布因幡守、五陣は橫岳下野守賴續、其外筑紫上野介廣門・前の名左馬頭。安武民部大輔家敎・前の名山城守。豐饒美作鎭連・前の名中務大輔。堤備前守貞之以下、各〻肥・筑兩國の內、三瀦・山門・

同合戰

三根・養父・佐嘉・神崎等の軍兵を從へて三池へ討入り、鎭實が山の城へ取懸る、當日の大將は後藤伯耆守家信なり。斯くて城兵、城戸を持つて相戰ふ。時に寄手の先鋒田尻、蒲池が山門・三瀦の軍兵に、下田の堤が手の者加はつて、一の城戸を打破る。是を見て佐嘉勢の中より、鍋島信生、養父郡の軍士に手の者を加へ、神代の山內勢と一つになり、頻りに進みて城內へ攻入らむとす。されども城兵、烈しく是を防ぎ二の木戸に支へて相戰ふ。斯かりし程に、諸手の寄手疵を蒙り、討たるゝ者數を知らず。其內に鍋島の家人加々良掃部助討死し、松田權助、則ち信生の側にて手柄を現す。然る處に、武藤善兵衞貞淸、前名丹後。火矢を以て城外の櫓を燒落しけり。然れども城中猶は差怺へ、今朝晨より日夕陽に沒するまで、敵味方入亂れ、中々稠しく相戰ひ、いつ果つべき軍とも見えざりけり。斯かる處に、酉の剋に及んで、大雨降り出し、偏に篠を突くが如く、東西を辨せず、敵味方を知らざりしかば、矢を放ち太刀を打つべき樣もなく、合戰叶ひ難くして、寄手悉く尾の嶺へ引取りけり。斯くて其夜城主河內守鎭實、風雨に紛れ城を落ちて行方知れずなりにけり。然る間、寄

隆信小代を攻むこ

手の諸勢勝鬨を揚げて引退きけり。

小代入道宗禪龍造寺へ降參の事

斯くて隆信、三池を攻め落され、夫より小代伊勢入道不二軒宗禪を攻めらるべしと、諸勢を率し、先づ芥田神へ差寄せ小代へ取懸けらる。先手は蒲池鎮並にて、其一勢進んで小路口へ攻め入り、散々相戰ひ、中山藏人其外簗河勢數多討死す。時に又米山に小代が長臣荒尾攝津守家經、其勢二千計りにて打つて出づ。之に依りて佐嘉勢の中より鍋島飛驒守信生、三千を以て米山へ取懸けらる。然るに荒尾如何思ひけむ、一戰に及ばず引退く。鍋島續いて追駈け、町小路に火を懸け、宗禪が梅尾の館を燒き破り、猪鳴叫(をめき)んで討戰ふ。此時宗禪の一族小代越前守主從を、鍋島衆の內より木下四郎兵衞昌直討取りけり。其外鍋島衆に、伊東一慶入道・同名兵部少輔・大塚勝右衞門・川浪大藏・右丸藤左衞門・下村生運・小宮左馬允・小柳彌藤左衞門以下進戰ひ、城兵百餘人討取りぬ。斯かりし程に、宗禪入道幷に嫡子左近將監親傳防ぐ事を

得ずして、筒岳の本城へ取登り、木下四郎兵衛まで懇望を以て降參の由申しければ鍋島是を免し、則ち合戰を止められけり。時に鍋島の家人江副兵部左衛門、城兵荒木彈正・同子進士允を虜り、信生の前に引居う。信生見て、彼の者共は弓箭の引廻をする曲者なり。早々誅すべしと申されしかば、彈正は兵部左衛門之を斬り、進士允は安本源太左衛門首を刎ねけり。

ある記にいふ、此時隆信、小代を攻めらるべしと、梅尾の城近く山上に陣を居ゑ、城を攻められしに、小代越前守・荒尾攝津守切つて出で、龍造寺の先手簗河の蒲池鎮竝の一勢を切崩す。時に鍋島信生入替はりて相戰ひ、小代衆敗軍し、越前守は討死し、城主小代親忠下城、父の宗禪入道を質人に出すとあり。非なり。

一、此時、筑後國入院の鐘ヶ江長門守・菅原家續、龍造寺に相從ひ、神文を呈す。其文にいはく、同名宮內大輔事罷失候儀、家續努々存知不仕候。上下之を略す。

一、此時、肥後國隈本の城主城越前守親冬も、龍造寺に屬して質人を出す。

隆信山下の蒲池鑑廣を攻めらるゝ事

隆信蒲池鑑廣を攻む

龍造寺隆信、小代宗禪入道を從へられ、諸勢筑後へ陣を返し、夫より山下の蒲池勘解由次官鑑廣が未だ從はざるを攻められるべしとて、四月八日、肥・筑兩國の軍兵凡そ二萬餘騎を以て、山下へ取懸けらる。抑〻此蒲池鑑廣と申すは、簗河の蒲池と一家にて、筑後國の內八千六百町を知行し、當國に於ては一二の大名なり。然るに此度、龍造寺の軍兵必定押寄すべしと思ひしかば、矢原・谷河・上妻・菖蒲尾木等所々の要害に、數千の健兵を差籠め置き、山下の大河を前に當て、亂杙・逆茂木を引竝べ。鐵炮百挺用意し、其外端城に至るまで堅固に持ち、殊に頃日、大友の軍士星野親忠を攻めて、生葉に在陣せしを後援に賴みて、佐嘉勢遲しと待懸けたり。斯くて隆信は、旣に山下の城近く、眉手に一夜陣せらる。案內者は田尻鑑種なり。爰に菖蒲尾の要害に、上妻・酒井田、其外當郡の輩取籠りて居たり。隆信、此敵を仕崩すべきの由、案內者たるに依りて、田尻鑑種に下知せらる。玆に因つて田尻、先勢として佐

嘉衆相加はり彼の菖蒲尾に取懸けたり。時に敵烈しく防戰し、味方度々崩れ立ちしを、田尻手の者を初め、佐嘉勢より副島式部少輔・北島河內守・成富左近・同又次郎以下進んで相戰ひ、北島は敵を討つて首を取り、副島は混々(ひたく)と構に付いて切破り、其內に入りて相働き、諸勢續いて合戰し、菖蒲尾を容易く攻め破り、翌日龍造寺の總軍、皆山下の城の麓へ相進み、所々を働いて先づ水田へ打入りぬ。此時、大友義統(宗麟嫡子。)より、木室次郎入道への狀に云く、

(マヽ)前はなし、

龍造寺山城守其外悪黨申組、蒲池勘解由要害取掛候處、其方事、足城取誘(拵)數度之防戰難得勝利依無勢不持支之由註進到來候。殊に親類被官、或分捕高名、疵或戰死之由、粉骨之次第感入候。必以判形可顯志候。恐々謹言。

卯月十七日　　義統判

木室次郎入道殿

肥後國和仁大膳允龍造寺へ和を乞ふ事

和仁大膳允降參

扨隆信先づ山下を差置き、五月下旬に肥後へ討入られ、和仁の城主和仁大膳允を攻めらるべしと、鍋島信生・小川武藏守・田尻中務大輔を和仁城へ差向けらる。先手は案内者たるに依りて田尻なり。斯くて寄手の諸勢、和仁の里城へ取懸け、眞前に田尻の手の者、城戸口に付いて鬨の聲を揚げ、打破らむと相戰ふ。是を見て、佐嘉勢の中より、中野式部少輔・鑰山孫右衞門・水町彌太右衞門・大塚勝右衞門・田代次郎助・北島河内守以下、田尻に續いて挑み戰ひ、上野三郎四郎歳十七、首三つ取り、中橋平兵衞も、一番構に入りて首一つ取り、秀島隼人手疵を蒙り、相浦河内守討死す。又鍋島の手より江副兵部左衞門、一番に北の口より乘込みけるに、同じく甥の江副傳兵衞・小森源右衞門、是に續いて攻め入り相戰ふ。されども城兵烈しく防ぎて、容易くは城落すべしとも見えざりけるに、武藤善兵衞貞淸、火矢を以て城内を射付け、其上田尻鑑種が計略にて、城主和仁大膳允降參すべき由申しければ、鍋島信生、是を宥免あり。則ち軍を止めて攻口を弁げらる。然る間、大膳允頓て城を明渡しけり。時に信生、田尻が數度の軍忠を賞せられ、當城を彼の一族田尻石見守鎭貞に預け給

はりけり。

或はいふ、相浦河内守は、天正十五年和仁の城滅亡の時、討死すとも。

或はいふ、和仁大膳允を丹波守とも。

同國永野紀伊守以下同じく和を乞ふ事

鍋島信生以下納富能登守家理等の諸將、夫より同國木山の城主永野紀伊守を攻むべしと彼の城へ取懸けらる。中にも納富が一列の軍士に、大隈兵部少輔・小宮善助・牛島兵部允・伊東一慶入道・小柳彌藤左衛門進んで相戰ひ、其外堤左馬允軍忠を抽んで、田代次郎助疵を蒙る。斯くて永野紀伊守終に怺へずして降參しけり。斯かりし間、三船の城主甲斐民部大輔親直入道宗運・或は鑑隆。同子息相模守親秀或は右京大夫鎭隆。を初め、木野山鹿の輩悉く降參す。其中に甲斐入道は、同名彌左衛門が申す旨あつて、最前より志を龍造寺へ通じけり。斯くて鍋島信生を初め隈府へ討入らる。時に地下人等、大勢にて出合ひ烈しく相戰ひ、龍造寺の先勢悉く敗走し、鍋島信生の陣に崩れ

懸る。其内に副島式部少輔・中野監物・島原大學助・松田彌右衛門・大塚勝右衛門、唯四五人返合せ、敵を突立て〳〵討戰ひ、杉町藤右衛門も進んで敵〔の首脱カ〕二つ取る。其勢ひに地下人皆引入りしかば、龍造寺の輩勝に乘り、一番構を打破りて少時息を休め、夫より八代の赤星を攻むべしと評定ありしかども、先づ歸陣すべきに衆議決し、龍造寺の諸勢、隈府より皆々筑後の本陣に引返しけり。

一、隆信、山下の蒲池を攻めらるべき爲め、又々水田へ在陣あり。時に高良山の祝部鏡山大明神武邊安實、龍造寺に相從ひ神文を贈る。

此祝部、俗ながら大明神と稱す。其謂之を略す。

一、隆信、此時田尻鑑種が軍忠を賞せられ、始めて領知を與へらる。其村付に云く、

村付

一、豐永貳拾町、　　一、野々宇田六町、

一、岡堺八町、　　一、楠田四拾五町、

一、新關四拾五町、　　一、江の浦上下六拾六町、

此外、自今以後御忠義次第領地之儀可₂進置₁候。以上。

天正七年六月朔日

隆　信判

鑑　種參

鎮　賢判

北肥戰誌 卷之廿三終

北肥戰誌　卷之廿四

隆信筑後在陣

龍造寺隆信筑後在陣の事

隆信は天正七年の夏、彌〻筑後國水田に在陣せられ、山下の蒲池志摩守鑑廣（前名勘解由次官。）を攻めらるべしと、六月下旬、戸原・兼松へ旗を進めらる。此時高良山の大祝部幷に座主鎮興・麟圭・良寛、各〻一山の衆徒を引連れ來陣す。又紀親祐といふ者、神文を捧げて龍造寺に相從ふ。爰に於て隆信鐘ヶ江將監を招かれしかども承引せず。然る間、人數を差向けられ、是を誅伐ありけり。野田九郎右衛門、將監を討取りぬ。隆信、夫より河崎出羽守鎮堯が伊駒野の城に差籠りしを、攻めらるとて軍兵を向けらる。

河崎出羽守落城の事

七月廿一日、龍造寺の軍兵、河崎出羽守鎮堯が伊駒野の城を攻む。先手は築河の蒲池鎮竝にて、大手の城戸を打破り散々に相戰ふ。時に城兵宗徒の者に、中園備前守を、佐嘉勢の中より成富十右衞門信安討取りけり。斯くて寄手の者共、一面に攻め登りて我れ先を諍ひ、城戸内へ込入りし間、城兵是を防ぎ難く、城主出羽守は、城を遁れて行方知れず落失せけり。是を延さむと、川崎但馬守・同名民部少輔・同上總介・同治部少輔・同彈正忠・同右馬助・同刑部大輔・忠見紀伊守・同藏人・同右衞門允、原兵部少輔・同彌太兵衞・藤木土佐守・樋口九郎左衞門・牛島金助・薗田右衞門佐・駒野九郎衞門・瀨戸口釆女助・高山九郎次郎・原越後守以下悉く討死し、殘兵は皆落失せて城は則ち落ちけり、隆信夫より先づ本の水田へ馬を入れらる。

一、同八月上旬、同國猫尾の城主黑木兵庫助調實久・或は鎭連、入道となり宗英と號す。高良山の新坊、龍造寺に相從ひ、黑木は嫡孫の四郎を質人とし、新坊は親類を質とし、各〻隆信の水田

の陣に聘禮す。

黑木河崎星野由來附待宵侍從の事

黑木河崎星野の由來

抑〻筑後國の住人黑木・河崎・星野といふは、元來一姓にて、世には稀なる調姓なり。其由緒を尋ね聞くに、中頃上妻郡河崎の庄黑木山の城に、藏人源助善といふ者あり。其先は薩摩のねぢめに住せし故、ねぢめの藏人とも申しけり。歌讀にて笛の上手なり。然るに此藏人、頃は人皇八十代高倉院の御宇嘉應年中、大番勤に上洛して內裏に候す。時にある日、管絃の御遊坐しけるに、俄に笛の役闕けたりしかば、公卿殿上人の中を選まれしかども、折節笛を吹く人なかりけり。其時德大寺左大臣實定卿、彼助善が笛の器量を兼ねて能く知り給ひて、斯くと奏聞ありける間、さらば助善、殿上を免さるべしと勅定あつて、緣に祗候し笛を吹きけるに、堂上の笛の音より猶すみやかに其調子妙(たへ)にして、御遊既に終りぬ。時に主上甚だ叡感あつて、則ち助善に調子の調の字を姓に下され、其上從五位下に補(敍カ)せられて、藏人大夫調助善と

待宵の侍従

ぞ召されける。藏人が時に取りての面目なり。然るに此助善、在京の間、德大寺殿殆んど情を加へられ、雨の夜、宵〔雪カ〕の朝月花の遊宴にも、常に昵近しけり。ある夜いたく夜更けて、德大寺殿、助善を具せられ、相知り給ひける女の許へ立入り給ひしに、女は待侘びて、

待つ宵に更け行く鐘のこゑ聞けばあかぬ別れの鳥はものかは

と打詠じて、希に逢ふ夜のかごとも盡きなくて、其朝實定歸り給ひしに、餘りに別を惜み給ひ、助善を女の許に返して、盡きぬ名殘を託(かこた)れしに、藏人、女に向ひ一首の歌をぞ詠み侍りけり。

物かはと君がいひけむ鳥の音の今朝しも如何に戀しかるらむ

是よりして、助善を異名に、物かはの藏人と稱し、女をば待宵の侍從とぞ申しける。此女、元は阿波局とて高倉院の官女なり。ある時御惱ありしに、歌を詠みて叡慮に叶ひ、供御を上りて其御悅に侍從になされぬ。父は八幡の別當法印武内光淸、母は建春門院の小大進なり。斯くて藏人、大番過ぎて歸國せしに、德大寺殿、此年月の事を

思はれて、彼の待宵の侍從をぞ給はりける。藏人、面目身に餘り、彼の女を具して歸國しけり。此事隱なく、黑木山にありける本妻聞付け大に腹を立て、其京上﨟め、何故に爰には來るらむ。片時も此所に叶ふまじと、下人共を相語らひ、城の麓の大河を境して、是を入れじとぞ防がせける。されども爭か叶ふべき。藏人大夫打破りて、待宵と共に本城に入りけり。本妻彌〻息卷しけれど叶はずして、竟に黑木川の深淵に身を投げてこそ失せにけり。其骸の寄る所に、則ち是を埋め、祠を立て今の世まで、築地御前といふなり。然るに侍從は、腠胎にて下りしが、程なく男子を產みけり。是は實定卿の子なりし故、定の字を實名に用ひて、黑木四郎調定善と號す。此子孫代々、黑木山猫尾城に居住しけり。其後侍從、又男子を產みけり。是は藏人が子なり。此子孫は星野・河崎と號し、星野は生葉郡星野妙見城に代々居住し、河崎は上妻郡川崎伊駒野の城に居住しけり。扨彼の築地御前、其後侍從腹の子孫に怨を遺して恨をなす。茲に因つて今に黑木の子孫より其靈魂を祭るなり。其祭には、彼の女の忌日、年に一度身を投げたりし淵に、粹といふ器に、假粧の具を入

れて水上より流すに、其所にて忽ち沈みて見えずとなり。黒木の子孫、今簗河にあり。されば又待宵侍從下向の時、所願ありて高野山に一寺を建立し、講防〔坊カ〕と號す。是れ調姓の菩提所なり。

或はいふ、藏人助善、元來高倉院北面の侍なり。六位を歴、歌人にて異名にやさ藏人といふ。或は助能。此藏人が子孫、今に德大寺家に仕へて、則ち名字物加波と號す。黒木河内に於て古人語りていふ、黒木・川崎・星野三人の子、腹替なり。其内黒木は待宵腹にて、則ち高倉院の御子なり。仍て總領を繼ぐ。餘は本妻の子なりと。又いふ、黒木の家既二十七代、藏人助善より兵庫助實久に至る。天正の末大友家の爲め衰亡すと、待宵侍從、後に歸京しけるが、墓は入幡にあるなり。

筑前國脇山軍の事

去年天正六年の三月下旬、隆信、筑前國早良郡へ討入られし後、大友方の聟押へとして、城原の江上衆を、執行越前守頭人にて各番にして脇山の內野の砦に差置かれ

けり。然るに今年九月、大友持五箇城の内、小田部入道紹叱がありける荒平城・大鶴入道宗周が鷲岳城、何れも高山の嶮岨にて人馬不自由故、兵糧乏しくなりしに依り、竊に戶次入道道雪が居たりし立花城へいひ送り、兵糧を乞ひけり。道雪、さらば兵糧を差送るべし。さりながら其節は、必定内野より肥前衆打出でて是を押へむ間、其警固の爲め、我等も出張すべしと、道雪自身數千騎にて短兵急に取懸る。爰に敵勢に法師武者一人、味方の人數より二間計り先立ち馳せ來る。古賀右衛門允、是を見て走り懸つて引組み、押へて首を掻落し、今朝内野を出でし時、分捕は打捨とありし故、殊に隙なき時分にて、其頸をば田の畔の草の少しつまり之ある中に差入れてこそ置きにけれ。爰に又大鶴入道が一老牛田能登守駈來るを、古賀が一男同名權右門馳せ合せ、能登守と引組み伏す。古賀は生年十六歳、牛田は古兵なり。權右衛門危く見えける間、脇より加勢すべしと申す。父右衛門允、顔を振つて、いや〱若き者の初勝負に加勢をすれば、面々癖になるなりと、後に控へて見居たるに、運や强かりけむ。竟に權右衛門、上になりて牛田が首をぞ取りにける。爰に是も大

鶴が一族に壬生宗觀入道、味方に抽んでて相戰ふ。江上の長臣枝吉長門守種量が二男大藏大輔、生年十八歳と名乘り駈寄せ槍を合せ、宗觀を突伏す。然る處を青柳九郎左衛門駈寄りて、大藏と二人にて其首を取にけり。斯くて雙方入亂れ火を散らし打戰ふに、敵の大將大鶴入道も討死す。時に江上衆の内にて立花城を出で、九月八日の早天、脇山へ來つて彼の兵糧を運ばせけり。然る間、小田部・大鶴も是を迎へむ爲め、則ち己々が城を出で、其勢數百人、路々を警衛す。時に執行越前守、早此事を聞付け、いざや打ち出で駈け散らさむと、あり合ふ士卒を引率し、内野をば未だ夜も明けざるに打出づ。折節番所の者共、江上石見守宗種を初め僅に七十三人なり。越前守下知していひけるは、敵に味方を比すれば九牛が一毛なり。常の如くに戰ひなば、千に一つも勝つことあるべからず。十死一生にして相戰ひ、若し打勝ちなば分捕は無益なり。頸は皆討捨たるべしといひ談じ、先づ見合の爲め、古賀右衛門允を差遣すに、走り歸りて告げけるは、時分はよく候。大鶴・小田部と見えて、既に川を越え、其勢五六百計り來り候。又其後より立花勢と見え、遙に後れて凡

そ三千程にて押來れり。彼の跡勢の續かぬ内に、早一戰を急がるべしと申す。古賀が見たりし如く、戸次入道は遙か後より打つて、人夫數百人にて兵糧を運送し、其勢三千計り押來りぬ。大鶴・小田部は其兵糧を迎取り、既に早良川を越えたり。執行越前守、大に勇み士卒を下知し、執行與三右衛門信直生年十八歳。進んで敵を討つ。江上石見守定種、二箇所の疵を蒙り、其外高木式部左衛門種周・江上左近允・重松四郎右衛門・小柳清右衛門・今村右衛門佐大に討戰ひ、二時計りの合戰に難なく切勝つて、小田部・大鶴が者共を悉く追崩し、歷々數多討取り勝鬨を揚げて、早速内野へ引取りぬ。此由後陣に聞え、戸次道雪が立花勢三千計り内野近く取懸る。時に越前守、下知を加へ鐵炮十四五挺差出し、覺むる計りに打掛けさせ、輕く内野へ引入りけり。立花勢も其儘に立花へぞ歸りける。此合戰に、江上衆も十一人討死しけり。斯くて執行越前守以下城原の輩、計らず軍に打勝つて大に悦び、各々内野に歸陣せしに、生捕の者申しけるは、今朝の合戰に小田部・大鶴兩人ともに討取るなりと申しぬ。越前守、不審に思ひて是を改めしかども、首は元より討捨にとありしに依り

て、誰討取るとも知れざりけり。生捕の者申しけるは、さらば今朝討死の諸道具を見らるべしと申すの間、古賀右衞門允が討ちたりし法師武者の太刀を見せける處に、疑もなく小田部紹叱が定指なりと申しぬ。仍りて越前守、右衞門允に仔細を尋ねしに、右衞門允申しけるは、此法師武者、誰とは知らず。さりながら大將の紹叱ならば、總勢の眞先にはよも來るまじ。兎角皆々來られよ。彼の首を見るべしとて、件の戰場へ赴き草の中より入道の首を取出し、傍輩共を初め生捕の者へ見せけるに、紛もなき紹叱が首なりけり。又大鶴入道も討取られ、其首はありしかども、誰人の討ちたりとも分明には知れざりけり。斯くて執行越前守、彼の兩人の首を桶に入れ、註文を以て頃日隆信の筑後の陣所へ送りしかば、隆信限なく悦ばれ、彼の首共を則ち山下の城下に梟(かけ)られ、扨今度脇山にて戰功ありし輩、執行を初め各、褒美せらる。特に古賀右衞門允へは感狀を給はりけり。此競に蒲池鑑廣が山下の城、頓て落去すべしとぞ見えたりける。

或はいふ、右脇山の軍に、小田部入道は討たれず、遁れて荒平城に歸りしを、隆信、

筑後の陣より執行越前守を以て、同國飯場城主曲淵河内守に、小田部を討つべき旨申遣されけるに、房助申して曰く、御下知畏まり候へども、彼の入道は、某遁れぬ親類に候間、御免を蒙るべき由、越前守まで難澁しけり。されども隆信承引なし。仍りて曲淵、すべき樣なく小田部を攻めむとす。紹叱是を聞き、却つて飯場へ取懸け相戰ひ、自身の槍合に紹叱故なく房助に討たれぬ。其子十八郎は、房助が家人井上九郎左衛門に討取られたり。同年の冬の事なりと。（小田部入道紹叱、元來豐後の士なり。俗名民部少輔鑑と號す。）又いふ、小田部紹叱入道、曲淵河内守房助に討たれし由、戸次道雪聞付け腹を立て、飯場へ取懸け曲淵を攻めむとす。仍りて房助、隆信へ援兵を乞ひけり。隆信尤もなりとて、副島長門守に神代衆三瀬大藏以下を差副へ、曲淵に加勢せらる。其後戸次入道、竟に曲淵を攻めずと。

一、同九月、秋月長門守種實・原田越前入道了榮・草野中務大輔鎭永・筑紫上野介廣門、各、龍造寺へ一味にて、戸次道雪・高橋紹雲と所々に於て合戰す。

赤星統家
龍造寺に
和を乞ふ

赤星統家龍造寺に和を乞ふ附人質の事

同九月、隆信、筑後に在陣の中 肥後八代の赤星肥後守統家(或はいふ掃部助。)を味方に引付けらるべしと談合あり。鍋島信生の思慮を以て、彼の統家が知音に、同國甲斐外記といふ者を語らはれ、樣々内談の上にて、下村生運を外記に差副へられ八代へ遣されけり。兩人、統家に對面して龍造寺へ一味あるべき由、色々賺しけれども統家更に承引せず。されども甲斐も下村も類なき辯才にて、竟に統家を雌伏させ、剩へ質人の事まで由調へけり。斯かりし程に、赤星今年十歳になりし男子を、龍造寺への質として彼の兩人へ相渡し、此子を深く賴むとて、太刀一腰を下村生運へぞ與へける。斯くて兩人赤星が兒を具して筑後の本陣へ歸り、隆信・信生へ是を披露しければ、大悅あつて外記へ禮謝あり。生運へは今度の忠賞として、後に肥後國竝惠村を給はりけり。

或はいふ、赤星が人質の子、鰡江の無量寺に置かれしとなり。後に簗河に之ある

か。或はいふ、赤星は熊庄の城に住すとも。

山下攻矢原三溝軍の事

矢原口合戰

隆信、彌〻筑後に在陣あり。蒲池志摩守鑑廣が山下の城を攻めらるべしと、多勢を以て取詰めらる。然るに九月朔日、城兵矢原口へ討つて出づ。時に龍造寺の陣より納富能登守信理が一列進んで城兵と相戰ふ。中にも牛島兵部少輔・同新右衞門・河波大藏・於保左右衞門・伊東兵部允・石丸藤太左衞門以下、我れ先にと駈けて亂れ合ふ。一番槍は大塚勝右衞門にて、討ちつ討たれつ敵味方戰ひしに、城兵多く討たれ、寄手にも吉島平左衞門討死し、二度の懸に小宮左馬允討たれたり。斯かる處に寄手より横岳下野守・大塚伯耆守進んで、納富と一つになり、鍋島信生も來り加はりて城兵を追立てらる。此時鍋島の軍士の中より、松田權助・秀嶋新助大に打戰ふ。爰に於て城兵竟に引入りけり。斯くて翌二日に、隆信衆議を以て、水田より津留田に陣を移され、鍋島信生三溝に在陣あり。蒲池鎭竝は津留田近所に陣を取り、田尻鑑種

は長田に陣す。

一、同三日、城兵三溝へ討つて出で、鍋島信生の陣へ切懸り烈しく相戰ふ。時に鍋島の一列利を失ひ、信生の從弟鍋島權之助爲俊（前の名肥前守。）（マヽ）討死す。信生も、自身槍を取りて敵を拂はるゝ事千變萬化せり。是を見て早晩の松田權助・江副兵部左衞門・下村生運等、命を際に打戰ひし程に、城兵怺へず引入りけり。信生は彌〻三溝に陣を居ゑらる。然る處に山下衆、松延表へ刈田仕るの由到來ありしかば、田尻鑑種は彼の在所邊差搦むべき由衆議ありて、田尻は早速堤村へ陣を易へ、數日在陣しけり。

或記にいふ、此時蒲池鑑廣、山下城を隆信に圍まれ、數百日の籠城に兵糧等乏しくなりし間、斯くては叶ふべからず、豐後へ隱符を送り大友へ加勢を乞ひけり。斯かりし程に、宗麟父子下知ありて、肥後衆には關山の大津山河内守・和仁の和仁丹波守以下、山下加勢として筑後へ打越え、松延表に陣取りて青田を刈取らす。然る間、筑後衆には三池・豐持・豐饒・齋藤・大鳥井、是に與して瀨高の

庄に打出づ。之に依りて隆信、田尻鑑種を堤村に置いて、近邊の敵を差揺め、樣々行を廻し焦しける程に、豐府の加勢に怺へ兼ね、頓て歸陣すと。非なり。凡そ似たることなり。

蒲池鑑廣龍造寺へ降參の事

蒲池志摩守鑑廣は、數月龍造寺に居城山下を圍まれしかども、究竟の要害といひ、其上頃日、豐後の大友勢、筑後へ來り星野・草野・問注所と相戰ひ、生葉に陣して居たりしを、後援に賴み心強くありける處に、彼の大友勢、十一月初、豐後へ歸陣しけり。斯かりし間、鑑廣礑と力を落し、同月三日、終に龍造寺へ懇望しければ、事一著し、鑑廣自身隆信の陣所に來りて、降參り禮を遂げ、舍弟掃部助鎭行を質人とし、其上神文を送りけり。然る間隆信、同廿八日、山下の圍を解かれ、陣を高良山へ移さる。

蒲池鑑廣龍造寺に降參

隆信歸陣の事

旣に隆信、山下の蒲池を從へられ、高良山に陣を居ゑられしに、秋月長門守種實・筑紫上野介廣門、見參の爲め高良山へ參向せらる。隆信對面あり、前後の軍事其外稍々物語あつて、兩將をぞ歸されける。斯くて此度、龍造寺に屬する面々には、筑後國に蒲池式部大輔鎭並・同名志摩守鑑廣・子息式部大輔鎭運・(兵庫頭家恒と改む。) 田尻中務大輔鑑種・同名山城入道宗達・西牟田左近大夫鎭豐・安武式部大輔家敎・鐘ケ江長門守家續・草野中務大輔鑑員・黑木兵庫入道宗榮・問注所治部大輔鑑景・豐饒美作守鎭連・戶原薩摩入道紹貞・三原左馬入道紹心・高良山の祝部鏡山安實・同山の座主鎭興・麟圭・良寬以下、此外落失せ跡を暗ます輩には記すに及ばず。又肥後國には城越前守親賢・(親冬の子。) 合志常陸介親爲・小代前伊勢入道不二軒宗禪・子息伊勢守親傳・(前名左近將監。) 隈部但馬守親永・子息式部大輔親泰・甲斐民部入道宗運・子息相模守親秀・赤星肥後守統家・大津山河內守・永野紀伊守・宇同・鹿子木以下なり。斯くて隆信、旣に筑後一國(十郡。) 肥後半國を切從へ、同名上總介家晴・同肥後守信時を肥後の高瀨に、土肥出雲守家實を小代の城に差籠めて、大友・島津方の輩を押へ、鍋島信生を筑後の酒見の城に置いて當國を守ら

せられ、其身は十二月三日、高良山の陣を拂つて佐嘉龍造寺の城へ歸陣ありけり。

邊春親運龍造寺へ降參の事

邊春親運隆信に降參

今年の冬、肥後國邊春常陸守親運、龍造寺に至つて逆心之あるに依りて、隆信より是を誅伐有るべき由、筑後の蒲池鎭竝・田尻鑑種、肥後の小代宗禪・大津山河内守の許へ下知せられ、肥前より後藤伯耆守家信・内田肥後守兼能入道榮筋發向にて、各〻邊春へ取懸け切岸に於て防戰す。中にも大津山衆進み戰ひ、其手の人數宗徒の者共、手負死人若干なり。又小代入道は大手の口より取懸けて大に打戰ふ。城主邊春親運、當時は差恊へ防ぎ戰ひしか共、寄手の蜚餘りに稠しく攻詰めしに依りて、城内難儀至極し、終に親運叶ひ難く龍造寺に到つて、懇望の上、降參一著して、寄手歸陣しけり。

神代長良養子の事

龍造寺隆信既に筑後・肥後を征伐せられ武威を耀し、十二月初旬、佐嘉城へ歸陣あ

神代長良犬法師丸を養子とす

り。是れ偏に一族鍋島信生の武功に由る所とぞ聞えし。然るに今年の冬、肥前國山內の領主神代刑部大輔長良の方より、老臣三瀬大藏を佐嘉へ遣し、隆信へ申されけるは、長良に家を繼ぐべき男子之なく候の間、御一族の中より養子を致し、娘に娶せ家を讓りたく候。但し存ずる仔細の候間、御名字の中よりは叶ひ難く候。鍋島飛驒守殿に子息餘多候はゞ、其内を給はりたしとの使なり。信生頻に辭し申されけれども、深々の所望なりしかば、隆信、詞を加へられ、信生には此時未だ男子之なき故、舍弟小川武藏守信貫(後に信俊)の三男犬法師丸が七歲になりしを、山內へ送られけり。時に鍋島より侍八人相附けらる。武藤善兵衞・田中善右衞門・石井孫兵衞・太田源助・馬郡孫右衞門・木下小兵衞・久納八助・矢作小右衞門。斯くて犬法師丸、山內へ赴き長良の息女に嫁し、神代の家督を繼いで、中頃神代喜平次と號し、後に大炊助家良と改めけり。

北肥戰誌 卷之廿四 終

北肥戰誌　卷之廿五

龍造寺隆信中國へ通用の事

隆信上洛を遂げむと欲し先づ毛利輝元に使を遣す

既に隆信、國中はいふに及ばず近國を從へられ、如何にもして近年上洛を遂げ上帝に朝し奉らむと、心に深く思はれしかば、家臣三浦入道可鷗・土肥出雲守信安・（前名家實）田原伊勢守尙朗・水上坊仁秀・（背振山の僧。）西岳坊賢也（江上太郎兵衞出家。與賀社僧。）を代る〳〵使節とし、先づ中國の毛利三位右馬頭輝元をぞ頼まれける。然るに隆信、去年（天正七年。）十二月三日、筑後より歸陣あり。今年天正八年庚辰正月元日、年始の儀式美々しくして、門前偏に市をなす。筑前・筑後・肥後の侍、或は自ら來りて初春の禮を遂ぐるもあり。或は名代を差遣すもありけり。同三月朔日、副島長門守光家・空閑三河入道可清・小田常陸介增光に、隆信領知を加附せらる。此輩、頃日筑前の敵を押へて、其境を警衞

し大功あるに依りてなり。

筑前國の內

一、原村　百三十町　一、片江村　三十町　一、本名村　五十町

合貳百十町　副島長門守へ

一、入部村　二十町　一、戸栗村　六十町　一、郡村　二十町

一、野介村　四十町　一、有田村　二十町　一、大隈村　五十五町

合貳百十五町　空閑三河入道へ

一、殘る闕所　小田常陸介へ

右三人の者、曲淵河內守に事々を談合し、彌ゝ彼の境を警衞し、飯盛の城にあり（此飯盛の城は、曲淵の居城飯場より乾の方なり。）兩城筑前の內なり。

蒲池鎭竝龍造寺に對し籠城の事

爰に簗河の城主蒲池彈正少弼鎭竝（前名民部大輔。）は、此二三箇年、隆信一味を以て肥後・筑後

蒲池鎭竝龍造寺に對し籠城の原因

の案内し、所々の合戰に功を立て、隨分二心なく見えける處に、去冬より礑と隆信に至つて害心を挾みけり。其仔細を尋ぬるに、去年の冬、肥後の邊春親運が籠城の時、龍造寺より是を攻められしに、彼の鎭竝も其討手の人數にて、數日邊春に在陣しけり。然るに鎭竝、其陣中に折々己が在所築河へ通ひしを、諸人の取沙汰宜しからず。或はいふ、武士は其家を出づる時に妻子を忘ると。或はいふ、其敵に逢ふ時は身命を忘ると、此人口を鎭竝何となく耳に觸れ、是は何樣佐嘉の批判よと狐疑を起しけり。次には又鎭竝と山下の蒲池鑑廣は、甚だ近き親類なり。然れども兼ねて其會釋快からず。此鑑廣と隆信、去年霜月和平せられ、味方に引付けられしを、鎭竝大に曲なく思ひけり。右彼是を以て、竟に鎭竝、龍造寺に至つて野心を發し、次第に不和になりけり。然るに田尻鑑種は、鎭竝が伯父なり。是は隆信へ二なく志ある者なりしかば、鎭竝が色を早見取り、勝屋宗機といふ中國大内家の浪人を使にて、鎭竝が異心を、隆信の方へ竊かに內通す。斯かりし間、隆信さらば彼の鎭竝を誅伐あるべしと思立たれ、密々田尻と內談せらる。田尻は甥の事なれども、鎭竝が行跡を兼ね

て納得せず、疎ましき者に思ひしかば、隆信と同心し、件の勝屋宗機を以て、數度佐嘉へいひ通じ、隆信父子・鍋島信生に對し、書札神文を取替はし、鎭竝を誅伐すべしと密談しけり。此宗機が弟は勝屋伊豆守と號す。中國大內殿沒後、兄弟ともに浪人となり、伊豆守は、龍造寺を頼み佐嘉へ來つて奉公す。勝一軒とも兄弟となり、其由緣に依りて、彼の宗機、今度密事の使を勤めけるが、此時、隆信より田尻への狀にいはく、（但し去冬の狀なり。神文あり。之を略す。）

以宗機申旨候。被聞召、御存分之趣預御返事可得其意候。委曲口上申候。恐惶謹言。

十二月五日　隆信判

鑑種参

御申給へ

一、隆信、田尻と內談あり。蒲池鎭竝誅伐の事、去冬十二月初旬より始まつて、同九日彌相談の上、田尻へ新恩の地千町（筑後國の內、村付之あり。）其外に田尻所望の在所津留村・濱

蒲池鎭竝は下筑後一番の大名

田村百三十町宛行ふべき由、隆信約束せられ、子息鎭賢と連判を以て、重ね〳〵神文を差送られ、今年正月に及び、猶其内談密々にあり。彼の蒲池鎭竝は、關東下野國宇都宮彌三郎が末流大木・大塚等と一族にして、下筑後の內一萬二千町を知行し、國中の城持廿四人の旗頭なり。國一番の大名といひ、其上九州無雙の要害簗河に在城しければ、隆信も是を退治の事、大事に思はれしに依りて、樣々に田尻をぞ語られける。

一今年、隆信、嫡子民部大輔鎭賢に家をゆづられ、その身は須古の城に隱居せらる。

一、蒲池鎭竝、龍造寺に對し彌〻逆意を挾み、今年二月十日より居城簗河に楯籠る。之に依つて此段早速、田尻鑑種が許より勝屋宗機を以て、隆信へ注進しけり。時に隆信より田尻への狀にいはく、

宗機齋被仰付候御口上之趣令承知候。我等意茂、彼方江入魂候。尋被聞召御納得肝要候。恐々謹言。

二月十一日　　　　　　　　　　　　隆信判

鑑種
御返
御申給へ

追而棚町之儀御知行不レ可レ有ニ相違一之由、爲ニ御心得一候。

龍造寺鎭賢簗川城を攻む

一、蒲池鎭並籠城の事、鍋島信生の酒見の居館より佐嘉へ注進あり。隆信は其頃須古の城にありて、さらば早速討手を差向くべしと下知せられ、嫡子民部大輔鎭賢を大將にて、一萬三千の人數を簗河へ向けられけり。先手は手寄にて内田美作守兼能なり。鍋島信生は、三潴の郡士を司つて酒見より來られ、田尻鑑種は、三池山門の家人等を催して、鷹尾の城より馳せ向ふ。其外國衆には、山下の蒲池志摩守鑑廣・西牟田の西牟田播磨守鎭豊以下參陣し、又肥前衆には龍造寺上總介家晴・安住安藝守家能・横岳兵庫頭家實・同名下野守賴續等、彼此段々に備を立て、二月十三日より簗河の城を取圍む。後には所々の軍兵追々に重つて、寄手の總勢凡そ二萬餘騎になりけり。斯くて諸手の鬨、その口々を差詰めて大に攻め戰ひ、不

日に打破らむとしけれども。城兵強く防いで事ともせず。斯かりし程に寄手の輩、評議を極め急に是を攻めずして、おの〳〵陣を取り固め、城を圍んで時日を累ぬ。

或はいふ、龍造寺の軍兵簗河を攻めし事は、三月十三日よりと。又同十八日よりとも。

一、ある日鍋島信生の手より城を攻む。時に松田權助進んで戰ひけるを、城兵に荒卷和泉守といふ者是を見て、天晴剛の者かな。いで〳〵勝負を決せむと、河向の櫓より飛んで下り、白帷子を二つ著、鎧は著ずして唯一人河を游ぎ越し、鍋島の陣へ相進み、松田に聲を懸け馳せ寄る。權助打見て、心得たりと無手と組む。和泉守は大の男の大力にて莚すともせず、權助を引寄せ押伏せて、首を搔かむとしけるに、川を游ぎし時、帷子の袖濡れて刀の柄にまき付きけるを、振りほどかむとしける間に、權助組打に馴れたる者なりしかば、下より二刀三刀續けざまに刺透す。さ刺れて疼む處を刎返し、和泉守を討取りけり。此外數日の合戰に、分

捕高名樣々なり。其中に江副兵部左衞門は、鎭並の長臣中山筑前守を討取り、辻小左衞門は城堀二重を越えて、敵二人を討取りぬ。此時江副が證人は園田主計允、辻が證人は久納市右衞門・長淵壹岐守・相良右衞門助此三人なり。皆鍋島の攻口にて相働く。

或はいふ、中山筑前守は天正十一年、蒲池益種の居城蒲船津落去の時、杉町藤右衞門討取るとも。不審。但し後に又同名の者之あり候。

龍造寺鎭賢肥後國へ出馬の事

一、同三月下旬、天正八年。龍造寺鎭賢、簗河の城を圍まれながら、肥後國の輩の未だ隨はざるを征伐すべしと、諸軍へ談合せらる。然る間、鍋島信生衆議を加へて、彌〻參陣の日限は、來る四月九日たるべしと決定あり。此時、信生へ田尻鑑種が許より音通しけるに、信生の狀にいはく、

如レ仰近日無音心外候。幾日不通候共御同前所レ仰候。仍鎧一領被レ懸二御意一候。御

丁寧之至畏入候。然者參陣之儀、從₂來月九（日脱カ）₁可ㇾ爲₂出張₁候。此節別而御馳走可₂目出度₁之由被ㇾ申候。隨而下小河之儀度々預₂御口能₁候條、至₂鎭賢₁申聞候處、分別被ㇾ申候。聢可ㇾ有₂御知行₁之由候。尤珍重猶重々可ㇾ得₂御意₁候。恐惶謹言。
追而鯛二掛被ㇾ懸₂御意₁候。種々御懇志候。將又北之關竹之江あたり勢道可ㇾ被ㇾ作之事肝要に候。

二月廿七日　鍋飛守
信昌判

鑑種
方
御返給へ

鍋島信生實名、此時迄は信昌なり、天正十年に、鎭賢、政家と號せられし故、昌の字を替へて信生と改む。

龍造寺鎭賢肥後國に出陣

一、龍造寺鎭賢、彌〻肥後國を征伐あるべしと、簗河をば多勢を以て押へ置かれ、四月九日、筑後の陣を發して、瀬高通りに竹の江北の關を過ぎ、肥後へ討入らる。先

陣は鍋島信生、二陣は龍造寺安房守信周・同子息次右衞門信純・同名越前守家就・同備後守鎭家を初め、高木左馬大輔盛房・內田美作入道卜菴・倉町左衞門大夫信俊・馬場肥前守鑑周・同名中務大輔鎭周・出雲藤右衞門信忠・姉河中務大輔信安・横岳兵庫頭家實・同名下野守賴續・藤崎筑前守盛能・重松中務大輔賴幸・本告左馬允信景・大塚三郎右衞門家廣・鹿江・堀江・鴨打・德島・安住・江副・馬渡・石井・福以下、三陣・四陣と段々に打續けたり。其外江上左馬頭家種・後藤伯耆守家信・龍造寺和泉守長信、并に神代長良の陣代同名彈正忠、松浦衆には松浦丹後守盛の陣代・山代虎王丸の陣代・平戶肥前守鎭信の陣代、藤津衆には鍋島豐前守信房を先とし、犬塚播磨守盛家・德島筑後守信盛・上瀧志摩守盛員・原・吉田・永田・辻・久間・嬉野の一族、彼杵衆には大村丹後守純忠の陣代同名左兵衞佐・同左近大夫・同右衞門大夫・同又八郎を初め、西鄕刑部大輔・同名右衞門大夫・宇良上野介・伊戶・岐多良・森山・遠岳の者共、高來衆には有馬左衞門佐鎭貴の陣代兩人、其外島原式部大輔純豐・神代兵部大輔貴茂・安富下野守純泰・安德上野介純俊以下、或は陸より討つもあり。或は平戶・大

村・鹽田・岳崎・高來等の津々浦々より兵船を出すもあり。其手寄に隨つて皆出勢し、船は順風に帆を揚げ肥後に到つて、高瀨・大島・猫宮・黒崎に著船し、陸の軍勢は悉く筑後を歷て肥後へ討つて入る。此外筑後の國人は、蒲池兵庫頭家恒・（志摩守鑑廣の子。）田尻中務大輔鑑種・草野中務大輔鑑員・黒木伯耆守家永・西牟田播磨守鎭豐・河崎出羽守鎭堯・三池河内守鎭實・安武式部大輔家敎・高良山の座主麟圭・同良寛・同祝部安實を初め、或は簗河の城を押へ、或は肥後へ參陣して、龍造寺の下知を守るもあり。爰に於て隆信の武威、已に巳の時とぞ見えし。斯くて鎭賢、同月十日、肥後國大津山へ著陣せらる。今日筑紫上野介廣門の名代同名新介晴門來り加はり、都合著到五萬餘騎なり。同十一日、山鹿へ著陣あり。今日國侍に筒岳の城主小代伊勢守親傳・（宗禪の事。）隈部の城主隈部但馬守親永・關山の城士大津山河内守・邊春の城主邊春常陸守親運各〻參陣す。

赤星親隆落城の事

龍造寺鎮賢隈部城を攻めしむ

同十三日、龍造寺鎮賢、山鹿に陣を居ゑらる。赤星刑部大輔親隆が、頃日隈部但馬守が城にあつて、龍造寺に隨はざるを攻むべしと議せられ。玆に因つて同日鍋島信生、軍士二萬を引分けて隈部の城へ取懸けられしに、親隆も元より用意して、町小路の詰々を差固め、火を散らして防戰す。されども鍋島頻に進んで、一方の外郭を打崩し、敵を切らるゝ事三百餘人なり。時に親隆防ぎ難くや思ひけむ。妻子を携へ詰の城へ取籠る。信生彌〻是を攻めて其陣を退かず。

一、同日、御船の城主甲斐民部入道宗運・合志の城主合志常陸介親爲・隈本の城主城越前守親賢・親冬の子。八代の城主赤星肥後統家・玖珊の城主相良修理大夫義陽、其外阿蘇大宮司惟種・志岐豊前守鎮經以下の國人等、鎮賢の山鹿の陣所へ、或は船より來りて聘禮し、或は陸より參陣しけり。天正八年三月十五日

一、同廿一日、赤星親隆、鍋島信生に攻められ、竟に怺へず本丸に火を懸け、其煙に紛れて己は合志の山中に落ち隱る。斯かりし程に、城中の女童、煙に咽び度に迷ひて、湟溝に飛入り命を失ふもあり。又岩窟に行き丁つて疵を蒙るもあり。目も

當てられぬ有様なり。斯くて鍋島信生、當城を攻め取られしに、隈部但馬守より此城は己が舊城の由にて、深く所望申すに依りて、則ち是を給はりけり。信生、夫より內久我鎭房或は鑑茂。を攻めむと議せられしかども、同廿二日、內久我城を開いて降參す。斯くて信生、隈府・八代等へ馬を進められしに、所々無事の和に從ひしかば、先づ歸陣すべしと、鎭賢此時の陣所南の關まで馬を返さる。

ある說にいふ、赤星刑部大輔親隆、龍造寺に攻められ、今月廿一日、下村生運へ人質を渡して下城すとも。此段未だ詳ならず。去年赤星肥後守統家、下村へ質人を渡したるを誤るか。

右赤星刑部大輔親隆、或は備中守とも。後に四國の阿波へ浪人す。太閤秀吉公の時召出され、無禄に依りて又浪人す。

ある說にいふ、當城を一孤の城と名づけ、城主は赤星入道道繁とも。

一、今度龍造寺鎭賢・鍋島信生肥後在陣の中、當國の輩麾かざるに屬從ひ、語らざるに來伏して、國中程なく平均しければ、高瀨・山鹿・南ノ關へ宗徒の一族を殘し置き、

其境を守らせられ、龍造寺の諸勢、皆筑後に歸陣す。

ある記にいふ、鎭賢、此時肥後に於て島津と對陣あり。竟に和平の上、肥後半國宛分地に約束あつて、筑後まで歸陣せられしとも。非なり。其事は天正十一年癸未十月なり。末に委しく記す。

或はいふ、隆信、此時三萬餘騎を引率し、肥後へ出馬ありしと。非なり。

一、今度鎭賢、肥後參陣の後、佐嘉の城へは、隆信、須古より移られ、其留守を守られけり。高木太榮入道・犬塚宗珍入道・木塚尾張守・前田伊豫守・井元上野介以下宿直申す。又隆信、筑前の事心元なく思はれしかば、秋月種實・筑紫廣門へ下知せられ其口々を押へられけり。

筑前國荒平城軍の事

去年天正七年の秋、大友より筑前國に差置きたる大津留入道宗周・宗秀とも。小田部入道紹叱、脇山に於て執行越前守が爲に討たれたる由。府内に聞え、宗麟父子大に悔ま

龍造寺隆信筑前に出陣

れ、さらば彼の表へ人數を差加へ、戸次・高橋へ力を付けて、龍造寺方の者共、一々誅伐すべしと、今年天正八年の夏、臼杵新介鎮富・小佐井大和守鑑直に軍兵を副へて筑前へ差遣す。兩人則ち府内を立つて筑前に赴き、先づ戸次入道道雪・高橋入道紹雲に參會し、談合を以て大津留宗周がありつる荒平城に修理を加へ、臼杵・小佐井兩人ともに此城に入りて、龍造寺方の内野・飯場・飯盛等の城々を攻めむとぞ用意しける。茲に因つて彼の城中の輩より、其段佐嘉へ注進す。然る間隆信、さらば自身馬を出し、彼の敵を追落さむと、筑紫・秋月・原田・波多・草野が方へ、回狀を以て、急ぎ荒平表へ出陣あるべき由觸送られ、其身は天正八年五月下旬、佐嘉の城を打出でらる。先手は小河武藏守信貫・納富能登守家理にて、三瀨峠を打越え、神代長良・曲淵房資に參會あり。此兩人を案内者とし、筑前の内本名村に著陣あり。舍弟安房守信周は、下松浦・杵島兩郡の士卒を引率し、隆信より先立ち筑前へ討入り、早良郡に陣を取る。其兄和泉守長信と龍造寺下總守康房は、多久の城より出で上松浦を打通り、波多三河守親・草野中務大輔鎮永に會し、彼の勢を一つに合せ、怡土・志摩の間に出で、原田

荒平城の合戰

五郎信種と一所に陣を取る。江上左馬頭家種は、三根・神崎の軍士を司つて、北山を越え内野の要害に馳せ加はる。鍋島信生は、筑後の軍兵引具して、築河の陣所より直に筑前に到つて、岩門に著陣あり。爰に於て、秋月長門守種實、鍋島の陣へ來りて一つになる。龍造寺の從兵彼此四萬三千なり。斯くて隆信、先づ筑紫・秋月と評定せられ、戸次・高橋が居城岩屋・寶滿、立花と荒平との通路を取切り、士卒二萬を引分け、龍造寺安房守を軍大將とし、小河武藏守・納富能登守兩人を以て、荒平城を攻めさせらる。當城の警衛臼杵新介・小佐井大和守は聞ゆる勇士にて、士卒を下知し命を此城に縮め、命を萬天に揚げよと訇つて、上より懸り山の崩るゝが如く、小河・納富の兩勢を、坂より下へ捲り落す。此荒平といふは、東西南北ともに嶮岨なる事屛風に等しく、石垣雲に聳え、矢倉・掻楯間なく構へて、弓・鐵炮を烈しく打懸け、萬卒を勵し思ふまゝに防ぎし間、寄手二萬餘騎、重ねて攻め登るべき行もなく、手負を助け徒に城を見上げて控へたり。隆信、城を遠見あり、小河・納富に下知せられ、先づ軍兵を引揚げられ、遠攻にこそせられけれ。

一、六月下旬。小河・納富が陣所へ、執行越前守來りて、三人閑所に集り竊かに談合しけるは、是程の小城を、二萬に餘る軍勢にて攻めあぐみ、斯樣に月日を送る事、世上の嘲・傍輩の沙汰、是に過ぎたる瑕瑾あらじ。よしや大將の下知はなくとも、我々が手の者にて、一攻攻めて見るべし。叶はずば討死すべし。人には知らすまじ。努々他の人數を加ふべからずと內談を極め、執行は陣屋に歸りぬ。斯くて七月七日、小河・納富・執行三人の輩、談合の如く手の者與力を相催し、密に陣屋を打立つて自身眞先に進み、さしも嶮しき荒平の坂を、唯〻一息に攻登り、大城戶に混と付いて城中へ乘入むとす。城兵共不意の事なりしかば、城戶を破られじと周章て、矢石を飛ばせ鐵炮を烈しく打懸く。されども三人の輩、事ともせず甲を傾け、竟に大城戶を打破り、城中に攻め入りて相戰ふ。此時、三人の士卒に討死・手負數を知らず。中にも執行が從兵の中西刑部允・同新介・光安刑部丞・同彥四郎討死しけり。納富能登守も進んで疵を蒙る。時に龍造寺の總勢、すはや味方拔駈するぞ。續けやと我れ先を爭ひ一同に攻め登る。其內に空閑三河入道可清進んで

城中に入り、敵の大將小佐井大和守を生捕りけり。其外副島長門守・神代彈正忠・曲淵河內守以下、小河・納富・執行と同じく、皆城中に乘入りて散々に相戰ひ、あそこ爰に火を懸けしかば、城兵煙に咽びて防ぎ得ず、一方の大將臼杵新介、鍋島信生を賴み和を乞ひけり。斯かりし程に信生、是を調達あり。則ち和平に一著して、敵味方軍を止め、新介、卽日に當城を去り渡し、殘黨悉く平治しければ、頓て荒平或は安樂平と。には、龍造寺より番人を差籠められけり。

ある記にいふ、此時當城落去しけるに、隆信則ち入替はられしとも。

ある記にいふ、此時隆信出馬の留守には、鎭賢梁河より佐嘉へ歸られ在城あり。

鍋島駿河入道後見たりとも。

此荒平城攻に、江上家人光安刑部丞父子討死しけるを、執行越前守、之を憐み日來の契約に任せ、彼の者父子の死骸を舁かせて、本國城原へ送り、執行一家の墓所竹原といふ所に葬りけり。此光安、無雙の剛の者故、越前守兼ねて懇志を加へしとなり。

戸次道雪龍造寺へ和平の事

斯くて隆信、荒平城を攻め落され、夫より戸次道雪がありける糟屋郡立花の城を攻めむと議せらる。然る處に、筑紫上野介廣門、雙方に入りて和與を談合しければ、則ち其議一著し、筑前國十五郡を二つに分け、東北六郡を大友領とし、西南九郡を龍造寺領と相定む。

戸次道雪龍造寺と和平

或はいふ、此時國分の事、立花・岩屋・寶滿等、大友方の城付を除きて、其外は一圓に隆信支配たるべしと約束すとも。

一、頃は七月半なりけるに、隆信、生（いき）の松原へ逍遙あり。終日の酒宴なり。秋の風冷（すゞ）しくして、所の景色詞に絶えたり。斯かる處に、高祖の城主原田越前入道了榮、孫子の五郎信種を具し、鏡の草野中務大輔鎭永と同道にて、酒肴など持たせ參候ありしかば、隆信悅（よろこび）淺からず、鍋島信生の會釋にて、大に入興ありけり。

一、隆信、立花の城へ使節を以て、戸次道雪の許へ書を送らる。其返書にいはく、

尊書致頂戴候。仍近日到博多可被成御出陣之由、存其旨候。御通道之儀毎事不可存緩〔忘脱カ〕候。随而涎香貳百斤、并段物壹端諸色拜領忝候。此等之趣宜預御取成候。恐惶謹言。

七月十九日　戸次入道道雪判

龍造寺六御黨中

一、隆信、夫より豐前國征伐として五萬餘騎を引率し、舍弟安房守信周を監軍にて、先づ博多まで打出でらる。此時、戸次道雪より家人麻生主水助を使にて、太刀・馬・酒肴を隆信の旅陣へ差贈る。折節隆信、饗膳の半ばなりけるに、彼の使者主水を召出し、對面の上にて道雪へ一禮を述べられ、扨音物の酒を、飯椀を以て三盃酌まれ、今度和平の印に、此盃を道雪にさすぞと、主水が前に投げられけり。主水は、隆信の異風を見て膽を潰しけれども、さあらぬ體にて、畏まり彼の盃を請取り、色代して退出しけり。

一、隆信自身は博多に陣を居ゑられ、豐前國へは、舍弟安房守信周に軍兵を副へて

差向けらる。斯くて秋月種實の弟高橋九郎元種、己が豐前國馬が岳の城へ、信周を引入れしかば、當國の城持城井常陸介鎭房・長野三郎左衞門鎭辰以下、規矩・田河・仲津等の郡士、敢て一戰にも及ばず、龍造寺に皆相從ふ。信周、戰はずして豐前國を治め、暫く在國あり政務を司り、先づ筑前まで歸陣しけり。然るに隆信、今度の參陣に、筑前の內九郡・豐前の內三郡を切從へ、大に威を振はれ、小田常陸介增光・空閑三河入道可清・副島長閑入道放牛・龍造寺隱岐守家久・倉町左衞門大夫信俊・執行越前守種兼・神代彈正忠を以て、內野・荒平・柑子・飯盛・鳥飼等の諸城へ差籠められ、石田右馬助信能を代官として、博多に居ゑ置かれ、頓て佐嘉へ歸陣ありけり。時に鍋島信生は、蒲池鎭竝を攻めらるゝ最中に付いて、又築河へ赴かれけり。

ある記にいふ、隆信、此時豐前國へも五萬餘騎を以て討入りしと。非なり。筑後・肥後の事、猶用心あつて豐前へは竟に參陣あらず。

今年九月廿二日、荒平にての生捕小佐井大和守を、空閑入道に下知せられ、豐

後へ送り歸されけり。

ある記には、此時、小佐井は誅せられしとあり。非なり。

ある記にいふ、臼杵新介は、元より筑前に來り居て、近年は柑子岳の城に住せしとも。

一、筑前國箱崎八幡の社務を、隆信の命に依りて、肥前加瀨の住僧增誾之を勤む。

蒲池鎭竝龍造寺と和平の事

簗河の蒲池彈正少弼鎭竝、今年二月十日より龍造寺に對して、逆意をなし籠城する事、既に三百餘日に及び合戰止む事なかりけり。然る處に、田尻鑑種、樣々謀略を以て宥め賺しける程に、十一月廿八日、終に隆信へ和を乞ひ、鎭賢の陣へ來りて聘禮す。斯かりし間、則ち其圍を解かれ、其上鎭竝を龍造寺の壻に約束ありけり。

鎭竝を壻に約束の事、舊記の如し。されども鎭竝に男女の子二人あり。妻女は肥後の赤星が娘となり。此段詳ならず。

ある記にいふ、鎭茲、數百日の籠城に矢盡き戈折れしに依りて、龍造寺に降參すと。非なり。佐嘉より鎭賢參陣あつて、數箇度攻められしかども、要害堅固にして城陷らず。仍りて田尻へ内談せられて。和平になりしとなり。

北肥戰誌卷之廿五終

北肥戰誌 巻之廿六

蒲池鎮竝誅伐の事

天正九年辛巳、龍造寺民部大輔鎮賢、名を改められ久家と號せらる。

一、簗河の蒲池彈正少弼鎮竝、去年龍造寺に對し野心を挾み、籠城に及びしかども、田尻丹後守鑑種（前名中務大輔。）が内畧に依りて、舊冬十一月廿八日和平しけるに、頓て復心を翻し、薩州の島津へ一味すべき旨いひ送り、其儀に一著す。仍りて同十二月十八日、島津の老臣伊集院右衛門大夫が狀にいはく、

不レ圖對二御當家一可レ爲二御幕下一之旨、連々任二御懇望之辻（赴カ）一、今度致二一著一既被レ差二出質人一、此等之儀以二使節一被二仰通一候段、尤感心之由被二思召一儀候。於二向後一毛頭不レ可レ有二疎意一之通誓紙被レ顯二心底一候事、御面目之至候歟。永代可レ被レ抽二忠貞一事無二

申及候。於私弟飜法印又々申達候。爲御納得候。恐々謹言。

二月十八日　　伊集院
右衞門大夫忠棟判

蒲池十郎殿

十郎とは鎭竝初の假名なり。

一、斯くて鎭竝、再び龍造寺を背き、島津に隨ひしこと、深く隱密しければ、人更に知らざりけり。然る處に、今年天正九年の夏、鎭竝彌龍造寺へ害心あり。同國の西牟田播磨守鎭豐へ使者を送り、密かに右伊集院が狀を見せて、鎭豐も鎭竝と同じく、龍造寺と手切し、島津へ一味あるべき由をぞ申し勸めける。されども西牟田は、無二の龍造寺方なりしかば、敢て蒲池に同意せず。右の次第家人向井左京亮を以て、一々隆信へ申し送り、剩へ鎭竝より見せに遣しける彼の伊集院が書札を押へ置き、龍造寺へ差遣しけり。隆信は須古の城に坐し、此事を聞かれ、さらば鎭竝を誅伐すべしと思はれける處に、兼ねて筑後へ附置かれたる横目田原伊

隆信蒲池鎮竝を佐嘉に招きて討たむとす

勢守が方よりも、鎮竝、又々逆意の由注進せしかば、彌〻事急に決定しけり。然れども隆信、去年の如く簗河へ取懸けては、又々手間を取るべし。何とぞ計畧を以て、鎮竝を佐嘉に招寄せ、易々と討取るべしと思はれしかば、五月廿日餘に、田原伊勢守・秀島源兵衞を兩使にて簗河へ差遣し、鎮竝へ申されけるは、去年の冬和平ありし後、未だ其禮を受けず。彼此の爲め、近日佐嘉へ來越あるべし。然るに於ては須古の新館にて、猿樂を興行申すべし。其許よりも猿樂の役者共を召具せらるべしと申送られけり。

ある記にいふ、右隆信よりの使節秀島源兵衞を、西岡美濃守とも。此秀島、初は西岡が養子なる故、之を誤るか。

ある記にいふ、田原伊勢守を木原伊勢守とも。

旣に件の兩使、簗河の城に到りて、右の次第を申し達しけるに、鎮竝病氣と稱して返答せず。田原は心賢き者にて、斯くては叶ふべからずと思ひ、鎮竝の母儀と同じく伯父の左馬大夫鎮久へ申しけるは、隆信父子の心底、聊か別心候はず。則

ち神明の照覽に候間、起請文を以て申すの由、様々忻り賺し、一紙の神文を出しける程に、母儀も左馬大夫も是を信用し、鎭竝を色々教訓ありしかば、鎭竝も今は承引し、さらば罷越すべしとて、既に其用意しけり。扨鎭竝の母儀、田原と秀島へ對面あり。此度佐嘉の首尾、彌〻然るべき様に賴み申すの由にて、兩人へ黃金一枚づつ得させられけり。斯くて鎭竝、五月廿五日伯父左馬大夫を初め、親類家人等、彼此主從二百餘人、樂役ともに三百餘、簗河の城を打立ちけり。

蒲池佐嘉に行く

或はいふ、此時鎭竝上下七百餘人とも。

爰に鎭竝の一族に、大木兵部少輔統光といふ者あり。今度鎭竝、肥前へ赴くの由傳へ聞き、急ぎ半途に出合ひ、鎭竝に向ひて、御邊はそも物に狂ひ給ふか。當時弓箭の最中なり。然るに、うか〳〵と他所へ赴き給ふ事、偏に石を懷いて淵に臨むに異ならず。平に留まり給へと制しけれども、鎭竝、更に領掌なく、早斯様に出立ちし上は、阿容々々と引返さむも見苦し。其上天運全からば、縱令劒戟刀杖の中なりとも、豈恐るゝに足らむやといひ〳〵、馬を早めて寺井江を打渡り、肥前

龍造寺久家蒲池に對面

に入りて、同日の夕方鎭並上下三百餘人、龍造寺の城下佐嘉に著す。先づ田原・秀島を以て、龍造寺久家（前名鎭賢。）に案内を啓し、城中に到りて去冬和平の一禮を述ぶ。久家則ち鎭並へ對面せられ、饗膳美を盡して奔走あり。其夜は終夜の酒宴にて、鍋島信生同席なり。斯くて鎭並、龍造寺の城を退出し、城北の本行寺に宿を取り、明廿六日逗留す。此時、隆信は須古に坐し、土肥出雲守信安を使節として、廿六日の夕方鎭並へ酒肴を贈られけり。鎭並悦び隆信へ禮謝あり。則ち彼の酒肴を披き、出雲守をぞ饗しける。扨其翌くる廿七日には、未だ未明に、鎭並本行寺を打立ち、主從三百餘人、隆信へ一禮の爲め須古をさして急ぎしに、與賀の馬場を通りける時、龍造寺の伏兵小河武藏守信貫・德島甲斐守長房・水町彌太右衛門・秀島源兵衛・石井の一族、其外大勢、四方より一同に噇と起つて鬨の聲を發す。時に鎭並、馬を控へて齒噛をなし、跡に打ちける伯父左馬大夫に向ひ、口惜しき次第かな。我れ築河にて思慮せしは爰にてあり。極運とはいひながら偏に御邊の勸に依りて、今此計策に陷されぬと、大に怒りて申しけるを、左馬大夫聞いて、赤面の色

に打見え、早此期に及び返答をするに言なし。我等に二心あらざる事、唯今見給ふべしといひ捨てゝ、與賀大明神の花表の前に馬を驅け居ゑ、蓬き龍造寺が仕業かな。己れ七生が間は恨むべきぞと訇つて、矢二筋三筋放ちて後、家の上に驅登り、差取引詰〔詰カ〕め散々に射る。時に鍋島信生の使として、江副兵部左衞門馳せ來り、一通の書を左馬大夫へ見せけり。鎭久は、屋の上にありて敵を射けるが、彼の信生の狀を披いて見、暫く詞を出さず。兵部左衞門待つこと久しくて返事如何と問ふ。鎭久聞いて、件の狀を寸々に引裂き捨て、返事は是ぞと礑と射る。江副、此矢を膝節に請留め、少しも疼まず二の矢を待つて居たり。されども左馬大夫、夫より江副に目を懸けず、屋の上より飛下り火を出して相戰ひ、堤左馬允に渡り合ひ、終に討死しけり。斯くて佐嘉勢には、彌永佐介眞前に進み、其外相良右衞門佐・永淵壹岐守・辻小左衞門・大塚勝右衞門・中島將監・澁谷善右衞門・中島次兵衞・秀島隼人・水町彌太右衞門・石井三河守・同四郎兵衞・同四郎左衞門・同次郎右衞門以下、我れ先にと懸つて相戰ひ、中にも石井次郎右衞門は、敵の首五つ取り、自身も疵を

蒙る。辻小左衛門も敵二人討つて首を取る。又中島次兵衛・秀島隼人も分捕す。此外龍造寺の者共、汗水になりて打戰ひ、疵を蒙り討死する者數を知らず。其中に石井四郎左衛門は、鎭竝の小性大木忠五郎と駈合はせたり。時に忠五郎、鎧透を以て手裏劒を打ちしに、四郎左衛門が左の股を打貫きけり。されども石井、其短刀を拔き捨て忠五郎をぞ討取りける。此四郎左衛門、彼の疵にて後まで左の足叶はずとなり。爰に又島内新左衛門・同弟左近允は、槍を持つて一番に堀を越え、簗河勢と突合ひしが、新左衛門太腹をつき貫かる。されども貫かれながら、其槍をたぐりて竟に當の敵を討取り、其場にて死にけり。弟左近も兄に續いて討死す。斯くて合戰時を移し、血は淙々と川をなし、骸は堀を埋めたり。されば簗河の上下三百餘人、とても遁れぬ軍よと思ひ切りしかば、命を惜む氣色もなく駈出で〱討死す。先づ宗徒の者共には、蒲池左近大夫竝安・大木日向守鎭照・田尻種致・中山掃部助・本郷中務大輔・同彌七郎・大木越後守・丸毛外記・吉谷式部少輔・同與三兵衛・内田内藏助・小溝藤兵衛・西河縫殿助・今村源右衛門・原對馬守・鳥栖勘解由・

香土左近・岩井九郎以下討死百七十三人、此外生捕となり疵を蒙る者は、假名を記さず。然るに鎭並は、今はかうよと思ひしにや。一族家人の討死しける其隙に、小家のありけるに立入りて、心靜に沐浴し、腹掻切つて臥しにけり。淺猿かりし有樣なり。

蒲池鎭並自害

一、ある記にいふ、此時鎭並、簗河を出でけるは五月廿六日にして、廿七日・廿八日の兩日、佐嘉に逗留。廿九日の朝、與賀にて討たれしとも。

一、蒲池家の傳には、廿八日に討たれしとも。

一、舊き年代日記には、廿七日なり。此の本文の如し。

一、或はいふ、此時鎭並主從討死二百餘人とも。

一、又いふ、騎馬の侍百餘人とも。

一、或はいふ、蒲池左馬大夫鎭久は、鎭並の伯父にはあらず。別腹の兄なりとも。

一、或はいふ、此時龍造寺の城中に於て酒宴ありし時、鎭並席を立つて、左馬大

夫を呼立て密かに談合し、鍋島信生を左馬大夫閑所へ招き、樣々に方便(たばか)つて、若し心ありやと心底を引き見しかども、信生敢て其方便に乘らず、却つて左馬大夫を恥しめける間、夫よりは心打解け、二三日佐嘉の坂下に逗留し遊宴しけりとも。

一、此時鎭竝、佐嘉の本行寺に宿を取つてありしに、隆信、須古よりの使なりとて、土肥出雲守に酒肴を持たせて來れり。鎭竝悅び則ち其酒を拔き、出雲守を饗し終夜酒宴して入興の餘、錦木の謠を自ら謳ひ立つて舞曲をなす。此鎭竝は、當代希なる猿樂の上手なり。出雲守つくぐと是を聞き、見し心に思ひしは、はかなの彼の鎭竝が有樣かな。旣に明日誅伐に逢ひぬる身の、夫を夢にも知らずして斯樣に戲れける事よと、思はず落淚しけり。鎭竝是を悟らず、我が藝の面白さに、出雲守泪を流すと思ひて、彌々其技を舞ひしとなり。

鎭並殘黨退治の事

斯くて隆信、計畧を以て蒲池鎭並を易々と誅伐あり。猶其殘黨の簗河の城に之あるを退治すべき旨、田尻丹後守鑑種が方へ下知せらる。此鑑種の姉は、蒲池武藏守鑑盛の妻女にて、鎭並の母なり。されば鑑種は、鎭並の爲め正しき伯父なりしかども、最前より隆信に心を合する仔細ありて、彼の殘黨退治の事、則ち領掌しけり。爰に鎭並の弟に、蒲池統春といふ者あり。簗河の城中にありけるが、田尻に談合しけるは、我等に於ては龍造寺に對して別心なし。然るに當城に籠り居て、自餘の者共と一味せば、殘黨沒落必定手間をとるべきか。所詮我等は龍造寺へ忠義の爲め、此城を退くべしと申す。玆に因つて田尻鑑種より、其旨早速龍造寺に到つて申試みける處に、然るべき由いひ來るに依りて、則ち統春一類百餘人は、簗河城を出でて、田尻の領內佐留垣村へ引退きけり。斯かりし程に、簗河へ殘りし鼈豐饒美作守鎭連・蒲池駿河守統康、其外餘儀なき者共男女五百餘人（ある舊書には、千百餘と。）は、悉く簗河城よ

り巽の方鹽塚村に取籠る。其中に鎭竝の母は田尻好みに付いて、龍造寺へ申し斷り、己が館へ呼取りぬ。又鎭竝の稚き娘のありしは、乳母抱取り田尻が据場へ打向ひ來りし故請取りけり。其外鎭竝の男子、今年六歳になりける統虎丸を初めて、皆鹽塚村に楯籠りぬ。然るに六月朔日、田尻丹後守鑑種、龍造寺の命を蒙りて鹽塚の要害へ取懸る。其人數には田尻石見守鎭直・同名左京亮鎭永・同名彌七郎・同勘解由兵衛鎭乘・同但馬守鑑忠・同大藏助鎭富以下、田尻一手都合二千七百餘騎にて、諸口より押寄せたり。佐嘉勢にも鍋島信生・中野兵庫助・水町丹後守信定相加はり、彼此六百餘騎にて田尻に加勢あり。斯くて鎭竝一家の輩、皆必死に思定めしかば、各〻足弱を害し、六月一日の午の刻、我れ先にと切つて出づ。されば鎭竝の家人は、田尻家人とは皆々伯父甥・兄弟にて互に恥合ひ、他人よりは猶烈しく、初の程は一人二人づつ出合ひて、跡を弔ひ給はれと言葉を替し、火を出して相戰ひ首を取るもあり、取らるゝもあり。後には亂れ合ひ、田尻家人には中尾與三兵衛種次幷に其被官金栗將監・谷軍十郎、殊に進みて首を取る。勝屋宗機も蒲池衆二人を討捕りぬ。宗機、此時田尻と號す。

今朝卯の刻より押寄せて、敵味方兵糧もつかはず午の刻の終り迄、さしもの極熱に汗水になり雙方入亂れ、弟は兄の首を取り、甥は伯父と刺違へて目も當てられぬ戰なり。是を見る者、如何なる前世業因にて、昨日まで睦しかりし親類共の、今日はいつしか敵味方と分れて、斯かる思はざる修羅の勵をなしける事よと、泪を流さぬはなかりけり。斯かりし程に、簗河衆生きて殘るは一人もなし。寄手田尻勢にも親類・被官・中間以下、或は戰死し或は深手を負ひし者算を亂し、折節水無月初旬にて、寄田も堀も死人にて埋み、悉く平地となりけり。先づ簗河衆宗徒の討死には、蒲池駿河守統康・豐饒美作守鎭連を初とし、蒲池紹心入道・同甚三郎・同名宮内少輔・同左近允・中山竝元・西河甲斐守・江曲相模守・同掃部助・守部左京亮・甲斐將監・大本宗幸入道・高山藏人・池松將監・原新右衞門・同彌七郎以下、其外老若男女五百餘人、或は討たれ或は自害して、一人も殘らず失せにけり。其中に稚き子・老いたる入道・若き女の死骸爰彼所に横たはり、足の踏所もなく哀れなりし事どもなり。實にや朝に紅顏なりしも夕には白骨となり、郊原に朽つるとは是なるべし。寄手田尻勢にも討死する者、

鎮並の子統虎殺さる

田尻勘解由兵衞・末吉刑部・田島伊賀守・松尾左馬助・其外雜兵百八人、手負は八百三十六人なり。斯くて軍散じて後、田尻鑑種、則ち右合戰の次第、扨又討取る處の首共を、船二艘に取乘せ肥前へ運送して、隆信の實檢に入れけり。然る處に、鎮並の子統虎丸、胡仙といふ山伏と主從三人にて、田尻が居城鷹尾に來り、鑑種を賴みけり。幼稚の者なれば、鑑種も是を助けたく思ひしかども、男の子にて行末の事如何と覺束なく、不便ながら殺すべしと思案し、高來へ送ると方便(たばか)り船に乘せ、家人上妻刑部丞其外二三人警固にて、船中に於て是を討つべき由申付け、則ち鷹尾津より押出しけり。然るに胡仙、其色をや悟りけむ。朝日に向ひ珠數を以て鬮を取りけるが、惡しくやありける。其儘上妻刑部を切つて伏す。是を見て殘る田尻が家人共拔合せ、彼の山伏胡仙を初め統虎主從を切害しけり。

一、鎮並の弟蒲池統春が一家、佐留垣村に在けるをも討伐すべき由、田尻方へ佐嘉より申し來りけり。時に鑑種佐嘉に到り申遣しけるは、彼の統春は、龍造寺へ異心なく一族を離れて、早速城を〔脫アルカ〕致退出で候。其調儀故にこそ、簗河殘黨輙

く案利に屬して候へ。然れば統春が身體に於ては、御宥免候へと申し斷りしかども、隆信承引あらず。鹽塚落去の中一日あつて、六月三日、佐嘉より筑後衆に下知せられ、統春がありける佐留垣の城を攻む。肥後衆には小代伊勢守相加はる。肥前衆には納富能登守・田原伊勢守・秀島源兵衞以下、六月三日一同に取懸け、諸口より押詰め攻め戰ふ。此時、肥前勢の中よりは、納富が與力に小宮善助・增田六彌太・濱田與次進んで分捕し、川浪大藏續いて討戰ふ。其外石田右京亮討死しけり。斯くて統春を初め百人計りの者共、悉く切つて出で火出づる程合戰し、一人も殘らず切死して、佐留垣不日に落去しけり。扨此首共に、統虎丸が死證を加へ、又候船一艘に積みて、田尻鑑種より肥前へ差送り、隆信へ見せ申しけり。是を聞く者見る者每に、あらおそろしと舌を慄はぬはなし。然るに此時隆信より肥後の小代へ、石田內記を使節にて、今度佐留垣加勢の禮書を送られし返禮にいはく、

貴札令拜見候。仍蒲池鎭並事、連々就惡行顯然、今度輙御成敗候。千秋萬歲候。

彼殘黨、於佐留垣城楯籠候之處、筑州衆申談、卽時討果候。被聞召付候段、外聞之至忝候。彌〻可抽忠節之覺悟、不可有緩疎候。猶石田內記方可有御達候。可得御意候。恐惶謹言。

六月十二日

小代伊勢守
親傳判

龍造寺殿
參貴報

一、ある記にいふ、此時鎭竝の殘黨鹽塚・佐留垣等の所々へ分散しけるは、田尻が謀略にて、是を輙く討果すべしとの工なりとも。

一、ある記にいふ、鹽塚を攻めしは、田尻一手となり。鍋島以下の事之を載せず。

一、ある記にいふ、此時鎭竝の母・妻室・娘三人は、田尻申請ひしに依りて、隆信宥免せられしと。但し其中に妻室の事、古き書に見えず。

一、ある記にいふ、統虎丸の事を、田尻佐嘉に到つて申請ひしかども、宥免せられずとも。

一、ある記にいふ、此時鹽塚落去して、統虎丸は虎千といふ小性と主從四五人にて、田尻が鷹尾の城へ來りしを、鑑種是を殺すべき爲め、薩摩へ送ると方便り船に乘せ、既に海上へ押出し船中にて殺さむとす。然るに小性の虎千、其色を見とり、旭に向ひ鬮を取り、則ち主の統虎丸を切殺し、己れも自ら首を搔落し、海中に入りしとも。

一、或は鹽塚村にて古老の語りしは、虎千とは山伏なり。統虎丸が鷹尾の城に居たりしを、田尻殺さむとしける故、是を盜み出して、薩摩へ落ちむと船に乘りしに、財寶多く持居たるを、船頭共目懸けて、主從の人を殺さむとす。虎千其色を悟り、終に遁れ難き事を量つて、統虎丸を害し、其身も腹を搔破り、海中に飛込みけるとも。

右の說々之を用ひず。此書に載する所は、田尻家の舊書なり。

一、鎭竝歿後に、筑後より大木兵部少輔統光、肥前木原村へ來り傳を賴み、鍋島信生・小河武藏守まで申しけるは、今度鎭竝が供を致さず、殘念の仕合なり。所詮

追善の爲め、切腹申すべき爲め罷越したる由訴へたり。其段、隆信に披露ありしに、義ある武士なりと賞美せられ、頻に切腹を留められ、筑後へ歸されけり。此兵部、浪人となり、後宗繁入道と號す。數年を經て小河が取持にて鍋島の臣となる。或はいふ、此大木、筑後國堀切の城主とあり。非なり。田尻が五箇城の内なり。大木は大木に住す。

一、今度鎭並一亂に付いて、筑後國騷動し、其殘黨討伐の後も稍〻靜かならず。之に依つて龍造寺久家、佐嘉より簗河の城に移られ、鍋島信生と同じく居住あつて、毎事相議せられ、當國を鎭められしに依つて、頓て國中平均す。

一、同六月廿二日、龍造寺久家、鍋島信生談合をもつて、豐饒新介を誅伐あり。これは父美作守鎭連、今度簗河黨殘に加はつて鹽塚村の要害に楯籠りしに依つてなり。

一、同月下旬、筑後國戸原薩摩守親隆入道紹眞、龍造寺に對し害心をさしはさみ、己れが戸原河内の城を修補して楯籠り、佐嘉の通路を斷ちけり。この入道は、鎭並の近き親類なり。然るに鎭並、今度佐嘉に於て不慮の生害しけるを、隆信の不仁

なりと深く憤りし故なり。斯かりし間、久家の舍弟後藤伯耆守家信、六千餘騎を以て、戸原河内へ取懸け、紹眞を攻めて相戰ふ。時に筑後衆には、草野長門守鑑員・西牟田播磨守鎭豊・高良山の座主麟圭馳せ加はり、戸原が城を取圍む。斯くて城主親隆入道、持口を差固め暫しが程は怺へしかども、つひに籠城叶はずして、懇望の上降參に一著しければ、寄手の諸勢、合戰を止め悉く圍を解いて歸陣しけり。

或はいふ、戸原、此時落城せずとも。

一、同七月、田尻丹後守鑑種も、龍造寺に至つて異心これある由に付いて、是をも佐嘉より討果さるべしと、いづくともなく巷説あり。其段、田尻も聞付けしに依つて、隆信父子より更に心疎あらざる由、鑑種が許へ神文を差送らる。其趣にいはく、

數度以二御神文一雖二申候一、今度其許有二曲說一之由承付候之條、此方親子對二鑑種一毛頭無二心疎一之條、彌々無二御疑心一樣、以二御神文一申入候。自今以後對二鑑種一邪儀表

裏心疎有間敷候。

右此旨於ニ偽申ニ者、

神文之を略す。

天正九年七月廿日

龍造寺山城守
隆信 判

龍造寺民部少輔
久家 判

鑑種 参る

一、右隆信・久家よりの神文を、田尻拝見して疑を晴しければ、いよ〳〵龍造寺に至つて、向後別心あるまじき由、鑑種も起請文を認め、土肥次郎左衛門信重まで遣しけり。この時信重よりも、田尻が方へ神文を替はす。その文にいはく、（信重は土肥出雲守の子、後に佐渡守と號す。申次なり。）

再拝敬白天罰起請文

一、至二隆信・久家一深重可レ被二仰談一之由、以二御神名一承候之條、爲二信重一何樣盡未來際無二相違一、如二親子兄弟一可二申承一之事。

一、鑑種御爲に可二罷成一儀承付候者、御入魂可レ申之事。

付若鑑種信重間、雖レ有二如何體讒人一互申明、可レ相二紀邪正一之事。

一、隆信・久家、信昌江連々御取合之儀、聊不レ可レ存二緩〔怠脱カ〕一之事。付、萬一至二隆信・久家一御相違之時一者、右之條不レ可レ有二其實一之事。

右條々、於レ令二違背一者、

神文之を略す。

天正九年八月十九日

土肥次郎左衛門尉

信重　判

田尻丹後守殿

進覽

一、今度龍造寺より蒲池鎭竝一類を、容易く誅伐ありし事、偏に田尻鑑種、最初より

隆信へ志しを通じて、竊かに內略を廻しける故なりしかば、去々年十二月に約束の如く千町の內、先づ六百八十町、今年九月初、久家判物を以て、田尻へ給はりけり。其坪付にいはく、

筑後山門之郡之內　鹽塚村　百三十町
肥後合志郡之內　夜門　十二町
右郡之內　金龜寺　二町
右同郡之內　橋田村　四十五町
同玉名郡之內　伊倉北方小島　十町
同郡伊倉南方之內　請三箇村　三町

天正九年九月四日　久　家判

鑑　種
參る

右の外　村付

鎭竝本地	百三十町	鹽塚村	同	百町	たな町村
黑木領	廿五町	ひらき村	同	廿五町	をさ島
豐後領	六町	井手の上	同	三十三町	松延村
鎭竝本地	六町	大き村	三池之內	四十五町	龜崎
同	四十五町	野瀨	同	三町	上內村
豐饒領	三町	龜尻	鎭竝本地三池	十三町	柰木
豐饒領三池	十五町	尾尻本村	三池	六町	ふすべ
三池	六町	ふか倉	三池	十三町	ふか浦
三池	五町	をか松			

以上四百七十八町

薩摩勢肥後へ攻め入る事

同九月下旬、薩摩より太守義久の舍弟島津兵庫頭忠平、（中頃義珍。後義弘と名づく。）肥後の八代へ

攻め入り、大友・龍造寺方の城々を攻むべしと、既に大町杉島まで出張す。是は宇土の伯耆左兵衞顯孝・隈本の城越前守親賢、頃日島津に屬し、薩摩勢を差招きしに依つてなり。然る間、甲斐民部入道宗運人數を卒し、其上龍造寺方の輩と評定を加へて、是を防がむとす。されども忠平、急に軍を發せず。斯かりし程に、玖麻の相良義陽・阿蘇大宮司惟種時に六歲。等の龍造寺方、甲斐と談合して、隆信より南の關へ差置かれたる龍造寺上總介家晴まで援兵を乞ひけり。玆に因つて家晴、早速軍兵を相催し、甲斐が城本御船まで差遣す。爰に於て島津、如何思ひけむ。八代へ引退く。

一、今年龍造寺より肥後國支配の地、横島・高瀨・山鹿・南の關の城々へ彌〻番人を置かる。或はいふ、今年三月、久家・信生、肥後へ參陣ありと。

一、今年久家・信生、簗河へ移られし後、筑後・肥後旗下の輩、或は神文を送り、或は質人を出す。其人數には、

小代伊勢守、親傳

甲斐民部入道、宗運

同名左京入道
同　兵部大輔
同　刑部入道
同　掃部助
城　越前守、親賢
同　主計允
木庭隱岐守
隈　庄太郎
一、四月日
合志常陸介、親爲

右何れも肥後衆なり。是は久家築河へ入城以前、龍造寺に神文を送る。

一、六月日
志岐豐前守、鎮經
赤星肥後守、統家
隈部源次郎、親泰

右何れも肥後衆なり。神文を送る。

八月廿六日　　高良山座主、良寛

同　寶生院、鎮興

右筑後衆なり。神文を送る。

一、九月八日　　相良修理大夫、義陽

右肥後衆なり。神文を送る。

一、龍造寺へ段々相從ふ面々の質人は、皆簗河の城に之を置かる。其内有馬左衞門佐の質・島原大學助。石黒備中守。島原式部大輔の質・嫡子木工左衞門。安富下野守深江と改む。の質・嫡子助四郎。赤星肥後守の質・嫡子太郎或は新六。隈部但馬守の質・次男。草野長門守の質・嫡孫幡千代。祝部の質・妻女。此外詳ならざるに依つて之を記さず。

鍋島信生羽柴秀吉へ音通の事

鍋島信生秀吉に音信を通ず

今年天正九年。鍋島飛驒守信生、背振山の僧水上坊仁秀を以て、羽柴筑前守秀吉の頃日毛

利輝元を攻めて、中國に在陣ありしに通せらる。秀吉大悦せられ、樣々の禮謝ありけり。雙方音信は是が始なり。

北肥戰誌卷之廿六終

北肥戰誌　卷之廿七

龍造寺久家鍋島信生改名の事

天正十年壬午、龍造寺民部大輔久家・鍋島飛驒守信生、倶に簗河に在城あつて、肥後・筑後を鎭めらる。然るに今年、久家名を改められ政家と號せらる。信生も亦、此時までは未だ信昌と申しけるを、信生と改められけり。

黑木父子再び龍造寺へ降參の事

同二月、筑後國上妻郡猫尾の城主黑木兵庫入道宗英・其子伯耆守家永、龍造寺に背いて居城猫尾に引籠る。然る間、政家・信生相議を以て、黑木を攻めらるべしと、則ち信生に小河武藏守信貫加はつて其勢五千餘騎、簗河を立ち猫尾城へ向はる。時に草

野長門守、雙方に入りて和與を悈ひしかば、黒木父子、再び龍造寺に至つて異心あるまじき由、懇望一著の上、嫡孫黒木四郎に宿老一人差副へて質人に出しけり。斯かりし程に信生、黒木を攻められず、彼の質人の四郎を具して、簗河へ歸城ありけり。

或はいふ、此時政家も、上妻へ參陣せられ、高良山に陣を居ゑられしとも。

田尻鑑種籠城の事

同八月二日、龍造寺政家・鍋島信生、簗河の城より鵜川逍遙として、瀨高上ノ庄へ出でられけるに、是は鵜使の遊山にあらず、田尻鑑種・蒲池家恒、龍造寺に至つて逆意之ある由相聞え、川狩に事寄せて、彼の輩を招寄せ、其場に於て討果すべき工の由、世上に風聞しけり。然る間、蒲池は大に仰天し、急ぎ田尻が方へ神文を以て申談じける趣にいはく、

再拜々々敬白

一、今度至㆓鑑種・家恒身上㆒曲風說之儀共候。互申談、何とか被㆓聞召分㆒候之様、入〔精〕性至㆓御兩殿信生㆒可ㇾ遂㆓御詫言㆒儀不ㇾ可ㇾ有㆓緩〔怠脱カ〕㆒之事、

一、舒陸甲冑共に無㆓拔懸㆒、兩人同然に可ㇾ遂㆓馳走㆒之事、

一、如何體之讒人候共、兩人間深重可㆓申合㆒事、

右條々若於ㇾ僞〔申脱カ〕者、〔神文之を略す脱カ〕

天正十年八月十二日　　蒲池兵庫頭
　　　　　　　　　　　　家恒　判

鑑種　参

田尻鑑種籠城の原因

家恒は、斯様に龍造寺に至つて異心なき由、鑑種へ申談じ詫言しけれど、鑑種は、天性其機飽くまで不敵の者なりしかば、敢て無實の申分に及ばず、大に腹を立て、此鑑種、近年隆信に一味し、三池鎮實を初め甥の鎮並其殘黨まで悉く討果し、其上肥後・筑後の案内して、所々龍造寺の手に入れ軍勞莫大の事なり。然るに如何なる

讒口に依つてか、今斯かる企ありけるや。されども未だ其實否計り難しとぞ窺ひける。斯くて此事、頓て佐嘉・築河へ聞え、隆信父子・信生大に膽を潰され、元より彼の風說は跡方もなき事なりしかば、聊か鑑種に至つて疎意なき旨、各神文を送られけり。隆信父子の紙上にいはく、

隆信以下の神文

再拜々々敬白天罰起請文

一、今度鑑種御身上由風說申散候。更無是非候。爲隆信・政家毛頭不存寄候之事。

一、御緣重之儀、此方親子以見合可申談儀不可有疎之事。

一、鑑種隆信・政家申談候而、その後前々と不存疎意候。勿論向後不可有別儀事。

附、被對隆信・政家、鑑種御隔心之由、如風說者直尋口〔糺カ〕、縱一往者、鑑種御隔意雖無御晴候、引直可申談候。及兩度候者、可及鉾楯覺悟之事。

右條々於僞申者、

神文之を略す。

天正十年八月十八日

龍造寺山城守
隆信 判

同民部大輔
政家 判

田尻殿

鍋島信生の紙上にいはく、

再拜々々敬白天罰起請文

一、今度不慮之惡説不レ及二是非一候。乍二勿論一爰元公私共、對二田尻鑑種一毛頭惡心惡行之儀無レ之候之事。

一、雖二事新敷樣候之至一、鑑種盡未來際被二申談一候首尾、少茂不二相變一、爲二鍋島飛驒守一茂別而可レ得二御意一之覺悟不レ淺候之事。

一、此已後茂自然讒者有レ之而、於レ有二申妨仁一者、〔即〕則時無二御腹藏一預二御入魂一相二糺邪正一、速其沙汰無二異議一可レ被二申談一候之事。

附、萬一對₂隆信・政家₁、爲₂鑑種御惡心₁之儀於ᴸ有ᴸ之者、此神文不ᴸ可ᴸ有₂其實₁候之事。

右之條於₂相違₁者、

神文之を略す。

天正十年八月十九日　鍋島飛驒守　信生判

田尻丹後守殿　參

小河武藏守信貫の神文にいはく、

再拜々々敬白起請文之事

一、今度之風說努々不ᴸ存之事。

一、至₂田尻鑑種₁爲₂小河武藏守₁、盡未來際不ᴸ可ᴸ存₂疎意₁之事。

一、隆信・政家・鑑種御間に自然讒者於ᴸ有ᴸ之者、相₂糾邪正₁無₂異議₁可ᴸ被₂申談₁候樣に、御取合可ᴸ申之事。

附、如ㇾ此雖ニ申談候一、被ㇾ對ニ政家父子一於ニ御相違之當人一者、此神文不ㇾ可ㇾ有ニ其實一事。

右之條於ニ相違一者、

神文之を略す。

天正十年八月十九日　小河武藏守

信貫 判

田尻鑑種 參

納富能登守家理の神文にいはく、

敬白天罰起請文

一、今度之風說努々不ㇾ存候事。

一、對ニ田尻鑑種一爲ニ納富能登守一、盡未來際不ㇾ可ㇾ存ニ疎意一之事。

一、隆信・政家・鑑種御間に、自然讒者於ㇾ有ㇾ之者、糺ニ明邪正一無ニ異議一可ㇾ被ニ申談一之樣、御取合可ㇾ申之事。

附、如ㇾ此雖ㇾ被ㇾ申談ㇾ、被ㇾ對ㇾ政家父子ㇾ於ㇾ御相違之概ㇾ者、此神文不ㇾ可ㇾ有ㇾ其實ㇾ之事。

右條々令ㇾ違犯ㇾ者、〔神文之を略す脱カ〕

天正十年八月十九日　　納富能登守

家理判

鑑種參

鑑種籠城

右の如く龍造寺より數通の神文を以て、聊か異心あらざる由、數返申されしかども、鑑種信用せず。猶以て狐疑を插み、同十月四日、終に龍造寺に對し、手切の働を以て所々放火せしめ、簗河に差置きし質人同名內記丞鎭淸が子千代松丸を捨てゝ、居城鷹尾へ栖籠り、其外四箇所の端城江の浦へは、同名但馬入道了哲〔大友の狀には常陸入道。〕濱田へは同大藏助鎭富・津留へは同石見守鎭直・堀切へは同彥左衞門鎭永〔或は福山將監とも。〕を差籠め、兵糧・馬秣・弓鐵炮・玉藥に至るまで不足なく用意し、龍造寺勢を待掛けたり。斯くて田尻、旣に龍造寺に對し五箇所の城へ引籠りしかば、隆信父子もさのみは賺さ

れ難く、さらば是を攻むべしと、政家自ら肥前勢二萬を率ゐて、田尻が本城鷹尾へ取懸けられる。禅將は後藤伯耆守家信と、鍋島飛驒守信生なり。扨三方より取圍み、海の方は亂杙を以て立切り、諸口に於て合戰始まり、鐵炮止む事なし。その上彼の五箇所の要害を取詰むべき爲め、城廻り三里の間、堤を掘續け、所々へ向城を取付け、船手には田雜大隅守を頭人にて番船を付けられ、一向海上の通路を差塞ぎしかば、田尻が爲體、偏に籠鳥の雲を戀ふるに異ならず。されども田尻機を屈せず、五箇城を堅固に持つて防戰す。

一、鍋島信生は、此時鶴の口を攻められしに、其手の侍木下四郎兵衛・中橋平兵衛以下進んで相戰ひ、平兵衛十三箇所疵を蒙り、同勘兵衛四箇所の疵を負いて、兩人ともに首を取る。此外、後藤家信・小河武藏守を初めて、數箇度粉骨を盡し攻め戰ふと雖も、城中堅固にして破られず。斯かりし程に、寄手三萬餘騎、急に城を攻めずして日を送る。

一、鷹尾寄手の面々集まつて評定を加へ、先づ江の浦の端城を攻めて見るべしと、鷹

尾をば多勢にて押へ、扨後藤家信・鍋島信生兩將を以て、江の浦へ取懸けらる。當城には鑑種が從弟田尻但馬入道了哲ありけるが、肥前勢の寄せ來ると聞きしかば、城中に下知し口々を差固めたり。然るに寄手、急に構を打崩さむと仕寄を付けて相進む。中にも後藤の家人等、前駈にありて相戰ふ。其内に岡部與右衞門・同新兵衞・吉村藤左衞門・塚原與左衞門相挑み、新兵衞は討死しけり。又鍋島の手よりは、中野式部少輔淸明進んで、早堺の手に付く。是を見て成富十右衞門信安・下村生運・於保賢守・木下四郞兵衞・南里太郞三郞・石井次郞右衞門相進み、松田權助は城兵荒河八郞を討取り、石井左京亮敵と槍を合せて、其中を突透すに、彼の敵槍を手繰り左京を一刀斬る。左京疼まず、則ち其敵を討取りけり。中橋平兵衞も槍を合せて深手を負ひ、石井伊豆守・上野助二郞・同與三郞は討死す。斯くて寄手の士卒、挑戰ひ骨を碎くと雖も、城中強く防いで落城せず。然る間、後藤・鍋島以下の寄手、江の浦の城を差置いて、又鷹尾の城を攻めむとす。

一、寄手其後、鷹尾の城を攻めけり。中にも小河武藏守信貫進んで下知を加ふ。然

れども鑑種が家人西原美作守・中尾與三兵衞・北原紀伊介以下、命を際に防戰し、鐵炮を打掛くること雨の如くにて、寄手の士卒、更に面を向け得ず。小河を初め鍋島・後藤の輩、攻口を引退く。此時、鍋島信生の侍に三ヶ島又右衞門勵み戰ひ、脇の下に矢疵を蒙る。斯くて軍の次第、追々須古へ聞えしかば、隆信大に立腹あり。いでさらば、自身馬を向くべしと、成松遠江守・高木太榮以下を具せられ、龍王崎より兵船を以て、筑後の榎木津へ登られ、肥・筑・豐の分國に觸れて大軍を催され、小河武藏守を軍奉行とし、鷹尾の城へ取懸けられ、日夜攻められしかども、鑑種更に氣を屈せず、却つて寄手の者共、數箇度打負けて、雜兵多く討たれしかば、隆信は頓て須古に歸られけり。其後は彌〻向陣を取固め、城の四方海陸を圍みて、政家・信生は先づ簗河へ退かれ、遠攻にこそせられけれ。

戸原籠城附落去の事

爰に筑後の戸原薩摩入道紹心、又々龍造寺に對して逆意をなし、同年天正十年。十月、田

尻と引合ひ、己れが戸原河内の城に楯籠り、府内へ通じて大友勢を引入れむとす。此事築河へ聞えて政家と信生相談あり。さらば先づ田尻をば押置き、戸原を攻めらるべしと、筑後衆をも催され、佐嘉勢と一つにして、同十月十四日、戸原河内へ討入られ、三手に分れて取懸けらる。其内、大手の先陣は小河武藏守、二陣は信生、搦手は後藤伯耆守、山の手は先陣高良山の座主良寛、二陣納富能登守なり。三方の寄手一同に鬨の聲を發し鐵炮を放掛け、卽時に城戸を打破らむとす。城中よりも同じく鐵炮を打違へて、其音百千の雷に異ならず。信生の手には筑後の蒲池兵庫頭家恒・西牟田新介家親來り加り先を駈く。神代家の陣代同名彈正忠・內田美作入道卜菴も一つになり、無二無三に攻め入らむとす。城主戸原入道、士卒を下知し強く防いで相戰ふ。時に寄手佐嘉勢の中より松田權介、小河武藏守の手に屬して相戰ひ、鐵炮に中りて高股を打貫かれ、持永治部大輔盛秀も、信生の手にありて疵を蒙り、神代勢の中より三瀨長門守、痛手を負うて半死半生なり。(歸陣して死す。)其外綾部尾張守幸義・高木左馬大夫盛秀・原口平次兵衛憲秀・石井與次郎・(生年廿五。)石田新太郎・同萬五郎・千々石

甚太郎以下宗徒の者共討死し、蒲池・西牟田が手の者も、算を亂して討たれたり。搦手の後藤勢も、勵み戰つて死創多く、叉山の手に向ひたる高良山の座主良寛、一陣に進んで同宿餘多討たせ、二陣の納富能登守も、其與力川浪大藏・於保左衞門尉・小宮左馬允・牛島兵部丞・同新右衞門・石丸藤太左衞門・小柳彌藤左衞門等挑み戰ふと雖も、二の目の軍に小宮左馬允を初め若干討たれ、諸手ともに寄手怺へずして引退く。

一、同十六日、寄手重ねて評議を加へ、戸原の城を攻む。先手は蒲池兵庫頭・西牟田新介なり。時に鍋島信生、手勢七百餘騎にて城の廻りを巡見あり。八戸左近大夫・鹿江伯耆守に下知せられ、先手の蒲池・西牟田が猶豫して進まざりしに申遣されけるは、早速懸らるべし。延引あるは二心ありと見えたり。其儀ならば則ち討果すべしと申し遣され、信生は先に大手の口へ押詰めらる。時にいつもの江副兵部左衞門、一番に大櫓に付いて味方を招くに、三ケ島叉右衞門馳せ來り、北島治部丞・陣内相兵衞・大塚勝右衞門相續いて、塀の手に混々と付く。是を見て鴨打右衞門佐・江里口藤七兵衞・中野兵庫助・同名式部少輔・下村生運・大塚内藏允・石井

戸原落城

五郎右衞門・副島右近允・鐙田善兵衞・澁谷善右衞門・杉町刑部・中橋平兵衞・同勘兵衞・小柳源兵衞も續いて來り、塀を打破つて各〻我れ先にと乘入る。此時、三ヶ島又右衞門分捕し、喉肮節に疵を蒙り、石井五郎右衞門も手を負ひたり。南里太郎三郎生年十五歳、城兵の戸原五郎と引組んで臥す。戸原は大の男にて、南里危く見えけるを、鍋島大膳驅け合せ、戸原を仰け首を掻く。此外田中日向守泰景・同嫡子相兵衞賢秀・二男源右衞門・三男新左衞門父子四人、丑寅の方二の丸より乘込みけるが、日向守は討死し、相兵衞は深手を負ひて働き得ず。(歸陣して死す。)弟源右衞門、土手を越えて相戰ふに、副島右近允來つて、源右衞門を援けて挑戰す。爰に後藤家信の家人土岐心學入道と、戸原が侍驅け合せ、馬上にて切合ひしが、後には馬より下立ち引組で臥し、雙方差副を以て互に刺透しける處を、兩陣より落合ひて其に左右へ引分けたり。斯かる處に、鍋島信生の手より武藤善兵衞貞淸、例の火矢を以て城中を燒立つ。中野式部少輔淸明も、城中に火を掛けしかば、餘焰頻に覆ひて城主戸原入道紹心堪へ兼ね、いづくともなく落失せけり。斯くて當城落去

しければ、政家・信生、諸勢を引いて簗河に歸陣せらる。

或はいふ、當城落去は天正十一年十月十四日。又十七日とも。

又いふ、天正十年八月とも。又いふ、天正九年とも。

或はいふ、此時城主戸原薩摩守親隆幷に豐饒中務大輔鎭連、當城に於て討死すと。非なり。豐饒は去年六月鹽塚にて討死なり。

一、此頃薩州の島津兵庫頭忠平・伊集院右衞門大夫忠棟、肥後に在陣し、龍造寺方の輩と相戰ふ。然る間、今年十月、龍造寺より彼の表の城々へ番人を差加へらる。中にも横島の城番には高來衆中一識、海上手寄(たより)の間能渡るべきの由、隆信下知あるに依りて、有馬鎭貴よりは安富左兵衞入道德圓を差出し、其外安富下野守純泰以下、高來島中の歷々、十月九日より肥後へ渡海し、横島の城に入りて在番しけり。佐嘉よりの檢使は下村生運なり。

薩摩勢田尻鑑種へ加勢の事

薩摩勢鑑種に加勢

斯くて田尻鑑種は、數日、龍造寺の大軍に、東西南北透間なく取圍まれ、始終の軍難儀に思ひしにや。十二月中旬、島津兵庫頭・伊集院右衛門大夫の、此時肥後に在陣しけるに、事の仔細をいひ遣し、向後に於て薩州へ相屬すべきの間、此度加勢を給はりたきの由懇望す。斯かりし程に、兩人則ち領掌して、互に神文を替はし、頓て加勢の人數を差越すべきの旨申談じけり。玆に因つて翌れば天正十一年癸未正月十三日、薩摩より伊集院若狹守・河俣甲斐守・柏原將監・瀧聞（たきぎゝ）越後守・本村淡路守・田尻荒兵衛・怡（帖カ）佐彦左衛門・矢口宮內少輔・矢野箟（かん）（マヽ）介（舊書斯くの如し。）等人數三百餘、乘船を以て筑後へ押渡り、鷹尾に著船し、則ち田尻と一つに籠城して、鑑種に力を合せ、兵糧等まで運送し、其上薩州より使者飛脚を以て、折々音信を通じて、樣々懇情を加へけり。然る間、田尻大に機を得、津留・濱田・堀切・江の浦・鷹尾五箇所の城、彌〻異議なく持堪へけり。

肥後の赤星筑後の祝部質人殺さるゝ事

龍造寺隆信赤星の質人を殺す

既に田尻、薩州の援兵を得て籠城猶ほ堅固の由、肥前へ聞え、隆信又々築河まで參陣あり。暫く逗留ましく〜、田尻征伐の相談ありける內、肥後の赤星統家は、蒲池鎭並の舅にて、鎭並佐嘉にて切害の後、龍造寺に對し恨を含む由聞えしに依りて、隆信狐疑を起され、則ち八代へ使者を遣し、彼の赤星統家を築河へぞ召されける。統家は元より龍造寺へ異心なく、男子を質として築河の城に差置きし上は、仔細に及ばず畏り申す由返答しけるが、兎角に滯つて二三日延引しけり。斯かりし程に隆信、彌〻疑ひ思はれ、成松遠江守・木下四郎兵衞を兩使にて、急に赤星をぞ呼ばれける。されば統家が極運にや。折節近邊の山中に猪を擇(ねら)ひに行きて在合せず、妻女出合ひ兩使に對面し、統家歸宅の後、則ち築河へ罷越すべきの由斷り申しける程に、成松・木下力に及ばず、築河に歸り隆信へ斯くと申す。然る間、隆信限なく立腹あり。急に赤星が妻女が〔を〕有無、爰許へ唯今連れて參るべしと、右兩人を押返して、八代へ遣し申されけり。成松も木下も、迷惑には思ひしかども、隆信以の外に氣色變つて見えしかば、すべき樣なく、其儘又八代へ赴きしに、統家は未だ宿所に歸らず。兩

入則ち妻女に對して、能きに申し拵へ、八歲になりける美麗の娘を召具して、早速簗河へ歸り隆信に見せ申しけり。然るに隆信、猶も忿閲に堪へず、最前より簗河にありける彼の赤星が質の太郎の今年十四になりけると、今の八つに成りし娘を、筑後と肥後の境竹の井原へ引出し、兄弟共に磔に梟けられけり。是を見る者、皆淚を流さぬはなし。赤星夫婦の歎きいふ計りなく、島津忠平の其頃甲斐宗運を攻めて、肥後の御船に在陣しけるに、夫婦泣く〳〵行いて事の仔細を語り、龍造寺に到つて此鬱胸を一度晴させて給はり候へと、手を束ねて悲みけり。斯かりし程に、島津も泪を流し、心安かれ。何樣隆信に其怨みを報いて得さすべしとぞ肯はれける。

或はいふ、赤星統家、今度隆信の召に遲參せしは、一つには壻の蒲池鎭竝を誅せられしに懲り、二つには又之を憤りての事なりと。

此赤星、隆信を深く恨み、翌くる天正十二年の三月、島原に於て島津勢の先手を申請ひ、龍造寺と合戰し。僅か主從五十餘人を以て、佐嘉の大軍を切崩し、剩へ隆信を討取りぬ。是子供の怨みを報ゆるの一念なり。さのみ人には無情あ

るまじき者なり。此赤星が子、別にもあり。三郎武重と號す。先年大坂一亂の時籠城す。御赦免の後、早世して子孫なし。

或はいふ、彼の赤星統家が質人の子供、初めは肥前廊江(しくち)の無量寺に置かれしとも。

隆信鏡山忠實の質人を殺す

一、高良山の大祝部鏡山安實も、龍造寺に背くと聞えしに依りて、隆信下知を加へられ、彼の質人の妻女、歳未だ盛櫻なりしを、築河の城より出し、高良山の麓と岩井川の邊に生磔に梟けられけり。斯くの如きの事ども疊(かさな)りて隆信を疎む者多し。或はいふ、此祝部の妻女は、佐嘉の水ケ江にて磔に梟けられしとも。時に金襴の小袖を著す。是を見る者落涙しけるとなり。其舊跡は岩井川の邊りにあり。

蒲池鑑種落城討死の事

此頃築河の近邊蒲船津の城に、蒲池鑑種といふ者あり。本姓は黒木兵庫頭鎮連が弟なり。されども、さる仔細あつて、蒲池と稱す。元來鎮並・鑑種が親類なり。是も龍

蒲池益種戰死

造寺に野心を挿み、己が居城に引籠りけり。然る間、鍋島信生七百餘騎にて、蒲船津へ取懸けらる。百武志摩守・多々良壹岐守を初め、信生の手の者富岡喜左衞門・下村生運・野田右衞門允・陣内相兵衞・杉町藤右衞門以下、我れ先にと進みて打戰ふ。中にも辻小左衞〔門脫カ〕・增田善兵衞敵を討つて首を取り、江副六郎左衞門粉骨を抽んで、下村生運が被官藤五左衞門討死す。時に城兵も命を際に防ぎしかども、竟に城戸口を攻め破られ、城主益種は陣內相兵衞に討取られて、城は不日に落ちたりけり。斯りし程に百武志摩守信兼、則ち入替はりて當城を相守りぬ。

ある記にいふ、此時城兵の長中山筑前守を、杉町藤右衞門討取るとあり。非なり。彼の中山は蒲池鎭竝の老臣にて、簗河籠城の時、江副兵部左衞門討取りぬ。其證人園田主計允、則ち其場にて信生へ披露す。但し又今此中山の別仁なるか。

一、此時島津兵庫頭忠平、肥後の八代に在陣して、阿蘇・相良・甲斐以下龍造寺方の輩と相戰ひ、數度の勝利を得たり。時に肥後の國人等、多く島津へ降參す。

高來深江城軍の事

今年天正十一年の夏、高來島深江の城主安富下野守純泰、龍造寺に一味して島津・有馬と相戰ふ。其次第を尋ぬるに、去年一月九日より隆信の下知として、當島中の輩有馬家人を初め、肥後の横島の城番に赴き、下野守も其人數なり。然るに有馬左衞門佐鎭貴、其留守を計りて、又々龍造寺に至つて心を飜し、島津に一味すべき由いひ送り、先づ龍造寺へ手切の爲め、布津村・深江村を放火し、下野守が深江の城際まで取詰む。此時下野守は横島へ赴き、父伯耆守純治は、島原式部大輔純豐が島原の城の入番にて在合さず、深江の城中なか〳〵無勢にして防ぎ難く見えしかども、下野守が妻女并に留守居の者共百姓以下まで同前に相働き、敵の足輕少々討取り勝利を得、領知三箇村の男女・牛馬まで、悉く城內に取込め城を持堪へたり。然るに此時、下野守が祖父に但馬守貞直といふ者あり。入道して正佐と號す。至極年老いし故、老耄して有馬方に心引かれ、樣々危き事ども多かりしに、下野守の妻女、頗る

安德純俊の變心

賢女にて正位を押籠め、城中を下知し、悉皆後の女姓一人の働を以て籠城す。此事横島へ早速聞えしかば、下野守、同十一日深江に馳せ歸り、安德上野介・島原式部大輔は元より一味なりしかば、其城々段々相續き、彌々堅固に城を持ち、有馬方の軍兵と日夜防戰しけり。斯くて有馬方、色々行を以て是を攻めしかども、下野守が家人其外百姓以下まで、骨を碎いて相働き、去年天正十年は歳を重ねて籠城す。

一、斯かる處に、今年四月廿八日、深江一味の安德上野介純俊、如何なる所存や出で來りけむ、俄に心を變じ有馬方となりて、薩摩勢を己が安德の城に招き入れ、佐嘉の通路を絶ちて、龍造寺に對し逆意をなしけり。此上野介は下野守が爲には伯父にて舅なり。是より深江と佐嘉の通用相切れ、下野守難儀に及びて、島原山・鞍掛越温泉山傳ひ、忍々の通路にも、途中にて家人等多く討たせけり。斯かる半に薩摩より有馬・安德へ加勢として、伊集院肥前守・新納武藏守・同長男刑部大輔・樺山播磨守・福崎新兵衛・河上左京亮、其外八代侍に簑田平右馬助を初め、七千餘騎高來へ押渡る。此勢は皆島津兵庫頭忠平、此頃八代にありて下知を加へ、肥後よ

り差向けしとぞ聞えし。斯くて島津よりの加勢、各〻安徳の城に入りて、有馬勢と同じく安富下野守が深江の城へ取懸け、両方より差詰め、火矢を射懸け鐵炮を放つて烈しく攻め戰ふ事、夜晝十八日が間なり。されども城主下野守、下知を加へ稠しく鐵炮を打たせ、敵の火矢を消させて大に禦ぎ戰ひ、島津・有馬の敵軍を追散らしけり。此事、隆信へ注進ありしかば、急ぎ加勢を越すべしとて、筑後の安武式部大輔家教・三根郡の横岳兵庫頭家實を、高來へ差越され、深江の城へ入れられ、其後、藤津・彼杵の輩へも下知ありて、安富をぞ援はれける。其上又兵糧の用にとて、多比良村にて五十町の田地を相渡されし間、下野守彌〻心強くなりて、堅と籠城しけり。

一、斯くて同六月十三日、安富が深江の城中にありける百姓共、薪取に在郷へ行きしが、安徳の百姓共と出合ひ闘諍に及び、安徳の者を二三人討殺しけり。此事、安徳の城中へ聞えて、島津よりの入番新納刑部大輔・河上左京亮・鎌田平右馬助以下若武者共數十人、皆生肩にて急に安徳の城を馳出で、深江の郷民を追立て、深江

の城外構口まで追詰む。玆に因つて城中より安富三介人數を催し、早速討つて出で、其外加番の横岳・安武が手の者も切つて出づ。中にも安富三介と安武式部大輔手を碎き、五郎右衛門誰とも知らず。が屋敷の前にて討ちつ討たれつ、太刀打するもあり、槍を合するもあり、大汗を流し火を散らして相戰ふ。爰に新納刑部大輔と、安富の家人村吉雅樂助と渡り合ひ新納を突いて臥す。然れども村吉も亦、新納が槍に手を負ひしかば、首を取ること叶はず。時に横岳の家人古館播磨守駈け寄りて新納が首をぞ取りける。其外大將分には、簑田平右馬助も討取られ、上下八九人討たれにけり。其中新納・簑田は二十二三の若武者なり。又爰に河上左京と安富三介と切合ひしが、三介は河上に討たれ、河上は三介に切られ、手を負ひて引退く。總じて今度の一戰は、彼の三介一人の働なりけり。斯くて薩摩の者共、大將分二人は討たれ、一人は疵を蒙り、其外八九人討たれにければ、殘る者共悉く安德さして引退く。深江の城兵、勝に乘つて町下堂の前まで追討にして、又少々討取りけり。城兵にも安富が家人には、同名三介を初め數多討死す。番人横岳家人

には、宗彦兵衛・中島將監并に秀島隼人挑戰つて各〻高名し、安武が手の者も戰功を抽んでけり。されば今度の戰、俄の懸合急なる事にて、殊に手を碎き働ける者共は、三介を初め皆其場にて討死しければ、彼の新納・簑田が頸をも何某討取り、又は誰の頸とも、最初は分明ならず。されども其頸の體・脇刀の様子唯者ならず見えしかば、城中の輩皆不審に思ひしに、圓宗掃部是を見知つて、斯くと申し出でけり。扨下野守より、右兩頸を佐嘉へ差送り、隆信の實檢に入るべしとしける處に、敵方より頸桶等尋常の拵にて矢文を以て、彼の頸を所望す。斯かりし間、下野守弓箭の作法默止し難くて、右兩頸を敵方へ差渡しけり。然るに此軍の次第、安富・横岳が方より隆信へ注進す。依りて横岳家實への返書にいはく、

立川讃岐守所迄御細書之趣、令二承知一候。去月十三日於二其表一被レ遂二一戰一、敵宗徒之者共歷々被二討捕一之由、御粉骨御辛勞之次第不レ及レ申候。雖レ無二申迄一候、彌〻無二御緩一御覺悟專一候。此口於二一著一者、如二其表一指渡一行不レ可レ有二緩〔怠脫カ〕一候。猶期二來音之時一候。恐々謹言。

七月廿三日

家實まゐる申給へ

龍山
隆信判

江浦攻薩摩衆鷹尾を引拂ふ事

隆信田尻の江の浦城を攻めしむ

龍造寺隆信は、其頃田尻鑑種が鷹尾の城を攻めて築河に在陣あり。然るに去冬より田尻を圍まれ、今に至りて長陣に及び、士卒の辛勞を痛み思はれしかば、鍋島信生に談合せられ、急に先づ田尻了哲入道が在番したる江の浦の端城を攻め落すべしと、則ち信生以下の佐嘉勢に、肥後・筑後の輩を差加へられ、江の浦に到りて取詰められ、竹木・蘆萓・土俵等を以て山を築立て、次第に仕寄り、既に城の切岸まで詰寄られ、堀一重に攻め寄せて、築山の蔭より鐵炮軍、數日の間日夜止む時なし。斯くて去ぬる正月、薩摩より田尻へ加勢の輩、鷹尾の城にありけるが、數日の籠城に困窮し、

薩摩勢歸國

其上遠國に依りて、その後、薩摩よりの續けもなかりしかば、力に及ばず薩摩へ打

歸りけり。斯かる處に同じく七月中旬、秋月長門守種實、田尻とは同じ大藏姓にて、漢の高祖の苗裔なり。その好(よしみ)を以て、鑑種、此度家滅亡すべき事を歎き、龍造寺と和平調達の爲め、家人惠利內藏助を鷹尾へ差遣し、雙方に相談して、七月二十一日、龍造寺と田尻既に和平に相決し、兩家互に神文をも取替はしけり。然る處に、また入組み六箇敷き事ありて、右一著破れしかば、鑑種再び龍造寺と鉾楯に及び、彌々籠城日を累ねけり。

或はいふ、この時、秋月種實、自身鷹尾へ來り和平を扱(あつか)ひしとも。非なり。舊書にいふ、この時、高良山の座主麟圭も和平を談合して、既に一著すと。然れども右入組み六箇敷く一著違變なり。入組とは田尻居所の事、次に領分替地のことなり。この札答六箇敷くして、今度種實・麟圭が中和濟まずとなり。

鍋島信生重ねて豐臣秀吉へ音通の事

今年六月二日、京都不慮の一亂ありて、右大臣平信長、家臣明智日向守光秀の爲に

鍋島信生再び秀吉に音通す

生害せらる。然るに太閤秀吉、其寵臣として、此時は未だ木下筑前守と申し、播州姫路の城主なりしが、折節中國の毛利輝元を攻めて、備中國に在陣あり。主君の弔軍（とむらひいくさ）の爲め、早速上洛せらる。此時、鍋島信生より土肥出雲守信安・水上坊仁壽を以て、秀吉へ一書を送らる。其返札にいはく、

如仰去年之頃示預候。就夫唯今兩人被差越、書中幷口上之趣承屆候。隨而今度於備中表敵城數箇所攻崩、毛利陣中切懸り可相果刻、京都不慮に付而、毛利相抱候國五箇國、此方江可相渡與懇望之筋目を以、令和睦馬を納、則都江切上及一戰、卽時切崩、三千餘打取、明智一類共不殘首を刎、其身之事ははた物に掛置候。然者御國々如前々靜謐申付、一昨廿九日令上洛、近日於播州姫路可歸城候。就中任被仰越旨、中途上者不可有疎意候。將又南京帽子送給候。祝著之至候。猶期後音之時候。恐々謹言。

七月二日　　羽柴筑前守
　　　　　　秀吉　判

鍋島飛驒守殿

或はいふ、信生、秀吉に初めて通ぜられしは、去々年天正九年なりしと。然れども此文談を以て見るに、去年天正十年に初めて書通ありと見えたり。

一、八月朔日、安富下野守純泰、龍造寺の加番人と人數を合せ、安德の城へ取懸けたり。時に城中防ぐ事を得ず、薩摩よりの加勢新納武藏守を初め、伊集院・樺山・河上・福崎以下船に取乘り、肥後國に引退きけり。此時、肥後の隈部が子、近年龍造寺へ質人として簗河の城にありけるが、折節肥後へ歸り、薩摩勢に取籠められ、敢なく討たれにけり。

龍造寺政家肥後出馬國分の事

同年十月、島津兵庫頭忠平、肥後に在陣して、國中を掠め所々へ相働くに依りて、龍造寺方の輩多く降參するの由、簗河へ聞えしかば、其頃隆信は須古へ歸られ、政家・信生談合を以て、政家自身、肥後へ出馬ありて、彼の表の旗下共を援はるべしと議定せられ、田尻をば多勢にて抑へ置かれ、分國を陣觸あるに、筑前には筑紫・秋月、筑

龍造寺島津和平

後には蒲池・草野・黒木・西牟田・高良山の座主皆出勢し。肥前勢と合せて都合三萬七千餘騎の著到を以て、同十月、政家、築河の城を打出でられ、瀬高通りに竹の井を過ぎて肥後へ打入り、南の關に陣を居ゑられ、先手は玉名・合志に到つて、高瀨・山鹿へ相働く。然るに津島忠平、頃日は御船に陣してありけるが、龍造寺の大軍にて攻め來る由聞えしかば、さらば出向つて戰ふべしと、肥後國の味方共を催し、其外伊集院・新納・樺山・喜入・河上・福崎等の手勢を合せて、御船の陣を立つて出向ふ。斯くて島津・龍造寺對陣ありて、既に大なる合戰あるべきに、秋月長門守種實、此時龍造寺の催に依りて參陣しけるが、兩家の大軍相挑むこと年を累ね、民の煩ひ之に過ぎずと兩陣に入りて、樣々是を宥め和平に扱ひしかば、龍造寺も島津も、秋月が申すに任せ、竟に和平一著して、最前約束の如く、肥後を半國宛分けて領知あるべきに相定まり、忠平は八代へ馬を納め、政家は築河へ歸陣ありけり。是よりして當國高瀨川より巽の方を島津領と定め、新納武藏守忠元、御船にありて分内を守り、又乾の方を龍造寺領として、龍造寺上總介家晴を彌〻南の關に居ゑ置き、太田右衞門大夫

家豐・内田肥後の入道榮節を、大野別府へ召置き。横岳下野守頼續・姉川兵庫助信秀を、横島の城に差籠め置きて、各〻其境を警衛ありけり。此時、肥後の國侍に栗栖刑部少輔正重といふ者、龍造寺に屬して神文を呈す。

田尻鑑種龍造寺へ降參の事

同十一月、田尻丹後守鑑種、今に至り五箇城を持つて籠城す。然るに政家は、頃日肥後より築河に歸陣あり、彌〻田尻を攻められけり。中にも鍋島信生は、田尻了哲が在番したる江の浦の城を取圍み。僅か堀一重に詰寄られ、蘆萱・竹木等を以て山を築立て、其蔭より段々仕寄りて鐵炮を打たせられ、又釣勢樓を用意して、城内の鐵炮を除かむ爲め、鍬を多く集め、其鐵を以て彼の勢樓の表を圍ひ、内は綿にて能く拵へ、是を釣上げて城内を相窺ひ、堀は芥草を以て是を埋められ、又右の勢樓よりも、鐵炮を城内へ打込ませらる。然るに城兵、是を防がむ爲め、大鐵炮を以て件の釣勢樓を打落し、夜は續松を投げ掛けて、彼の築山を燒崩し、又は堀の部草をば、岸を穿ち大

鑰を以て引捲り、敵味方互に種々の行を廻らし、防ぎ戰ふと雖も、更に勝劣なかりけり。然る間、田尻が籠城已に五百日に及びぬ。爰に鍋島信生、倩々思はれけるは、彼の鑑種が此年月の忠功、誠に莫大の事なり。然るを今度攻め潰し、數代の家を滅さむも、流石無情事なるべし。所詮、彼等を賺し、和平をなして下城さすべしと思はれしかば、頃日百武志摩守が蒲船津の城に在番せしを差招かれ、足下は田尻了哲と無二の會釋と聞ゆるの間、了哲へ行きて鑑種何とぞ和平致し、以前の通り當家へ隨ひ候樣に、內談あるべしと申されしかば、志摩守其意を得、急ぎ江の浦へ赴き了哲に對面し、鑑種和平の事色々談合す。了哲尤もの事に思ひしかば、鷹尾の城に入り、鑑種を樣々宥め敎訓しける間、鑑種も今に於ては心解け、了哲が申す旨に隨ひて和平すべきにぞ決定しける。斯くて百武方より、鑑種が所存の通を、小河武藏守信貫まで一々相談しけるに、隆信父子・信生へも、其旨披露あり。鑑種より願の通りに一著して、同月廿七日、隆信・政家より別儀なき由、神文を送られ、和平靛と調ひ、十二月朔日、田尻一門九人連判を以て神文を差出し、同月十日、鑑種居城鷹尾の城の築

地を破却し、近々彼の城を去り渡すべきに相定まる。時に鑑種は、世外法體の樣なりしかば、嫡子長松丸を本人とし、堪忍分の新地二百町差出さるべき旨約束せらる。此時又別儀なき由、鍋島信生より長松丸へ神文を給はり、其上龍造寺の宿老三人小河武藏守・納富能登守・土肥出雲守よりも連署を以て神文を差送りけり。斯くて同十二月下旬、鑑種、本城鷹尾の城を明け去つて龍造寺へ引渡し、其身は堀切の端城へ下城しけり。爰に於て長松丸へ、隆信父子より同月廿五日、兩判形を以て肥前佐嘉郡巨勢の內二百町、約束の如く之を給はり、鑑種父子家中の輩、翌くる天正十二年甲申二月二日、所替を以て、船より肥前の佐嘉へ罷渡り、籠城二箇年にして和平す。

ある記にいふ、江の浦落城し、鑑種力盡きしに依りて、降參しけるとも。非なり。密記にいふ、田尻鑑種、去冬籠城以前より舊主大友義統に通じて、龍造寺へ逆意をなし、籠城中にも大友へ音通し、豐後よりの見次勢(みつぎぜい)を賴みて居たり。然れども義統恐將に依りて、兎角に滯り其加勢延引す。之に依りて其間を延さむ爲め、暫

く島津へも據りて加勢を乞ひけり。然れども大友加勢、猶延引に付いて、田尻籠城、今に於ては堪へ難く思ひし半ば、同名了哲・百武裁判を以て、幸に下城すと見えたり。此時。大友義統幷に朽網宗歷入道より鑑種への狀に委し。之を略す。

北肥戰誌卷之廿七終

北肥戰誌 卷之廿八

高來軍龍造寺隆信戰死の事

島津忠平高來に出陣

天正十二年甲申。薩州の太守島津修理大夫義久、去年の夏、高來深江の軍に、新納刑部大輔・簑田平右馬助、敢なく討たれしに依りて大に腹を立て、急ぎ高來へ加勢を差越し、有馬・安德に力を合せて、龍造寺方の者共を一々退治すべき由、舍弟兵庫頭忠平の頃日肥後の八代に在陣したるに下知せらる。然る間、忠平、同正月、新納武藏守忠元が御船に居たりしに軍兵を差副へ、有馬以下へ加勢として高來へ遣しけり。斯くて忠元、早速高來島へ押渡り、先づ有馬左衞門鎭貴へ參會し、夫より安德上野介が城に入る。此事、龍造寺へ聞えて、隆信・政家談合せられ、さらば此方よりも、高來の味方共へ、人數を增して力を副へよと下知を加へられ、同二月、先づ神代兵

部大輔貴茂を、安富下野守へ加勢とし、深江の城へ入れられ、其外、藤津郡の董原・嬉野・吉田・永田等を以て有馬を押へ、大村信純を三城へ差置かれ、海上には田雑大隅守を船大將にて番船を附けられ、數日の間、有馬・島津の者共と、龍造寺方の輩所所に於て相戰ふ。

一、此時島津兵庫頭忠平、八代にありて肥後國中を大半掠領するの由、相聞えしに依りて、同二月下旬、龍造寺の面々、又々肥後へ參陣あり。時に田尻鑑種、始めて佐嘉の新館より之に從ひ、諸勢異議なく頓て歸陣す。

島津家久出陣

一、斯くて高來の軍に島津・有馬の者共、龍造寺方の輩に動もすれば討負くる由、鹿兒島へ相聞え、島津義久評議を加へられ、兎角尋常の如くに戰ひなば利あるまじ。所詮中務大輔罷向ひ、萬死一生に決して、龍造寺方の奴原悉く討取るべしと申されしかば、舍弟中務大輔則ち領掌し、早速陣觸して薩摩・大隅・日向三箇國の中より、健兵三千を勝り出し、鹿兒島の鎭守の神前に於て、三千の者共一同に皆神水を飲み、今度高來の軍に打勝たずば、生きて二度歸るまじと誓ひて、十文

字の白旗と采配を頂戴し、島津中務大輔家久、既に薩州を打立ち海陸を押して、三月十三日、高來の島へ著船し、安德上野介純俊が城に入りけり。

一、此時、高來島中龍造寺の輩、安富下野守が深江の城へは、神代兵部大輔加番にあり。又島原式部大輔が島原の城へは、安富伯耆守・同次男新七郎入番しけり。然るに薩州の敵軍、段々高來へ入るの間、彼の輩是を防ぎ難く思ひしかば、其旨龍造寺へ注進しけり。隆信は此頃須古にありて、彼の注進を聞かれ、いでさらば、我等自身馳せ向ひ、有馬・島津が兩軍を一々驅け散らし、夫より鹿兒島へ討つて入り、義久と有無の勝負を決すべし。政家も同じく參陣すべしと、高來出馬の陣觸を犇々と急がれけり。扨隆信下知ありけるは、今度隆信・政家高來發向の跡の儀は、鍋島剛意入道を留守居とし、龍造寺越前守・納富但馬入道兩人城中にありて、諸事剛意と示し合はせ國衙を守るべし。鍋島飛驒守は彌、簗川の城に居て筑後を押へ、龍造寺上總介は南の關にあり、以前の如く肥後の分內を相守れ、龍造寺安房守は、去々年より一の岳の城に居住するの間、彌、其儘にて內野・安樂・平・飯

守等の番人共と事々談合し、筑前・豐前の領分を守護すべし。其餘大村・松浦の輩は、艪より神代の港へ出勢し、佐賀・神崎・三根・養父・小城の郡士は、皆隆信・政家が旗本たるべしと、夫々に分つて下知せられ、三月下旬、隆信父子既に高來へ出馬あるべきに相決す。

隆信父子高來に出陣

一、隆信父子高來へ參陣の事、鍋島信生、築河の城にありて傳聞き、心中に難思はる事色々ありしに依りて、叶はぬまでも隆信へ諫言を加へ、此度高來發向を留めて見ばやと思はれしかば、急ぎ隆信の居られし須古の城に赴き、隆信へ對面あり、三箇條の凶を擧げて樣々に教訓せらる。然れども隆信承引なく、いやとよ飛驒守、爰許より高來に懸け軍事を指揮するは、偏に韘をさして痒を掻くに異ならず。茲に因て自身彼の表へ馬を出すなりと、更に留まり給ふ氣色もなし。斯かりし間、信生も力及ばず。斯くて隆信・政家、三月十八日より打立たれしに、江上・後藤・神代を初め、小川・納富以下國中の歷々はいふに及ばず、隣國の旗下衆都合總勢五萬七千餘騎、皆兵を以て高木へ押渡る。中にも隆信・政家の佐賀勢は、龍

王崎より纜を解き、同廿日に神代の港に著船し、其外は追々に或は廿二日・廿三日の間三會の津に著くもあり。或は神代に上るもありけり。斯かりし程に、鍋島信生も、簗河の城へは父剛意入道を佐賀より招き居ゑ、隆信・政家と同じく高來へ參陣あり、神代に著船せらる。

島津軍の部署

舊書にいふ、三月廿日より隆信高來へ出張とも。

一、既に龍造寺の大軍押渡るの由、先達高來へ聞えしかば、島津家久・有馬鎭貴評定を極め、夫々に軍を配つて相備ふ。先づ鎭貴が原・日の江の兩城には、其家人堀・志自岐・本田・林田・白石以下、畢竟の者共を籠め置き、鎭貴は其勢五千餘騎、島原へ押出で森岳に陣を張る。島津家久は手勢三千餘騎、三月十五日に安德の城を出で、是も島原へ陣を寄せ、新納武藏守と左右に分れ、要害を前に當て、兩方は牟田にて中一筋の細道に城戸を構へ、柴垣を以て塀とし、其蔭に弓・鐵炮の上手數百人、矢先を揃へ陣を取る。爰に八代の赤星肥後守統家主從五十人計り、今度島津勢に加はりて天晴此時、龍造寺に到つて子供が仇を報はむものをと、齒を嚙みて先陣

に相進む。斯かる半ば、伊集院右衞門大夫忠棟、頃日肥後にありけるが、隆信の出陣を聞いて、兵船を鳥の飛ぶが如くに押〔寄脫カ〕せ來つて、新納と一つに陣を取る。此兩勢合せて凡そ五千餘騎とぞ見えける。

龍造寺勢軍評定幷に其部署

一、龍造寺隆信、三月廿日神代に陣を居ゑられ爰にて軍の評定あり。先づ高來の味方を援はるべしと、所々へ押詰め防戰せられ、同廿四日には、有馬・島津が本陣島原森岳の要害を攻めらるべきに決して、軍を其口々に分けられけり。一手は政家に鍋島信生を相副へられ、敵陣の大手中道へ向はる。此時神代次郎家良、若年に付いて參陣に及ばず。仍つて同名彈正忠陣代にて其手の一勢、皆信生の軍士に相加はる。又一手は江上構兵衞家種・後藤伯耆守家信、城原・塚崎の兩勢を前後に從へ、濱の手に向はる。一手は隆信、旗本を以て山の手へ押詰めらる。其旗本の先手は、小河武藏守信俊〈前名信貫〉。納富能登守家理、二陣は龍造寺下總守康秀〈前名信種〉。倉町左衞門大夫信俊、其外龍造寺の一族幷に土肥・百武・福地・江副・安住・副島・鴨打・德島・鹿江・西岡・澁谷・馬渡・前田・田代・重松・石井・諸岡・秀島・西村以下、都べて佐

嘉・小城・神崎の士卒、段々に備を定めらる。殿は藤津衆嬉野越後守尙道・原豐後守尙家・同越後守氏家等なり。軍奉行は成松遠江守信勝・百武志摩守信兼・圓城寺美濃守・高木太榮入道、軍監は勝屋勝一軒と定めらる。

或はいふ、此時、殿の頭人は鍋島豐前守信房なりと。又いふ、信房は藤津郡を相守り、此時參陣せず、犬塚・永田以下と同じく、隆信高來出馬の留守を守護すとも。此信房、近年藤津の押なり。

一、既に龍造寺の總勢五萬七千餘騎、三月廿四日の朝、口々へ分るゝの時、旗本より軍使を以て下知ありけるは、今度定めらるゝ所の手分、唯今礑と相變じ、中道へは隆信自身向はれ候の間、政家・信生は山の手に向はるべしといひ來る。然る間、兩將は則ち神代衆と共に、山の手へ差して押詰めらる。斯くて隆信、中道に懸り貝鉦を鳴して士卒を進められ、早敵陣の構城戶近く押寄せられしに、敵靜まりかへつて音もせず、暫く控へて矢頃に引請け、柴垣の間より弓・鐵炮を放つこと、偏に雨の如し。時に赤星統家主從五十餘人、一様に赤裝束に出立ち、城戶を開いて切

つて出で、前後を顧みず無二無三に突いて懸る。此時龍造寺の先手、眞先に進みし者共忽ち打負けて色めき立つ。是を見て跡に續きし味方、援はむとすれども、其道左右は沼にて中は僅の細道なれば、前に立つ者漸く五人・七人敵に當たり、後より援はれ樣もなく、一向的になつて射臥せられ、退かむとすれども又後陣閊(つか)へて退かれず。斯かりし程に旗本差支へ、一歩も進み難く。隆信、氣を揉まれ馬廻より吉田清內を先へ遣し、樣子見て參るべしと申されけるに、清內飽くまで推參なる者にて、先へ拔け大音を揚げ、先陣の面々臆して進まざる故に、二陣・三陣・御旗本まで差支へて進まれず。命を惜まず則ち懸からるべき由、大將の御下知なりと觸れたりしかば、先陣の軍士、大に腹を立て、よしさらば死を一擧に定めよとて、小河・納富の者共、左右の沼に駈入り〱相進まむとす。是を見て二陣・三陣・旗本の士卒に至るまで、我れ劣らじと彼の牟田へ飛込みける程に、草摺・上帶・胸板まで見えず、部(はま)りて働き得ず。總じて乘馬は船數詰まりし故、多くは牽かれず、大方は陸立なり。赤星が五十餘人を初とし島津の軍兵、此體を見て得たりか

龍造寺勢敗軍

しこしと、箙を叩き勇(いさみ)をなし、差取り引詰め能き者を見すまし射ける程に、佐嘉勢遁るゝ者もなく、眞先に進みし小河武藏守・納富能登守・龍造寺下總守・倉町左衞門大夫以下宗徒の輩數百人、算を亂して討死し、其外の士卒、右往左往に敗北す。其中に小河が與力安住石見守・堀江兵庫助は小川と一所に討れたり。松田權助も小河が側にて、敵の放つ鴈俣を足に請留め働き得ず。田原源左衞門疵を蒙り、組頭納富常陸介より其場にて胴服を得さす。秀島隼人・同甚右衞門同じく疵を蒙り、同名進士左衞門も矢の手を負ひ、被官兩人討死す。中島次郎兵衞・同九郎兵衞踏留まりて敵二人を討つ。證人野中權右衞門・七田五郎兵衞なり。石井三右衞門、時に十六歲敵を討つて首を取る。證人八戸掃部助なり。田代次郎助、近づく敵三人鐵炮にて打倒す。此外今村右衞門助・牛島新右衞門・高岸主水・川浪作右衞門・青木九郎兵衞等進みて相戰ふ。隆信は大肥滿の大將にて、馬より山駕籠に移り。小高き所に直られ床机に腰を懸け、味方の軍兵共が或は分捕し、或は討死するを少時(しばし)一見せらる。斯くて島津の者共、彌ゝ勝に乘り、龍造寺の士卒悉く

命を殞す。然るに此頃、隆信四天王とて四人あり、成松遠江守・百武志摩守・木下四郎兵衛・江里口藤七兵衛なり。其内、木下は此時鍋島信生の手に屬して山の手の戰にあり。江里口は敗軍の習にて、いづくにありとも知れず、成松と百武は敵を防いで居たりしが、中にも成松は主從十六七人に討ちなされ、とある所に息を休め、傍輩共の段々に討死するを見て、早此信勝が死時も今なるべし。いでさらば大將の目の前にて討死し、兼ねての君恩を生前に報い奉るべしといひ〳〵、金に日ノ出したる扇を開き、敵を麾いで呼ばはりけるは、是は先年豐後の大友八郎を討取りたる成松遠江守といふ者ぞ。敵に於ては不足あらじ。首取つて褒美に預れと高らかに申しければ、薩摩勢百人計り、一同に噇と切懸る。遠江守長刀押取り渡り合ひ、東西切つて廻りしに、家人共皆討たれ、自身は敵七人薙倒し、八人に當るときは終に討たれにけり。嫡子又兵衛も同じく討死しけり。百武志摩守は主從四十餘人にて、隆信を落さむ爲め、近づく敵に駈塞がり〳〵、打戰うて一人も殘らず討死す。圓城寺美濃守は、大將と態と同じ毛の鎧を著して有りけるが、我

こそ龍造寺隆信なりと名乘懸け、敵中へ駈入り切死す。高木太榮入道は、是まで大將の側を離れず居たりしが、つと立つて敵に向ふを隆信見られ、太郎は種に殘れ殘れと制せらる。されども太榮、耳にも入れず敵に駈入り討死す。太榮、俗名太郎といふ。時に隆信の側には小性の鴫打新九郎・田中善九郎・福地のな居たりしを、今はかうよと思はれしにや。先づ鴫打を召して、渠等が前髮を手づから房と切られ、顏に颯とゆり懸けられ、扨宣ひけるは、汝は未だ若年の者なれば、人の嘲りもあるまじきぞ。早く此場を落ちよとあり。新九郎打笑ひ、弓矢取る身の主の先途を見捨て逃げ去る法の御座候や。兼ねての御厚恩には、せめて御目の前にて討死仕るを御覽候へと申捨て、群りたる敵中に主從六人駈入りて、十四五人切臥せ、其身もそこにて討たれにけり。生年十六歲なり。是を見て田中善九郎、泪と共に隆信へ申しけるは、公御腹を召されなば、某御介錯は仕るべしと、唯今まで御前に在り候へども、敵餘りに間近く襲ひ奉り候程に、某は死出の山の御先仕るなりと、福地のなと共に慕ひ來る敵に駈合はせ、散々に切合討死す。福地のな、本名千といふ禿なり。隆信常々戯にのな

隆信戰死

と呼ばゞる。隆信は近習の者共が斯樣に皆討死しけるを見られ、今は早是までなりと大高音を出して其名を名乘られ、終に敵に總角を見せられず潔よく討死せらる。薩州の侍大將河上左京亮進んで、隆信の首を給はりぬ。時に天正十二年三月廿四日未の刻の合戰、隆信行年五十六歲なり。爰に小性の中馬渡九郎左衞門は、敵中に戰うて隆信戰死ありしを未だ知らず。然るに敵の射ける矢を請け留め、其矢を拔かむと田の畔に立寄りける時、隆信、早討死の由聞きしかば、則ち又敵中へ駈入りて討死しけり。江里口藤兵衞と申すは、元は鍋島豐前守の侍なり。未だ生殘りてありけるが、隆信既に河上左京が爲に討たれ、其首敵陣にありと呼ばはる聲を聞いて、今はいづくをか期すべきと、討死の者の首を切り、左の手に提げ亂髮になりて敵に紛れ、島津中務大輔家久が、弓杖にすがり馬上より敗軍を追はせてありける處に相近づき、味方の分捕見參に入ると哃つて、持ちたる首を投懸け家久を礑と斬る。家久運强うして、高股を少し鞍の前輪に切付けられ馬より落つ。時に家久が馬廻の者驚いて、江里口を取籠め切殺しけり。家久起上り、夫は無雙

の剛の者ぞ。助けよ〳〵と申しけれども甲斐ぞなき。此外龍造寺の士卒に中道へ向ひし者、凡そ生きて歸るは稀なりけり。されば其死骸、或は泥土に觸れ或は野徑に横たはり、算を亂すに異ならず。

江上家種奮戰

一、江上構兵衛家種は、城原の軍士を引いて後藤家信と相備にて、濱の手に向はれ、鬨の聲を揚げて攻め戰はれし其半、中道の味方打負けて、隆信討死あるの由聞えしかば、家種、泪を鎧の袖に懸け、さらば爰にて家種も父と同じく討死すべしと、眞先に立つて擊ち戰はる。此家種と申すは、當世無雙の大力にて、實(さね)よき鎧を二領重ねて著流し、三間柄の槍を二三本一つにひつ掴み、群る敵に割つて入り、死狂に狂ひて當るを幸ひに打倒さる。是を見て城原の一列、家種の命に代らんと、執行越前守種兼を初とし、嫡子新介種直・次男新九郎・同名式部大輔・同與三右衞門・同内藏助・同四郎左衞門・同又兵衞・諸岡安藝守・同名對馬守・同次兵衞・同内藏允・江上左近大夫澄種・同名孫右衞門隆種・同太郎次郎・同彦四郎・枝吉三郎右衞門・此時周防守と號す。島治郎大輔・同上野介・同與五郎・同彌次郎・生野孫左衞門・江副中務允・西筑前

守・畑地主馬允・牟田口進士允・古賀右衛門允・石橋三郎兵衛以下、執行一組三十餘人、諸岡一組廿餘人、我れ先を爭ひ亂入り〳〵相戰ひ、一人も殘らず同じ枕に討死す。其中に鍋島丹波守種房・枝吉清兵衛・此時大藏。諸岡清左衛門・江藤助右衛門・青柳九郎左衛門・小柳清右衛門は、家種の前後を相離れず命を捨てゝ打戰ひ、枝吉は敵の首を取り手疵三箇所蒙り、小柳も敵兩人討取り、家種の實檢に入れ、其身四箇所の槍手を負ひ、青柳も同じく敵の首を取る。斯くて家種は、敵多勢にて押取籠め散々に射れども、鎧よくして裏掻かず、件の槍を以て敵數十人討倒し、當りを拂つて見えられしかば、敵一人も近付かず。斯かりし程に、さのみは如何に戰ふべきと、死殘りし者共僅を連れ、三會まで出でられけり。道々にて樣々の難儀多かりしに、鍋島丹波守・江藤助右衛門其外相働き、漸く小船を求めて先づ筑後へ押渡り、夫より城原の城へぞ歸り入られける。

家種城原に退却

一、後藤伯耆守家信も、塚崎の軍兵を司つて、江上家種と同じく是も濱の手へ向はれしが、戰ひ半なりし時、隆信討死ありし由、陣中隱れなくして、家信大に嗟嘆あ

後藤家信奮戰

り、一向討死を思はれしにや。自ら敵に當ること七八度、大長刀にて薙臥せ〳〵目を驚かす振舞なり。是を見て弓奉行執行三郎兵衞、主の前に駈塞り敵二人切臥せ、三人に當つて討死す。其外八並新三郎信明・家信の異弟なり。馬場隼人佐・古賀紀伊守・鬼石周防守・古川和泉守・千綿一平・畑地了信・同七兵衞以下、家信を討せじと近づく敵に馳合せ、我れも〳〵と討死す。此外河原豐前守高・同善九郎疵を蒙る。爰に於て家信も早討死と見えける處に、成松新左衞門馳せ來り、當の敵二人切倒し、家信を援ひて一所になる。斯かる處、久池井彌五左衞門以下二三十人來り加つて、家信の馬の前後に立隔り、由なき公の御死狂や。いざ〳〵御供申さむと馬の口を把り、汀に沿ひて引退き、神代の港に著き爰にて後れし味方を待合はせ、心靜に船に乘り塚崎の城へぞ歸り著しける。

一、鍋島飛驒守信生は、政家の副將として山の手へ向はれけり。時に神代次郎家良の家人等、同名彈正忠を陣代として信生の手に相加はる。斯くて合戰未だ亂れなき前、馬渡賢齋・矢作小右衞門純俊味方に先を懸け、島津勢の陣場より艮の方、

鍋島信生敗れて簗河城に入る

丸尾より乘入る。然るに此山の手は、薩州の猿亘越中守・同子息彌次郎以下差固めたり。其勢の中より村岡加右衞門良珍と馬渡賢齋太刀を合せ、賢齋、村岡に討たれぬ。家人も一所に戰つて疵を蒙る。村岡も亦手を負ひけり。矢作小右衞門は敵中へ切入つて、薩摩の侍香西右馬助を討取りたり。斯くて敵味方亂れ合ひ火を散らして戰ひしに、佐嘉勢大に利を得、薩摩陣を切崩し、軍將猿亘彌次郎を討取り勇み進んで見えける處に、中の手の佐嘉衆敗軍して、隆信落命ありし由、陣中風聞ありしかば、致家・信生の士卒、忽ち力を失ひ悉く敗走す。爰に於て神代勢の中より神代彈正を初とし、同名中務少輔・福島加兵衞・三瀨大藏・梅野大膳・國分左馬助・千住左助・古川藏人・大江相五郎・神代相右衞門・藤原主水允踏止つて戰ひ死す。鍋島の手よりは加々良大學・小森伊豆守以下討死しけり。政家は父隆信の戰死を聞かれ、生きては爭(いかで)か歸るべきと、數度引返されしを、水町彌太右衞門・犬塚新四郎其外數輩立塞がり、無體に引立て退きけり。信生も討死すべしと、六七度に及び取つて返されけるを、中野式部少輔、信生の鎧の袖にすがりて三會の方へ

引退く。此度信生に從ふ輩には、鍋島太郎五郎家俊・同名大膳信清・綾部新五郎・南里太郎三郎・小森甚五・中野式部少輔、此外槍持の増岡軍右衛門・草履取の笠原與兵衛幷に太郎五郎の從者小宮三之允、彼是合せて九人なり。敵是を見て必ず大將とや思ひけむ。五十人計り遁さじと追駈け來る。時に綾部新五郎引返し、敵と組んで首を取り、中野式部敵二人を討ち、又信生も手づから敵を切留めらる。斯かりし程に此敵恐れて引退く。然る處に敵又三百計り、鳥毛の指物さゝせ急に追駈け來り、河越に散々に射る。時に皆々取つて返すに、南里太郎三郎矢に中りて臥し、鍋島太郎五郎、敵と引組み押へて首を取り、中野式部槍を以て突いて懸る。其勢にやしらみけむ。此敵も引返しぬ。是は島津中務なりけり。斯くて信生は、從者共の働にて廿四日の夜に入り、漸く三會の船場へ出でらる。道にて木下四郎兵衛・北島治部允追付申す。爰にて信生、隆信死生必定の所を聞かまほしき由、申されしに依つて、木下は又敵中へ立歸りぬ。夫より信生主從十餘人、田雜大隅守が船に乘つて三會の津を押出さる。此時、江上の家人小柳清右衛門、今日の軍に痛

手負ひて行歩不合期なりけるを、家種より斷にて、信生の船に乘せられけり。扨信生は先づ岳崎へ船を寄せられ、少しの間休息せられ、爰にて密書を數通認められ、先達小早より筑後衆中へ差送られ、夫より筑後へ渡海あり。榎木津へ著かれ簗河の城に入られぬ。

龍造寺軍の戰死者

一、右此外に今度龍造寺の軍士に討死の人數、

龍造寺右馬大夫、同名右衞門大夫、同名雅樂助、同名刑部左衞門、問田兵部大輔、原豐後守、同越後守、同太郎五郎、千布因幡守、小川石見守、同孫太郎、綾部土佐守、同左近允、同五郎左衞門、重松備後守、納富伊豫守、同新次郎、同相兵衞、德島甲斐守、同肥後守（此兩德島主從三十餘人。）西岡美濃守、勝屋勝一軒、同名伊豆守、同相五郎、澁谷次郎大輔、土肥佐渡守、鍋島淡路守、岩松善助、田原伊勢守、秀島雅樂助、西村伊豫守、前田吉右衞門（主從七人。）藤崎筑前守、藤崎次兵衞、鹿江五郎三郎、馬場筑前守、馬場藤五兵衞、安住左衞門佐、福地藏人、福地藤右衞門、鷲崎右京亮、野口右馬允、田中權右衞門、武藤將監、石橋新四郎、石橋相次左衞門、同名六郎左衞門、成富玄意、

同名兵部左衛門、古川主計允、古川左介、糸山將監、眞島護介、中島彌十郎、同名與次郎、橋本內藏允、大野源太左衛門、平島汲濟、久我加兵衛、豐田大和守、同名善左衛門、大熊左馬助、津山主水允、蒲原源左衛門、江田又十郎、古賀左衛門大夫、大江左馬允、馬郡藤內、江副孫太郎、同名相五郎、同名修理助、太田加兵衛、立石孫次郎、堤越後守、同名兵部少輔、同名藏人、同名相右衛門、上野丹波守、香田甚內、白仁乘徹、鵜池藏人、同主馬允、牟田周防守、同相右衛門、古館掃部允、同左近允、吉田又次郎、石井安藝守大串次郎三郎。淵ノ上又次郎。同名新右衛門、同越後守、同兵部少輔、同四郎左衛門、同內藏允、同大膳助、同源右衛門、同宮內少輔、同九郎左衛門、同源左衛門、同帶刀、同左衛門尉、同四郎兵衛下人彌三。今泉孫四郎、西牟田紀伊守主從十七人。同名彈正忠、西牟田但馬守、兵動彌三郎、同右衛門允、兵動二右衛門、同彌左衛門、東兵部少輔、東知齋、香田源介、副島左近允、同名喜左衛門、川浪攝津守、同敎也齋、同名權介、同名新左衛門、原口對馬守、同名彌左衛門、梅崎四郎兵衛、同新九郎、同川右衛門、蘆原富慶、早田小三郎、倉永恕介、石田主殿助、松永三郎兵衛、村岡十郎左衛

門、藤山忠次郎、永島木工右衛門、池田式部丞、山本忠介、宮副監物、岩部一乘房、青木主税、於保藤太郎、一卜齋、榮鑑齋、中野對馬守、同名甚五左衛門、吉富木工左衛門、鬮新右衛門、中牟田六郎兵衛、山口七郎兵衛、緒方治部少輔、伊東一慶齋、津留傳兵衛、今村對馬守、同左衛門佐、中田町左馬允、牛島太郎三郎、吉岡次郎九郎、乙成權兵衛、深町天下左衛門、永松六左衛門、永田淸左衛門、八田主馬允、横尾勘太左衛門、服部加兵衛、岩瀬與七郎、島原兵部少輔、木戸監物、石丸彌次郎、松田源內、大塚內藏允、同名喜兵衛、同淸左衛門、同名四郎右衛門、深町理卜齋、岸川彌七兵衛、陣內慶朝、似我權內（本名服部。）石動藏人、德久新左衛門、甲斐彌三郎、窪彌三郎、（納富能登守內）樺島新右衛門、田島三郎兵衛、（生捕に成後歸る。）（田尻丹後守一族、筑後人）田尻但馬入道了哲、（但主從田尻出勢の內。）（西牟田播磨守弟、筑後人）西牟田紀伊守統賢內、（主從十七人。西牟田彈正忠・同名但馬守。）（筑後人）鹽塚備後守、（中間。）同名彌右衛門、同名喜左衛門（上に同じ。）水町勘右衛門、田島淸八郎（三郎兵衛の子。）大串藤次郎（無屬人。）三郎右衛門、四郎兵衛、主馬允、市十郎、源左衛門、六郎左衛門、十助、赤房麻呂、角助、忠次郎、勝次郎、孫六、近十郎、藤左衛門、市之允、兎介、治部左衛門、孫三郎、彥

兵衞、源左衞門、吉十郎、與一左衞門、彌太右衞門、彌右衞門、與太郎、藤太左衞門、助次郎、善介、源介、孫介、淸三郎、彌六、淸右衞門、右京、神左衞門、新兵衞、忠五郎。

今度龍造寺の諸勢討死の侍、都合凡そ二百三十餘人。

ある舊書に、雜兵合八百餘人とあり。

手負數を知らず　內杉浦虎王丸歲十五、肩の上に疵く。（主從三百餘人出勢す）

鍋島豐前守信房疵を蒙る。（藤津衆之に從つて出勢す。）

或は云ふ（此豐前、此度高來出陣にあらずとも。）

ある舊書に云ふ
一、今度島原合戰、三月廿四日辰の刻、龍造寺敗北、隆信生害あるとも。（本文には未の刻と。）

或は云ふ
一、隆信落命の時、敵河上左京亮と一句問答の上、其死證を授けられしとも。

或は云ふ
一、鍋島豐前守は、隆信生前より留守居の列に入つて、今度藤津郡を鎮め島原へ參陣せずとも。

或は云ふ
一、今度島原に於て推參申したる吉田淸內、敗軍以後逐電せしを尋出され、生害せらしと。

も。

一、或は云ふ鍋島信生、今度島原退口の時、神代より出船ありしとも。又多比良の港よりとも。

一、信生今度簗河へ歸城、先づ小保へ著船あるの時、三根郡續命院の重松四右衞門範幸、早速小保へ出合ひ信生を迎へて城へ入れ申す。

一、信生、今度島原參陣の以前より大野の城の加番として、富岡喜左衞門・相良清左衞門・久納市右衞門・田尻昌賢・秀〔島脱カ〕牛右衞門・下村生運等を差越され置きけるに、此度島原の軍に隆信戰死ありし由、即日大野へ聞え、中にも下村生運、信生の死生を心元なく思ひて、中原主水に家人源五左衞門相副へ、食籠・重箱等を持たせ神代へ差遣し、其安否を聞きける處に、折節木下四郎兵衞參合ひ、信生は恙なくおはして、早出船ありし由申しゝに依つて、下村が使兩人は、木下と打連れ大野へ歸り、翌くる夜明より加番人殘らず信生跡を追ひ、簗河の如く打渡りけり。

北肥戰誌卷之廿八終

龍造寺政家鍋島信生歸城

龍造寺政家鍋島信生歸城の事

既に天正十二年三月廿四日、島原の合戰過ぎて、龍造寺政家は佐嘉へ歸城せられ、鍋島信生は簗河へ歸陣あり。其由先達て聞えしかば、重松四右衞門範幸、此時筑後山門郡蒲池の城警衞なりけるが、信生を迎ひ入れむと急ぎ榎木津まで出向ひ、是を守護して簗河の城へ誘ひ入れ、武具・馬具の修理を調へ、中野式部へ引渡し、其身は又蒲池へ歸りぬ。斯くて信生、簗河へ歸著ありしかば上下悅ぶ事限なし。中にも父剛意入道は、嬉しさの餘り落涙止まらず、御邊、此度生殘りしは偏に龍造寺八幡の御加護にて、國家長久の基なりとぞ悅び申されける。

安富下野守純泰佐嘉に赴く事

爰に高來嶋深江の城主安富下野守純泰は、兼ねて龍造寺へ一味の者にて、頃日は居城深江に楯籠り、父伯耆守純治は次男新七郎を具して、島原式部大輔純豐が城の加番として島原にありけり。然るに深江・島原等の城々へも、薩摩勢早取り懸りて、今度隆信以下の佐嘉衆悉く戰死あるの由、矢文を以て申遣しけり。されども深江の城中には、是を信用せざりし處、彌〻其實相知れしに依りて、城主下野守大に悔み、さらば此城を持ちても甲斐あらず。所詮佐嘉へ赴き、龍造寺に忠戰をも相勵むべしと決定して、折節、神代兵部少輔貴茂（たかもち）、深江の城に加番の時分故、貴茂と同心に申合せ、父伯耆守・弟新七郎が島原にありしをも振捨て、親類・家人はいふに及ばず、城中の老若男女一人も殘らず引連れ、其外極老の專昌寺の住持九譽上人幷に同宿共迄、一同に深江を退き、先づ神代まで出でけるに、神代へも早薩摩勢入込みしを、安富の家人田代利右衛門一番に驅合はせ、敵皆々追拂ひ、城主兵部少輔と同じく神代

安富純泰佐嘉へ赴く

の城へ著き、夫より安富は、神代と引分れて一家悉く船より、龍造寺の領知藤津へ押渡りけり。されば此時、彼の九誉上人を初め足立ざる女童共、深江を出でてより溫泉山・鞍懸越の山々、其嶮難を越えて、僧俗男女都合二百餘人、道々の難儀いふ計りなし。斯くて安富、三月廿六日在所を立退き、藤津へ來りしかば、政家・信生特に懇志を加へられ、則ち藤津にて少地を給はりしが、後には名字を變へて、深江下野守とぞ申しける。

一、此下野守が父伯耆守は、次男新七郞と共に、島原式部大輔が城へ隆信の下知に依りて、去年以來加番に赴き居たりしに、今度龍造寺の諸軍、利を失ひ悉く引退きしゆゑ、城主島原も薩摩・有馬の大軍を防ぎ得ず、敵に取籠められ、心ならず有馬へ退きけり。然る間、伯耆守父子も力及ばず、島原と同じく有馬へ赴き、有家といふ所に、小時は囚の如くにて居たりしを、嫡子下野守、猶も龍造寺へ志を通じ、佐嘉へ赴きける由隱れなく、其科par罰差募り、五月十五日、敵の爲め父子共に覺に討果されけり。時に新七郞、家人共と同じく比類なく相働き討死しけるとぞ

聞えし。扨島原式部大輔は、同名伊賀守と同じく、其後薩摩勢に引立てられ、すべき樣なくして、一家悉く薩摩へ赴き、伊集院に從ひありけるが、時節を窺ひ忍び出で、肥後の南の關まで逃延びしを、島津の家人等追駈け來り、妻子眷屬一人も殘らず討果しけり。

田雜父子軍忠龍造寺靜謐の事

田雜父子の軍忠

此時、田雜大隅守といふ者あり。元來肥後の者なりしが、さる仔細あつて壯年より紀伊國へ赴き田雜に居住し、年久しく星霜を送り、海賊の大將となりて其本名を隱さむ爲め、則ち在名を以て田雜と改めけり。元は相良の一族なり。然るに此田雜、近年又舊里へ歸り、九州の海邊に徘徊し、頃日は肥前の內高來・藤津の津々へ船を寄せ、龍造寺へ奉公を相望み、去々年筑後の田尻が籠城の時も、佐嘉へ加勢として船手の番船にありし者なり。されば此度、島原の軍にも合戰の勝負を窺ひ、多比良・三會・神代等の渚に手船を著け置き居たりし處に、鍋島信生、三月廿四日の夜、島原

より歸陣の期に及び、折節船場にありて、早速手船に乘せ申し簗河へ送り屆けぬ。時に船中にて中野式部が取成を以て、彼の田雜、竟に鍋島の家人となりけり。斯くて大隅守、新參の功を立てばやと思ひしかば、寺井津の地下人吉田左近・篠町織部・宮原藤五左衞門・高田木工之允・同仁右衞門以下を差語らひ、父子三人家人等を召具し、薩摩の船大將阿久禰大炊助が、肥後の三隅の瀨戶に懸りてありけるに押寄せ散散打戰ひ、難なく其船を乘取りて、大炊助を初め七十五人を討取り、則ち其死證を信生へ見せ申しけり。信生大に感賞ありて、大隅守以下寺井の地下人共へも、各〻感狀を得させられけり。

龍造寺靜謐の談合

一、龍造寺政家、島原より佐嘉へ歸城せられ、納富但馬入道道俊・龍造寺越前守家就以下の輩相集り、安房守信周は、筑前一の岳の城より馳來られ、國家靜謐の談合樣々なり。時に安房守の方より急ぎ簗河へ使を立て、鍋島信生を佐嘉へ招かれしかども、信生は聊か思慮ある由にて來られず。仍りて安房守自身、寺井の長福寺まで來りて、信生へ度々使を遣し、國家相續の談合に候間、枉げて佐嘉へ來ら

るべき由頻りに申されし故、信生力に及ばずして、先づ長福寺に來り安房守へ對面あり。稍〻少時密談せられ、信周は佐嘉へ歸られ、信生は簗河へ歸城ありけり。其後信生、簗河の城へは龍造寺上總介を南の關より招き居ゑ、其身は蓮の池の城に移られ、晝夜油斷なく方々に到り、色々才覺を以て謀畧を回されし間、龍造寺の城下、少しも騷動せず、國中しかと靜謐し、近國の旗下中も彌〻異心あらざりけり。

一、四月五日、肥後國小代伊勢守親傳（ちかつぐ）の老臣荒尾攝津守家經、龍造寺に至つて彌〻別心あらざる由、佐嘉へ神文を送る。

一、五月廿日、大村丹後守純忠、同じく神文を贈り、質人として同名右衞門大夫家秀を差出す。

一、六月二日、肥後國隈部但馬守親永・同嫡子式部大輔親泰、同じく神文を送る。

一、同月廿四日、筑後國黑木伯耆守家永、同じく神文を送る。

深堀中務大輔純賢有馬の使者を討つ事

彼杵郡俵石の城主深堀中務大輔純賢も、兼ねて龍造寺に一味の者なり。然るに有馬左衞門佐が方より、温泉山の住僧眞純坊・大乘坊、此兩僧を使にて申し遣しけるは、鎭貴、此度島津と勢を合せ龍造寺隆信を討取りぬ。茲に依つて今島津の武威、巳の時と曜きて、肥後・筑後の諸將悉く薩州の下知に隨はずといふ事なし。定めて貴方も同意たるべし。其儀ならば純賢と鎭貴勢を一つにして彼杵郡へ出張し、龍造寺が殘黨殘りなく退治申すべし。若し又同意なくば、卽時に其表へ取懸け、先づ御邊の一家を誅伐せむとぞいひ送りける。深堀、此使を打聞きて、惡しき有馬が使かな。一向に一味せよとならば、兎にても角にてもあるべきものを、若し同意せずば此表へ來りて、我等が一家を誅伐せむとなり。物をかしのいひ事かな。深堀が手並の程は、兼ねて音にも聞き目にも見つらむものを、所詮彼奴等を忻つて、手を燒かせむと思ひしかば、目をしばたゝき兩僧に向つて申しけるは、元より深堀は有馬

深堀純賢有馬の使者を討取る

と親しき者なり。仰までも候はず。則ち御一味申すべし。去ながら軍の密談は武士の業にして、曾て沙門の知る所にあらず。然るに何ぞ出家・山伏を以て仰せ給はるこそ心得ぬ。彌〻我等へ御入魂あらば、御一族の中然るべき侍を、爰許へ差越さるべし。心底を殘らず申談じ、龍造寺の一家を不日に討果すべしとぞ返答申しける。兩僧、有馬へ歸りて此趣を語りしかば、鎭貴、深堀が僞り謀るとは夢にも知らず尤もと同じ、頓て從弟の荒木加兵衞に老臣木崎市右衞門を差副へ、深堀へ遣しけり。純賢思ふ樣、有馬を方便り母が浦へ兵船を用意し、荒木・木崎が主従五十餘人一人も殘らず其首を取り、龍造寺へぞ差贈りける。斯かりし間、政家・信生以下打寄りて、隆信の死後百日も未だ過ぎざる中に敵の首を見る事、偏に深堀の忠心なりと甚だ悅び思はれけり。

一、頃日有馬鎭貴より、家人本田伊豫守に人數を副へて、彼杵・藤津の邊へ差渡し、龍造寺領の内所々を燒拂ひ、其上隆信より其所の鄕士共へ給はりたる知行の判物を皆取上げ、新に鎭貴より判形を各〻差出しけり。

龍造寺島津和平の事

今度隆信戰死ありしに依りて、龍造寺には衆議ありて、父の怨には倶に天を戴かずと、弔軍すべきに決定して、既に諸軍を催さるべきの處に、秋月長門守種實の方より使節あり、政家・信生へ申されけるは、未だ花洛の騒動すら靜まらざるに、九州又大亂に及ばむ事、第一天下の妨妖といひ、次には國民の苦みなり。然る間、先づ私の憤を止められ、少時島津と和平あり、又折を得、鬱胸を達し天聽を晴されなば、頗る穩便なるべしと申送られしかば、政家・信生ともに老士に評定を加へられ、兎も角もと返答せられ、薩州への發向をば止められけり。

今度、島津と龍造寺和平あり。佐嘉より薩摩への質人、一番に小林播磨守、二番に土肥相左衛門、三番に副島長門守、何れも五六箇月宛薩州にあり。天正十四年六月中旬より秀島進士左衛門家周、（初は四郎左衛門。）薩摩へ赴き翌年の夏歸る。

大友勢筑後國亂入所々軍の事

今年_{天正十二。}の夏、龍造寺より諸境目警衞として、田尻丹後守鑑種を淵底案内者たるに依りて、筑後國へ差遣さる。時に先づ鍋島信生、鑑種を召して、御邊は今度境目番として筑後へ越さるべし。然れば舊知にて候間、筑後の內、田尻・龜尻・海津此三箇村を以前の如く知行せられ、境目よく〳〵勤番ありて給はるべしとありしに依りて、田尻則ち領掌申し、手勢を以て筑後へ打越え、海津にしかと在村しけり。

田尻鑑種筑後に出陣

一、斯かる處に同六月、豐後より隆信戰死の由を聞き、彼の領知を切取るべき時、此節なりと大守大友義統下知を加へ、其老臣志賀安房入道道輝・朽網三河入道宗歷幷に舍弟田原六郞親家・大友九郞親盛に大勢を相副へ、肥後・筑後の間に差向けけり。此勢、旣に黑木表野田・簑納に著陣し、先づ黑木兵庫入道宗英・同嫡子伯耆守家永が龍造寺方にて居たりし上妻郡猫尾・高群(たかむれ)の兩城を攻めむとす。斯くて黑木父子、僅の手の者を以て、豐後の大勢を防がむ事難儀に思ひしかば、急ぎ佐嘉へ

大友勢筑後國に亂入

注進して加勢を乞ひけり。之に依つて政家・信生談合せられ、則ち猫尾の城へは倉町近江守信光・久市白又右衞門、高群の城へは土肥出雲守信安・馬場清兵衞信員を合力として、罷越すべき由下知せられ、扨又田尻鑑種が、頃日筑後の海津にありけるをも、猫尾へ加番仕るべき旨、政家より倉町へ申含められけり。斯くて此佐嘉衆、七月十三日肥前を打立ち、即日筑後に著陣し、中にも倉町は直に海津へ赴き、田尻に對面して政家の命を相達し、則ち一同に猫尾へ入城すべしといひけれども、城主黑木伯耆守、色々存じ分ども之あり、先づ猫尾加番の輩は、彼の城入番に及ばずして上妻表に在陣すべき由。之に依つて同月廿九日、田尻・倉町・久市白は上妻の內福島村に陣を張り、高群加番の兩人は、頓て彼の城に入りけり。然るに八月上旬、豐後の軍士、猫尾の城へ取懸りしかども、城主伯耆守、持口を守りて防戰し、豐後勢利あらず引退く、

一、七月二日、肥後國戶原能登守親幸、龍造寺に對して別心なき由神文を送る。

一、同月十三日、同國隈縫殿入道覺甫・筑後國大善寺の衆徒善住院観明坊・政所觀行

坊・東琳坊・祐眞坊、同じく龍造寺に對し、別心なき由鍋島信生へ神文を送る。
一、八月廿日、筑後國戸原薩摩入道紹心・同名下野入道宗胤異心なき由、信生へ神文を送る。
一、同月廿四日、肥後國甲斐中務少輔重信・同少輔太郎親盛・同名掃部入道紹眞、同じく信生へ神文を送る。

同合戰

一、同月十八日、戸次伯耆入道道雪・高橋主膳入道紹運、豐後勢に加勢として、兩勢を合せ一萬餘騎、筑前國立花・寶滿の居城を發し、筑紫・秋月が領內吉岐・川島・鳥越・山鹿・夜須・山隈・三原等の敵地を恐るゝ所なく討つて通り、一夜河を馳渡し、石垣原を歷て耳納山に著陣す。時に島津・龍造寺の兩旗下草野・星野・問注所が家人共、一所に集まりて是を遮りしかども、戸次・高橋物ともせず一々に馳散らし、北野・河內を押下り、野田・耳納・高群の山路嶮難十餘里の行程を、一日の中に易々と打つて嶺々に攀登り、所々に陣を固めて、先づ龍造寺方の蒲池兵庫頭家恒が山下の城を攻めむとす。斯かりし程に家恒、彼の大勢を防ぎ難く降參の由申しければ、

田尻鑑種加恩せらる

戸次・高橋是を発し、夫より黒木兵庫入道が高群の城を攻めむと議す。

一、戸次・高橋の兩將、既に高群の城を攻めむとする由聞えしかば、龍造寺より當城加勢の土肥出雲守・馬場清兵衛より早速佐嘉へ申送り、援兵を乞ひけり。茲に依りて政家より田尻鑑種が、頃日福島村に陣してありしを、高群の城へ早々加番致すべきの由、八月廿二日に申遣されけり。此時、鑑種へ筑後に於て四百九十町を加恩せらる。仍りて政家・信生より田尻に給はる狀に云く、

從二明後日廿四日一至二高群一可レ被レ成二御勤番一之由候。御粉骨之次第御頼敷被レ存知一候也。今度之依二御忠義一江上四百町・藏永四十五町・野瀬四十五町地之事、可レ進レ之置一之由候也。早々御知行肝要候。恐惶謹言。

八月廿二日　　信生 判

鑑種老
参る申給へ

今度鑑種御事、至二高群一可レ有二登城一之由申入候之處、以二御納得一可レ被レ差二籠一之由候。珍重候。就レ夫其方御事、當未無二可レ申承一覺悟不レ淺候之條、不レ能二書載一候。

恐々謹言。

八月廿四日　龍氏政家判

田尻文三郎殿
参る申給へ

一、斯くて田尻丹後守鑑種、龍造寺の下知に依つて、同八月廿四日、上妻の陣を拂つて、高群の城加番の爲め長田村まで打出でけるに、早今日廿四日に、高群の城、戸次・高橋に攻落され、佐嘉よりの加勢土肥出雲守・馬場淸兵衞は肥前へ退き、城兵は悉く降を乞ひて大友方へ相隨ひ、戸次・高橋は、同廿四日の晩權現岳に陣を取る由聞えしかば、田尻は手を空うして、本河の如く差下り、又々海津村へ討入り、上妻に陣したる佐嘉勢倉町・久布白も、下目の如く繰取りけり。

一、戸次道雪・高橋紹運は、八月廿四日、黑木が居城高群を攻落し、翌廿五日の朝、權現岳より河崎に陣替し、廿八日、坂東寺に陣を張つて、西牟田播磨守鎭豊が領知を燒拂ふ。爰に於て龍造寺方高良山の座主良寛以下筑後國の輩、多く大友方へ降參す。此事、佐嘉へ聞えしかば、政家・信生相議せられ、急ぎ龍造寺上總介家晴

猫尾城陷落

を以て、彌、簗河の城を守らしめ、其上内田肥後入道榮節・空閑左衞門大夫家盛・犬塚三郎右衞門家廣を加番とし、又頭日倉町近江守・久布白又右衞門等が上筑後の内に在陣しけるを、下筑後の如く繰取り、田尻丹後守彌、海津村へ居置きて、大友勢と相戰はむと用意ありけり。然るに此時島津兵庫頭忠平、八代にありしが、薩・隅・日三箇國の軍兵三萬餘を相催し、肥後國の龍造寺を攻めさせ、頓て筑後へ討入らむとす。

一、戸次道雪は、下筑後の內山崎に陣を移し、九月一日、黑木伯耆守が猫尾の城を攻めけるに、家永堪へず落城す。夫より道雪、山門郡に來りて、同月九日、瀨高近邊の村々に討入りて所々を燒拂ふ。此時海津にありける田尻鑑種、鍋島信生の下知に依つて大友勢を防がむ爲め、同九日、海津より垂見村に陣更し、則ち爰に要害を取構へて差籠りけり。此日大友勢白鳥表へ討ち入るに付いて、田尻則ち馳向ひ是を追返す。然る處に豐後衆、又鷹尾へ相働く由聞えしに依つて、田尻早速取懸けしかども、其事虛說なりし故、頓て垂見へ陣を歸しけり。

一、同月十五日、戸次入道道雪、山門郡の内所々に相働き、高橋入道と勢を合せ、坂東寺へ陣を替へ、豐後勢の一將田原六郎親家に參會し、軍談を決して、先づ西牟田村・酒見村榎木津の在家數百軒悉く燒拂ひ、扨龍造寺上總介家晴が守りたる簗河の城を攻めむとしけり。されども當城は無雙の要害といひ、其上城主家晴、兼ねて用意しければ、空閑・內田・犬塚以下の加番人を初め、草野左〔衛カ〕右門尉家清も當城へ來りて。彼是數十騎を以て楯籠り、其兵糧の料として、城の四維六十餘町の稻を悉く刈採り城內へ籠置き、海手には數十艘の番船を繫ぎて敵を近づけず、所々に端城を取構へ、佐賀への通用を自由にす。其端城といふは、先づ城より凡そ五十町、北の方酒見の城に大田右衛門大夫家豐、乾の方榎木津の要害に中野式部少輔清明、東の方蒲船津の城に百武志摩が後家圓久尼大カ、南の方蒲池の要害に重松四右衛門範幸、此外垂見に田尻丹後守鑑種、各、其武備を固うしければ、道雪・紹運を初め豐後の輩、卒忽に簗河へ取懸け得ず。先づ輕卒を進めて道々を放火し、中野式部が榎木津の要害をぞ攻めさせける。中野、聞ゆる者なりしかば、

蒲船津合戰

更に事ともせず城中を驅廻りて士卒を下知し、鐵炮を打たせ矢を放ちて、身命を惜まず防ぎし間、戶次・高橋が軍兵共、爰を左右なく破り得ず。夫より百武が後家圓久比丘尼が籠りたる蒲船津の城へ取懸る。彼の圓久といひしは、比類なき剛の者にて、長高く髮長く大力の荒馬乘なり。過ぎぬる三月、夫志摩守、島原にて戰死の後、信生の命に依つて、女なれども志摩守に變らず當城を守り、元より男子あらざりしが、家人等を從へ居たりしかば、大友勢の寄ると聞いて、大長刀を横たへ城戶口に出で、手の者を勵まし防戰す。斯かる處に中野式部、榎木津より馳來り、圓久を援ひて相戰ふ。斯かりし程に、戶次・高橋が者共、爰をも打捨て又坂東寺へ引退く。斯くて豐後方の諸勢相集まり、龍造寺方三池河內守親基が、三池の古賀の城・中野兵庫助が江浦の城を攻めけるに、兩人則ち降參す。

一、斯くて筑後の龍造寺方、大友勢に攻められ、多くは下城に及ぶ由、追々佐嘉へ相聞ゆ。斯くては叶ふべからずと、政家・信生談合せられ、田尻鑑種が近日垂見に在村しけるを、蒲池の城へ差籠められ、大友勢を防がるべきや又鷹尾の城へ置か

るべきやとありける處に、鷹尾は元來彼の鑑種が舊地なる間、鷹尾の城番然るべしとて、同九月十八日より田尻は鷹尾へ入城しけり。然るに江浦の中野兵庫助、此時大友方になりて、度々討出でしに依りて、田尻、日夜の油斷なく其境を守りて勤番す。

一、同九月十五日、肥後國隈部但馬守親永・龍造寺に對し異心あらざる由、鍋島信生へ神文を送る。

一、同廿一日、彼杵の西鄉伊勢守幸武、同じく信生へ神文を送る。

一、同九月、政家・信生思慮あるを以て、成富十右衞門信安を中國の小早川隆景へ差遣し、羽柴秀吉に通ぜらる。秀吉則ち一札を以て禮謝あり。

一、十月一日、肥後國隈部鎭遠、龍造寺に對し別心なきの由、信生へ神文を送る。

一、同月初、大友の軍士戸次道雪を軍將として數千騎相集まり、龍造寺上總介が築河の城を圍み攻む。されども持口堅固にして、攻落すべき樣もなし。道雪、城の體を量り見て、則ち士卒を引揚げ、同月三日高良山へ取登る。

龍造寺政家羽柴秀吉に通ず

一、翌くれば十月四日、戸次・高橋相談して、草野長門守鑑員を攻むべしと、高良山の陣を發し草野の里城に取懸りけり。此時鑑員が嫡男左衞門尉家淸、簗河の城にありて、家人等多く家淸に從ひしかば、當城中無勢にして、鑑員防戰叶ひ難く外郭を打破られ、發心岳の本城に取登る。時に寄手の中より今村彌助軍功あり。斯くて戸次・高橋の兩使、夫より生葉へ打つて通り、島津方星野中務大輔鎭種が妙見の城を攻めけるに、折節鎭種は、兄弟ともに近日筑前國若杉の城の警衞として留守なりしかば、其子供長虎丸・熊虎丸未だ幼稚の者にて、敵の大勢を防ぎ難く思ひしにや。城を落ちて逐電す。斯かりし程に、戸次・高橋頗る武威を振ひて、其近鄕の村里民屋を悉く燒拂ひ、問注所治部大輔鑑景が井上の城を攻むべしと、其通路を取切り、豐後よりの一將田原六郎親家と陣を一つに合せ、生葉に先づ屯しけり。然る處に彼の田原親家、已れが士卒に議しけるは、今度太守義統公より敵征伐の爲め、某等を差向けられ、數日の軍勞莫大なるに、あの道雪・紹運め、奚ぞや下知もなき處に、筑前の預を明けて此所に來り、我々が軍に差加はり、所々の

田原親家府内に歸る

城を攻落すに依つて、今度の戰功は悉く彼の兩入道が名に顯はれ、此親家が武名は、一向なきが如くに隱る。所詮他人の功を立てむ爲め、命を敵に抛つて久しく軍を當陣に曝さむより、急ぎ豐府に歸つて席を温めむに如かずと議す。士卒も亦遠境の長陣に困窮して、是に同意しければ、則ち親家兄弟は、己れが勢を引分けて府内へこそ打歸りけれ。斯かりし間、道雪・紹運あきれ果て、是れ皆天魔の所業にして、大友家の末になるべき前表なり。さらば先づ問注所が城攻を延引して當陣を返すべしと、又高良山へ引返し、暫しは軍を止めて在陣しけり。

一、十一月三日、秋月長門守種實、龍造寺に對し別心あらざる由、政家へ神文を送る。

一、同月七日、三池河内守親基、同じく神文を送る。但し、此親基先達て大友方に降參す。此神文不審。

一、十二月七日、筑紫上野介廣門、同じく神文を送る。

上使下向の事

此時の公方は、足利十六代權大納言源義昭公なり。然れども當時は、京都頽廢の頃なるに依りて、義昭公、頃日毛利右馬守輝元を御憑みまし〳〵、中國に御下向あり。小早川左衞門佐隆景の領知備後國深津に御住居まし〳〵けり。然るに此將軍、天下再興の御願ありしかば、今年御歸洛ありたき由、去ぬる八月に、上使として一色駿河守昭秀・槇島玄蕃允昭元を以て、九州の諸將へ御内書をなされけり。時に輝元よりも、彼の兩上使に、自分の使節として柳澤新右衞門を差副へらる。然るに三人の使者、九州へ渡海あつて、別しては大友左兵衞督義統・龍造寺民部大輔政家・島津修理大夫義久の許へ、上意の趣演達ありけり。然れども此三家、折節鼎の如く立雙び鬪諍の最中なれば、私の隙あらず御請兎角に延引して、上使徒らに歸られけり。

筑後國所々軍龍造寺島津大友和睦の事

筑後國所所合戰

天正十三年乙酉正月、戸次道雪・高橋紹運は、筑後國三井郡高良山に歳を越し、青陽の祝嘉終りしかば、頓て兩勢を合せ、龍造寺方の西牟田新介家親が守りたる城島の砦を攻む。時に家親、早速佐嘉へ援兵を乞ひ、稠しく是を防ぎしかば、戸次・高橋が軍士利を失ひ、道雪が弟右衞門大夫以下數輩討たれ、高良山の本陣へ皆引退く。斯くて同二月、戸次・高橋、重ねて兩勢を合せ、島津方の問注所治部大輔鑑景が井上の城を攻むべしと、高良山の陣を立つて生葉郡へ發向す。鑑景是を聞いて、大勢の敵を防ぎ難く思ひしかば、城を去つて發心岳に取登り、草野鑑員を憑みしに、鑑員則ち問注所を援ひて一所に楯籠りけり。斯くて戸次・高橋に志賀・朽網が豐後勢加はりて發心岳に攻登り、草野鑑員を攻めて相戰ふ。されども草野・問注所の親類家人灰塚三河守以下大に挑み戰ひしかば、寄手動もすれば利を失ひ、上より下へ追落さる。戸次を初め寄手の軍將、城の體を巡見し卒忽に是を攻めず、晝は足輕を出して遠矢を射、夜は篝を燒かせ其道々を差塞いで、四月半に至り遠攻にこそしたりけれ。斯かりし間、城主鑑員、數日の籠城難儀なりける處に、戸次入道が計畧にて、草

野が城中に、彼の親類歴々九人を差語らひ反忠を勸めしかば、忽ち同心して城に火を懸け味方を擊つべき由、相圖を定めけり。戶次入道大に悅び、城を一時に攻落さむをと思ひしに、此事草野が長臣灰塚三河守、如何にして聞出しけむ。彼の反忠の者九人殘らず捕へ、一々首を刎ねけり。是よりは城中堅固に、寄手も急には彌々攻めざりけり。然れども大友勢猶ほ取圍み、草野鑑員難儀に及ぶ由、佐嘉へ聞え、龍造寺政家・鍋島信生談合を以て、急ぎ彼の敵を追拂ひ草野を援ふべしと、兩將自身、筑後へ討出でらる。斯かりし程に、上松浦の波多三河守・草野中務大輔・原田五郎、其外筑紫新助・江上構兵衞・後藤伯耆守以下、佐嘉衆悉く相從ひ、龍造寺の總勢二萬餘騎、筑後國へ討つて入る。中にも鍋島信生は、味方の諸勢に先立ちて筑後國北野に著陣せらる。龍造寺上總介家晴も、急ぎ簗河の城を出で政家の軍士を迎へむと久留米に陣を取りけり。斯くて戶次・高橋を初め大友の諸軍、佐嘉勢の來ると聞きしかば、先づ草野を差置いて高良山へ陣を返し、座主武邊良寛以下一山の衆徒と一つになり、都合一萬餘騎、軍は敵に先んで不意を擊つに如かずと、山上を發し中途に

出向ひ陣を張る。斯くて同四月十八日、政家の總軍河を越えて、先手の輩は旣に久留米に著陣し、龍造寺家晴が簗河勢と一所に陣を固む。扨兩陣相懸りに懸り、弓·鐵炮を打違へて亂れ合ひ少時戰ひけるに、初度の軍には、大友方高橋紹運が一勢、龍造寺家晴に駈立てられ散々に敗走す。然る處に、戸次道雪が手の者都戸五六兵衞·萩野大學以下數百騎、近邊の藪蔭より一同に噇と起り、家晴が勢に切つて懸り火を散らして相戰ふ。時に家晴、利を失ひ討たるゝ者百餘人、二陣の味方に崩れ懸る。是を見て跡に續いたる江上構兵衞家種が城原勢入替りて、鐵炮數百挺を同時に打懸け相戰ふ。斯かる處に龍造寺方にて脇備にありける上松浦の輩、豐後の朽網入道宗歷に打負けて、立つ足もなく敗走しければ、政家の軍兵竟に利を失ひ、悉く久留米の城に引いて入る。斯かりし間、戸次·高橋以下大友の軍士は、一戰に打勝ちて又高良山に登りて陣を取る。

此頃戸次道雪が筑前國立花城に殘し置きたる家人共、龍造寺方の曲淵河內守房助が飯場の城·副島長門入道放牛が在番したる飯守の城に取懸け合戰す。

一、今年三月七日、筑前高祖の城主原田入道了榮・同嫡孫五部信種、龍造寺に對し別心なき由神文を送る。

一、筑後國安武次郎三郎家綱、同じく神文を送る。

一、同年九月、筑後國山門郡堀切の地下人、龍造寺を背き大友勢を引入る。則ち豐後の侍平井彈正少弼鎭經、堀切の城へ差籠りぬ。茲に因つて田尻鑑種、早速彼の在所の人質二人を召禁しめ、久布白又右衛門を檢使にて、己が家人中尾與三兵衛に斬らせけり。是よりして堀切の地下人共誅伐の爲め、田尻鑑種、鷹尾の城を出で日々夜々軍止む時なし。時に戸次・高橋が兵共、堀切の味方を援けむ爲め、濱田村に來りて陣を取る。然るに頃日、龍造寺家晴も田尻へ加勢の爲め、簗河より鷹尾に來りてありしかば、兩人評定を極め、堀切の城をば家晴押へて、鑑種は濱田の敵に馳向ひ火を散らし打戰ひ、戸次・高橋が者共數十人討取つて悉く追散らしけり。其後又、鑑種と家晴勢を合せ、三池河内守親基又は鎭實。が領知三池郡へ相働き、所々を放火し繰返りし處に、山下の蒲池兵庫頭家恒、又は鎭運。三池へ加勢として

討つて出で濱田村に陣を進む。是を見て田尻の家人に若手の者共、古賀の渡を潮時を量り、土民の眞似をし農具の中に太刀・長刀を包み籠め、各、荷擔ひて游ぎ越え、山下勢に近づきて、蒲池家人今村新兵衛・同大炊助を初め數多討取りけり。然る處に鑑種・家晴も取懸けしかば、敵勢悉く引入りぬ。斯かりし程に、田尻も家晴も先づ鷹尾へ引返しけり。

一、此時、島津兵庫頭義珍、前名忠平。肥後の八代に在陣し所々へ手仕して切從へ、中にも合志常陸介親爲が高狹城をば、伊集院右衛門大夫・新納武藏守に、七千の人數を差副へ攻めさせけるに、親爲堪へず降參す。此外、龍造寺方隈部但馬守以下は、早去年より薩州へ從ひしかば、肥後國中に島津を背く者もなし。さらば筑後を征すべしと、義珍下知を加へ、同九月上旬、伊集院肥前守・山田越前守其外一兩士、人數を率ゐて筑後に討入り、先づ三池へ來つて三池河内守を語らひけるに、親基則ち同心す。斯くて島津衆、さらば先づ大友方にて、豐後の平井彈正が籠つたる堀切の城を攻むべしと、其寄口を見るべき爲め、肥後衆少々同陣を以て、三池

親基を案内とし堀切近邊まで打出でけるに、城中より見て大に仰天す。島津勢、其體を相窺ひ、則ち海上を打渡り切つて入りしかば、城兵是を防ぎ得ず、番人の平井は城を遁れ出で、江の浦の城へ逃籠り、中野兵庫助と一つになる。斯かりし程に、島津勢安々と乘取りて城中に攻入り、殘黨悉く討果し、其儘に肥後衆を以て、當城に在番させ是を守らせけり。夫より島津衆、樣々內書を廻らし、江の浦の城番中野兵庫助を語らひしかども、田尻鑑種、近邊の鷹尾にありて中野を賺しける程に、中野終に島津衆の語らひを承引せず、田尻が申すに任せ、以前の如く龍造寺方となり、聢と彌、江の浦に在城しけり。斯くて一所にありける平井彈正は、薩摩衆に道の口懸望を以て、頓て豐後に歸國しけり。

右中野兵庫助は、元來肥前塚崎の住人にして、中野式部が從弟なり。先年、主の後藤貴明父子一亂の後、浪人となり、ある時は龍造寺に從ひ、ある時は大友に屬す。無雙の勇士なる故、既に一城を預りぬ。此後又、浪人となり年を經て故鄕に歸り、竟に身を立てざる事を述懷し、伊萬里の島にて自殺して死す。其子

平五左衞門上方に赴き子孫あり。

一、同九月、戸次入道道雪は、去ぬる春より高良山に在陣し、病惱にかゝりしが、倩〻思ひしは、斯かる病身を以て、いつまで他國に軍を曝すべき。所詮鍋島信生を方便り出し。十死一生の合戰を挑みて、運を天に任すべしと、同九月中旬、一騎當千の者を七百人勝り出し、前後に相從へ高良山の陣を發して瀨高口に進み、此頃信生の築河の城に居られしに使を立て申し遣しけるは、既に大友、龍造寺と武威を爭ふ事年久しく、兵革の弊萬民の歎、是れに過ぎたるはなし。然る間、貴方と道雪唯〻二人槍を合せ、雌雄を立所に決して、諸人の苦を扶け申すべし。則ち瀨高口へ御出合あるべしと申し遣しけり。信生、此使を聞かれ、道雪が心底は早推量ありしかども、恐るゝに足らずと思はれしかば、先づ久富左介を以て敵陣の體を相窺はれ、扨築河の城を打出でられ、井手の橋に陣を居ゑらる。時に相從ふ軍士共、道雪が機を察して、今日の一戰は先づ延引あれと制し申すといへども、信生、更に承引なし。然る半ばに佐嘉勢の中より倉町大隅守信吉と、水町丹後守信定、大

戸次道雪鍋島信生を褒む

戸次道雪病死

なる喧嘩を仕出し既に珍事に及ばむとし、陣中以の外騷動して、前後の備混亂す。茲に因つて信生、今日の一戰力及ばずとて、頓て城中に引入られけり。斯かりし間、道雪、牙を嚙み無念に思ひしかども甲斐あらず。又無勢なれば續いて築河をも攻め難く、其儘高良山の本陣に引返しけり。

今日、倉町・水町喧嘩をしけるは、信生道雪との雌雄を留めむ爲に、兩人密談して工(たく)みたる事なり。此兩士は龍造寺に於て老功の者となり。

一、戸次道雪、高良山に歸りて後、諸士を集めて讃談〔嘆〕しけるは、天晴鍋島は智・仁・勇の三つを兼ねたる大將かな。此道雪、多年弓箭を執りて彼の信生と挑むに、肺肝を碎き謀れども謀られず、時の至るを待たむとすれども、鍋島は若くして健かなり。我等は老いて病氣なり。口惜しき仕合なりと、頸を垂れて悔みけるが、其勞の積りにや。同十月廿日、北野の陣中にして死去しけり。歳六十歳とぞ聞えし。

或はいふ、道雪、高良山に於て死去すとも。非なり。

又いふ、道雪、信生に使を立てしは、去年八月なりと。非なり。

一、道雪病死しけれども、高橋紹運は猶も高良山に陣してありける處に、居城寶滿を、秋月長門守謀を回らし、印火を以て燒立て伏兵にて攻めける故、留守にありし紹運の子彌七郎統增、則ち下城に及び、其餘煙高良山へ見えしかば、紹運驚き、早速士卒を引いて筑前に歸陣しけり。道雪死去して中兩日を隔て、十月廿三日なり。斯かりし程に、豐後の志賀・朽網も、同日悉く陣を引きけり。紹運は筑前に歸著せしに、早寶滿の居城へは、秋月一味の筑紫廣門が一族同名四郎右衞門與門入り替つて守りし故、紹運は力なくて岩屋の城へぞ入りける。

一、既に十月廿三日、大友の諸勢敗軍に及び、高良山の陣を拂ひしかば、筑後在陣の龍造寺勢、鍋島信生を先とし、悉く高良山へ取登り凱歌を執行ふ。斯かりし程に、兼ねて龍造寺へ一味し、城々へ楯籠りたる筑後の國の輩、草野長門守・西牟田播磨守・問注所治部大輔・安武次郎三郎・久留米の麟圭・高良山の良也以下、皆己々が居城に安堵し、佐嘉勢の中より後藤伯耆守家信、高良山に在陣し上筑後を警衞あり。內田紀伊守信堅・姉川中務大輔信安、久留米の城に入りて其近郭を相守り、

龍造寺上總介家晴は、以前の如く簗河の城にありて、彌〻下筑後を鎭め、國中大半平均しければ、鍋島信生は頓て肥前へ歸陣せられけり。斯くて此時、佐嘉・簗河の兩城へ、隆信存生以來携へ置かれたる隣國遠境の質人幼稚の男女囚み沈みしを、信生特に愛憐を加へられ、政家と相議せられ、皆己々が在所へぞ送り歸されける。

秀吉の命に依りて大友島津龍造寺の三家和平

一、今年羽柴秀吉、上帝に朝して既に關白に任じ天下の權を執給ひ、諸國の干戈を停止せらる。中にも鎭西の事は、今年十一月上旬、小早川隆景上洛ありて秀吉公に謁し、龍造寺・大友・島津の三家、累年武を爭ふに依りて國民勞れ患ふるの由、深く歎き申されしかば、秀吉公急ぎ彼の三家の面々へ下知を加へられ、早速弓箭を取鎭め、九州靜謐すべき旨仰せ給はりけり。然る間、島津も大友・龍造寺も、台命背き難くして皆畏まり領掌し、各〻神文取替し、九州既に平均の體にぞ見えける。

一、今度關白殿下の命に依りて、大友・島津・龍造寺和平ありける處に、薩州より家臣

大友宗麟秀吉に謁す

鎌田刑左衞門を大坂へ差登せ、關白殿へ申されけるは、義久既に九州を過半切取り候の間、今に於ては九箇國を殘らず下し給はるべし。然るに於ては高麗・南蠻・唐國までも御征伐の節、御先を仕り忠貞を抽んで申すべきの由、金銀を捧げて言上ありけり。されども關白殿御許容あらず。此事、大友宗麟聞付けしかば、其儀に於ては我等も上洛して、關白殿を賴み申し、彼の島津に對し年來の遺恨を晴すべしと、上下一千餘人にて鶴崎の津より船に乘り、順風に帆をあげ泉州堺の津に上り、妙國寺に驛宿して宮內卿法印を賴み、先づ案內を啓し、大坂へ登城して關白殿に謁す。初めての對顏なり。捧げ物には正宗の太刀一振・無雙の駿馬一疋・虎の皮百枚、其外和漢の茶の湯の器物、恰も堆く積並べたり。時に關白殿、其間四疊にして宗麟に對面せられ、前田又左衞門利家の座上に請ぜらる。土器(かはらけ)拜禮終りて饗膳を給はり、其後、金の座に誘はれ、千利休をして十服の茶を給はる。其外、寢殿に於て幸藏主・東殿以下の淑女、偏に花を飾りし如くにて、宗麟、是を見るに心迷ひ目も怪(ちや)なり。斯くて宗麟謹んで申しけるは、薩州の島津義久、上意に

背き和平の一著を破りて、種々惡逆の企を以て、肥後・筑後の諸侍を引率し、既に筑前・豊前まで相働くの由、是非に及ばず候の間、あはれ一稜御加勢を給はり候へかし。島津に對し戰を勵みたき由訴へ申しけり。關白殿、特に御喜色〔氣カ〕にて御背あり。其上、毛利と大友不和なりし由も、純熟申すべきよし御中入にて種々拜領申し、宗麟御暇給はり、頓て府內へ歸城しけり。又宗麟、頃日筑前國を進上すとなり。時に戶次道雪の猶子立花左近將監宗虎・高橋主膳入道紹運直參となりて、筑前國立花・岩屋の兩城に居住しけり。

北肥戰誌 卷之廿九 終

北肥戰誌 卷之三十

龍造寺政家關白秀吉へ音通の事

龍造寺政家關白秀吉に音信を通ず

天正十四年丙戌正月、龍造寺民部大輔政家、佐嘉城に於て分國諸士の禮を受けらる事例の如し。同四日、政家、鍋島飛驒守信生と相議せられ。大坂に於て關白秀吉公へ申さるゝ意趣之ありて、江上太郎兵衞入道賢也を差登ぼせらる。其趣は去冬關白殿の仰に依りて、島津・龍造寺・大友の三家、一旦和平すと雖も、鹿兒島と府内の間、和平程なく破れしと聞え、又龍造寺に到りても、島津より條々相違の旨之あり。別しては去々年、隆信、高來に於て島津が爲に戰死ありし事、合戰の習といひながら、政家・信生遺恨更に晴れやらず。茲に因つて兼ねて心中に事ありし故、去年九月にも小早川隆景まで、成富十右衞門を遣され關白殿へ通ぜられ、今度又賢也を

差登せられ申さるゝ旨ありけり。斯くて賢也、先づ藝州廣島に到り。小早川隆景に謁し、夫より大坂へ上り、蜂須賀修理大夫・黒田勘解由次官の執奏を以て、二月八日、大坂の城へ罷上り關白殿に拜謁し、其上、典藥の間に於て饗膳給はり、首尾能く政家・信生の心底を言上し、〔判脱カ〕形を給はりて早速佐嘉に歸りぬ。政家又、賢也に押續きて三浦長門入道可鷗・成富十右衞門信安を大坂へ上せられ、關白殿へ重疊（かさねがさね）申さるゝ仔細あり。此兩使も先づ廣島へ赴き隆景に謁して、成富は大坂へ上り、安國寺惠瓊を相憑み、關白殿下の前を首尾能く申調へ、可鷗は隆景の返書を請取り、則ち廣島より歸國しけり。其返札に云、

如レ仰舊冬者與風（ふと）致ニ上洛一、關白殿ニ逐ニ一禮一郎令ニ下向一、長久入魂之體に候條可ニ御心安一候。爲ニ御祝儀一御太刀一腰・金覆輪。織物貳端送給候。至ニ遼遠一御丁寧之儀候。仍九州之儀、先狀に如ニ申候一靜謐之儀、京都御下知之條、可レ成ニ其御心得一候。御使僧御仕合能被レ明ニ御隙一候趣者、從レ是重疊申入候。然者御質之事、以之外被ニ差急一儀候條、可鷗夜を日に繼差下申候。成富方事者、御理申候而至ニ大坂一上を申候。彼

御分別御苦勞之段、可レ被レ成二御褒美一候。御人質無二御延引一來月廿日頃大坂著之樣御上せ可レ爲二肝要一候。此一儀に相極候。猶任二口上一候。恐々謹言。

二月廿三日　　隆景判

政家御返報

可レ囑入道、早速佐嘉に到り歸著し、政家・信生より申さるゝ旨、關白殿御同意あり。其上にて龍造寺の人質を差急がるゝ由なりしかば、三月十五日より右質人千布宗右衛門賢利を、大坂へ差登せられけり。

筑紫廣門沒落の事

大友島津龍造寺三家の和平破る

既に京都・大坂の下知に依りて、大友・龍造寺・島津和平しけると雖も、又三家の面々より關白殿下へ各、訴へ申す旨あつて、和睦忽ち破れ、薩州方より弓箭を取出し、九州の諸士彌、思ひ〳〵になりけり。其中に筑後衆には草野家清・西牟田家親・田尻鑑種・高良山の座主麟圭は龍造寺方なり。同國三池鎮實・親基とも。蒲池鎮運・家恒とも。星野鎮種・

問注所鑑員は島津へ一味、肥後衆皆同前なり。此外、筑前の筑紫廣門・秋月種實も、龍造寺の旗下なりしを引替へて島津に相從ひ、豐前の城井鎭房・長野鎭展・高橋元種以下同じく島津に一味す。又筑前の國立花・岩谷の兩城主立花左近將監・高橋紹運は、元來大友の家人なりしかども、頃日は關白殿へ直參して、公儀の命を蒙り筑前國の警衞にあり。然るに此時、島津に屬せし筑紫上野介廣門、手の裏を返すが如くにして、高橋紹運一致を以て、則ち紹運の子彌七郎を壻に取り大友方になりけり。然るに薩州より彼の筑紫を誅伐すべしと、今年天正十四年六月廿七日、先勢として稅所新介・新納右衞門尉・河上左京進、筑後國竹井原へ著陣し、同日又伊集院肥前守、北の關一夜陣にて打立ち、同廿九日、伊集院忠棟山下に著陣、次の日高良山へ取登り、此外追々參陣し、又海上より來る勢は、鷹尾津へ船を著け、入船出船凡そ十日間は、日夜引も切らず、總べて海陸の諸軍、新納武藏守・阿久根播磨守・相良日向守・北鄕讃岐守・樺山權左衞門・宮原左近・河田大膳亮・鎌田出雲守以下、悉く高良山へ打登りて、伊集院忠棟と一所に陣を取る。其外豐前の長野三郎左衞門・高橋九郎も出

勢し、佐嘉よりも一旦島津一味の體にて、口決。政家は神崎まで打出でられ、信生は波古川へ進んで陣せらる。田尻鑑種も龍造寺に屬して、親類四人に軍兵二百人を相副へ、政家と一所に在陣す。今度島津に一味し馳集る士卒彼此三萬餘騎、薩州衆はいふに及ばず其餘は皆肥後・筑後・筑前の輩なり。是は一向筑紫廣門征伐の爲のみにあらず、高橋紹運が岩屋の城・立花左近將監が立花の城をも此次に打崩し、又は事に依り、龍造寺の城をも攻むべしとの評議なりけり。斯くて島津の諸勢、七月六日悉く高良山の陣を打立ち、其内人數を差分け、秋月長門守と談じ、筑紫が端城朝日山・一の岳・一の瀨・鷹取等を押へさせ、其外の軍勢は段々備を定めて、筑紫の居城勝の尾・山浦を攻むべしと瓜生野口より取懸る。中にも伊集院肥前守・河上左京進、伏草を以て夜中より打出で、勝の尾の城の麓新町輙く燒拂ふ。夫より諸勢相續いて、廣門の居館を初め小路々々、其外所々の塹垣打崩し、殘る所なく放火し、手向ふ者は斬つて捨て、逃ぐる者は山林まで追討に討ち、砦の兩城朝日山・鷹取をも瞬目の中に挫き、筑紫の親類左衞門尉晴門を始め、宗徒の者數百人討取り、降人以下悉く斬

筑紫廣門島津に攻められて沒落す。

捨て散々に攻付けたり。薩摩勢にも河上左京、石橋の邊にて筑紫晴門と組んで刺違へて死す。其外數多の戰死なり。斯かりし程に、城主廣門は勝の尾の本城を引揚げて、降參の由懇望しければ、薩摩の軍將伊集院右衞門大夫忠棟、衆議を以て是を宥免し、同七月十日、勝尾下城を以て、小松山院主へ先づ下著、夫より筑後の大善寺に蟄居しけり。時に勝尾の城番には、肥後の小代伊勢守・大津山河内守罷り上りけり。當城は肥前に取りては東の端、筑前の境にして山の頂にあり。

或はいふ、廣門、此時戰ひ屈し城內へ引入り、秋月種實を賴み下城すとなり。

或はいふ、廣門、此時勝尾の砦一の岳の城へ落ちしが、爰をも攻落され自害せむとしけるを、薩摩衆生捕りたりとも。非なり。

或はいふ、一の岳の城を、秋月種實人數五六百を以て攻落す。其時、勝尾の本城も落去すと。

或はいふ、一の瀨の城をも、秋月、策を以て攻落すと。此兩城、筑前の內にて何れも山上なり。

岩屋の城沒落高橋紹運戰死の事

島津勢高橋紹運の居城を攻む

既に島津の諸勢、七月十日、筑紫が勝尾の城を攻落し、扨此度、高橋入道と立花左近將監をも攻干すべしと、同十三日、薩摩衆・肥後衆・筑後衆悉く筑前へ討入り、先づ高橋紹運のありける岩屋の城を攻めむと、同十四日、秋月勢を案內者として太宰府へ亂入し、安樂寺の社家町一宇も殘らず燒拂ひ、同十五日、島津・秋月、其外肥・筑の從兵都合五萬餘騎、岩屋の口々より押寄せたり。城主紹運は、元より待儲けたる軍なれば、大に士卒を勵まし、城の追手南の口を初め虛空藏の臺百貫島口・二條口幷に秋月陣の手當等、夫々に人數を配つて持口を差固む。斯くて寄手の諸軍、弓・鐵炮を打違へ攻登り追下され、雙方の討死・手負數を知らず。合戰數度に及びしかども、

合戰

當城は究竟の要害といひ、城主は無雙の大將といひ、城中僅の小勢にて五萬の寄手に對し、更に勝劣なかりけり。同廿日、島津勢、一同に相圖を定め出丸の際に押寄せたり。城兵敢て事ともせず、大鐵炮を放つて打殺す事、將碁倒に異ならず。寄手叶

はずして引退く。然るに此時、龍造寺政家・鍋島信生は、神崎波古川の陣を拂つて、佐嘉へ馬を返され、陣代として龍造寺家晴・江上家種、其外佐嘉衆、岩屋に到つて在陣し、其代として後藤家信・田尻鑑種・西牟田家親、同廿三日に岩屋へ著陣あり。同廿五日、後藤・田尻の兩勢を以て、岩屋西の口へ押詰め、鐵炮を以て終日城兵を射付けたり。同廿六日、薩摩・大隅・日向・筑後・肥前の寄手、雲霞の如く一同に押寄せ、口口より攻入らむとす。其中に肥前衆に後藤家信・田尻鑑種魁(さきがけ)を以て、岩屋里城を攻めて相戰ふ。時に城内より大鐵炮を打懸くること雷の如くにて、兩手の士卒眼闇み心茫然となり、戰死手負若干なり。されども此方よりも大鐵炮を累(つる)べ掛け、終に里城を討崩して切登る。爰に於ても亦、田尻・後藤が手の者數多疵を蒙りけり。時に薩摩の軍將伊集院忠棟、其軍功を賞感して、彼の兩手の輩は則ち軍を甘(くつろ)ぐべき由、指圖を以て里城の番を勤む。又爰に薩州の伊集院肥前守・新納武藏守・北郷讃岐守は、十文字の旗を山風に靡かし虚空藏の臺を攻む。時に城兵矢山中務少輔・成富左衛門尉を初め宗徒の輩集まりて散々に相戰ふ。此時薩摩勢數百騎討死す。斯く

高橋紹運戰死

て廿六日の合戰半なりけるに、寄手の一將島津圖書頭忠長が方より、城主紹運入道へ、新納藏人を以て申送りけるは、希くは忽ち心底を飜され、薩州に從ひ給へ。其儀に於ては本領安堵相違あるまじき由申し遣しけり。紹運の家人麻生(あさふ)外記、主に代りて是を聞き、降參の事中々思寄らざる由返答す。斯くて同じく廿七日の曙、薩摩・肥後の軍兵、其外の諸勢、岩屋追手の口より切懸り、火を出し合戰す。城中の者共、萬死に入りて一生を顧みず防ぎ戰ひしかども、寄手の勢に比ぶれば九牛が一毛にて、竟に追手を攻破られ、討たるゝ者數百人なり。斯かりし程に百貫島の持口をも、伊集院肥前守に打破られ、三原和泉入道紹眞筑後三原の先主なり。討死す。寄手彌〻勝に乘り、新納・北郷・伊勢・樺山、士卒を進めて虛空藏の臺に攻登れば、新納藏人・猿亘兵部少輔は、城の後口に廻つて前後より攻めたりけり。爰に於て終に城兵力盡き、或は討たれ或は敗散して、今は早殘る者六十餘人、詰の丸を守りて相戰ふ。時に大將紹運も、士卒と共に防戰して疵二三箇所蒙りしを、日向の侍馳合せ、紹運を討つて首を取る。是を見て殘る者共、群る敵に駈入りて、引組み刺違ふるもあり。又腹搔き

破りて臥すもあり。一人も殘らずなりにけり。時に城中の討死、紹運を初めて矢山中務少輔以下都合七百餘人となり。爰に此時、あはれなる事こそあれ。矢山が子生年十三になりけるが、父中務が討たれしを見て、限なく歎き續いて討死すべしとて、泣く〳〵小太刀を振り切つて廻りしを、寄手の諸將是を見て、あはれなる事に思ひしかば、其兒射殺すな。討取るなと下知しけれども、數萬人の中なりしかば、雨の降る如く放つ矢に、彼の兒、胸板を射拔かれうつぶしに臥し、朱になりてぞ死しけり。此矢山は高橋家の老臣なり。斯くて七月廿七日の暮程、當城落去しければ、則ち紹運の首を掛け、薩摩衆計りにて凱歌を執行ふ。此時、紹運の女中は薩摩勢の中よりぞ生捕りける。紹運行年四十九なり。

或はいふ、紹運、岩屋の城中に於て自害す。辭世の一首に、

屍こそ岩屋の苔に埋むとも雲井の空に名は留むべき

又いふ、紹雲の實子立花左近將監より、今度岩屋城攻の以前、家人十時攝津守を以て紹運へ申遣しけるは、近日島津が大軍、其元へ取懸るの由相聞え候。然るに

岩屋はさしたる地利にも候はず、其上分内狹く、大勢を防ぐに便りなく候間、早早我が立花の城へ來られ候へ。父子一所に楯籠り、兩家の人數を以て薩摩勢を防いで、一戰の中に追散らし申すべしと申遣しける時に、紹運、十時に對面し返答ありけるは、抑ゝ愚老、數度の軍功他に異なりと、頃日宗麟公の御吹擧に依りて、既に關白殿の御家人となり、九州守護の爲め、當城を直に下し預りぬ。然るに何ぞや、唯今事の急なるに臨んで、御朱印の地を捨て御邊が城へ逃來〔入カ〕るべし〔きカ〕。唯當城を枕にして淸く討死するより外、別に仔細なし。然れば最早生前の對面は叶ひ難し。必ず來世の再會を期するなりとぞ申し遣しける。左近將監、此返答を聞いて泪に咽びけるとぞ。

或はいふ、岩屋城攻以前、薩州より島津義久、莊嚴寺の住僧を以て紹運を樣々に賺し、味方に語らひしかども、紹運敢て承引せず。却つて島津を恥しめ、終に大敵を引受け潔く死すとなり。

一、紹運の子高橋彌七郎統増は、此時、寶滿の城を守りてありしに、島津衆より色々

龍造寺の使僧下著秀吉の命を傳ふ

內略を以て方便りし程に、家人共が不覺にて、易々と方便かられ、八月五日、統增、寶滿を下城し、則ち島津衆へ當城を引渡して、其身は主從十餘人、阿容々々と降人となりて出でけるこそ口惜しけれ。斯かりし間、島津衆、是を虜にし肥後國へ差送り、吉松といふ所へ稠しく番を附けて置きけり。扨又薩摩衆、岩屋落城の時、虜へたる紹運の妻女幷に娘は北の關へ遣し、是にも番を附けて守らせけり。妻室は頓て樣を變へ宗蓮尼といひけり。

一、斯くて島津の諸軍、宰府に皆在陣し、左近將監統虎が立花の城を攻めむと議しけれども、當城は無雙の地利にして、輙くは攻寄り難く、其上、毛利輝元より立花加勢として、大軍押渡るなど樣々風聞ありしに依りて、兎角に延引しけり。然る半ばに、龍造寺より上方へ上せける使僧西岳坊賢也、（江上太郎兵衛入道の事なり。）近日下著し、龍造寺・立花が方へ、關白殿の御書を見す。其文に曰く、立花事、島津と合戰の用意する由、神妙の至なり。暫く城を持堪ふべし。不日に關白御馬を出され、島津一家悉く首を刎ねらるべしと。又龍造寺事、島津と手切致し、立花と和睦然るべし

と仰せ給はる。斯かりし程に、立花大に機を得、彌、堅固に籠城し、扨龍造寺より島津へ加勢として、江上家種・後藤家信・田尻鑑種・西牟田家親・高良山の座主麟圭・同良也、其勢五千にて宰府に在陣しけるも、座主・西牟田・田尻計りを、荒平安樂平。の城に殘し置き、江上と後藤は、八月廿日肥前へ打歸りけり。然る處に、豐後に在陣したる島津家久が方より宰府の薩摩陣へ飛脚を立て、豐後の軍、難儀に見え、其上、關白殿下の命に依りて、四國の長曾我部、大友加勢として近々渡海するの由、風聞すといひ遣しける間、島津忠長・伊集院忠棟を初め宰府在陣の島津勢、さらば先づ立花を差置き、豐後へ打越え、家久に力を副へむと評定を決し、寶滿の城へは秋月長門守種實を入置き、若杉・高鳥井の城をば、星野中務大輔鎮種・同弟民部大輔親種を以て相守らせ、岩屋・勝尾其外の城々へも、夫々に人數を入置き、立花を押へて同月廿四日、薩摩諸勢、悉く太宰府の陣を拂つて、豐後の國へぞ赴きける。

立花勢星野が高鳥井城を攻む

高鳥井の城落去星野兄弟討死の事

今度島津方にて、筑前若杉の高鳥井の城を守りたる星野兄弟は、元來筑後生葉の妙見の城主星野筑後守親忠が子供なり。父親忠以來島津に隨ひ、去る年(天正十二)の冬より兄弟ともに、當城に移され居住しけり。然るに今度薩摩衆、宰府を立つて歸りし後には、必定立花の城より敵勢取懸るべしと思ひしかば、城中の女童に、宗徒の手の者百餘人を差副へ、筑後の本領へ送り遣し、扨高鳥井の城中には、鎮種兄弟幷に家人增田・井上以下三百餘騎にて楯籠りけり。斯くて立花へは、中國より毛利衆、加勢として雲霞の如く渡海し、薩摩勢の退口にも附慕ひ、又高鳥井へも取懸らむとす。星野兄弟、是を聞きて元より期せし事なれば、必死に思ひ定め、城中三百餘人の者共に下知していひけるは、味方に百倍の大敵なれば、千に一つも勝つべき軍にあらず。唯、薩州より給はりたる此城に於て、討死することこそ本望なれ。見苦しき物共置くべからずと、城中の雜具等悉く燒捨てさせ、寄する敵を待懸けゝり。斯くて廿四

日の夜すがら城中を取仕舞ひしに、翌くれば八月廿五日の早旦、立花勢に中國衆加はりて凡そ一萬七八千と見え、高鳥井へ取懸け犇々と東西の柵を打破り、早本城へ攻め近づく。星野兄弟、采配を採りて下知をなし、城兵僅に三百餘人、三方の門を押開き一同に切つて出で、大將の鎭種必死に定めし上は、士卒爭でか猶豫すべき。大勢の敵中に切入りて、皆死狂と見えしかば、寄手の軍兵二百餘人、目の前に切臥せらる。立花左近將監、此體を見て小敵とて侮るな。萬死に定めし者共ぞ。後口一方を明けて落ちば落せと下知しければ、寄手則ち後口の方を開きたり。されども城兵一人も落散らず、巳・午兩刻の間に三百餘人、一人も殘らず切死す。斯かりし程に、城主鎭種は舍弟民部大輔親種・大聖寺の法印筑後の僧。を初め、家人增田・井上・井手以上六人、一同に腹搔切り同じ枕にぞ臥しにける。斯くて立花は、高鳥井を攻落し、星野兄弟を討取り、勝鬨をあげ居城へ歸陣し、早速首註文を以て、大坂に於て關白殿下へ此由注進申し、其後、又岩屋の城へも人數を差向け、薩摩よりの城番を追落しけり。此時、關白殿下より左近將監へ給はる書に云く、

星野兄弟戰死

去廿七日、對二安國寺・黑田・宮木書狀并首註文一、今日加二披見一候。今度於二其表一島津相働候處、御方城二三ヶ所手脆相果候條、其方構之儀無二心元一被二思召一、輝元・元春・隆景、其外人數差遣候處、立花城無二別條一相抱候刻、對二殿下一無二比類一思召候處、去廿四日朝、敵引退候刻、足輕相附人數餘多討捕手柄之上、重而高鳥井東西攻破、城主星野中務大輔・同民部少輔を初、其外不レ殘數百人討捕首註文到來、粉骨之段中中不レ及レ申候。此以後、聊卒爾之働可レ爲二無用一候。人數追々差下候條、輝元・元春・隆景兩三人一左右次第、殿下被二出馬一、九州逆徒可レ被レ刎レ首候。得二其意一尤に候。然者爲二褒美一新地一廉可レ被二仰付一候條、突槍高名仕二忠節一之輩可レ令二支配一旨、彌々勇候樣可二申觸一候。委細右兩三人可レ申候也。

九月十日　　御朱印

立花左近將監殿

一、又星野兄弟討死の由、薩摩へ聞え星野が子長虎丸へ、島津義久よりの感狀に云く、

於二筑州一若松鎭胤兄弟被レ遂二戰死一事、連々忠勤之鬱憤異レ他畢。至二長虎丸一向後倍、可レ屬二感慮一之旨、聊不レ可レ有二踰易一者也。

天正十四年
菊月廿一日　義　久判

星野殿

筑紫廣門本領へ歸入る事

筑紫廣門本領に歸る

爰に筑紫上野介廣門は、去る七月居城勝尾の要害を島津勢に攻められ、竟に下城降參の身となり、頃日は筑後の大善寺に虜の如くにて、番を附けられ居たりしを、譜代の家人等島・小川・立石・黑岩以下心を合せ是を盜出しければ、廣門悦び則ち本領筑前の五ヶ山へ忍入り、猶ほ家人等を相催し、旣に其勢一千餘騎になりて、舊地の內一の岳の城に、薩州の侍鎌田出雲守・北鄕讃岐守が在番せしを追出し、則ち入替る。扨龍造寺政家の未だ島津へ一味の體にて、安樂平の城に番人として高良山の座主武邊良也を入置かれしを攻む。良也叶ひ難く思ひしかば、早速肥前へ加勢を乞ひ

けれども、事の延引に良也堪へず下城しけり。斯かりし間、筑紫乘則ち入替りぬ。然る處に龍造寺より小田常陸介增光・副島長門入道放牛を差向けられ、筑紫乘を追出さる。此後は田尻鑑種・西牟田家親・高良山の座主麟圭（眞也の父）。三人より各、名代を以て當城を相守り、夫よりは小田增光一人にて在番しけり。

龍造寺島津と義絶

龍造寺島津に到り手切の事

同天正十四年九月上旬、龍造寺政家、島津へ手切の使として、田原大隅入道一運を薩州へ差越され、（今度田原一運、大事の使として一人薩摩へ赴く由、北原作介聞付け、急ぎ本庄の船場へ出合ひ、自分と一運と同船し、薩摩に於て手切の使を達す。時に島津、是を惡み討果さむと談合す。兩人、早其色を見取り酒に醉臥し、打解けたる體に見せ、油斷せる間に、忍び出で山中に隱れて、後に佐嘉へ歸る。）政家、已に島津と義絶せられ、其色立のため同九月十一日、鍋島信生と同前に其勢二萬餘騎、先づ筑前へ打入られ、島津一味の三池河内守鎭實が領知へ相働かれ、村里悉く放火あり。鎭實居城計りになりしかども、此時鎭實は、島津家久に屬して日向表に在陣せしかば、留守の家人等一人も出合はず。玆に因つて政家・信生則ち三池より瀨高へ陣を移され、同

十三日より肥後へ打入られ、土肥出雲守以下歷々相從ひ、肥豬・洞間〔臼カ〕野へ發向、大田黑まで相働かる。然るに肥後衆の內、相良・甲斐・伯耆・阿蘇を初め、隈本・木山の百姓原まで人質を出して降參しければ、政家・信生頓て肥後より引返され、筑前へ打入られ秋月種實の領所々へ手仕あり、岩屋の城邊相働かれ、先づ佐嘉へ歸陣せられけり。此事、小早川隆景より關白殿下へ注進ありしかば、早速政家・信生へ同前に書を給はる。其文に云く、

今度到二豐後一島津令二亂入一由候處、殿下爲二〔御脫カ〕忠節一色立、肥後國へ打入所々放火之由、小早川右衞門佐方ゟ申越候。時分柄被レ見二計忠節一之段、御祝著被レ思召一候。島津、國ニ北入候共、春は被レ出二御馬一島津可レ被レ刎レ首候。被レ得二其意一諸事無二越度一樣働分別、此節御褒美面目を持候樣、一廉可レ被二仰付一候。其段下々申觸、可レ成レ勇事儀尤候也。

十月四日　御朱印

龍造寺民部大輔殿

追而其方事、當春言上之首尾無ニ相違一忠節之段、祝著被ニ思召一候。以上。

同信生への御書に云く、

今度到ニ豐後ニ島津令ニ亂入一由候處、殿下爲ニ御忠節一色立、肥後國ヘ打入所々放火之由、小早川左衞門佐方ゟ申越候。時分柄被レ見ニ計忠節一之段、不レ斜御祝著被ニ思召一候。島津、國ヘ北入候共、春は被レ出ニ御馬一島津可レ被レ刎レ首候條、被レ得ニ其意一諸事無ニ越度一樣働分別、此節御褒美之段面目有レ之樣、一廉可レ被ニ仰付一候。其段申ニ觸下々一可レ成レ勇事尤候也。

十月四日　御朱印

鍋島飛驒守どのへ

一、同十月、關白殿下、龍造寺の質人を召すに依りて、政家よりは母公宗誾尼を大坂に到り差上せらる。信生よりは猶子鍋島平五郎茂里（前名左衞門大夫後といふ。）を、小早川隆景まで差出さる。仍りて隆景、茂里を長府の潮音院に之を置かる。時に石井三右衞門、茂里に從ひ彼の寺にあり。又龍造寺の一族江上家種・後藤家信・龍造寺長信・

同信周・同家僦・同家晴よりも質人各〻出さる。黑田勘解由孝高の預なり。
一、同十一月、島津勢、豐後に於て大友方幷關白殿より加勢の輩と大に打戰ひ、所々に在陣す。

關白秀吉島津征伐の爲出陣

關白秀吉公島津北條御征伐の事

天正十五年丁亥正月、關白殿、彌〻島津義久一家御退治の爲め、九州御下向あるべきに決定しければ、同じき二日、龍造寺政家・鍋島信生、其勢二萬を引具せられ筑後國に打入られ、島津方の蒲池兵庫頭鎮運〔連カ〕が山下の城へ取懸けらる。時に國の案内者に依りて、田尻鑑種先陣に討つて所々へ働き、村里民屋を燒拂ふ。されども城中堅固に依りて先づ歸陣せらる。
一、同正月廿五日、關白殿の御先手大和大納言秀長卿、其勢七萬餘騎、京都を進發せらる。
一、同三月朔日、關白殿御出京、同廿五日、赤間ヶ關に御著。

一、同四月、豐前の國の島津方長野三郎左衞門鎭展・城井常陸介鎭房・高橋九郎元種降參。

一、筑前國の島津方秋月長門守種實降參。

一、筑後國の島津方蒲池・問注所・黑木降參。

一、鍋島信生、關白殿の御迎として先達上洛あり。御供にて下向、御先に佐嘉へ著かれ、政家と同じく同四月十一日、高良山に於て、關白殿の御本陣へ參陣せられ、薩州への先手を申乞はれ、立花左近將監と倶に御先手御免。

一、政家・信生其勢三萬七千餘騎、關白殿の御先手として薩州へ向はれ、先づ肥後へ打入らる。爰に於て島津より差置きたる新納武藏守忠元、其外島津方の地侍小代伊勢守親傳・城十郎太郎・大津山河内守以下城を去つて降參。

一、同五月四日、關白殿總勢十萬餘騎、薩州に到り御打入、仙臺河へ御陣、島津義久兄弟幷に家臣等、悉く懇望を以て降參。

一、同七月廿一日、關白殿大坂に到り御歸城。

一、天正十六年戊子、肥後の地侍一揆を起す。程なく是を誅伐。太守佐々陸奥守成政、仕置惡しきに依りて召登せられ、尼ヶ崎に於て切腹。

一、天正十七年己丑、鍋島信生在京、正月七日從五位下に任せられ加賀守直茂に改められ、羽柴豐臣の姓を給はる。

一、天正十八年庚寅、直茂在京。三月七日、國事を勤むべき旨台命あり。肥前國三十五萬七千三十石の御朱印頂戴。

秀吉小田原を攻む

一、今年關白殿下、小田原の城主北條氏政御征伐、二月上旬、御先手として德川殿其外出陣せらる。

一、同二月上旬、鍋島直茂、同綱中在京の爲め上洛せらる。同日、尾州淸洲の城番として佐嘉より田尻鑑種・土肥出雲守・向孫三郎西牟田新介名代なり。上下百人、直茂の供立に加はりて發足、同十一日、赤間ヶ關より出船、海上九日にして大坂へ著、日數六日大坂逗留、廿七日京都へ著く。

天下御一統の事

一、同三月朔日、關白殿關東へ御出馬。

一、鍋島直茂、關白殿へ御見舞として小田原下向。七月五日に小田原著陣。當日北條氏直以下降參に依りて、能き時分加賀守參陣の由、關白殿甚だ御大悅なり。同十一日、北條一家御仕置相澄み、關八州皆平均。關白殿御歸洛。九月朔日、京著。天下一統す。

北肥戰誌 卷之三十 大尾

奥書

此書は肥前の古老舊記實蹟を參考して編集する所にして、編中間〻口傳祕説多し。他國は素より、自國の內にても所持の人少し。故に予若年より是を仰望すれども不レ得レ見、老期に及で偶〻馬渡氏の懇情に依て手に入、一覽して返さんことを約すといへども、餘りに殘り多く、竊に寫し取んことを思立、朧眼遊筆七十六歳の精力を盡して、四十餘日にして寫功終、又錯誤脱字本書のまゝ也。素より戶外不レ出他借を不レ容、笥中に祕して閑寂の樂みとす。國學に志あらん者、必可レ讀の書也。爰を以て家に傳へて爲二重寶一と秀。

明和八年辛卯六月初日

養軒信翁愚一均　花押

追記

此書は馬渡新七入道加志老の編集也。愚老日者其家藏の舊記草稿を涉獵するに、反故の裏に草記あり、其言に云、此書を編集する志は、凡九州の事を記す書不レ少といへども、或は虛説を附會して實事を誤り、或は諸士の勳功を洩して顯さず、此故に今諸家の證を求め、九州を巡て實蹟を尋、就中諸國の故事傳記を考て虛實を正し、凡二十餘年にして全書成ぬ。梓に彫て天下に行はんことを欲するの處に、太守宗茂公御覽有て、此書は世間に翫しむる物に非ず、當家の祕書也。叨（みだり）に流布せしむべからず、草稿あらば燒捨て、本書は文庫に納め置べしと嚴命ありと云々。愚老按するに、嚴命如此といへども、古老大家に

は竊に書寫して藏せる人も有となん。其表題一ならず、肥陽軍鑑、九州軍談、九州諸家軍記、肥陽治亂記、或は鎭西軍爭要略、或は覺書なんと、是文庫の本と同き事を憚りて題號を替たるもの歟。然ば愈〻此書實なき者に見すべからさざ者也。安永六年酉七月日謹記。

恩田信翁

大正七年四月八日印刷
大正七年四月十一日發行

國史叢書 北肥戰誌 二

定價金一圓二十錢

編輯兼發行者 國史研究會
右代表者 今村勝一
東京市牛込區市ケ谷柳町二九番地

印刷者 楢山定吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所 友文社
東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所 國史研究會
東京市牛込區市ケ谷柳町二十九番地
振替貯金口座東京二七〇二四番
電話番町四一六六番